

---

# 創世の詠

陽無陰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

創世の詠

### 【Nコード】

N9142V

### 【作者名】

陽無陰

### 【あらすじ】

本人の意思とは裏腹に、高みに登らされた兄妹はその頂きで何を見るのか。

世界を救わなければならない兄妹の冒険の果てに何があるのか。  
様々な思惑の中で世界を旅し、世界を救う冒険譚。

## 第一楽章 至高の存在とそれに群がる者たち

闇に包まれ、ただ一人佇んでいる。

闇の中にいる自分の身は何も聞こえず、何も触れず、何も感じない。

ただ見えるのは細く、今にも消えてしまいそうな一筋の道だけ。後ろに戻ることはできない。他の道に逸れることもできない。ただ血塗られた、呪われた道を歩くだけ。

一歩歩くごとに慣れ親しんだ粘性がある、錆びついた鉄のような味がする血が足に纏わりつく。自分のものか、他人のものか分からないほどに混ざり合った血が自身から零れていく。

痛みを感じようと立ち止まることはできない。

恐ろしくとも逃げ出すことはできない。

闇の中を只管歩き続ける。いつかこの身が砕け散るその時まで。

絶望の道を歩き続ける。

(……朝か)

夢を見ていた。内容は先ほどまで見ていたからかうじて思い出せる。先ほどの悪夢は自分がこれから歩む道程を暗示しているようだ。

例え、先ほどの悪夢のような道程を歩むとしても自分としてはなら不都合はない。

なぜなら その道を歩むために自分は何意された のだから。

悪夢を見ていたせいか、汗が寝巻のシャツに吸いこんでしまっていて、シャツが身体にべったりと張り付いている。気持ち悪さを感じて、すぐにも脱ぎ去りたい衝動に駆られるが、夢見が悪かったこともあって、汗と一緒にそれを流してしまおうと浴室に向かうことにした。

「兄様？」

シヴァが浴室に向かう気配を察したのか、シヴァの妹であるフラウ＝トリムールが寝惚け眼を擦りながら身体を起こす。雪よりも透き通った純白の長髪が零れ落ちる様は本人の聖女の様な美貌もあつてか幻想の一部が現実に飛び出してきたようだった。

「すまない。起こしてしまつたか？」

「大丈夫です……」

シヴァは寝惚けているフラウに近寄り、謝罪の意味を込めて頭を優しく髪を梳くように撫でる。

フラウはシヴァが撫でるのを陶然とした様子で受け入れている。気持ちよさそうに受け入れてくれるフラウには悪いが、汗が張り付いたままなのもあまりいい気分はしないので、シヴァはフラウにその事を告げる。

「これからシャワーを浴びてくるよ」

フラウは兄が朝にシャワーを浴びることは滅多にないことなので、訝しく思い聞こうとしたが、シヴァのシャツが汗で張り付いているのに気付く。

「では、お背中を流させてもらえませんか？」

妹のこのような発言は珍しくなく、シヴァは自分が兄としては出来損ないであると自覚しているの、妹からお願いがあればできるだけ叶えることにしていた。

また、妹の精神の安定の為にもできる限り世話を任せていた。だが、シヴァは今までの境遇から人の情動に疎いが、さすがにこれはまずいのではないかと知識として、一応知識としてある一般常識から断ろうとした。

「それはさすがに……」

「お願いします！ 兄様のお世話ができる機会はなかなか得られないのですから……」

妹の必死の懇願とこれから自分のこれまでの負い目もあってか、シヴァには断れそうもなかった。

「はあ……わかったよ」

「精一杯お世話しますね！」

願いが叶ったこともあってかフラウは本当に嬉しそうな表情を見せた。

シヴァが寝巻のシャツを脱ぐと、そこには鍛え抜かれたせいや極限にまで引き締まった無駄の無い筋肉が覗かせる。そして、そこには数えきれないほどの薄らとした傷跡と全身を覆う複雑な紋様を描く刻印が刻まれている。

フラウはそのことに胸が引き裂かれそうなほど痛みを覚えてしまうが、彼女には何も言うことはできなかった。フラウ達はそういう立場に立っているおり、そしてこうなった原因はフラウにもあるのだから……。

こうしてゆつくりとシヴァの世話ができるのはフラウにとってこれまで数少ない機会だった。これまではフラウはともかくシヴァは鍛錬だけにその身を費やしてきており、なかなか接する機会は得られなかった。これからフラウ達はいつ命を落とすかもしれない身の上である。だからこそ、今までの分も込めて積極的に世話するべきとフラウは誓う。

フラウはシヴァの艶やかに黒く光る髪が少しばかり羨ましく思う。フラウは母譲りの白髪であり、シヴァは父譲りの黒髪ということは他人から口伝えに耳にしている。幼い時に両親は亡くなったことは耳にし、それ故に両親については人伝にしか知りえない。それはシヴァも同様だった。フラウ達に両親が残したものとえば、傍迷惑な称号だけ。私達には逃げ道はなく、ただ与えられた称号の示すとおりに役割を果たすだけ。

( 兄様、私達はいつまでこの宿業を抱えればいいんでしょうね )

シヴァとフラウは浴室を出ると、普段着に着替え、朝食を取るべく施設内にある食堂に向かうことにした。

シヴァは衣服を着る際、黒を好む。なぜなら、自分が返り血を浴びることも自分が血塗れになることは既に前提条件なので、黒の衣服であった方が何かと都合がいいのだ。

逆にフラウは白髪ということもあってか、明るい染色の服を好む。今朝着たのは白の体のラインを隠すローブ。髪の色と同色の為か全身がほとんど白一色に染まっている。

シヴァは苦笑する。まるで自分達の役目の様であるからだ。

シヴァは今厄介になっている部屋を見渡す。

部屋の中は殺風景と言っても過言ではなかった。あるのは、机とクローゼットとベットだけ。それ以外には何もなかった。他の者が

見れば寂しいと思うのだろうが、シヴァにはそのような感性は備わることにはなかった、というよりも彼にとっては親しんだものだからだ。この部屋は彼の生きざまを表しているようだからだ。

この部屋はシヴァ達の故国にあるシヴァの自室と全く同じだった。ここには一時的にいるだけだから最低限の物しか置いていない。ここにはいつまでいるかは見当はつかない。滞在時間によってはフラウの私物は増えるかもしれないが、シヴァの私物は増えることはない。

妹やその友人はシヴァの自室に何かと飾りでも入れたがっていたようだが、その都度シヴァは断っていた。自分には必要ないと。この部屋で過ごすこともあまりないと。

シヴァ達が故国を離れ、世界防衛機構W.D.O（通称：ウオード）と呼ばれる各地に人材を派遣する施設に足を運んでいるのは訳がある。

シヴァ達の住む世界はエイコーンと呼ばれているが、いくつかこの世界には不可解な点がある。

その一つが、各地に必ずと言っていいほど存在しているクリスタルだ。

そして、全てではないが、そのクリスタルから穢魔と呼ばれる異形の怪異が生まれることだ。

世界防衛機構W.D.Oが結成されることになったそもその始まりはこの世界に広く、そして数多く存在している壊すことも削ることもできない材質不明なクリスタルから突如穢魔が出現したことに由来している。

そのクリスタルはこれまで掘り出すことも動かすこともできなかつたので、国が保護し、旅人の目印に、研究にと利用されてきた。

だが、いつからかそのクリスタルから凶悪な穢魔が出現した。

各地に点在しているクリスタルからは疎らしか出現しないが、穢魔が軍勢を伴って出現されることが確認されているのが五つあり、

まるで門を潜り抜けるかのように穢魔が出現することから水晶門と  
その五つの巨大なクリスタルは呼ばれている。

穢魔が尽きることを知らぬかのように圧倒的なまでに数が多く、  
力を有していたことも拍車を掛けていただろう。最初は僅かながら  
も抵抗していたものの、次第にその物量に押され、人々の抵抗は空  
しくも散っていった。人々の理解が届かぬ異常気象が相次いだこと  
も関係しているだろう。人々は恐れを抱き、無慈悲に踏み躪られ、  
嘆くことでしか、自分を慰める手段はなかった。

穢魔は数を増すばかりか、大小問わずコロニーと呼ばれる巣をつ  
くり、人々の支配地を少しずつ削り取っていった。

誰もが絶望に包まれ、滅びを待つばかりとなったが、ある王国か  
ら二人の人物が立ち上がったことにより、その斜陽の時を免れるこ  
ととなった。

その二人こそが後に『勇者』と『聖女』と呼ばれる英雄だった。

二人は魔導デユナミスの器と呼ばれることになる魔導術を駆使し、獅子奮迅  
の働きで穢魔軍を悉く滅ぼしていった。そして本人達はその意思に  
かわからず、周囲に望まれ世界を巡り、穢魔を滅ぼし、穢魔の脅威  
に悲嘆する民を慰撫し、世界に蔓延る暗雲を打ち払っていった。

世界にとって二人は救世の光と同等で、魔物に怯えていた人々も  
いつしか武器を取り、二人に続かんと、まるで小さな種火が燃え広  
がり、いつしか大きな炎となる様に人々の心に光と希望を齎してい  
った。

人々の心に光と希望を齎していき、世界が二人を中心に纏まってい  
ったことに敬意を称し、『勇者』と『聖女』と二人は広く認識され  
たのである。

そして、人々は穢魔を駆逐し、世界は平穏を得たのである。

圧倒的な程の数の穢魔が存在していたにもかかわらず、最早穢魔  
は疎らにしか存在せず、人々はこれまでの反動なのか、今までの遅  
れを取り返すかのように栄華を極めた。

しかし、その栄華も長くは続かなかった。



再び穢魔が多数出現し、過去の再現をするかのように世界を侵略し始めたのだ。

その度に人々の間からは『勇者』と『聖女』と呼ばれる英雄が輩出され、穢魔を駆逐し、倒してきたのだ。

穢魔が自分達でも対処は可能ではあることが、既に証明されていたので、人々は いや、国々は功を競うかのように『勇者』と『聖女』を輩出していった。

そして、最近まで人々から全ての国々から『勇者』『聖女』と正式に認識されていたのが、シヴァとフラウの両親、ルドラトリムールとラクストリムールだ。

スターリア王国は島国だ。しかも大半の穢魔は海を渡って上陸せず、スターリア王国は幸運にも他大陸に比べ、面積が狭い為か、それとも他に理由があるのか穢魔は他大陸に比べ遥かに少なかった。

それ故か、穢魔の支配からは縁遠かったが、突如とした穢魔の大規模な侵攻により窮地に立たされることになった。その時、人々の中心に立つて穢魔の大群に抗ったのが、スターリア王国でも屈指の腕前を誇ったルドラとラクスだったのだ。

今までスターリア王国から『勇者』と『聖女』と呼ばれる様な優秀な人材は輩出されなかった。だからだろうか？ スターリア王国の人々は二人を挙って二人を奉り、古からの習慣通り、二人を有無を言わず旅立たせた。生まれたばかりの子供二人を残して。

その後の二人の功績は各地に語り継がれるほど、伝説的な活躍だったという。他にも他国には『勇者』と『聖女』がいるにもかかわらず、それらが霞んで見えるほどに目まぐるしく活躍し、終いには旅の仲間として同行していったとされている。

彼らには少なからず同行していった人物はいたが、『二つ名』を冠するほどの実力者が二人の他にも七人いた。人々はその七人を『七英雄』と呼んでいる。

だが、彼らの偉業も最後の水晶門で途切れることとなる。詳細は

定かではないが、彼らからの連絡はそこで途絶え、その後の姿も確認されていないことから死亡したのではないかと噂されている。さらに、封印されたはずの水晶門から再び多数の穢魔が出現されたことがその噂に拍車を掛けた。

英雄の訃報に人々は意気消沈し、穢魔も押し込めていたにも拘らず領土は侵食され、元の木阿弥となった。

絶望に沈む人々に希望の光を射すことになったのが、稀代の英雄であるルドラトリムールとラクストリムールの子供であるシヴァとフラウが二人の代わりに『勇者』と『聖女』になるというストーリーア王国の発布だった。暗澹としていた人々にとってその発布はまさしく救世の光だった。人々はその発布を受け入れ、二人をサポート いや、二人に世界を救わせるために各地に人材を派遣することを目的とした世界防衛機構<sup>W.D.O.</sup>を設立。そして、ストーリーア王国だけに今後の国際情勢でイニシアチブを取らせまいと自国の軍事力が激減しない範囲で、二人の出立に合わせた人材を育成し、あわよくば『勇者』と『聖女』の称号も掠めようと画策した。

そのような事情もあってか、ウォードには戦力の加算もそうだが、復興を目的とした様々な人材が、主に若い芽ではあるが集結することになった。

シヴァ達が現在いるのはストーリーア王国に最も近いフレイス王国の首都パリスにあるウォードの宿舎に滞在している。ここはまるで教育機関施設、学校のようなものだ。学校との違いは授業はなく、与えられた指示に従い、救援を要請されたところへ直行することだろう。言い方は悪いが、基本的には傭兵の真似事だ。

シヴァ達が居る所の様な施設は各所にあり、ウォードに所属する者はそこを利用することになる。一箇所に固まりすぎないように、調整はしているようだが、シヴァ達がここを訪れることは旅立つ前から分かっていたため、同行しようとする者は後を絶たない。七英雄の子や各国の実力者の子は数は少ないが、ウォードに所属している。現に一人、シヴァ達と同じ施設を利用している。

だが、決定的に異なる点が一つある。それは実績だ。

仕方がない事ではあるが、ウォードに所属している者達は全員ではないが、穢魔との戦闘は経験している。だが、コロニーを陥落したことは当然ながらない。各国の軍でも手を焼いているのだ、まして将来性はあるが、経験不足の若者がコロニーを陥落などできるのは夢のまた夢だろう。

しかし、それを覆す者がいた。それがシヴァだ。

各国の噂にはなっているが、シヴァはフレイス王国に旅立つ際、スターリア王国が滅びの淵に立たされない為に、小規模ながらもコロニーを単独で陥落した。

故に現在、スターリア王国は自軍のみで対処できる状態、つまりコロニーが存在せず穢魔が疎らにしか存在していない状態にある。

シヴァ達はフレイス王国でいくつか小規模なコロニーを陥落した後、各国の情勢を顧みて、救援を要請しなければならぬ激戦地に足を運ぶ手はずになっている。

そして、今現在シヴァ達が宿舎に居るのは、フレイス王国のどのコロニーを陥落させるのかを審議しているからであり、一時の休息を得ているのだった。

「お腹が減ったぞ」

そう言ったのは、身長が約二十センチメートルの灰色の長髪を背に流している少女だ。その少女はシヴァの周りを飛び回りながら、空腹だと主に訴えている。

「食べなくても問題ないだろ、サティ」

シヴァは鬱陶しそうに飛び回るサティを見ている。

「そういう問題ではないのだ。食べなくても問題はないのだが、食事は日々摂らなくてはいけないものだ。故にそこに快樂を見出すのは当然だ」

サティはシヴァの目の前に止まると、踏ん反り返って反論した。

シヴァは肩を竦めると、肩を指でトン、と叩く。

サティは嬉しそうに、そこが定位置と言わんばかりにすぐさま座る。

「では、行きましようか？」

フラウは髪をいつもの髪型に結んでいた。長髪を先の方で結んでいるため、まるで尻尾のようにゆらゆらと揺れている。

扉を開けるとセミロングの翠緑の髪を持つ、鋭利な雰囲気を持つ少女がまるで部屋に入るのを防ぐかのように佇んでいた。その美貌も相俟ってか近寄りがたい雰囲気を出している。

「セレナ、待たせたな」

シヴァは浴室から出た直後から感じていた気配に声を掛ける。彼女が部屋に入ることはフラウの護衛であるため何も問題はないのだが、部屋の中にはシヴァが居た為、彼女は部屋の外で待機することにしたのだ。

「ごめんなさい、セレナ。待たせてしまったわね」

「気にする必要はない。これが私の役目だから」

待たせてしまったことにフラウは友人であり、護衛でもあるセレ

ナニルヴェリア詫びるが、セレナは待たされることも護衛の一環  
と思っている節があるので、特に気にしてはいなかった。

「では、朝食に行くぞ！」

サテイが号令をかけ、足を運んで間もない食堂に向かうこととな  
った。

シヴァ、フラウ、セレナの三人はスターリア王国で今最も知名度  
が高い三人で、セレナは二人に正式に供と認められている人物だ。

二人に供にしたいと認められれば、道中を共にすることはできる。  
サテイを含めた四人はスターリア王国での昔からの馴染みで、彼  
らに与えられた柵からか数多くの苦難を共にしたといえよう。

スターリア王国からは三人以外に、国力からか、それとも国柄の  
為かウォードに加入している者はおらず、四人にとっても煩わしい  
だけなので彼らに加わろうとする者がいないことは有難くはあるが、  
同時にウォードに加入する者がいないことは嘆かわしい事ではあっ  
た。

食堂に足を運ぶと、遠巻きから彼らに注目する視線があるのを察  
する。シヴァ達がここに到着したことは昨日の内に知れ渡っていた  
ことなので、今のような状態になることは容易に予想することはで  
きた。

シヴァ達にとってみれば、このような視線に晒されることは珍し  
い事ではなく、日常茶飯事だった。ずっと遠巻きに見ていてほしい  
のが、シヴァ達の偽らざる本音だった。スターリア王国のように「

穢魔を殺してほしい』という殺戮の声も『今世界が絶望に包まれているのはお前達のせいだ』という怨嗟の声も最早耳が腐るほどに聞き慣れている。羨望も嫉妬も怨嗟も慣れ親しんだものではあるが、鬱陶しいことにかわりはないので、有象無象の輩には近づいてほしくはなかった。

その願いが叶ったかどうかは定かではないが、幸いにしてシヴァ達に近づく者はおらず、静かな環境の元、食事を摂ることができた。

シヴァ達は通達があるまでは待機することになっている。故に訓練にあてる事にしたのだが、他の三人はともかくシヴァは訓練か休息しか時間の潰し方を知らないなので、観光ではなく訓練になってしまったのはある意味当然といえよう。

シヴァ達は訓練場を借りることにした。自分達の他にも借りている者がいるため、少し離れて訓練することとなった。

フラウは遠距離から攻撃するタイプの為、最低限の護身しか身に付けてはいない。もっとも下手な腕前では彼女には及ばない程度ではあるが……。それに彼女の傍にはセレナが常に護衛している為、彼女には近づくことはできない。

よってシヴァとセレナは今、対峙している。その二人をフラウとサティが観戦している。

二人は稽古ではデュナミスは使わないことにしている。使うこともあるのだが、それはもっぱら誰も見ていない時だけだ。この場には四人以外に人がいる。よって二人はデュナミスは使わず、己の技量だけとなる。

シヴァとセレナ、二人は共に同じ構えを取っている。剣を握っているだけで、自然体のままだ。長く時を共有したこともあって、お互いの手は知り尽くしている。その為か、無闇に動かず、静止したままで二人は互いに隙を窺っている。

張り詰めた空気が訓練場に浸透していく。いつの間にか剣戟が止み、耳鳴りがするほどの静寂だけが場を支配している。

埒があかないと思ったのか、シヴァは消失してしまったと見紛うほどの神速で間合いを詰める。

二人はぶつかつた衝撃を利用して距離をとる。

手には痺れが残っていたが、それにかまわず二人は相手に疾走すセレナはシヴァの神速から繰り広げられる上段からの一撃に慌てることなく、横からあて、逸らすことでシヴァの剣閃を回避し、その勢いのまま一回転し、シヴァに横薙ぎの一閃を繰り出す。

シヴァは逸らされることを前提にしていたのか、逸らされた剣速を損なうことなく、淀みなく身体を回転させ、下段から雷光の如き一閃がセレナに迫る。

ギイインと金属音が大気を奮わせるほどの轟音を奏でる。

セレナよりもシヴァの方が男女の差の為か臂力がある。しかし、セレナが押し負けることはなかった。シヴァの剣が力を発揮できる位置に先んじて、セレナが風さえも切り裂いてしまうような剣閃を繰り出せたからだ。

二人の剣の操る姿は似ていた。寒気がするほど鋭すぎる剣閃も、一切の表情も見せない冷徹な無表情も……。違いがあるとすれば、セレナが清流を思わせる流麗な動きであるならば、シヴァは奔流を思わせる荒々しくも躍動感ある動きであることだろう。

元々勝敗を気にしていなかった為か、決着を気にせず適当なところで稽古を切り上げた。二人が稽古を終えるとすぐにフラウは二人に駆けつけ、タオルと水を渡す。

「お疲れ様です。二人とも」

フラウはシヴァにはタオルを渡さず、自分でシヴァから出ている汗を拭きとる。ここにいる三人ともフラウの行動には何ら口を挿ま

ず、いつものことと好きにさせていた。

フラウは鼻歌交じりに上機嫌にシヴァから出てくる汗を丹念に拭き取る。

「いつまでかかると思う?」

やや言葉が抜けているが、シヴァと付き合いが長い三人は問題なく意味が通じていた。

「そうだな……着いたばかりである事を考慮し、明日以降ではないか?」

「そうね。それが妥当でしょう」

「では今日は何をしますか?」

「観光でよいのではないか? 出歩いて行けないという通達はされておらんし、問題はなかるう」

「ではそうしましょう」

シヴァは女性陣に口を挿まず、会話も盛り上げようとはしなかった。シヴァは無口な方ではあるし、最低限の事以外は声もかけない。四人の中では会話は只管受け身だった。それ故か。

「では、シヴァも行くのだぞ」

「……行かなくては駄目か?」



「「「駄目」「」」

女性陣に振り回されるのであった。

四人が去った後、シヴァとセレナ二人の稽古にあてられたのか、一人の青年が今だに熱に浮かされていた。

「あれが『勇者』と『聖女』か……」

「あれで俺達より年下なのか……」

恋焦がれているような青年に対して、この青年は唸りをあげて二人の稽古を何度も頭の中で動きを繰り返していた。

そんな二人を見て、二人の師に当たる熟年の男は喝を入れる。

「感心するのもいいが、触発されたのであれば、自分達の内に受け入れ、どうすれば昇華できるか考える！ いいな！」

「「はい！」」

すぐさま二人の青年は二人の動きを参考にし、自分に昇華できないか稽古を再開する。

「あいつらがあの人達の子供か……」

口腔で呟いた声は誰の耳にも届かず、虚空に消えていった。

フレイス王国の首都パリスは『華の都』として有名だ。数々の芸術家達を輩出したこともだが、聖堂などの人々の目に留まりやすい建築物には匠の意匠を凝らし、人々の芸術に対する感性を高めていることがそう呼ばれている所以の一つだろう。

街を一望すると、建物の高さがさほど差がなく、同じ様式であることもその一因だ。街そのものが一つの芸術作品と言えるだろう。

その街並みをフラウはシヴァとまるで恋人のように腕を組んで歩いている。サティはシヴァの肩に留まり、セレナは護衛として彼らの後ろに付いてまわっていた。

街ゆく人々がフラウを見て、恍惚とした溜息をついている。

フラウは見る者を虜にする並外れた美貌を持っている。上機嫌な為幸せそうにしていることも人々を魅了している原因となっている。

だが、そんな彼女に声を掛けようとする兵つわものはいない。気後れしてしまう美貌であることもその一助となっているが、主な原因はシヴァとセレナだ。フラウに近づこうとする者は二人の殺伐とした視線の集中砲火を受けてしまい、結果誰も近づけずにいた。

余計な横槍が入らず、実に有意義な観光をしていたシヴァ達はパリスで最も有名な大聖堂　チャートレス大聖堂を訪れた。

夕暮れ時なためか、大聖堂を訪れようとする者はシヴァ達の他に目に付く限りはいなかった。

二つの尖塔を持つゴシック様式の聖堂の重厚な扉を開けると、そこには神秘的な光景が広がっていた。

外は夕焼けの為、朱陽が外の色を支配している。にもかかわらず、聖堂の中は清浄な蒼が染め上げていた。意匠を凝らしたステンドグ

ラスがこの場を神聖な、荘厳な場に仕立て上げていた。その中に  
いて、今一際神秘性を高めているのが、この世界で崇められている  
神の一人、女神シュリーナの像に跪く様に膝を折り、その双眸を閉  
じ、両手を組んで祈りを一心に捧げている司祭服を着た少女だ。

バラ窓から射し入る色鮮やかな光が、洗礼の如く降り注ぐ。少女  
の金砂の髪が神々しい光を受け、闇の中で煌めく星の如く輝いてい  
た。

シヴァ達はこの光景を崩すことを憚れ、ゆっくりと音もなく扉を  
閉めた。

短くはない時間、祈りを捧げる金砂の少女に痺れを切らしたのか、  
少女の傍らにある木製の古ぼけた長椅子に座る薄桃色のシヨートカ  
ットを持つ少女は声を掛ける。

「相変わらず祈るのが好きだな。あたしはこういった場所もそうだ  
が、じっとしてるの苦手なんだがな」

そうぼやく、古くから馴染みある友人に金砂の少女はくすりと笑  
った。

「貴女はやんちゃなものね。おばさん達が貴方を神学校に連れて矯  
正させようとしたほどなもの」

「まあ……結局は無駄だったかな」

窮屈だった学校生活を思い出したのか、薄桃の少女は頭を掻きな  
がら顔を顰めている。そんな友人を金砂の少女はおかしそうに笑っ

ている。

「しかし……本当におまえも行くつもりなのか？ 正直に言ってみると全然向いてないと思うが」

「ええ……神の使徒としてできる限り多くの人に癒しを与えたいの」

金砂の少女は昔から信仰心が人並み外れて高かったからか、事あるごとに『神の使徒として』という言葉を使う。その事に薄桃の少女は思うところはあったが、今まで何も言わないでいた。

しかし、今回は別だ。旅には危険が付き纏う。目の前の友人は癒しの術には長けているが、荒事に向いてはいない。生来の性格と何かある度に友人を護ってきたため、薄桃の少女は荒事は自分の専門だと思っている。

だが、今回はかりは護りきれぬ自信はなかった。危険だと、反対したとしても頑固なところがある友人だ。きっと彼女は激戦地でも信仰心から震えながらも足を運ぶだろう。

（『勇者様』にでも頼ってみるか……）

『勇者』に付いていけるならば、自分の世界を見て回りたい衝動と混沌に染まってしまった世の中を正すことができる。さらに、友人の人々を助けたいという望みも満たせる。友人の護衛も場合によっては任せることができよう。一石三鳥であり、デメリットもない。あえていうならば、激戦地に足を運ぶことだろうが、目の前の友人ならば放っておけばそこに向かいかねない。ならば、優秀な護衛が付けることができる方がましだということだ。

（後はどう接触するかだな）

頭で考えるより身体で行動するタイプの彼女は、親友の為普段は使わない知恵を振り絞り、『勇者』にどうしたら付いていけるかを考えた。

「どうしたの？ 唸ったりして」

「ちょっと考え事をな……」

「ふふ……似あつてないね」

「ほっとけ！」

先ほどとは打って変わって、大聖堂に姦しい声が響き渡った。

フレイス王宮のある一室、議論が開かれる時に使われるこの部屋では、王、大臣、騎士団長、そして数人の文官と武官が一堂に会し、『勇者』をどこに派遣するかを話し合っていた。

「現状を確認します。今、フレイス王国にあるコロニーは二つ。一つは南方、もう一つは西方にあります。南方は隣接しているロマーナ王国に近く、ロマーナ王国にも穢魔が流出するので現状において危険度はさほど高くはありません。しかし、問題は西方です。こちららは山岳地帯に近い為、穢魔は隣接しているエスタード王国に流出する数は南方に比べ少なく、数多くの穢魔が蔓延っております。さらに、それを利用してか、盗賊共が山岳地帯を根城とし、派遣した軍、周辺の村落に襲撃を加えております。盗賊共を根絶やしにしようとも穢魔の存在が邪魔になり、奴らを排除することが困難となっております」

フレイス王国騎士団長、ジャン＝シルドレイはそう締めくくり、周囲の反応を待つ。

誰も言葉を発しない中、最初に口を開いたのは、大臣のローカス  
「カロヴィングだった。」

「仮に軍を二分したとして、一方を押さえることはできるかね？」

「押し止めることは可能です。……ですが、それも数に依ります。  
今までのような侵攻ならば可能ですが、それ以上となると困難と言  
わざるをえません」

騎士団長がそう言うと、何人かの文官は一見しただけでは分から  
ないであろう程、侮蔑の視線を向け、武官は拳を握り、自分達の不  
甲斐無さを悔いていた。

「ふむ……となると、『勇者』は西方に向けた方がよいか……」

自分の考えを吟味するように大臣が呟くと、疑問の声が湧きあが  
ってきた。

「一つお聞きしたいのですが……あの『勇者』は役に立つのですか  
？」

「そうだ！ 我らでさえ、手を焼いているのだ。たかだか十六程度  
の若造に何ができる！？」

「だが、コロニーを単独で陥落したと噂されているが……」

「ふん！ そんなものは誇張にすぎぬよ！ どうせ大方は排除して  
もらって最後だけ一人で片付けただけであろうよ！」

一度野次が出ると、その勢いは止まらず、今までの静寂が嘘のよ

うに部屋に喧騒が満ちる。誰もかれもが騒ぎ立てる中、大臣は自分の考えを纏めたのか、閉じていた目を開き、今だに騒ぎ立てている者達を一喝する。

「静まらぬか！！」

大臣の一喝に喧騒が止み、大臣は自分の考えを聞かせようと、一言一句誰も聞き洩らさぬように静かに、しかし威厳を伴った声で話し始めた。

「『勇者』は西方に派遣する。軍は二分し、一方は南方を警戒、侵攻があれば防衛する。そして、もう一方はコロニーの陥落だ。ただし、我らが軍を主軸にするのではなく、かの『勇者』を主軸とする。といっても、『勇者』は穢魔の間引き、及び囷に使用するのであって、主力となるのはあくまで我らが軍だ。そして、『勇者』にはコロニー攻略の前に盗賊共を根絶やしにして貰う。盗賊共に横槍を入れられてはかなわんから……。それまで軍はコロニーを攻略せず、準備を整え、『勇者』が合流した後、攻略することとする。反論はあるかね？」

大臣の意見に皆、沈黙を保つ。といっても、何も言えないのではなく、大臣の意見に問題がないかを吟味しているだけであるので、大臣は彼らの意見が纏まるまで待った。

反対意見が誰の口からも発せず、意見に従うことを示すかのようになり大臣を仰ぎ見るのを確認すると、大臣は最終決定をして貰うべく、王に裁定を窺う。

「皆の反対がないのであれば、大臣の意見を採用することとする。

……『勇者』が役に立つかが、唯一の不確定要素ではあるが……あの『勇者』の狂信者であるスターリア王国が、そして世界中の魔科

学者達が叡智を集めて造り上げたのだ。精々、我らの役に立つて貰うことにしよう」

王はそう冷徹に嗤った。

翌日、シヴァ達に今後の行動の指針が詳細に記された通達書が届けられた。そこには、明日の朝にある街へ出発。そしてその村を拠点にし、その街の近くにいる盗賊を対処した後、軍に合流し、コロニーを攻略することが任務となっていた。また、希望があるならば、直属の者を同行者として付けることも可能とのことだった。

フラウ達にも通達書を見せると、言葉を濁してあるが、便利な捨て駒として、便利屋として使われていることが明白であるので、一瞬顔を顰めたが、元々こうなることは『勇者』であるならば自明の理だったので、文句を口に出さず、ただ嘆息しただけだった。

「兄様、同行者を付けることが可能とありますがどうなさいますか？」

「必要ない」

間、髪も容れず拒絶の意を示す。ここにいる誰もがシヴァがそう答えるのは分かりきっていたことなので、それに異を唱えることはない。

しかし

「付いてこようとする者は必ずいると思います。そう言った者達はどうかさいますか？」



「好きにさせればいい……セレナにでも任せればいいだろう?」

シヴァがセレナの方を見ると、肩を竦め、心底面倒だといわんばかりの表情だった。

「私としても邪魔なだけなんです……まあ、私の役目は護衛ですし、その人達にも手伝ってもらおうとしましょう」

そう言っつて、もうこれに関しては興味を失ったといわんばかりに瞑想に勤しんだ。

「兄様、サティはどうしていますか?」

いつもシヴァの周りをウロチョロしている小人は今姿を見せていない。彼女がシヴァから離れることは現状ではありえない。

「ああ……サティなら今は寝てるよ。顕現しすぎたためにヒュレーを多く消費したからな。今は回復中」

「昨日サティは大はしゃぎでしたからね」

「違うない」

二人が共に思い浮かべたのが、昨日の観光の時、あっちに行きたい、こっちに行きたいというサティのわがまま。情動が乏しい三人なので、サティに付き合うのは気疲れしてしまうが、同時に心地良くもあつた。三人の事情もあつてか、サティは昔からフラウとセレナを振り回していたのだ。

サティは守護聖霊と呼ばれる存在だ。守護聖霊は デレナミス 魔導の器の最

上界層である 創世の詠の第八位階に到達した時に術者の特性・性格など本人を形成するあらゆる要素から自動的に創られることがある存在である。 創世の詠自体、至れる存在は稀であり、守護聖靈は何らかの獣の形をとるものであるが、サティは とある事情から人型となっている。

魔導の器は元々、生活の術として人々の間で重宝されていた。この世界のありとあらゆるものを構成するヒュレーを人体に取り入れ、人々の知識やイメージからヒュレーを加工し、現象を起こすことで人々の暮らしを豊かにしていた。

だが、人の必然か 暮らしを豊かにしていたデュナミスは人々の争いに使われ、生活の術としてではなく、戦闘用の術として用いられることが一般的になってきた。

その戦闘用の強力なデュナミスこそが今、穢魔達との戦闘で使われている魔導戦術だ。(エネルギーはデュナミスの発展形である。そのことから、人々はエネルギーとデュナミスを混同している節がある。そのため、基本であるデュナミスと発展形であるエネルギーを纏めてデュナミスと人々は称している。つまり、エネルギーア＝デュナミスと認識してよい)

魔導戦術は大別すれば二種類に分けられ、一つが身体能力の向上、武装強化に使われるオーラ。もう一つが自然現象、物理現象を起こすエイドスに二分される。

エネルギーは遺伝によるところもあるのだが、基本的にデュナミスを多く使えば使うほど、その効力を増す。

火を例に持ちあげるならば、デュナミスが種火とするならば、エネルギーはその種火を元に燃え上がった焚火といえよう。もちろん、規模に差はあるが、デュナミスとエネルギーの差は歴然としている。

そして、エネルギーの先にあるのが、エンテレケイアである。エンテレケイアはエネルギーをさらに先鋭強化し、術者にその恩恵を与えるものだ。

これに至る正確な条件は未だ解明されていない。英雄と呼ばれていた存在は高い確率で身に付けていた。しかし、彼らにも正確な理由は分かっていない。彼らが共通して言っていたことは、エネルギーを一つでも極め、己を知ることでは至れるのではないかと憶測をたてていた。

サテイはシヴァの守護聖霊である。それ故シヴァ自身、エンテレケイアに至っている存在ではあるが、本人は至っているとは微塵も思っていない。

至らされたとは思ってはいるが……。

「ところで兄様……」

「ん？」

フラウは顔を赤らめ、何かを言いくそくに、何度も口を開いては閉じ、拳動もそわそわしていた。

シヴァにはフラウがそのような態度をとる時に、何を行うのかを知っていた。定期的に行っていることなので、シヴァにとっては慣れたものである。いや、感情がほとんどないシヴァだからこそ何の感慨を生まないのであらう。

「例のあれか？」

そうシヴァが告げた途端、フラウはその一片のシミもない白皙の肌を赤く染め上げ、こくりと頷いた。

「おいで」

おずおずと　しかし確かな足取りでフラウはシヴァの傍に寄り、そしてシヴァの懐の中に入り込んだ。

瞳を潤ませ、緊張から息が少し荒れている様はその人のものだと  
は思えない美貌も相俟って、犯し難い神聖さとそれ故に墮としてみ  
たくなる劣情を感じさせた。

シヴァはそんなフラウに何の感情も齎すことはない。彼の感情は  
とうの昔に擦り切れ、摩耗し、壊され、捨てたのだから。

シヴァの瞳にフラウが映る。

フラウの瞳にはシヴァの顔しか映していない。

フラウの視界が徐々に昼から夜に変わる様に闇に包まれていき、  
何も映さなくなった時、フラウの唇にはフラウのものではない誰か  
の温もりが与えられた。

フラウがわずかに口を開くと、舌がフラウを犯す様に捻じ込まれ  
ていく。フラウはシヴァから送られてくる唾液を一滴残らず漏らさ  
ぬように啜る。

フラウは暫くシヴァの唇を、舌を、唾液を味わうと、同じことを  
シヴァに繰り返した。

二人の接点がなくなろうとすると、二人を繋ごうと銀橋ができて  
いたが、やがてそれもぶつりと途切れた。

フラウは行為の余韻を味わうかのようになり、シヴァの胸にその身を  
預ける。

シヴァはフラウを抱き寄せ、優しく髪を梳く。

この行為は二人を繋ぐ絆でもあり呪いでもあった。

二人は生きる為に、互いの体液を必要とする体質だった。先天的  
なものか、後天的なものか理由は定かではない。ただ、定期的に摺  
取せねば、飢餓が発生し、やがて衰弱し、死に至ってしまうのであ  
った。

二人がキスをするようになったのは、これが効率が良かった点も  
ある。血液でも代用はできるのではあるが、フラウは幼少時のトラ  
ウマからシヴァを傷つけることを激しく嫌う。それはフラウが常日  
頃から『兄様が少しでも気が晴れるならばどのような責めも喜んで  
受け入れます。犯してくださいさってもかまいません』という言動から

も窺える。 シヴァにはフラウを責める気など毛頭なく、また護るべき者であるので傷つけることなどする筈もない。よって、体液の交換がキスになったのはある意味当然の結末と言えよう。

「……………はあ……………いいけどね」

彼らの情事を見せいで溜息をつき、呟いたセレナの哀愁を誘う言葉は誰にも届かなかった。

冷たさを含む風がシヴァ達の頬を撫でる。涼しげな風ではなく、冷たさを感じるのは、曇天であるため陽光を雲が遮っているからだろう。数日後には雨が降るかもしれない。そんな予感をシヴァは見上げた空から予測を立てていた。

国が馬車を用意していたおかげで街まで大分時間が短縮できるとシヴァ達は思っていた。人の集落を除き、野には穢魔が生息していた。コロニーほどではないにせよ数は決して少なくはない。後れをとることはないにせよ、厄介事ひとつと片付けておきたいシヴァ達にしてみれば、時間のロスにかなりえないので移動速度が速いに越したことはないのであった。

移動手段は馬車だけではなく、魔導器の一つに《回廊門》と呼ばれる物がある。これは国内及び指定された関所にしか移動できないが、蓄積されたヒュレーを使用中はまるで門を潜り抜けるかのように人は言うに及ばず、物資を数多く運ぶことができる為、多くの国で採用されている。

しかし、基本的に緊急用であるので、平時に使われることはあまりない。

今回、盗賊団の壊滅及びコロニーの陥落の任務でシヴァ達に付いてくるのは五人。ウオードに所属している者は他にもいるのだが、戦闘要員が思ったより少なかったことと、軍は西方に力を注ぐので南方が手薄になる。それ故にもしものために緊急要員が一人でも多く必要としていた為、希望者を募ってから配分する筈だったのだが、希望者が五人だけだった為、こうなってしまったということだ。

少ないのでは危惧はあったのだが、戦闘要員が少なかったことと希望者の中に『七英雄』の弟子と息子が希望者の中に含まれていた為、少数精鋭で行く判断が下されたのだ。

「初めまして、私の名はエリオス」レウクロス。ユナティア連合国の出身となる。こっちは……」

始めに自己紹介したのは、茶髪を短く刈り込んだ偉丈夫で、服の上からでもその盛り上がった筋肉がはちきれんばかりに主張している。また、泰然とした雰囲気と高身長もあってかどこか威圧的でもあった。

「は、はい！ 僕はアタル」イグニードと言います！ 十九歳です！ 僕もユナティア連合国出身で先生とは師弟の関係にあります！ ええと……それから」

顔を赤らめ、茫然としていたところに声を掛けられ、軽くテンパっているのは赤みがかった金髪を持つ真面目そうな雰囲気を持つ青年だった。十九歳とのことだったが、彼の慌てた様と童顔からもつと幼く感じられた。

彼のチラチラ見る視線の先にはフラウがいた。

そんな彼を見て、こいつにも春が来たかと、にやにやとテンパる彼を落ち着けるように肩を抱くのは、見るからに軽薄そうな濃いめの青の色彩を持つ少し長めの髪を後ろに束ねた青年だった。

「まあ、落ち着けよ……俺はアープ＝アームナート。こいつと同い年で同じ関係。よろしくな」

そう言つと、アープはアタルを連れて、少し離れた場所に行き、シヴァ達が何を話しているか分からない音量でアタルと話し込んでいた。アタルが喚き散らしているが、シヴァ達は誰も気にしてはいなかった。

何もなかったようにシヴァ達に自己紹介するのは、後姿だけしか見かけていないが、チャートレス大聖堂で目にしたと思われる少女達。

「あたしの名前はレイア＝アルキユール。それで、こっちがマーテル＝ベレイード。ここの出身で親友。以上！」

にかつと笑うのは活発そうな薄桃の少女。マーテルはぺこりと金砂の頭を下げると半歩下がった。

お互い軽く自己紹介すると、馬車に乗り込み、拠点となる街へと出発した。

## 第二楽章 眩しさから直視できぬ存在は見えぬ故に理解することは能わず

今、馬車の中は沈黙に包まれていた。

いや、沈黙とは言い難い。ひそひそと親しき者と話す声はかろうじて他者の耳にも届く。アタルもアーブもレイアもマーテルも誰もかれも、ある一角を意識しすぎて自然と話声が小さくなってしまっていたのだ。

馬車の中は通常ならば走行からくる振動により、三半規管の揺れから体のバランスが崩れてしまい、酔ってしまう症状が出る者が出てしまってもおかしくない。

しかし、馬車の中にいる誰もが快適に過ごしていた。馬車の中にいる誰もかれもが乗り物酔いに強いわけではない。では、なぜ誰も乗り物酔いを起こさないのか。

その答えは馬車に敷かれている魔導器にある。各街には穢魔が出てくるクリスタルとは別に魔晶石と呼ばれるヒュレーの塊のような水晶が出てくる。

いや 魔晶石が出てくるクリスタルを恩寵の結晶と呼ぶ 恩寵の結晶があるところに人々は街を建設したといってもいい。

魔晶石は人々の中にあるヒュレーを補充・励起させ、人々の暮らしを豊かにしていた。

魔導器は人々がデュナミスエネルギーのようにならに戦闘用に加工したものであるならば、暮らしを豊かにする為に開発されたものである。

魔導器は感覚的なものであるデュナミスを魔導学という学問により図式化・数式化し、人々の理解を得られるように定着化することで得られた魔導刻印を刻み、スイッチを入れることにより望んだ効



果を發揮させる代物である。

魔導器はスイッチを入れると、魔晶石に含まれるヒュレーを消耗するので、ヒュレーがなくなってしまうえば、魔晶石は消え失せてしまうので消耗品の類いの品物だ。

故に定期的に特定の魔晶石を追加・補充しなくてはならない。

馬車に敷かれている魔導器は振動を吸収・拡散することを目的とした代物で、馬車を持つ者であるならば、誰でも使用している物だ。

ある一角では何者にも犯し難い雰囲気を発するカップルがいた。そのカップル二人の名はシヴァとフラウ。

シヴァはフラウの太腿に頭をのせ、周囲に気配を探りながらも身体を休めていた。

フラウは膝枕しているシヴァの髪を掬っては零したり、撫でたりしながら、実に嬉しそうに顔を綻ばせていた。

そんな二人を見て、いつものことと無視する者、嫉妬に駆られながらも羨ましそうに見る者、そんな友人を見てにやにやする者、顔を赤らめる者、きらきらと目を輝かせる者、御者台から過去に思いを馳せ、やはり親子かと懐かしむ者がいた。

身体を休めながらも、策敵を無意識に行っていたシヴァは、策敵範囲に親しき気配を察知し、フラウの膝からすぐさま跳ね起きる。

シヴァが傍らに置いていた剣を手にしたところで、フラウは穢魔の接近を悟り、セレナはほぼ同じタイミングでシヴァと同様いつでも馬車から降りようとす。

「な、なんだ？」

二人の突然の動きに驚いてしまい、レイアは驚愕の表情を顔に張り付かせた。

それは、他の三人も同様で誰一人穢魔の接近を察知できなかった。二人にやや遅れて察したのが、エリオスですぐさま馬車を停止させる。

シヴァは馬車が止まるのを待たないまま飛び出し、穢魔が接近してくる方向に駆ける。

セレナはフラウを抱きかかえ、馬車から飛び出すもシヴァの後を追わず、そのまま待機した。

「穢魔だ！」

エリオスが知らせることでようやく四人は何が起こったのかを察し、慌てて己が武器を手に取る。

シヴァはある程度接近すると穢魔を待ち構える態勢に入った。

確認できる穢魔は五匹、いずれも穢魔の中で数が多い駆竜種だ。

駆竜種は二足歩行で、鱗に覆われ、大きな鉤爪と鋭い牙を持つ全長約一・五メートル程の穢魔だ。

攻撃手段は鉤爪によるひつかきと鋭い牙での噛みつきだ。ややすばしっこい面があるが、一対一であれば、一般的な武力を持つならば、さして苦勞はしない相手だ。

駆竜種の厄介なところは大抵が徒党を組んでいることで、こちらも複数いれば特に問題はない相手であるが、単独で相手にするには厄介なところがある。駆竜種が穢魔の中で数が多く、相手もすることが多いこともあって、駆竜種は単独で複数を相手にし、勝利すること一人前とされている面もある。

シヴァは左腕を突き出し、一匹の穢魔に向ける。

シヴァの体内にあるヒュレーが活性化し、シヴァの望む形を取る。風の刃が空気を切り裂きながら、穢魔の身体をすり抜ける。

シヴァはそのまま、次の穢魔に左手を向け、同じように風の刃を繰り出し、穢魔を切り1裂く。

二匹、三匹と穢魔の身体が二つに切り離される中、二匹の穢魔がシヴァをその爪で、その牙で切り裂き、血液で染めようと肉迫する。シヴァはエイドスで迎撃することをやめ、オーラをその身に纏い、穢魔がその身に迫る以上の速度で接近し、擦れ違いざま穢魔を一匹切り捨てると反転し、突きを繰り出す。

通常ならば、剣の間合いの外にいる穢魔に届くことはありえない。だが、突きと同じような効果を發揮する切断のエイドスを飛ばすことにより、剣の間合いを伸ばした。

穢魔の身体は人とは違う青き血液だけを残し、風が吹けば消えてしまう塵のようにその姿を消していった。

地面に残る青い血液だけが、穢魔がいたという証拠だった。

シヴァが他にはもう穢魔が居ないことを確認すると、馬車の方へと足を向けた。

馬車に戻る途中、ばつが悪そうな五人が居た。

何か言いたそうな五人を無視し、シヴァは馬車に向かうと、五人も付いてきた。

「兄様、怪我はありませんか？」

「ない」

恒例ともいえる遣り取りを済ませ、馬車の中に戻ると、穢魔の襲撃前と同じようにフラウに膝枕をさせ、身体を横たえた。

馬車をエリオスが走らせ、暫くすると、アタルがばつが悪そうに謝罪してきた。

「すまない。君だけを戦わせてしまって……」

それは他の四人も同じなのだろう。エリオスは御者台にいる為表情が見えないが、三人はアタルと同じような表情をしている。

シヴァにはアタルが何を言っているのか分からなかったが、先の事だとなんとか理解できた。

「別に……」

シヴァにとってはいつもの事にすぎない。だからこそ、彼らが何故申し訳なさそうにしているのか微塵も理解していなかった。

シヴァにとってはいつもと同じ声音だったが、負い目もあったのだろうか、アタルは彼が怒ってしまっているのだと勘違いしてしまった。

「え、えっと……あの……」

どう言えばいいのか、とっさに言葉にならずしどろもどろしているアタルに救いの手が差し伸べられた。

「シヴァ、次からはこの人達に戦わせてはもらえないかしら？　ど

の程度のものか把握したいから」

セレナにはアタル達をフォローする気など全くなかった。彼女にとってもいつもの事だったので、微塵も気にしていなかった。なのに、彼女がこう言いだしたのは、人間関係を円滑にするためではなく、ただ単純に以前シヴァ達と話し合っていた通り、彼女の護衛という役割を果たす為の戦力の確認の為に他ならなかった。

だが、そんなセレナの思惑など微塵も気づいていないアタルには救いの手を差し伸べたれた事に、勘違いながらも感謝し、名誉挽回の為に意気揚々と張り切った。

「ああ！！ 次は僕達に任せてくれ！」

それは他の三人も同じ気持ちだったのだろう。何度も頷き、次の戦いに思いを馳せている。

「私は次の戦いは遠慮させてもらいます。あなた達の實力を確かめたいので……」

「ああ！ 任された！」

グツと親指を天に向け、レイアは任しとけと言わんばかりに自信に満ちた顔をセレナに見せつけた。

そんな馬車の中の様子を見て、エリオスはクスリと笑ったが、彼はシヴァとほとんど同じタイミングで馬車を飛び出したにも拘わらず、シヴァと共に闘うのではなく、フラウの傍で待機していたセレナが気になっていた。

そして、彼らがそれを当然のように受け入れていることも。

「来ます」

穢魔の襲来を告げる声を発するのはセレナ。

エリオスは馬車を止め、四人は各々の武器を取り、馬車の中から飛び出す。セレナはゆっくりと馬車から出る。

今回事前の打ち合わせで、エリオスを除く四人で戦うことになっている。エリオスは四人の監督役で、危険だと判断した際に、手助けをする事が決まっている。

途中までとはいえ、エリオスはかつての『勇者』達と共に世界を旅したことから、実戦経験は豊富だ。

しかし、弟子であるアタルとアープも今回共にするレイアもマーテルも、多少は実戦を経験しているとはいえ、未熟なところがまだまだ目立っていたので、少しでも経験を積ませてやりたいという師としての判断だ。特に、レイアとマーテルが不安要素だとエリオスは睨んでいる。二人は経験はしているのだが、大人達の監督の元、多少手伝っただけとのことなので、戦いが楽な今の内に慣れさせたいと思っていたのだ。

故に、セレナの提案は有難かった。セレナが言い出さなければ、エリオスが言い出していたであろう。

「駆竜種が三、豪獣種が一か……」

こちらに駆けてくる穢魔を見据えて、アープはそう呟く。

戦闘を行う際、誰が指揮を取るかという議題が出たが、アーブが取ることに決定した。

セレナかエリオスが取った方がよいのではないかという意見も出たのだが、二人ともそれを断った。四人は未熟である故に、単独では危うく、組んだ方がいいという意見もあるのだが、二人とも前衛タイプなので、後衛のアーブの方が戦闘中は都合がいいという意見により、アーブに決定したのだ。

もっとも、セレナは黙っていたが、セレナは単独で動く方が何かと都合がいいので、自分とは別のパーティーとしてエリオス達を認識していたのが、セレナにとってはアーブに指揮を取るように言った理由の一つであった。

豪獣種は人の胴回りほどある太さの長い腕と大きな爪が特徴的な熊の頭と猿のような体躯を持つ穢魔だ。

豪獣種は駆竜種と違い、他の種の穢魔と組むが、野にいる場合は単独でいることも多い。また、動きも鈍重で、他の種と組んでいても、戦闘の際単独になる事は多い。

しかし、それは脅威ではないということにはならない。

豪獣種の厄介なところは、その人の胴回りほどある豪腕から繰り出される大木さえ薙ぎ倒す強力な一撃と分厚い筋肉に覆われているため、高い防御力を持っている点にある。素早い動きで翻弄するも、分厚い筋肉の鎧でダメージが通らず、疲れから動きを鈍ったところをその豪腕から繰り出された一撃で、殺された例も数多くある。

故に、豪獣種は最後に倒す事が基本となっている事もある。

「よし、俺が牽制して駆竜種を散らすから二人はそいつらを頼む。

俺とマーテルは二人の相手をしていない駆竜種と豪獣種の動きを鈍らせるぞ」

「了解!」「わかった」「わかりました」

「降り注げ! 撃ち抜け! 氷の礫! イルバレット 《雷弾》!」

アープの右手から掌ほどの大きさの氷の礫が次々と撃ち出される。アープの角度を少しずつ変え、駆竜種が散らばるように調整する。

駆竜種が散らけたのを確認すると、二人はオーラを纏い、先ほどの氷の弾丸にも劣らぬ速度で左右に分かれた駆竜種に攻撃を仕掛ける。

オーラには二種類の指向性がある。一つは集束型、纏衣型の二種類に大別される。

アタルは軽装の鎧を身に纏っているにもかかわらず、それを感じさせない速度で駆竜種との差を詰める。

その理由は彼の足に集束させたオーラにある。身体の局所や装具に局所的に集中させることにより、オーラを全身に纏うよりも武器ならば攻撃力を、防具ならば防御力を、脚部ならば速度を遥かに効果を高める事ができる。

アタルは脚部に集中させていたオーラを大剣に変移させ、駆竜種を一撃の元断ち切る。

対して、レイアはオーラを全身に纏い、槍と胸当てだけというアタルよりも軽装の身で駆竜種に突撃を仕掛けていた。

アタルよりも速度はオーラの多寡により劣っていたが、軽やかに舞うように駆竜種に迫っていた。

レイアはヒュンと、大気の壁を穿つように突きを駆竜種の胸部に穿ち、槍を抜き去ると脚を薙ぎ払い、バランスが崩れたところを、



身体を回転させた勢いのまま急所に肢体を貫かんばかりの裂帛の一撃をかます。

集束型、纏衣型に優劣の差はない。

集束型は集約箇所<sup>①</sup>に爆発的な効果を発揮することはできるが、その反面非集約箇所<sup>②</sup>にオーラの恩恵を与えてやることはできず、多大なダメージを負うことになるリスクを背負う。

纏衣型は攻守のバランスが優れている反面、集束型に比べ、決定力に欠けるところがある。

今回、アタルとレイアの攻撃の結果がこのようになったのは、集束型と纏衣型の優劣ではなく、本人同士のオーラの多寡と自己練磨の差であった。

マーテルは二人が左右の駆竜種を片づけている間、中央の駆竜種の相手をする事となった。

しかし、彼女には穢魔に有効となる程の練磨を持つ攻撃型のデユナミスを持っていない。彼女は本来の性格もあるが、自らの修道女としての在り方によるものか、人間相手ならば多少の効果を持つデユナミスを取得しているが、穢魔に効く程の効果を発揮するエネルギーを現在習得していない。

だが、彼女には修道女としての誇りと人々を助けたいという意志から、治療用と補助系のデユナミス、エネルギーを取得していた。今、補助系のデユナミスがそのベールを脱ぐ。

「身重き故にその足を進める事能わず。《鈍重な体躯<sup>ドゥンジュウナテイク</sup>》！」

中央の駆竜種は今までの速度から急激に鈍り、足を纏れさせ転倒した。

転倒した駆竜種を貫くは氷の矢。  
弓を手にしたアープが残心したまま、次の獲物である豪獣種を見据えていた。

一部の治療用のデュナミスと補助用のデュナミスはその者の精神であるアストラル体を変化させ、本体であるエーテル体にその変化を齎すものである。

今回のデュナミスはアストラル体に動きを遅くする、正確には気落ち、疲れなどの精神及び肉体に体が重くなる影響を及ぼすデュナミスだ。

だが、治療及び、補助系のデュナミスには弱点がある。

それは、本人の意思が影響を及ぼす為、治療はともかく、補助系は相手によっては効かない場合もあるということだ。

さほど強くない穢魔ならば問題ないが、強力な穢魔だと効かないなんてことは珍しい事ではない。

ましてや、人間相手だと格下相手や、弱っている相手ではないと効果を発揮させることは通常のデュナミスでは難しい。

その場合だと、味方の補助に回るのが、補助系デュナミスを使う者の基本だ。味方であるならば、補助系のデュナミスを受け入れてくれるため、効果が発揮しやすいのである。

アープは範囲攻撃型のエイドスを多用する魔導師だ。

だが、それだけでは消耗が激しいので、弓の魔導器を使う。

この弓は使用者のヒュレーを抑える効果があり、矢が無くとも、使用者のヒュレーを使用することにより、矢型のエイドスを造る事が出来る。

アープは専ら、自身の得意な水のエイドスを使用し、時にはそのまま、時には氷にして矢として撃ち出す。

エイドスには二種類あり、一つが炎、水、風、雷などの自然現象を人為的に発動させるもの。

もう一つが衝撃、吸収、振動、加速など物体に作用する性質を発動させるものがある。

エネルギーはこの二つをより強力にヒュレーを凝縮させたり、複合させたものを指す。

駆竜種を撃ち抜いた後、アープは次の標的である豪獣種を睨んでいた。

二人が豪獣種に駆けつけるまでの時間稼ぎと、気を逸らす為に、衝撃のエイドスの矢を造り出し、次々と放つ。

光の矢は豪獣種に突き刺さると破裂し、衝撃を与える。

しかし、豪獣種は僅かにその巨体を揺らしただけで、ダメージを受けた様子はまるでない。だが、アープはダメージがないにもかかわらず、衝撃の矢を射る事を止めない。

鬱陶しいとばかりにアープを睨みつけ、聞いた者を震わせる雄叫びを咆哮する。

豪獣種がアープに気を向けるのを、好機といわんばかりにアタルが弾丸のように突進し、豪獣種の左腕を斬り飛ばす。

「もらった！」

一拍遅れて迫るのが、レイア。彼女の槍は豪獣種の心臓を貫かんと、胸部目掛けて突き刺さるが、筋肉の鎧が彼女の槍をそれ以上貫こうとするのを防ぐ。レイアは、必殺の一撃とばかり思っていたので、槍が進まなくなる事と抜けない事が同時に重なってしまい、致命的な隙を生む。

「っ!」

彼女が自身に迫る凶爪を察知した時には既に遅く、彼女は凶爪にかかることを目を閉じることでしか対応できなかった。

いつまでも来ない衝撃に、おそろおそろ彼女が目を開けると、アタルが右手を斬り飛ばす姿と豪獣種の顔に氷の矢が刺さっている姿だった。

アタルは大剣を離すと、突き刺さっている槍をオーラで強化した力で押し込む。

豪獣種はゆっくりと倒れ、その姿を消してゆく。

「大丈夫かい？」

「……ああ、助かったよ」

レイアは悔しそうに唇を噛み、地面に突き刺さっている槍を引き抜く。

「レイア！ 大丈夫!？」

危険が迫っていたレイアを心配し、マーテルが駆け付ける。

「ああ、大丈夫だ」

「危なかったな。感謝しろよ？」

「っ! わかっている! ありがとう」

軽い口調で、恩着せがましく言うアープに腹が立ちそうになるも、

助かったのは事実なので礼を言うが、レイアは悔しそうに顔を歪めた。

「ふむ……」

「……………」

エリオスとセレナは今の戦いを静かに分析していた。

シヴァとフラウとセレナは戦いを彼らに任せることにしたので、御者席に座って馬の手綱を取っている。

三人で座るには些か狭かったが、三人は然程も気にせず草原を駆け抜ける風を肌感じていた。シヴァを挟んで。ちなみに、サティはシヴァの頭の上に乗っかり、タレて寝ていた。

サティを紹介する時、ひどく驚かれたがエリオスが守護聖獣について他のメンバーより知っていたので、彼が慰める形でサティについての話題は落ち着いた。

もつとも、サティのような人型は初めてなので瞠目していたが。

今五人は、先ほどの戦いについて反省会を開いていた。

「今の戦いについてだが、そう悪いものではなかったぞ。連携については拙いところがあるが、それはこれから時間を掛けてやっつけばいいことだ。俺も含めると前衛が多いが、お前達四人ではバランスはいい方だろう」

師に褒められて悪い気はせず、アタルとアープは顔を緩め、マーテルは照れているが、一人だけ憮然としている表情の者がいた。

「さて……」

エリオスは一息をつくと、レイアの方を向く。レイアは憮然とした表情を改め、己の失態を恥じているのだろう真剣な表情で向き直る。

「豪獣種を攻める基本は、まず奴の攻撃手段である腕を攻撃して使い物にならないようにする事。こうすれば、奴は攻撃手段が著しく劣ってしまうため倒すのが楽になる」

「はい」

「次に止めを刺す場合は、心臓よりも頭や喉の方がいい。胸部では筋肉の鎧に阻まれてしまい生半可な攻撃では止めを刺せない。……オーラを集中させるのも一つの手だ」

「はい」

「ところで……君には師はいるかな？」

「いえ……ほとんど自己流です」

レイアは頭を横に振る。そう、彼女は基本的な事は学んだのだが、両親、特に母親が彼女が武術を学ぶ事を嫌がっていたので、街の警備員に通って教わったり、武術道場を覗いたりして、独自に学んでいたのだ。

「ふむ……よければなのだが、君の面倒も見ようか？」

「え？」

一瞬、何を言われたのか分からず、惚けてしまった。彼女はつきり、叱責を受けたり、戦線から外れるようにと言われるのかと思っていたのだ。

「なに……いつまで共にするかは分からないが、暫くは行動を共にするのだ。君の戦力を上げることは、こちらにとって決してマイナスにはならない。二人と同様に訓練を受けてみてはどうかかなと思っただのだ」

「ぜ、是非お願いします!!」

レイアは降ってわいた幸運にすぐさましがみついた。彼女にとっても足手纏いは嫌なのだ。自己流では限界であったし、すぐさま強くなれるわけではないだろうが、せつかくのチャンス逃したくなかった。

「よかったね！ レイア」

「これから同じ弟子同士よろしく!」

「よろしくたのむぜ」

アープは慣れ慣れしくレイアの肩に手を置く。

「気安く触るな!」

レイアは軽くアープの手を払いのけるが、アープは全く気にした様子はなく、撥ね退けられた事を嘆いた。

「なんだよ。いいじゃねえか」

「お前みたいなのに気安く触られるほどあたしは安くはない！」

「ひでえ！」

馬車の中は笑いに包まれ、和気藹々とした雰囲気になっていった。

その後は快進撃とは言わなくても、レイアも穢魔に対する戦術を学んだ故か、無理をすることなくサポートに徹し、穢魔との戦いを肌と感じ、己の血肉として取り込んでいった。

昼の帳が降り始め、夜の世界が幕開けようとしていたため、シヴァ達は野宿をすることとなった。

穢魔は昼間より夜の方が盛んに活動する。火を焚けば寄ってこないというわけではないが、襲撃に備えて火は絶やさずにいるのが常識だった。

この世界には愛玩動物と家畜以外に動物は存在していない。野にいたとしても、それは逃げ出した家畜が元になっており、生息数も非常に少ない。

よって、夜の静寂を崩す者は人間と穢魔以外存在していなかった。



「アタル達はどうしてウォードに所属したんだ？」

エリオス達との訓練を終え、体の汚れを落として身を清め、後は寝るだけとなったレイア達はアタルにウォードに所属した理由を尋ねた。

ウォードに所属しようとする者は実はあまり多くない。基本的にウォードは戦力の加算と復興を目的としているが、復興に関しては外交や内政の分野になるので、ウォードに所属している者ができることといえば、下っ端となって手伝う事だけだ。

戦力の加算に関しては、シヴァ達の行進が前提となっている部分が多く、可能であればシヴァ達がいなくてもコロニーの陥落を行う事があるが、防衛に手が一杯であることと、攻略しそうになると、人型の穢魔という他の穢魔より身体が小さいというのに、今までにありえないほど強力な存在が妨害し、攻略の実が花咲かないという事態に陥っている。

また、シヴァ達がコロニーを陥落した後は、ほとんどその国の軍に任せることとなっており、やることはあまりない。

ウォードに所属している者は大抵、他国にコネをつくることを目的とした商人や箔を付け、顔を作る事を目的とした者が多い。

また、ウォードには便利屋としての一面がある。国内で困った事があつた時や他国へ行くのに護衛が必要な時など、軍の力を借りれない時に手軽に、即座に戦力を補充できる面があるので、そういった仕事はウォードに舞い込んでくる。

だから、ウォードに関してはあまり外聞がよくなく、職に困った者や軍には入れなかつた者、軍の肌にならず止めていった者が所属する者が多い事がそれに拍車を掛けている面がある。

レイアは世界を見て回るには、平民という立場であつたレイアにとって、ウォードが丁度よかつたのである。

だが、目の前の男はエリオスという、以前英雄と共に弟子として

付いて回った人物がいることと、イグニードという『灼熱の騎士』の名を冠する英雄と同じ家名、同じ出身ということから縁者の可能性は非常に高い。国の軍に所属した方が自然というものだろう。もしかすると、箔付けと顔を売る為に、国がシヴァ達と同じようにウオードに所属させたのであろうか？

「僕は父さんのように『英雄』に……人々を護る者になりたい。そのためにウオードに所属することにしたんだ」

アタルの碧眼は青に染まっているにもかかわらず、まるで炎がその身を焦がすような熱を込めていた。

「その……軍じゃ駄目だったのか？」

「駄目だというわけではないよ。軍も人々を護る手段の一つだと思うんだ。ただ……軍に所属すれば軍に従わなければならない。軍に従って人々を護れなくなるようなことがあるのが嫌なんだ。だからこそ、僕は『勇者』になりたい。『勇者』になれば、きっと人々を護れる存在になれると思うんだ」

話しているうちに熱が籠ったのか、聞く者に熱情が伝わるような声色だった。

「そうか……で、あんたは？」

レイアがアープに存外に問いを投げかけると、アープはなんでもんな扱いなんだと落ち込んでいる。

「俺は……別にこいつのように有名な親の子というわけじゃなくて、ただのしがない商人の子だ。只の商人を継ぐ事が嫌で、無理やり師

匠に弟子入りしたんだ。それで、少しばかり有名になって、うはうはできれば十分だと思ってるよ」

「あんたはそんな感じだな」

「俺ってどういう風に見られているんだよ」

アーブはレイアの辛辣なアーブの人物像に落ち込んでしまい、周囲に笑いを呼び込んだ。

「んで？ てめえはどうなんだよ？」

「あたしか？ あたしは世界を見て回りたかったことと今の世の中を正したいんだ」

「大層な理由なこと」

「何か文句でもあるのか！」

「別に……」

アーブはわざとらしく顔を背け、レイアを挑発する。

それに黙っていなかったのがレイアで、今にもアーブに殴りかかりそうだった。

「ストップ！ レイア、ストップ！」

マーテルは殴りかかりそうなレイアにしがみつき慰めた。

「殴りかかる事ないだろ」

「あんたみたいなやつは躑けておかないと調子に乗るからな。これは躑けた」

アープは顔を引き攣らせ、レイアから一步下がった。

「はあ……二人とも疲れを残すわけにはいかないんだ。さっさと寝るぞ」

アタルの溜息混じりの慰めにレイアは拳を引つ込め、毛布をしっかりと被った。

「そっいや、マーテルは？」

「私はアタルさんと似たようなもので人々の助けになりたい。それだけですよ」

「どっかのやつとは大違い」

アープのいらぬ一言にレイアはギロリと睨みつけた。

「それにしても……シヴァさん達は私達とは規模が違いますよね。なんたつて、世界を救うのですから」

「当然だろう。『勇者』と『聖女』なんだから」

アープのその一言に誰も反論せず、ただ当たり前前の事と四人は認識していた。

今夜の火の番は、最初シヴァ達が見ることとなっている。

シヴァ達が身を清め終わったのか、それまで火を見ていたエリ

オスが馬車の中に入ってきたことで四人は話を終え、眠りに就いた。

シヴァは燃え盛る火をその漆黒の瞳に収めていた。

本来、野宿するのであれば身を清めることは難しい面はある。

しかし、デユナミスを、専用の魔導器を用いれば、熱湯のシャワーを浴びる程度のことであれば、そう難しい事ではない。

旅の不便さを失くす為の道具は、できる限り馬車に積んである。

故に快適とはいかぬまでも、不快というわけではないので気にしてはいなかった。

シヴァ達が身を清める際、男のシヴァが同行していったのを、一同は啞然としていたが、あまりの自然さにそういうものだと無理やり自分自身を納得させた。

シヴァ達は身を清める際、誰かが護衛につく。今回であるならばシヴァがつくのが当然なのだが、シヴァ達にはそんな常識は通用せず、シヴァとフラウ、セレナが交互に入ることとなった。

滅多にないのだが、シヴァとセレナが同時に入る事はある。

しかし、護衛の観点から二人はそれを好ましく思っていない。フラウが無理やり勧めた時と安全が確実だと判断した時程度だ。

シヴァとセレナは別に一緒に身を清めることに対し、抵抗はない。シヴァは元々、感情全般がほとんどないため何も感じず、セレナは希薄なものの抵抗は感じてはいるが、四人は断ち切ることはできない縁で繋がっており、セレナも彼らとずっと共にすることは最早決定事項に等しいので、何をされてもかまわないという覚悟で過していた。

自分達の行く末は理解している為、フラウとサティにしてもシヴァに絡み付く系は厳選するが、多いに越したことはなかった。同時に、少ない方がいいとも判断している。

「ん……」

フラウとセレナがほとんど抱き合うような格好で寝ていた。地面に寝るのは辛いだろうと思い、彼女達の周りはシヴァがデュナミスで覆い、快適な環境で安眠している。

シヴァにとって、この程度のデュナミスならば一晩中使用しても問題ない。

シヴァは交代もせず、一晩中寝ずの番をするつもりだった。別に彼らに気を遣ってというわけではなく、寝る必要性を感じなかったからだ。

些細な音や気配で起きるように彼はできており、また睡眠も必要とあればとる必要はなかった。　　そういう風に訓練されている。

星は闇の中で仄かに煌めき、月光が夜の闇を僅かに照らす。

見る者が見れば風情のある光景ではあるが、シヴァの心に生み出されるものはない。

人は闇の中の光に希望を見出し、光こそを至上のものと掲げるが、シヴァはその逆であり、そういった価値観を嫌ってもいた。

シヴァ達は『勇者』と『聖女』に望んでなったというわけではない。ただ、自我が目覚める前から、人々の言われるままに、人々が望んだ存在に成り果てた。選択肢などなかった。逃げ場所などなかった。　　いや、逃げられないように束縛された。

光そのものとなったシヴァは誰もいない、見えない、聞こえない、感じない闇の中でこそ安寧を得る事ができる。

『勇者』と『聖女』は人々にとっては希望の証。

『勇者』と『聖女』はシヴァ達にとっては絶望の証。

シヴァにとって、希望の証とはフラウ達に他ならない。

いや、そうなるように誘導された事は否めない。

だが、拒めない。離せない。失くせない。

それ故に『勇者』という与えられた脚本の道化を演じるしか他には路はない。

フラウを見ると、フラウは安心して寝顔をシヴァに曝け出している。

シヴァ達に安寧の時間が訪れるとすれば、それは道化を演じきってこの喜劇を終わらせるほかない。

まだ劇は幕を開けたばかり、終演まで程遠い。

全ての闇は自分が引き受ける。

だからこそ、フラウ達には光でいてほしかった。

それは、身勝手な願い、醜い欲望、傲慢な願望、身を引き裂く呪い。

だが、それ以外に自分は望むことはできない。抱けない。

死こそが終焉でもあり、祝福の時でもある。

だが、選ぶことはできない。抱くわけにはいかない。

願わくば 道化を演じきることができますように。

少年は光の中、闇の中から二極の業深き深淵故に、頂に立つ者、底に沈んだ者にしか覗けない虚無の幻の中から祈る。

### 第三楽章 曝け出された偽りの光

シヴァ達は度々襲われながらも、誰一人欠けることなく盗賊の拠点に近い街に辿りつく事が出来た。

道中、シヴァ達は最初を除き、戦ってはいない。レイアの実力の向上に努めた方がいいと判断されたので、それを阻害する実力者たちの加勢は控えたのだ。

「ん~~~~！ やつと着いたようだな」

腕を天に伸ばし、身体を解すのは街に着く日数の間、両の手の指には到底収まらないほどの回数の戦闘をこなしたレイア。

彼女は順調に実力を付け、足手纏いにはならない程度には成長した。

今、彼らが向かっているのは、指定された宿舎。門番に身分証明し、馬車を預けたところ、係の者から案内をして貰っているのだ。

「今日は皆さん、街に着いたばかりでお疲れでしょうから、明日市長と会談して貰います。その時に今現在判明している盗賊に対しての情報をお渡しします」

係員である彼女が足を止めたのは、街の中央に位置している宿舎。彼女が言うには、ここから市長のところまでそう遠くはないのとのだ。

「何かあれば中にいる係の者にお伺いしてください」



彼女は一礼して、ここから去っていった。

彼らに割り当てられた部屋は四つ。男四人、女四人と切りのいいことから二人ずつと分かれたが、シヴァはフラウ達のところで寝泊まりするので、あまり意味はなかった。

今彼らは二手に分かれている。

シヴァ達は街で消耗品の買い出し、エリオス達は訓練となっている。

消耗品の買い出しについてはパーティで使う物全般、個人で使う物は個人で後ほどとなっている。

「はああああああ！！」

裂帛の気合と共にアタルはエリオスに斬りかかる。

「ふん！」

エリオスは斬りかかるアタルを彼の懐に入れまいと、ハルバードを薙ぎ払う。

アタルはそれを防御するも、重量と遠心力からくる攻撃力で足を止めざるをえず、懐へと飛び込む算段を立て直す。

本来ならば、稽古事ではデュナミスは使用しない。

周囲の環境へのダメージを考慮すれば、余り得策ではないからだ。だが、今はそう言ったものを考慮しなくてもいい専用の訓練場を借りている。故に、レイアへの訓練も兼ねてデュナミスの使用は許可している。

「炎よ！ 彼の者を焼き貫け！」  
フレイムランス  
《炎槍》」

アタルから発せられた炎槍は空気を貪りながら、狙い定めた者を焼き貫こうと直進する。

「  
フレイムランス  
《炎槍》」

エリオスが発した力ある言葉は具現化し、同じ形を持ち、向かってくる炎槍と衝突し、相殺する。

デュナミスには通常、詠唱を以て術者の思惑を反映する。これは、言葉を発する事によってイメージを固め、具現化する意思を固めるためだ。

だが、必ずしも詠唱は必要とはしない。デュナミスに必要なのは確固たるイメージとヒュレーのみ。この二つさえ揃っていれば、後のものは二つを補う為のものでしかない。

また、デュナミスには自然法則は当て嵌まらない。同量の水と同量の火がぶつかり合えば、水が克つのは自明の理のだが、デュナミスの場合、先ほどあげた二つの要素がその優劣を決める。

故に、まだまだ未熟であるアタルと洗練されているエリオスのデュナミスでは注がれたヒュレーはアタルの方が多くとも、エリオスの方が使いなれていく為に確固たるイメージを持つていることから互角となったのだ。

アタルは懐に入ろうと、デュナミスを用いて隙を作ろうと画策し、時にはオーラを纏って突撃を繰り返し、時には得意とする炎を用いてエリオスを翻弄する。

だが、エリオスも師である意地と戦士である誇りから、訓練であるため防御が主体であろうとも、アタルよりも一步も二歩も先を歩んでいた。

レイアはそんな二人を見物しながらも、与えられた課題をこなす為に、エイドスの訓練を行っていた。

レイアは今まで師が居なかった為オーラのみを用いて、穢魔と対峙していた。だが、師を得られた今は手札を増やす為、エイドスの修行に励んでいた。

マーテルは攻撃用のエイドスを身に付ける為、アーブは魔導師の特性故に二人の修行を見ていた。

「エイドスを修行する際、もっとも効率がいいのは、自身の特性を見極め、一つのエイドスを極めることだ」

「どういうことだ？」

「これは本人の願望や性格等、本人を形作るあらゆる要素から言える事なんだが、エイドスはオーラと違い、得意不得意がはっきり分かれる。基本的には得意なエイドスを極めた方がいいんだ」

アーブは少し集中すると、水の塊を掌に現出させた。

「俺なら水、あの二人なら炎といったところだな」

エリオスは師であるアタルの父が炎を得意としていたことと、同時に衝撃も得意としていたことから炎と衝撃を多用する傾向にある。アタルは父に対する憧れと血筋によるものか、炎を得意としている。彼の戦術は父が大剣を用いていたことから、自身もそれを用いて、炎と剣術を己の血肉として日々修行に励んでいる。

「どうすれば分かるんだ？」

「こればかりは一通りやってみるしかねえ。得意とするものならば他のよりやりやすいはずだ」

肩を竦め、やってみるとレイアを促す。

指南書をレイアに渡してはいるが、当の本人であるレイアは本を読むことは苦手なのか、頭を悩ませながら読んでいる。

「不得意なものはやらないほうがいいの？」

マーテルは自身が癒しの術を得意としているのを把握している。だからこそ、今まで攻撃系のエイドスには手を出さず、治療用や補助系に手を出してきたのだ。

「得意なものをやった方がいいっていったのはその方が時間がかからないからだ。得意なものと不得意なものでは習熟の速度の差がはつきり出る。時間もないことだし、こいつにとってはその方がいいと思うてな」

「不得意なものでも得意なものと同じようにできるのか？」

指南書から目を上げて疑問を上げたのは、レイア。彼女としては得意なものが気に入らなかった場合、不得意なものでも気に入ったものに手を出したいのだ。

「できるといえばできるぜ。ただ……」

「ただ？」

「時間が物凄くかかる。基本的にデュナミスは触れば触れるほどヒュレーとの浸蝕度を増す。例えば、使用したり、その特定のエイ

ドスで攻撃されたりな。形はどうあれ、慣れる機会があればあるほどいいんだ。もしも、不得意なものを得意なもの並に使えらしたらそれは……それだけ無駄ともいつていいほどの時間を費やしたということだな」

「ふうん」

レイアは己の得意なものは何かを探るべく、指南書どおりにエイドスを使った。

大人数で行くのも無駄が多いので、市長との面談には、シヴァとフラウ、セレナだけで行くことになり、エリオス達は引き続き、訓練を行うことにした。

「トウローズ市長、『勇者様』方がおいでになりました」

「入りたまえ」

「失礼いたします」

中には、宝石を豪奢に宝石を着飾った、でっぷりと太った禿頭の男がいた。

「これはこれは『勇者様』。よくぞ、おいでなされました」

嫌味なまでに笑顔を張りつかせた市長がシヴァ達をもてなそうとする。

「私はピピン・トウローズ。ここ、コルドーの市長を務めさせてもらっております。ささ、どうぞお掛けになってください」

シヴァ達を見るからに座り心地のよさそうなソファに腰がける。

市長がベルを鳴らすと、メイドらしき女性が入室し、紅茶を用意する。

彼女が一礼し、退室すると、市長はお世辞もそこそこに、本題である盗賊達についての情報を提供した。

「君、例の資料を」

「はい」

秘書であろうか、先ほどまで案内してくれていた女性が、地図などの資料をシヴァ達に提供する。

「盗賊団は山岳地帯の麓にある砦を根城としております。ここは元々、隣国のエスタード王国を監視、または防衛ラインとして機能させる為に建造されたもので、穢魔がコロニーを築き上げた際、放置されてしまったのです」

秘書であろう彼女は、はきはきと、伶俐な女性であることを示す様に、淀みなく説明する。

「盗賊団の規模は約五十名程度ではないかと、度々派遣された軍や自衛団から推測されています」

「今まで討伐できなかった理由は？」

「コロニーが近くにある為、あまり大規模な派遣ができなかったことと、砦の周囲の地形が盗賊団にとって非常に有利に働いてしまい、彼らを討伐することが非常に困難とされております」

「周囲の地形？」

「はい。こちらから砦に向かうには、森林地帯を抜ける必要があります。森林地帯には盗賊団が仕掛けた罠や、彼らの奇襲によりどうしてもこちら側が不利になってしまいます。まずはこれが第一の理由です。二つ目は、仮に森林地帯を抜けたとしても、砦までへの道が細くなっており、高低差もあることから大規模な進軍は不可能で、さらに奇襲も一方的にやられてしまいます。攻めるには難き、守りには易い地形なのが、今まで彼らを討伐できなかった理由になります」

シヴァは考えを纏める為に、紅茶を一口飲む。彼には紅茶の味は分からないが、芳醇な香りが口腔内に広がった気がした。

資料を見る。そこには、砦周辺の地形が詳細に描かれていた。防衛拠点として砦が機能していた頃の資料なのだろうか、それとも盗賊団が根付いた頃のものだろうか？

「この資料は最近のものですか？ それとも昔のものですか？」

言葉を少し省いてしまったが、何を意味するのか分かったのだろう。秘書の女性は直ぐに答えた。

「昔のものになります。最近のものを手に入れたいとは思ってはいませんが、盗賊団が邪魔してしまい、詳細なところは不明です。しかし、それほど変わっている訳ではないので、そこはご安心ください」

シヴァは少し考えると、

「では、盗賊団がこれまで使用してきた罫は分かりますか？」

シヴァがそう言うと、秘書の女性は笑みを深め、手元にあったもう一枚の資料を手渡した。

「こちらが彼らが使用してきたとされる罫の詳細になります」

秘書の女性が罫の詳細を渡した時、一瞬不愉快そうな顔を市長がしたのをセレナは目撃したが、何も言わなかった。

シヴァが目を通すと、かなりの数の罫がそこには記されていた。

「他には、ご質問はありますか？」

「……最後に一つだけ」

「何でしょうか？」

「奴らへの処遇は？」

「お好きなように」

それを聞くと、シヴァ達は場を辞す事を告げた。

「何かお必要なものがあれば、お申し付けください。ご用意させていただきます」

優雅に一礼する彼女を背に、シヴァ達は去っていった。



秘書であるアメリカ・ロックフェリアはシヴァ達を見送ると、市長室に戻った。

ピピンは酷く不機嫌そうな顔で睨みつけている。

「どうして畏の事を教えたのだね」

「何か不都合でも？」

「なに、先入観を持たせてしまえば、『勇者』の邪魔になるのではないかと思っただけだよ」

顔には出さないが、畏の事を教えたのを不服に思っているのは明らかだ。市長は畏の事を教えずに、最低限の事だけを教えて『勇者』に盗賊団の討伐に向かわせるつもりだったのだ。アメリカが畏の事を教えたのは彼女の独断であり、彼の予定にはなかったことなのだ。

「質問されたから畏に関する資料をお渡ししただけです。先入観を持たせてしまって邪魔になるかとも思いますが、やはり対抗手段を持たせた方がよいのではないのでしょうか？」

「しかしだね……」

ピピンが苛立ちと共に反論しようとしたところ、ドアがノックされ、屋敷で働くメイドが姿を現した。

「ピピン様、お客様がお見えになりました」

「わかった。通せ」

「かしこまりました」

一礼して去る。

ピピンとアメリカの睨みあいはいし続いたが、

「下がれ」

退室を促す声を聞き、アメリカは一礼して部屋を出た。

彼女が部屋を出ると、来客らしき人物がこちらに向かって廊下を歩く姿が見えた。

来客は金髪を綺麗にセットしており、洒落たスーツを着こなしていたが、底知れぬ何かを腹の中に飼っているようでもあった。

アメリカは脇に退き、丁寧に頭を下げる。

来客も頭を下げ、市長室の中に入っていった。

暫く歩くとフラウがシヴァの腕を抱え込んだ。

「どうした？」

「いえ……少し甘えなくなっただけです」

「……そうか」

セレナは市長室で感じた事を己が直感に従って、報告する。

「正直に言ってしまうと、市長が豚の様な顔で私達の事を美術品を見定めるかのようなねちっこい視線で見っていたから気持ち悪い事こ

の上なかつたわ」

「ええ。正直に言ってしまえますと、焼き豚にしたいほどでした」

シヴァは肩を竦めただけで何も言わなかった。

「もしかすると……盗賊団と手を組んでいるかもしれませぬね」

「根拠は？」

「女の勘です」

根拠とは到底言えないが、組んでいると仮定した方がこちらの安全にも繋がるので、警戒することにした。

市長室に入った男は丁寧な物腰ではあるものの、どこか慇懃無礼でもあった。

「『勇者』が盗賊団の討伐に乗り出したそうですね」

「ええ。全く子供のくせに生意気と言わざるをえんな」

ピピンは男の態度に何ら構うことなく、『勇者』と崇められる生意気な子供であるシヴァを扱き下ろした。

「全くですな。……で、『聖女』の方はどうでしたか？」

「あれは実に素晴らしい。できれば手元に置いておきたいほどでし

たな」

『聖女』であるフラウを思い出す。あの類を見ないほどの美貌を持つ小娘を自分専用の雌奴隷に仕立て上げたかった。『聖女』と呼ばれる存在を自分の手で墮落させたかった。それを想像するだけで性欲が掻き立てられる。他の雌などあれの前では霞む。いくらかかってもいい。絶対に手に入れたい。

「ほう……実は近々、新製品を入荷しようと思ひましてね。できれば貴方を買っていただきたいのですがね」

ピピンは欲に塗れた顔で晒う。

「それは、それは……貴方方の新製品とあれば是非とも買いたいですな」

「ありがとうございます。私共としても大切なお客様のお期待に答えられるように、常日頃誠心誠意頑張っておりますので……ところで」

「何ですか？」

「その新製品の他にも入荷する予定なのですが……いかがなさいますか？」

「ふむ、そうですね……今回は見送らせてもらいます。私としてはその新製品を是非とも欲しいので」

「では、期待に添えるよう入荷しますので、今後とも私達の商品を御贖願います」

「もちろんですとも。では、宜しく願いしますぞ」

「はい、もちろんです」

腹の底を窺わせない笑顔で男は嗤う。

ピピンは盗賊団と手を組んでいる。正確に言えば、彼らが攫った女性を買っているのだ。盗賊団としても、顧客であるピピンと彼が齎す討伐者の情報、コロニーの近くでもある故に大量に仕入れてもおかしくないほどの武器。

持ちつ持たれつの関係で彼らは手を組んできた。

そして、今回彼らが狙っているのは『勇者』一行。

ピピンとしても盗賊団としてもどうか彼らを対処したい。そして、あわよくば『聖女』を手にしたいのだ。同行している女性陣も『聖女』には劣るものの上等の部類に入る。性処理としても、商品としても上等だ。暫くは安泰であろう。

彼らは夢を見る。今までの討伐者と同じように『勇者』を殺す夢を。『聖女』を組み伏せる夢を。極上の女を手に入れ、犯し、商品にする夢を。

男達は嗤う。欲望が成就する時を夢見て。

「中々厄介だな……」

盗賊団をどう攻略するかを話し合う為にシヴァは資料を渡したのだが、エリオスは地形の厄介さに頭を痛めていた。

「街中で盗賊団についての情報を集めたんだけど、統率力も優れているみたいだし、隙が見当たらないんだ。一人、一人の練磨も優れているみたいだし、何人かは国のトップにも引けを取らない実力だとの噂も流れている」

「嘆かわしいことだ。その実力は世の中の為に使うべきだということに……」

アタルが街中で聞きつけた噂にレイアは酷く憤っていた。彼女にしてみれば、力というのは、弱者を守る為に使うべきものだろう。盗賊達はそれを間違った使い方をしていると、彼女の価値観から見れば、そう思うのも無理はない。

「神の使徒としても見過ごすわけにはいきません。しかし、どうしたものでしょう?」

実際、彼らは巧者なのだ。彼らの被害にあつたほとんどが罍の被害にあっている。罍を潜り抜けたとしても、相当の実力者を有している。卓越した頭脳と他者を制する武力。盗賊でなければ、名立たる者となっていたに違いない。もっとも別の意味で彼らの名は広まっているが。

「俺としてもさっぱり妙案が思い浮かばねえ」

アープとしても対処療法でしか対応策は思い浮かばない。まさしくお手上げだ。

「どうする?」

エリオスはリーダーたるシヴァを見る。誰もが目撃する中、シヴァはゆつくりと口を開く。

「正面から行くしかないだろう。だが、奴らの傾向を見るに、大人数であれば殺傷力のある罠を用い、少数数の場合、捕獲性がある罠を用いる傾向にある」

シヴァはリーダーを自称した覚えはないが、『勇者』である以上仕方がない面があると自任している。よって、リーダーである事を否定せず、建設的な意見を述べることにした。

シヴァが行ったことを確認する。確かに記録では、そのような傾向が垣間見れる。

「絶対ではないだろうが、今回もそのような傾向になる確率が高いだろう。森林に関してはそれで行くしかない。森を燃やすという手もあるが、他国においてはそれは面倒がやってくるから打てる手ではない」

シヴァの森を燃やすという乱暴な策に一同は苦笑せざるを得なかった。確かに有効的ではあるが、国王公認の作戦でない限り、それは現実的ではない。他国である以上、あまり好き勝手することはできず、してしまえばどうなるかは想像にすることは難くないので、森を燃やすという策は使えない。よって、シヴァの言う通り、正面から行くしかないのだ。

「砦に関しては、資料が最新ではないから、それで対策を立てれば選択の幅を狭める可能性も否めない。実際に確認して対策を立てた方がいいだろう」

シヴァの言うことは尤もであり、盗賊達にしても隙を消す為砦

に何らかの対策をしている可能性は非常に高い。やはり、実際に確認してそれから対策を立てる方が対処法としてはいいだろう。

「やはり、それしかないか……」

エリオスも正面から行くしかないと考えており、シヴァの言うことも尤もなので、反論はしなかった。

欲を言えば、対処療法で行くのは避けたかったのだ。アタル達は人と殺し合いをした事はない。それ故に、何が起るかが分からなかったのだ。師として過保護かもしれないが、できるだけのは対処はしたかったのが本音だった。

「それと憶測でしかないけど、市長と盗賊団がグルの可能性があるわ」

セレナの言葉はエリオス達にとって寝耳の水だった。

「何を根拠に……」

「ただの勘よ」

「勘で人を疑うのか!？」

何の根拠もなく疑うセレナにレイアは噛みつく。

だが、セレナは柳に風とばかりにレイアの怒声を受け流す。

「ええ。疑ってかかった方がいいと思って」

「だが……」



何の根拠もなく人を疑うのは彼女の意に反するのか、セレナの言葉を受け入れられずに愚痴る。

「となると、この資料も疑ってみた方がいいか？」

エリオスは感情を挿まず、冷静に事を検分する。確かに彼女の言う通りになれば、罠に嵌められる可能性は高い。だが、仮にそうだととしても、正面から行くことには変わらないのだ。ならば、この事を考えても仕方がないか？

「その資料に関しては問題ない可能性は高い。市長の秘書に渡されたが、彼女は市長を敵視しているようでもあったからな」

「そうなのかい？」

「これも勘だがな」

シヴァとしてもその真雁はどちらでもいいのだ。どちらにしても正面から行く以上、背後を気にするのは当然の事だ。ならば、警戒する相手を一人増やしたところで何の問題もない。また、いかなる理由で市長と秘書が対立しているようとも、自分がやることは盗賊の討伐。自分には関係のないことだ。

「どちらにせよ、やることは変わらない。各自、必要だと思つ物を準備する事にしよう」

エリオスがそう締めくくり、会議は閉会した。

薄い夜着を纏ったアメリカはその豊満な身体から肌が零れるのを気にせず、足を組み、寝酒を呷っていた。

彼女が酒を呷ると、グラスの中の氷がカランと聞き地よい音を立てる。

思い出すのは昼間の『勇者』との会合。彼女は待ち望んでいたのだ。盗賊団を滅する事が出来る存在を。もしそれが叶うのであれば、悪魔にでも魂を捧げてもいいし、身体を好きなだけ捧げてもいい。

グラスの中の酒に映るのは、復讐に燃える醜い女の顔。

彼女が復讐に燃えるのは、三年前死んだ弟にその原因があった。

弟はこの街の自警団に勤めており、力はお世辞にも強いとは言えなかったが、勤労意欲に優れた真面目な普通の青年だった。

彼は運が悪かった。時折、盗賊団はこの街に略奪しにくる。彼らの手口は鮮やかで、気付かれることなく盗みだけを働く。人が死ぬことはないことはないが、少ない方だった。だが、弟はその数少ない中に入ってしまった。

この御時世、アメリカの境遇に陥るのは珍しい事ではない。穢魔の出現から勢力圏を削られた人々が絶望から盗賊に身を賣すのは、珍しい事ではないのだ。

だが、珍しくないからといって、復讐に走らないというのは、虫が良すぎるのだ。

復讐に身を焦がすのは、短絡的だ。そうだろう。

だが、アメリカはそのようなことをほざく愚か者に同じ絶望を味合わせてやりたい。それでも、復讐に身を墮とさないのであれば、それはそれでよい。だが、アメリカはそれでは満足できない。盗賊共を滅ぼしたいという欲求はこの身に常に燻っている。

だが、アメリカには力がない。だから、彼女は人を招き入れ、その者を使役することで、自分の代わりに復讐を果たしてもらおう存在を求めていたのだ。

今の立場にいるのはそういう理由だ。

しかし、知ってしまった。この街の市長が盗賊団と手を組んでいる事を。

証拠を掴み、引き摺り落とそうとしたが、探られているのを悟られてしまい、逆に縛られてしまったのが、数日前。

グラスがアメリカの掌の中で軋みをあげる。

証拠は揃っているのに、彼を吊るし上げることはできない。

人質を取られてしまったのだ。妹を。

その事を思い出すだけで、ピピンを八つ裂きにして、その肥えた肉を踏み潰したくなる。

おそらく、妹は盗賊団のところにいるだろう。どのような目にあっているかは、想像もしたくない。

明日、『勇者』に接触を図り、妹の救出を頼んでみよう。

半分諦めているが、半分だけ諦めきれない。

(『勇者』ならば、少なくとも盗賊は殲滅してくださいよ)

盗賊団さえいなくなれば自分は、妹の生死はどうあれ、動く事ができる。

そうすれば、あの豚を監獄にぶち込む事が出来る。いや、処刑台に上がらせる。

グラスがアメリカの握力に負け、微塵に砕ける。

(あの豚 必ず挽肉にしてやる！)

彼女の瞳は復讐に燃えていた。

早朝、人目も少ない頃、アメリカがシヴァ達を訪れていた。

「朝早く申し訳ありません、『勇者様』。折り入って頼みたい事があるのですが……」

「……何ですか？」

日が出たばかりである早朝に訪れたアメリカにシヴァは不審に思っていたが、人目を避けたかったとの説明があったので、こうして部屋の中で話をしている。

「こちらを……」

そう言って出したのは、目の前のアメリカによく似ている一人の少女。アメリカがツリ目がちで怜悯な雰囲気を持つのだとすれば、写真の中の少女は温和な雰囲気をしているようだった。

「私の妹でございます。数日前、とある事情で盗賊団に攫われてしまい、できれば彼女も救出してほしいのです」

「……助けられる保証はありませんが」

「承知しております。できれば助かって欲しいのですが、攫われてしまった時点でどうなるかはある程度は予想がつきます。だからこそ」

アメリカの瞳から一筋の涙が零れたが、シヴァはその事に一切感慨を生まなかった。ただ、本当ではあるが、何かを隠しているようだとも感じていた。

「……とある事情にはある豚が関わってますか？」

「はい。豚が他の豚と交配しているのを発見してしまい、監視員はそれを止めようとしたのですが、その監視の失敗を咎められてしまいました」

要するに、市長と盗賊団は繋がっており、秘書はその証拠を掴ん

でいると。

昨日の憶測が当たった形になるのだが、やる事は変わらなかった。

「それは災難ですね。こちらとしては、その事に関わる気はありませんから」

「それは残念です。できれば、他の豚が居なくなってしまえば、例の豚を処分できるのですが……」

「そうですね……では、他の豚は旅のついでに見かければ処分しましょう」

「はい。お願いします」

アメリカは愛想笑いを顔に張り付かせ、優雅にお辞儀をして、退室していった。

「繋がっていたようですね」

フラウも今の会話が何を意味するかは分かっている。

「ああ。盗賊団を片づけるのが俺達の役目だ。それ以上、このゴタゴタに関わる気はない」

「人質の少女はどうするのかしら？」

彼らの間では分かりきった事をセレナはシヴァに聞く。

「決まっているだろう。そいつは、ついででしかない」

鬱蒼と茂る森が、陽の光を軽減し、薄暗さを引き立てる。

木漏れ日が樹々の隙間から射しているが、視界は良好とは決して言わず、自然にはない変化を気を逸らしてしまえば、見逃してしまうようだった。

エリオス達は先頭に立ち、罨がないか気を尖らせながら慎重に足を進めていた。

いい機会なので、エリオスは弟子の成長の為に自分の監視の下、彼らに罨を探らせていた。

「しかし……神経が滅入るな、これは」

アープは怪しいポイントを衝撃の弓矢で射りながら、一向に進まない進軍を愚痴っていた。

「仕方がないだろう。罨にかかるよりはましだろう」

「その通りだ。愚痴る気持ちもわかるが、これも修行だ。耐えるしかあるまい」

「分かってるけどよ……」

森に入って一時間。時間的には少ないが、罨の存在が、予想よりも彼らの集中を削っていた。

罨がありそうな所には、彼らはアープがしたようにエイドスで攻撃し、直接は触れないようにしていた。また、それだけをしていれば消耗が激しいので、迂回する事もある。

方位は見失ってはいないが、畏にばかりかまっつていても迷ってしまいそうだった。

「気になる事があるのですが、宜しいでしょうか？」

疲れた神経を癒すデュナミスを一行に掛けながら、マーテルは疑問に思ったことを一行に問いかける。

「どうしたんだ？」

「ここに入ってまだ一度も襲われていないのですが……」

「そういえば、そうだね」

アタルもそれが気になった。捕獲用の畏は頻繁にあるのだが、盗賊の姿は一度も見えていない。

「作戦かもしれんな」

「作戦ですか？」

「ああ。こちらの疲労を促してから襲うというのはよくある手だ。現に」

エリオスが衝撃のエイドスを前方にある樹へと放つと、硬質な物が壊れる音と共に、映像を記録する魔導器が落ちた。

「監視をしている。こちらの行動は奴らに筒抜けというわけだ」

その言葉にアープは気が滅入る思いだった。

「はあ……あつちは楽な思いをしているんだろつな」

「ははは……敵陣に乗り込むんだからそれは仕方がないよ」

元気出せと、アタルはアーブを慰める。彼としても同じ気持ちではあるのだが、張り詰めた緊張を解す意味も兼ねて軽口を言う。

「これもいい機会だ。気を抜くことと気を張ることのペースの配分を学べ」

「」「」「はい」「」

「兄様、どうなされたのですか？」

シヴァは天を仰ぐ。冷たさを含む風が肌を刺すのを感じる。

「もしかすると……」

「ああ 雨が降りそうだ」

吉兆か凶兆か。

雨は彼らに何を齎すのか。

「ち！ 壊しやがったか」



粗暴な雰囲気を持つ男が、映像が途切れたのを苛立ちげに舌打ちする。

「奴ら慎重ですね。畏にかかりませんぜ」

「ああ、女を傷つけるわけにはいかないからな。どうしても手が限られてきちまう」

手段を選ばなければ、もうとつくにどうにかしていたに違いないのだ。

だが、奴らが離れない限り、奇襲はできない。間違つて女を殺してしまつては意味がないのだ。

「しかし……あれ程の美人なかないませんぜ。できれば俺達が奴隷にしたいくらいですぜ」

「駄目だ。あれほどの上玉だ。非常に高く売りつけられる。他ので我慢しろ」

「あの中の一人ぐらいは俺達の好きにしてもいいでやんすか？」

「頭にも許可は取つてある。だから、傷つけないようにしろ」

「了解でやんす」

もう一人の男は下卑た表情を浮かべている。凌辱する様でも思い浮かべているのか、男の股間は盛り上がっている。

男はそんな男を無視して、頭領の元に向かう。

頭領が居る部屋に入ると、頭領の他に参謀役の人物がそこにはいた。

「どつした？」

「森の半分は突破されました。着くのも時間の問題かと」

「そうか」

嗅ぎ慣れた性臭の臭いがする。女が一人、後ろから小突かれ、口に逸物を突っ込まれている。女が苦しそうに喘いでいるが、どうでもいいことだ。

「『聖女』は来ていますか？」

「はい。同行しています」

「それはよかった。どうしてもあれは入荷しなくてはいけませんからね」

女の舌使いを不快に思ったのか、一度自身の逸物を離し、頬を殴りつける。

「じほっ！」

口腔内が切れ、血が出ている。怯えた目をしているが、泣き喚くことはない。しっかり調教してあるようだ。

参謀役で市長との交渉役でもある男はもう一度、女の口に突っ込む。咳きこんでいるが、おかまいなしだ。

「皆で待ち伏せでよろしいでしょうか？」

「ああ。数もこちらが圧倒的に多いし、人質もいる。善良な『勇者様』なんだ、いくら強かろうとどうとでもなる」

頭領である男は腰を激しく打ちつけ、女の中に精を吐きだす。

「お前も休憩の時間だろう？ この女を好きに使っていいぞ」

「ありがとうございます」

興味を失ったのか、男は部屋を出て行った。

「助けて……お姉ちゃん」

女の助けを求めるか細い声は誰にも届かなかった。

「ようやく出られたぜ」

気分まで滅入ってしまいそんな薄暗い森を抜け、山の麓まで来ていた。

空は灰色の姿を晒し、いつ雫が零れてもおかしくはない様子だった。

「でも……結局は罠だけで、盗賊の奇襲はなかったね」

罠の数は多かったが、盗賊は一度も姿を現さなかった。神経をすり減らすのが目的だったのだろうか？ とすると、これからが本番となる事になる。

アタルがそこまで考えを巡らせていると、エリオスがシヴァに相

談を持ちかけていた。

「どうする？ 天気は崩れそうでもあるし、ここからは相手からの攻撃も考えられる。しかも、こちらは随分と疲れている。休憩を取るか？」

「その方がいいだろう。幸い、ここは見晴らしもいい。その間に俺は砦周辺を偵察してくる」

「それならば、俺も行く。では、二手に分かれて調べよう」

「ああ」

偵察に行く事を一行に告げ、シヴァとエリオスは単身で偵察に出かけた。

改めて偵察をしてみると、攻略するのは困難だと思われる砦だった。

砦はいくつもの防壁に囲まれている。しかも、砦に近づくほど高度があがっている。普通であれば、一方的に攻撃されるだけだろう。(救いがあるとすれば……)

盗賊団は五十名ほどだということだ。広大な敷地をカバーできる人数ではない。そうであるならば、少人数で時々奇襲を仕掛け、砦で大多数で待ち伏せするのが、相手側の定石か……。

彼らがどのような手を打ってこようと、正面から突破するよりないのだ。ならば、どのルートを進むか。

シヴァは何の感情も載らない無機質な漆黒の瞳で煉瓦で出来た砦を見据え、辿るべきルートの算段を立てた。

体を揺さぶり、どこか落ち着かない様子のレイアに、マールは声を掛ける。

「どうしたの？ そんなに落ち着かない様子で……」

「ん？ ああ、盗賊と戦うのは初めてだからどうしても緊張してしまっただ」

「情けないぞ。俺なんかは落ち着いてるだろう」

アーブの足は傍目から見ても分かるほどに、ガクガクと震えている。

「足を震わせておいて何を言っているんだ」

「これは武者ぶるいというやつだよ」

尚も屁理屈を言うアーブにレイアは呆れ、先ほどから黙ったままで、一見落ち着いて見えるアタルに話しかける。

「どうしたんだ？ さっきから黙ったまま地面を見つめて」

「……正直に言うと、怖いんだ。穢魔とは何度か戦ったけど、人と殺し合いをするのかと思うと怖くてね」

アタルはどこか怯え、今にも逃げ出したそうでもあった。

「何言つてんだ。お前は英雄の子だろ」

アタルを励ますアープだが、彼もまた怯えているようだった。

「そうだ。悪人共を見逃すわけにはいかないんだ。あたしはあいつらを絶対に法の元で裁きを与えてやるんだ」

意気込むレイアだが、彼女もまた、虚勢を張っている事は一目瞭然だった。

マーテルも怯えていた。

彼女は縋る様に辺りを見渡し、慰めてほしいのか、勇気づけてほしいのか、それとも仲間が欲しいのか、どの気持ちか分からないまま、『聖女』であるフラウに声を掛ける。

「フラウさん達はどう思っているんですか？」

そう問われ、フラウはなんら気負いの態度でこう返答した。

「特に、何も」

「そうね。この程度の事で怯えるようではこれから先が思いやられるわ」

二人は彼らが何に怯えているのか理解はしている。

だが、その路は幼い頃にとっくに進んでいる。

彼らがどうするかは彼らに任せる。

戦うのならばそれでいいし、逃げたいのであれば、そうすればいい。自分達にはそれができなかつたのだから。

彼らの選択に関係なく、彼女達は歩み続けるのだ。命果てるその

時まで。

フラウ達の言葉にどう思ったのか、各々の顔に生気が戻り、気合を入れたした。

フラウは未来に思いを馳せる。

きつと兄様は。

シヴァがどうするかは、分かっている。

それしか彼には許されていなかった。それしかできない。

だから、彼女はシヴァの鞘でありたい。光でありたい。癒したい。肯定する者でありたい。慰める者でありたい。全てを受け止めたい。

ただ、兄様に安息の時を。

それだけが、彼女の願いだっただ。

「師匠どうでしたか？」

今まで落ち込んでいた様を見せずに、アタルは偵察の詳細を尋ねる。

エリオスは首を横に振り、穴はなかったと告げる。

それはシヴァも同じであり、やはり正面突破するしかないというのは、共通した見解だった。

「正面突破するにしてもいつ突入するかだが……」

「もうすぐ雨が降る。その時に突入する」

シヴァの突然の提案に誰もが驚いた。

確かに雨が降れば、視界は狭まり、こちらに有利に働くかもしれないが、敵は待ち伏せしている可能性が高い。

ならば、こちらに不利に働くのではないか？

「そんなことは分かっている。だから……」

シヴァの提案にエリオス達は事の成否と、危険性を指摘するが、シヴァは考えを変えず、シヴァの策を実行することにした。

ぼつり、ぼつりと降っていた雨が勢いを増し、豪雨と化す。

豪雨がシャワーのように絶え間なく降り注ぐ。

豪雨のシャワーが視界を遮り、先ほどまでよく見えていた先を閉ざす。

顔も体型も隠すほどの厚手の黒色のローブが身体をずぶ濡れになるのを防ぐが、刻一刻と体温を奪っていく。

砦の入口に辿りつくまで襲撃はなかった。

不気味なまでに静けさを保っていた。

エリオス達五人は砦からの攻撃に備え、デユナミスの発動準備を怠ることはしなかった。

登場を待ち侘びていたかのように、砦に入る門が、獲物を砕く顎のようにゆっくりと開いていく。

どうやら敵はエリオス達を招き寄せているようだ。

歓迎されているのであれば、招待に与かるしかあるまい。

警戒を緩めず、慎重な足取りでエリオス達は開かれた肉食獣の口腔内に入っていく。

緊迫の場面が一変したのは、背後の扉が閉められた時だった。

盗賊が一斉に姿を現し、エリオス達を取り囲む。

蟻一匹逃さぬとばかりに取り囲む、一糸乱れぬ統率は彼らの練磨が高い証拠であり、一片の隙も見当たらなかった。

やがて、門が開かれるかのように、彼らに隙間ができ、そこから一人の男が悠々と歩いてきた。



頭領であるフランシスは馬鹿正直に正面から入ってきた彼らを嘲笑していた。

そうするしかないように仕掛けているとはいえ、もう少し悪足掻きをすと思うたのだ。今回、自分達は捕獲という面倒な仕事を受けているのだ。必然的に手は限定されている。

そのことを分かっているのか？  
それとも分かっていないのか？

自分たちなど軽く一蹴出来るとでも思っているのか？

疑問は尽きる事を知らないが、自分達の領域に入れてしまえばどうともなる。ここには、数々の道具がある。それに人質もいる。多少の手傷を覚悟しなければならぬだろうが、自分達の勝利は確実だろう。

「何人が足りないようだが、どうしたのだ？」

「貴様らにそれを言うと思うか？」

フランシスの問いに、エリオスは当然の事だと吐き捨てる。

確かに、自分達の情報を漏らすのは愚か者のすることだ。中には、自分達の優位を信じ、ぺらぺらと喋る者がいるが、目の前の男はそうでないらしい。

だが、大方の予測はつく。

おそらく別行動をしている三人は退路を確保しているのだろう。今頃、門を壊そうと躍起になっている事だろう。他にも手はあるかもしれないが、こちらしか把握していない秘密の抜け道から十名程をこちらに向かわせている。

皆までの道はほぼ一本道。挟み撃ちにあい、奴らは逃げ失せることが困難になる。

奴らはもう袋の鼠だ。煮るなり、焼くなり好きにできる。

雨が降っていることと、奴らが厚手のローブを着ている為、どいつが女かは判断しにくいだが、背の高い人物を狙えば良い。男は別に殺してもいいのだ。躊躇する必要はどこにもない。

「やれ」

頭領の指示を受けた部下は一斉に矢を、デュナミスを放った。

背後には門がエリオス達を守る様に、逃げる事を阻むように聳え立っているので、背後からの攻撃はない。

しかし、前方と側方からは視界を埋め尽くす様に矢とデュナミスが迫ってくる。

前方はエリオスが、側方はアタルとレイアが各々の武器と吸収・拡散・硬化・反射のデュナミスを駆使して、防壁を築き上げる。

幸いにして、致死性のあるデュナミスは行使されていないが、圧倒的なまでの数の暴力にエリオス達は晒され、蹂躪されるのも時間の問題だった。

「ぐううう！」

レイアは歯を食いしばり、面とさえいえる敵の暴力に屈さぬように、精神を奮い立たせて耐え忍ぶ。

アタルもそれは同じだった。何とか隙を見て、攻撃用のデュナミスを盗賊達に放つが、敵に届く前に敵のデュナミスに浸蝕されて、霧散する。

エリオスもそれは同様だった。彼は他の二人よりも多くの範囲を受け持っている。にもかかわらず、彼は防衛をこなしながらも、敵

に攻撃を届かせている。

それは、彼の實力の賜物か。確かに敵には届いている。

だが、それだけだ。

相手を気絶させるには至らず、生身で一発殴った程度しかダメージを与えられない。

マーテルは擦り減っていく精神を、時々掠めていく攻撃を癒し、戦線を保つのに、彼女は戦意を保っている。それが、自分の役割だといわんばかりに。

唯一、戦局を変えられる存在がいるとすれば、それはアープだ。

彼は今にも逃げ出したくなる衝動を抑え、必死に己が心と戦っている。

逃げられないという戦局も彼に味方したのだろう。彼は精神を集中させ、自身が持つ攻撃力が高いエネルギーを発動させた。

「汝は姿を自在に変える物。集い、圧縮し、我が意に従い、彼の者に鉄槌を下せ！ 《水激アクア・ストライクの戦鎚》！」

アープの頭上に突如として表れた直径五メートル程の水球。

敵の誰もが、現れた水球に目を奪われ、それが脅威に値する物だと判断し、攻撃を加える。

だが、水球は攻撃を受けても消え去ることなく、悠然とその姿を見せている。

水球から突如針のような物が発射される。

「ぐわあ！」

水の針が当たった男は強烈な衝撃を受け、気絶する。

次々と水の針が発射され、針は敵のデユナミスを受け、多少は減衰するものの、敵を気絶させるほどの威力は有している。

一人、また一人と気絶していく。

《水激の戦鎚》は巨大な水球を作りだし、術者のヒュレーが続く限り維持させる。

そして、その水球を時には高速で射出させ、時にはその巨大な水球ごと敵にぶつけるエネルギーだ。

アーブにとつて、このデュナミスは自身の持つデュナミスの中で多数を相手でき、尚且つ高威力を持つ物だ。消耗が激しいのが難点だが、現状ではそうはいってられず、多少は無理をしても継続させるつもりだった。

既に十人以上は気絶させている。このままいけば、なんとかするのはないか？

アーブは希望の光が見えてきて、精神が高揚するのを抑えられなかった。

だが、その希望は叶えられなかった。

凝縮された熱が水球に突き刺さり、まるで獲物を呑みこもうとする蛇のように絡み付き、水球を霧散させた。

「ああ！！」

突如と消え去ったデュナミスに、アーブの中にあるヒュレーが行き場を失い荒れ狂う。

アーブは荒れる息のまま、熱線が発射された軌跡を辿ると、右手を宙に向けたまま固まっているフランシスが居た。

奴が自身のデュナミスを食い破ったんだと理解すると、怒りがアーブの中で渦巻くが、同時にフランシスが自分よりも強力なデュナミスを放ったんだと理解させられる。

フランシスの傍にいる男が、筒状の物をエリオス達に投げつける。エリオスはそれを宙で叩きつけるが、筒からは白色の煙が吐き出された。

豪雨で視界が悪かったのだが、煙は相手が見えなくなるほどに悪化させる。

煙にまぎれて何かがやつてくると判断し、さらに警戒するが、これまでと全然変わらなかった。

雨のせいか直ぐに煙は晴れるが、影がエリオスの視界の片隅に降りてきた。

頭上を見上げると、エリオス達を捕えんとする網が降ってきている。

エリオスは直ぐに切断のエイドスを放つ。

網が切り刻まれ、網はエリオス達を捕えることなく素通りする。

レイアは前方だけに向けていた意識を上方にも向けざるをえなかった。

それが未熟なレイアにとって失策だった。

今までにない強力なデュナミスがレイアを襲った。

「あああああ！」

レイアに襲ったデュナミスはレイアの意識を刈るには充分だった。

「レイア！」

マーテルはすぐさま治療と覚醒のデュナミスをレイアに施すが、そこからエリオス達は窮地に陥った。

レイアの抜けたところをカバーしようとエリオスとアタルが防衛範囲を広げるが、今までの範囲でも苦しかったアタルにはカバーができず、相手のデュナミスが防御を抜けて、アタルを襲っていく。

それはエリオスもだった。

アタルに比べれば少ないが、着実と傷を増やしていった。

彼らはその身を地面に横たえるのも時間の問題だった。

フランスは満足げな笑みを浮かべていた。多少は手こずったが、それも時間の問題だ。

『勇者』と『聖女』がいなかったのが気にかかるが、他の仲間が彼らを取り押さえるだろう。

上玉な女が手に入る。

彼はその邪な想像から舌舐めずりをする。

「くくくくく」

笑いが止まらなかつた。自分達を止められる者は誰もいない。

これからも自分達には凌辱する機会が与えられるし、勝者の理として当然の如く享受する。

弱者を平伏せる快感が彼を酔わせる。

静かにその酔いは醒める。

ドサツと何かが、地に伏せた音がする。

何が起こったのかと、顔を向ける。

黒き死神が断罪の刃を振り下ろしていた。

それが彼の認識していた最後の光景だった。

エリオス達が門を潜り抜ける少し前、シヴァ達は皆の後方にある防壁のある一角に誰に悟られることなく辿りついていた。

そこは、十メートル以上もある煉瓦の防壁が地形の関係で直角になっっている処。

そこにシヴァの目的があつた。

『誰もおらんぞ』

シヴァとサティとフラウだけに繋がる念話で壁の向こうには誰もいない事を告げる。

シヴァはフラウとセレナに向かって頷く。  
フラウがシヴァの近くに寄る。

シヴァはフラウの膝に手を差し入れ、横抱きにする。

フラウはシヴァの体にできるだけ密着し、彼の邪魔にならないようにする。

シヴァは防壁を見上げると、上へと駆けた。

シヴァは防壁を交互に駆けあがることで、上方へと駆けている。

通常このような事はできない。出来ても五メートルが関の山だろう。

だが、シヴァは幼少の頃から鍛えられた驚異的な肉体性能とデユナミスの緻密な操作でそれを可能としている。

砦の防壁に降り立つ。

デユナミスで気流操作や吸収のエイドスを脚に張りつけ、静かに地面に着地する。

フラウをゆっくりと地面に下ろす頃には、セレナもシヴァの後に続いて駆け上がり、地面に着地していた。

声も掛けることなくシヴァは砦に向かう。二人もそれに続いていく。

三人はデユナミスに包まれている。

包み込んでいるデユナミスは《忍び寄る影》サイレント・ウォーカー。

術者を膜に包みこみ、足音、吐息、気配などを外に漏らさぬようにするデユナミスだ。

音もなく砦に侵入するシヴァ達。

意識を広げ、誰かいないかを確認する。

確認できたのは五人。といってもこれは敵らしき者の数だ。

人数が固まっているため、正確な人数は分からないが、一箇所に固まっていることからここに囚われた者達だろうと当たりをつける。

照明がシヴァ達を照らしだし、影を作りだす。だが、それ以外にシヴァ達の存在を察知させるものはなかった。盗賊が居る部屋の扉の前で立ち止まる。

四人が固まっており、一人が離れた場所にいる。

シヴァは一人分通れる隙間を静かに開けると、すり抜ける様に扉を潜り抜ける。

男達が侵入者に気付いた時には手遅れだった。

剣閃が踊る。

四人は喉を掻き切られ、首を落とされ、心臓を貫かれ、全て一刀の元に切り捨てられた。彼らは死を認識する間もなく、この世から去った。

離れた処にいた男は侵入者が入ってきたのを認識すると、思考は鈍ったままでも、本能は危険を認識し、性処理用として囚われている女達の部屋へと転がりこんだ。

シヴァは慌てることなく、男が逃げ込んだ部屋に入る。

部屋に入ると、袋がシヴァに向かって飛んできたので斬り捨てる。斬った袋からは粉末が飛び散る。

「ははは！ それには即効性の神経毒が仕込まれている。どうだ！ 身体が痺れるだろう」

洒落たスーツを身に付けた金髪の男は、身体が痺れ、倒れこむで、あるう侵入者を夢想して哄笑する。

だが、いつまでたっても侵入者は倒れず、こちらに歩み寄ってくる。

「何故だ！？」

男は腕に人質を抱え込んだまま混乱する。

侵入者であるシヴァは何の感情も載っていない漆黒の瞳で、男に



事実を突き付けた。

「俺に毒は効かない」

まるで死神の様な冷酷な威圧を放つシヴァに怯え、唯一の頼みである人質の首筋にナイフを突き付ける。

「く、来るな！！ こいつがどうなってもいいのか!？」

シヴァは立ち止まり、残酷な事実を男に告げた。

「貴様は馬鹿か？ 俺にとってそいつがどうなるかと知った事ではない。それに、人質というのは、相手が要求を呑めば、絶対に人質を返すという保証がなければ成り立たない。だが、そんな保証など証明することはできはしない。だから、人質というのは捕られてしまった時点でもう死んだものと認識するのは当然の事だ」

そんなこともわからないのかと言外に告げるシヴァに、男は人質の無駄を悟り、人質をシヴァに勢いよく突き飛ばす。

シヴァは向かってくる人質を気にすることなく避け、斬りつけてくる男の首を刎ね飛ばした。

女達の甲高い悲鳴が狭い室内に響き渡る。

シヴァは女達に目を向けることなく部屋から出て行った。

後ろで待機していたフラウ達に目線を送る。

了解したと首肯し、フラウ達は入れ違いざまに女達が囚われている牢屋に入ってしまった。

フラウは鼻に着く精液の臭いに顔を顰めた。

囚われている女達に何が起こっていたかは想像に易い。

女を物の様に扱った盗賊達に腸が煮え繰り返る思いがするも、呼気と共に排出する。

今の自分の役目は『聖女』として、肉体的な傷を癒す事。精神的なものに関しては、残念ながら自分達の役目ではない。本人か、親しい者達がする行為だろう。

今まで人質だった女性を癒す為に近寄る。その女性の顔はあの秘書にそっくりだった。まだ生きていたかと驚いたが、凌辱されていたことは明らかだ。精彩を欠いた表情は、まるで人形のようにだった。

ふと、思う。

生き地獄を味わうことと、死ぬこと。

どちらが幸せか？

だが、すぐに意味のないことだと頭を振る。

それこそ、その人や周りにいる人が決めることだと思うからだ。

自分達は生き地獄の中で過ごしている。

死のうとは思ったが、死ぬことは許されなかったことと、逃げた自分の代わりに最も地獄を味わった兄と、私を自分の立場に置かせない為に今も地獄で生き続ける兄を慰める為に自分は生かされている。

決して死ねない、死なせてもらえない。それが兄を苦しめる呪いだと分かっている。

だからこそ、自分は兄の傍に居続けよう。全てが終わったら

いや、終わらなくても兄に全てを捧げよう。

兄が死ねば、どうせ自分は生きてはいない。

今の自分は生きているのに、死んでいるのだ。それはこれからも決して変わらない。

そのことを嘆くつもりは毛頭ない。

それは同じ立場のサティも一緒だ。

この身は呪いと祝福が混じり合っている。  
生死など自分の範疇にはない。  
ならば、怖れることなど何もない。  
ただ、突き進むだけ。

意識を目の前の女性に移した。

清潔な身体にし、肉体的な傷を癒し、女性が凌辱された時の為の  
デユナミスをそれぞれ発動させる。

他の女性にも同じようにする。

セレナは個の意思を奪う奴隷用の首輪を破壊する。

これは装着者が所有者の意思に逆らった時に、装着者に抗いがた  
い苦痛を与える魔導器だ。

肉体的痛みではなく、精神 アストラル体に痛みを与えるもの  
であり、いくら痛みを与えようと装着者は壊れる事が出来ない拷  
問用の魔導器だ。

セレナ達とはある事情から着けた事があり、その外し方は熟知  
している。

次々と首輪を外していき、やがて身に付ける者は誰もおらず、治  
療も終わった。

女性達は解放された事を安堵し、湧き上がる感情を止めようとは  
せず泣き出した。

だが、女性の中の一人が怨嗟の声をあげた。

「どうして……どうしてもっと早く助けに来なかったのよ!！」

女性の嘆きは至極当然の主張である。

もし、彼女達ももっと早く助けに来ていたら、自分達はこのよう

な辛い目に合わなかった。

だが同時に酷く身勝手な主張だった。

彼女達は偶々この盗賊団を討伐することになったうえ、彼女達の救出など二の次であった。いたから助けただけ　それだけだった。フラウ達は彼女達の悲痛な叫びに理解も共感も同情も蔑視も一切しない。

このようなことは彼女達にとって別に珍しい事ではなかった。今回の様な事は初めてだが、似たようなことは何回もあった。

だからこそ、心は焼き切れている。

いや、鈍い痛みを感じるがそれだけだった。

シヴァはそのあたりが突き抜けている為全く何も感じないだろうが、フラウ達はかろうじて心の残滓が残っていた。

フラウ達は何も言わず、ただ黙って彼女の嘆きを聞いていた。

「もうこんな私なんて、生きていたってしょうがないのよ。死んだ方がましよ!」

女性が金切り声で自らの不幸を嘆いたのを黙って聞いていたセレナは静かに剣を抜いた。

「なら、死にますか?　今ならば楽に死ねますよ」

「ひっ!」

セレナの冷酷な瞳と白刃が鈍く光る様を見て、女性は思わず悲鳴を上げ、床を湿らせた。

「どうしますか?」

女性は怯えた。そして、嘆いた。何故、自分がこのような目に合

わねばならないのかと。

迫りくる死の恐怖に理性が臨界を超えた。

だからだろう。このような事を言い出したのは。

「こ、殺せるのならばやってみなさいよ！」

きっと、理性のどこかでこれは只の脅しだと思っていた。死を感じさせることで、生存本能に訴え、相手に生を無理矢理訴えさせるやり方だと。

こう言えば、きっと自分を少しだけ傷つけ、死を自覚させられ、自分は涙ながら生きたいと訴えるのだと。それとも、こう言ったのは今まで男に抑圧されてきたから、ぬくぬくと育った小娘には負けたくないと虚勢を張ったのか。彼女が分からない。どちらが本当の気持ちなのか。だが、きっと自分は生きるに違いない。そう、思った。

彼女の意識は途絶えた。

相手が悪かった。

彼女は『聖女』の護衛を義務付けられ、『聖女』に危険を及ぼす者を滅ぼす為だけに造られた、外道に類いする護衛。それしか許されなかった人形。

女性の首は胴体から離されており、胴体からは血が噴水のように湧き上がる。

女性達が悲鳴をあげ、腰を抜かした。

同じ人間だと思えないような目でセレナを見る。

セレナはそれにかまわず、女性達に向き直る。

「他にも死にたい人はいますか？」

誰からも声は上がらなかった。

セレナはデュナミスで血を一滴も、剣にも服にも残さなかった。

それはフラウも同じだった。

フラウはセレナの行動に何の疑問も挟まず、容認していた。

これは彼女達の日常の一部だった。

「では、外に行きましようか？」

フラウは腰が抜けた女性達をデュナミスで立ち上がる事が出来るようにし、付いてこさせた。

女性達はフラウ達を化物を見るかのような目で見ていたが、一切構わず目的の物を探索した後、シヴァの元へ向かった。

エリオス達が入口の門で窮地に立たされているのを黙ってシヴァは見届けていた。

約三十名ほどの盗賊がエリオス達を取り囲み、約十名ほどが地に伏せている。

無闇に飛び込んだりしない。

それでは彼らを囿にした意味はないのだから。

元々の作戦はシヴァ達が砦の中に侵入後、相手に悟られぬよう、いるかもしれない人質の救出。そして、待機。人数では遥かに劣っているうえ、相手の本拠地。ならば、頭領を一気に叩き、相手が混乱している内に討伐するのがよいと判断したのだ。

シヴァは強力なデュナミスを発動した人物を見詰めた。

その人物は力を有しているのみならず、近くの者に指示を出している。

シヴァはそいつが頭領だと判断し、《忍び寄る影》サイレント・ウォーカーを発動させ、相手に忍び寄った。

そして、近くにいる邪魔な人物を切り捨てた後、頭領だと思われる人物の首を刎ね飛ばした。

盗賊団の誰もが思考を放棄した。

自分達の優位を信じていた。

なのに、何故自分達の頭領が死んだのかと。

シヴァが持つ殺しの嗅覚はその一瞬を見逃さず、盗賊団に死の風が吹き荒れた。

エリオスはシヴァが盗賊の頭領を倒した事に安堵した。

今、盗賊団は自分達の思惑通り瓦解し、シヴァに狩られるだけの存在になっている。

だが、彼はシヴァのまるで躊躇の無さ過ぎる、殺す事に最適化されている剣閃とエイドスに茫然としていた。

この世界において、法はしっかり整備されており、大抵は法の元に裁かれることが前提となっている。

穢魔という例外的な存在はいる。

だが、通常盗賊であつても自己防衛した時や国の監督の元で組織された軍でなくては、人を殺すことなど赦されるものではない。

今回、自分達は国の許可を得ているので、罪に問われることはない。

だが、問題はそこではない。

アタル達がいい例だろう。

彼らは今まで人を殺した事はない。殺そうとは思わないだろう。実際、戦場にいるにもかかわらず、誰一人として殺していない。偶然なのかもしれないが、アープには殺そうとする意思はなかったのだろう。

自分は先の旅で師と共に世界を回った結果、人を殺めた事はある。今はもう、割り切ったが、当時は悩んだものだ。

今も、やむを得ない場合を除き、殺そうとは思っていない。いざとなれば殺せるが、それでも目の前に広がる光景のようにあれほど迷いなく殺せるとは思えない。

踊る剣閃が狙うのは血潮舞う急所。

エイドスの暴虐が治まった場所には無残な死体。

己の身体に血潮が振りかかるにもかかわらず、一切の嫌悪感はなく洗礼を受けているようでもあった。

人を殺すことに躊躇を持たない人物を自分は知っている。彼の者は狂躁の表情を浮かべていたが、シヴァは完全な無表情。漆黒の双眸には人が持つあらゆる感情が破棄されており、人形の様でもあった。

屍山血河の宴にアタル達は酔ってしまい、吐き気を催している。

疑問が思い浮かぶ。

どうしてそんなにも躊躇がない。

どうしてそんなにも慣れている。

あの人達の子供であるのに、どうしてそんな姿を晒している。

同時に自分の中で渦巻く激情が輪郭を見せる。

あの人達の子供である『勇者』がこのような姿を晒す筈がない。

あの人達の子供である『勇者』が無感情に人を殺せる筈がない。

あの人達の子供である『勇者』が人形のような人間である筈がない。





激情は彼らの中で鎮まることなく燃え上がる。

いつの間にか豪雨は止み、人から流れる温かい血は冷たい水溜まりの中に混ざり合い、大地にその姿を残すこととなった。

その後、フラウ達と合流したシヴァは砦を後にした。

道中、エリオス達は疑いと異形の者を見る眼差してシヴァ達を見ていたが、彼らに構うことはなかった。

砦の中にいなかった盗賊を含む、計五十名からなるこの地を長く脅かしていた盗賊団はその姿を消した。

#### 第四楽章 一人で全てを成す気高き者の名は『勇者』

シヴァ達は盗賊団を壊滅した後、女性達の保護の依頼、盗賊団討伐を報告するため、市長を訪れた。

市長は冷や汗を暑苦しい顔に満遍なく貼りつかせ、どこか落ち着かない様子で報告を受けた。

シヴァはアメリカに妹の生存の報告と皆にあった顧客の書類・契約書等、彼らの悪行を記されていた物を渡しておいた。

『私が持っている証拠と併せ持つて、これで豚を挽肉にすることが出来ます』と実にいい笑顔でその書類を見ていた。

彼女の依頼を受けて、逃げ出そうとしていた豚を縛り上げておいた。

その後どうなったかはシヴァ達は知らない。

豚小屋に入ったか、挽肉になったかは興味がなかったので、さっさと次の目的地であるコロニーを目指すことにしたのだ。

その後の一行には気まずい雰囲気か漂っていた。

道中の戦闘では、問題が起こることはなかったが、以前僅かながらあった会話はなくなったといってもいい。

シヴァ達とエリオス達の二手に分かれ、戦闘も一対二の割合で行うことにしたのだ。

アタルは彼の世界が揺らいでいるのを感じる。

目の前で起こった現実に打ちのめされ、どうすればいいのか分からなかった。

認めなくないと目と耳を塞いでいたかった。

否定し、非難し、拒絶して受け入れたくなかった。

それは他の仲間達も同様だった。

師がいなければ、今よりももっと酷い状態でいたのは確かだ。

何故、と思う。

何故『勇者』である筈の彼が僕達が求める『勇者』ではないのか。

人を守るのが『勇者』だろう？

人を救うのが『勇者』だろう？

『勇者』は正義の使者であるべきだろう？

頭からはその疑問が絶えず響き、僕達を蝕む。

逃避から穢魔との戦いに没頭している。

コロニーに近づいている為か、穢魔の数と種類が増してきている。

鳥獣種が身体の倍もある巨大な翼を広げ、鋭い嘴で僕を貫こうと滑空するが、擦れ違いざまにその翼を斬りつける。鳥獣種が地面に墜落した所を、エーテルの炎で焼き尽くす。

鳥獣種はその素早さの代償か、防御力が低く、胴体部分がほぼ毛皮だけといっても過言ではないので、一撃で決することが多い。

甲虫種が甲冑の様な甲殻を丸め、転がってくる。

僕はサイドステップで軽くかわし、甲虫種が方向転換しようとして丸めた身体を元に戻すのを待つ。

元に戻ったところを、接近して袈裟斬りにする。

甲虫種は黒光りする甲殻が非常に硬く、それを利用した高速タックルは厄介だが、ほぼ一直線にしか進めない。

それに、甲殻はともかく、露出している腹の部分は柔らかいので、そこを攻撃してしまえば、倒すことは容易だ。

屍骨種が鋭く尖った骨を槍のように刺すが、僕はそれを剣で払い、オーラを集中させ、衝撃のエイドスと共に叩きつける。

屍骨種は四本の手が生えた人骨の様な姿をしているが、その手は鋭い槍のように尖っている。

屍骨種の厄介なところは、その数としつこさにある。

動きはとろいが、数が多く、また槍を粉碎した所で、次は噛みつきを行うなど、一部を壊した程度では止まらず、しつこい事この上ない。

だが、ある程度の衝撃があれば、粉碎することは容易い。だから、屍骨種はその存在ごと粉碎するのが最善なのだ。

「ぶっ」

一息つく。

正直に言ってしまうと、今は戦っているのが楽なのだ。何も考えなくても済む。

あれから、気まずい雰囲気は僕達に漂っている。

彼らはいつも通りなのだから、気まずくしているのは僕達だ。

それを解消しようと、話し掛けようとはするのだが、彼の何も映していない漆黒の瞳を見ると、尻込みしてしまい、何も言えなくなってしまう。

あの日の事が鮮明に思い出されてしまい、彼に怯えてしまうのだ。それは他の仲間達も同様だった。

彼らも解消しようとは思ってはいるのだが、僕と同じように尻込みしてしまうようだ。

アープ達と愚痴を言い合う日々が続いている。  
どうにかしたいとは思っている。  
だけど、僕は彼に何と言えば良いのだろうか？

エリオスは今のままでは不味いと思っている。

コロニーの攻略の為に協力し合うことが必要なのだ。

だから、今夜アタル達が寝静まった頃、火の番をしているシヴァ達に話し掛けることにしたのだ。

彼の思惑には、コロニーの攻略のためというより、あの人達の子供である彼らに何があったのかを知りたかった。

「少しいいか？」

同行者の誰かが話しかけてきた。こちらには話すことはないが、会話に少し付き合う程度ならばいいだろう。

「何だ？」

「俺は君達の両親とも親交があつてね……今まで師との約束通りアタルの面倒を見ていたのだが、その……君達はどうしていたのかと思つてね」

何を言つかと思えば……くだらない。『勇者』になるべく生かされてきたに決まっているだろう。

「あんだ達の知つてのとおり、『勇者』としての訓練を受けてきた。

それだけだ」

「いや……それはわかっているのだが……」

エリオスは言いにくそうに口籠るが、やがて率直に口を開いた。

「どういった訓練を受けたんだ？」

「穢魔を殺すための訓練だが？」

そう穢魔を殺してきた。それだけだ。

時にはそうでない者も殺してきたが、大抵は穢魔を殺す訓練とそれを容易く行う為の訓練をしてきただけだ。

中々核心を得られない回答に業を煮やしているのは否めない。

エリオスは自分がいつになくイラついているのが分かる。

だから、今までの様な遠回しな質問ではなく、直接的な質問をしてしまった。

「人を殺すことに慣れているようだが？」

言った直後、後悔してしまった。

自分はこんなことが言いたいのではない。ただ、知りたいのだ。

あの人達は光り輝いていた。なのに、あの人達の子供である彼らはこんなにも人として堕ちていると自分は感じてしまうのか。そんな筈はないと否定したかった。

あの人達の子供であるのだから、きっとあの人達のような人物だと思っていた。

あの人達は世界を救うことと同じ位、子供達の事を心配していた。

出立の際に、国が引き取ったとのことだが、本当は自分達の手で守りたいと。抱きしめたいと。だけど、今はそんなことができないと悲しそうに言っていた。

自分は国が預かっているのならばと、安心して師の子供であるアタルの面倒を見ていた。

アタルは英雄の子供であることに誇りを持ち、自身も父のように『英雄』に、『勇者』になりたいと言って、日々師である自分の元で修行していた。

英雄の子供である事に重圧を覚え、劣等感を感じ、卑屈に感じ、父とは違い弱い自分の能力に苦悩しないように常日頃から英雄である師と、その子供であるアタルは違うのだと言い聞かせてきた。

幸い、友に恵まれ、周囲に恵まれ、アタルは自然と自身の心のかままに『英雄』になりたいと思ったのだ。父がそうだから『英雄』に、『勇者』になりたいと思うのではなく、自身の正義の心に従って『英雄』に、『勇者』になりたいと。

シヴァもそうだと思っていた。

スターリア王国がシヴァが『勇者』として、フラウが『聖女』として両親の後を継ぎ、世界を救う旅に出ることを発布した時は、アタルときつと同じだと思ったのだ。

自分はその時、まだあの人達に比べ弱かったからあの人達に、師に、付いていくことはできなかった。

だからこそ、あの人達の代わりに二人の旅立ちに付いていく事に決めたのだ。

違和感の前からあった。

シヴァは戦う時は常に一人だった。

フラウは回復役を担っているが、共には戦わない。

セレナはフラウの傍から彼女の護衛だからと、傍から離れない。

三人が三人ともそれを当然のように受け止めている。

きつと、自分は気づいていた。

だけど、認めたくなかったのだ。



あの人達の子供であるが自分達を必要としない事を。  
あの人達に付いていった時の自分と今の自分は同じだと。

「仮にそうだとして、そちらに何か不都合はあるのか？」

ない。

以前の旅から穢魔だけではなく、人間も時には穢魔以上に危険な存在として立ちは大かする事があった。盗賊に襲われたり、内戦に巻き込まれたりすることもあった。

だからこそ、時には人を殺めることもあるのだと知っていた。

そして殺さなければ、殺される事があることも。

アタル達にとってはこれは鬼門となり得るだろう。

どのような選択をするかは分からないが、旅を続けていけば必ずぶつかる問題だ。

その時に迷っていれば、殺されることも、さらに非道な事もされる場合がある。

だから、シヴァ達が殺す事が出来るのであれば、その時の脅威は凌ぐ事が出来る。

結局、自分は認めたくないだけだ。

あの人達の子供がどのような目に合っていたかを。

「最後に一つだけ聞かせてくれないか？」

シヴァは興味がなさそうに、エリオスを見る。

「あの人達の子供である君達は望んで『勇者』と『聖女』になったのか？」

「……………それ以外になる選択肢などあると思うのか？」

エリオスはその答えに愕然とした。

「そうか。邪魔をして、悪かった」

エリオスはふらりとした足取りで馬車へと向かった。

「お待ちしておりました、勇者様。こちらへどうぞ」

一般兵に案内され、他よりも大きい幕舎に入る。

シヴァが幕舎に入ると、そこには使い込まれた鎧を身に纏う将達が居た。

睨みつけられたが、シヴァは涼風とばかりに気にせず、彼らの近くに寄った。

「初めまして、私はジャン＝シルドレイ。フレイス王国騎士団長を務めている。早速で悪いのだが、作戦の説明に入ってもよろしいかな？」

「ええ」

ジャンはテーブルにある地図を駒を使いながら、視覚的に分かりやすく説明する。

「現状を確認すると、コロニーの周りには五千以上にも及ぶ穢魔の軍団。対して、こちらは二千の軍。数はこちらが圧倒的に不利、しかもコロニーは開けた平野に造られているので、地形を利用することはできない。全方位から取り囲む事はこちらが食い破られることは必至。よって、一方から攻める他ないのだが、左右を奴らに取ら

れるのは不味い。なので、鶴翼の陣を敷くことが決まった」

ジャンはシヴァの方を見る。

「そこでだ、勇者殿には我らより少し先行して、敵を引きつけてほしい。我らは勇者殿が討ち漏らした穢魔や、溢れた穢魔を狭撃で討つ。よろしいですか？」

「単独でコロニーを陥落したという『勇者様』ならば、簡単な任務でしょうな」

一人の将が皮肉交じりに嘲笑すると、周りの者も囁きたてた。要するに困なのだろう。あまりにも危険すぎる任務。命が惜しいのであれば、断らざるを得ない任務。

だが、シヴァは断ることはなかった。

「わかりました。作戦会議は以上ですか？」

「ああ……」

一悶着あると思ったのだが、あまりの呆気ない了承にジャンは瞳目した。

「では、後で作戦時刻を教えてください。では、失礼します」

一礼してこの場を去ったシヴァを一同は、呆然と見送った。

「無理に決まっているだろ！」

シヴァ達が行う作戦内容を話したのだが、誰もが渋い顔をしており、アーブは死ぬと言わんばかりの作戦に腹を立てた。

「その……断れなかったのかい？」

アタルとしてもやはり許容できないのだろう。作戦の拒否はできなかったのかと尋ねるが、

「無理だな。断ろうとしても、難癖をつけて強行させたに違いない」

一蹴され、肩を落とした。

シヴァは落ち込む一行を見て、こう切り出した。

「困になるのは俺だけでいいだろう。お前達はいつらの軍に入れてもらえ」

シヴァの突然の事に一行は瞠目した。 フ라우達を除いて。

「そんなの無茶だ！ 君は死ぬつもりなのか！？」

「死ぬつもりはないし、無茶は言っていない。はっきり言ってしまうえば、お前達は邪魔だ」

『なっ！？』

シヴァが斬り捨てる様に、無慈悲に事実を告げる。

シヴァにとっては邪魔にしかならないと冷徹に判断していた。

「何を言っているんだ！？ あたし達は仲間じゃないのか！？」

レイアはシヴァの冷淡な物言いに激昂する。

「仲間？ 俺はお前達をそんな風に見た覚えはないし、これからもする気はない。お前達がいようがいまいがどちらでもかまわない」

シヴァにとってはそれは厳然たる事実だった。彼にとっては邪魔にしかならなかった。

シヴァの言葉に一同は愕然とし、

「くそ！」

アープとレイアは与えられた幕舎から飛び出していった。アタルとマーテルは二人の後を追った。

「それでいいのか？」

エリオスはシヴァに問うが、

「ああ」

答えは変わらなかった。

「そうか……二人はどうするんだ？」

フラウとセレナを見遣る。二人はシヴァの言に何も変わらなかった。シヴァがこう言いだすのを分かっていたのだろう。

「私は兄様の傍にいますよ」

「私はその護衛」

エリオスはそっと目を閉じる。

自分の推測が正しければ、シヴァの邪魔にしなければならない事が分かる。

「俺達は俺達の好きにするが構わないか？」

「ああ。好きにしろ」

エリオスは弟子達の相談に乗るべく、場を去った。

レイアとアープは軍の拠点より程よく近い小川で二人佇む。

「何で……付いてきたんだ？」

「放っておく訳にもいかないだろ。仲間なんだから」

「そうか」

二人は何をするでもなく、佇み、小川の水の流れを見ていた。アタルとマーテルも程なく二人に追い付き、四人は合流した。

「その……これからどうするんだい？」

「分からない。どうしたら、いいか迷っているんだ」

アタルの問いにレイアは苦悶の表情を見せる。

「俺も、だな……正直に言っちゃまうと、怖くて仕方がないんだ。だって、五千の穢魔に突っ込んでこい、だぜ。自殺しろって言われてる様なものじゃないか」

アープの手は震え、脚もまたそれに劣らず震えていた。

「俺みたいな平民には土台無理な話だし、参加しなくていいって言われてホッとしてるんだ」

「アープ……」

アタルとしても今回の作戦は無茶極まりないと分かっているので、何も言えずにいた。

「あたしは」

沈黙する三人にレイアの声が響き渡る。

「あたしは力不足なのが悔しい！ 仲間と見られなかったのが悔しいんだ！」

涙交じりの声で己が心中を吐露するレイアをマールテルは胸に抱く。アタル達の後ろで、叢が踏みしめられる音がした。

「先生！」

「こんな所にいたのか……」

アタルはいつも導いてくれた師にどうしたらいいかと尋ねてみる

ことにした。

「俺の意見を聞いたからといって、自分の意見にするんじゃないぞ……俺はシヴァ達に付いていくつもりだ」

「え……でも彼は邪魔だと」

エリオスは以前、不確かな噂を聞いた。良識ある者ならば、耳を疑うことだ。

その時は単なる噂だと聞き流していた。だけど、今のシヴァを見ると、その噂には信憑性があった。後悔している。何故、彼らの元に行かなかったのだと。だから、これは贖罪の意味も込めている。かつて果たせなかったことを果たしたいとも思っている。

「そうだな。確かにあいつにとっては邪魔なだけだろう。」

だが、あいつはこうも言った。『好きにしろ』と　だから俺はあいつの邪魔にならない範囲で付いていくことにした」

迷いはなかった。

かつて果たせなかった願いを。

あの人はいないけど、あの人の代わりに見守ろうと　。

レイアは恥を忍んで師に尋ねた。

「先生、あたしは力がありません。だけど、そんなあたしでも付いていってもいいでしょうか？」

「レイア……確かに力の有無は物事の成否にかかわる。だからといって、力がないからといって、諦めることはない。」



初めは力がなくともいいんだ。進みながら、力をつけていけばいいんだ」

そうだ。自分はその時、力はなかった。

だけど、今も夢に見ている。あの人達と共に歩んでいける事を。もう彼らはいない。

だけど、彼らとの絆は確かにここにある。

「はい!!」

レイアも腹を括った。諦めずについていくと。

「傷ついたら治してあげるから」

覇気が出てきたレイアに嬉しくなり、マーテルは自分もついでいと決めた。

「僕は父さんの様な英雄になれるまでは諦めるつもりはないよ」

胸の中に燻る炎が燃え上がる。

僕は、この胸に燃え上がる炎に従って、『英雄』に『勇者』になると決めた。

一度くらい躓いたからといっても、諦めるつもりはない。何度でも立ち上がって、いつかはなってみせる。

父さんのような英雄に。

仲間と共に。

アープは次々と参戦を表明する三人を、眩しい様な物を見るような眼で見っていた。

彼らは強い。

自分は弱い。

だけど。

だけど そんな自分でも彼らと居れば自分も強くなれるのではないかと思う。

手は震えている。足は震えている。

だけど 歩ける。

彼らの元まで。

今はまだ、虚勢だけど。

引っ張ってもらっているけれど。

いつかは俺が引っ張ってやるさ。

「仕方ねえ。そこまで言うなら、俺も付いて行ってやるか」

「いや、誰もおまえに付いてきてほしいと思ってないぞ」

「嘘だよね!？」

アープはマーテルを見る。顔を逸らされた。

アタルを見る。露骨に目を逸らした。

「そんな……」

アープは落ち込みざまを身体全体での表現で表している。そんなアープにアタルは肩を置いた。

「一緒に行くんだろ 親友」

「おうともさ!」

満面の笑みを張りつかせ、肩を抱き合う。

これは彼らなりの再結成の証であり、絆の確かめ合いだった。

「それで、先生？ 邪魔にならないように付いて行くって具体的にどうするんですか？」

エリオスは二カつと笑った。

「 考えてない」

四人は揃ってずっこけた。

実は何も考えていなかったのだ。

今夜は新月のため月は見えず、淡く光る星が天を覆い尽くす。風も穏やかで、夜の世界は幻想的なまでの光景を彩っている。

「いよいよ、幕が開けるのだな」

シヴァ達しかいない馬車の中、サティは本来の姿に戻っていた。すらりと伸びた足が、シヴァの足に絡む。綺麗な半球を描く胸の膨らみはシヴァの胸に押しつけられる。彼女の身長は、シヴァの隣に密着しているフラウとほぼ同じ程度だった。

彼女は元から守護精霊ではなく、人間を守護精霊にした存在。シヴァ達と同じように造られた存在で、シヴァがエンテレケイアに至るために、シヴァの役に立つ事を生きがいとし、命と魂を捧げるシヴァのためだけに存在する少女。

彼女はそのことを不満に思わない。そういう存在であるからだ。シヴァとフラウにとってこの少女は大切な存在だった。

出会いから育まれた感情まで全て、目的を果たさせるために仕組まれていたとしても、この少女は大切だった。

シヴァが『勇者』という道化に甘んじる理由の一つとして、少女達の延命がその一つに挙げられる。

ある意味、サティを思う心までも仕組まれていたが、シヴァとしては、少女はフラウと同様に大切な存在故に、見捨てるという選択肢はない。

彼女はシヴァのヒュレーを元に生きている。

今現在のシヴァは刻一刻と、命を削られている。それは彼女がシヴァのヒュレーをシヴァの現在の器以上に吸い込むからでもある。

このままいけば、シヴァもサティもフラウもセレナも死ぬことになる。それを阻止するには、シヴァは穢魔の大量虐殺、または水晶門を破壊すること（正確にはそれに伴うあるものが必要）などして、今以上の器を手に入れるしか道はない。

故に、大切な存在を守るためには『勇者』という道化を演じるしかないのだ。いや、それ以外にさせてもらえないという方が正しいだろう。

「ああ、ようやく始まる」

彼らには生まれた時から選択肢などなかった。与えられた事を、言われた事をするだけの日々。

世界を救うという大義の元、そして古より紡がれし、いまはもう知る者は少ない本当の『勇者』の役割を果たす為だけに造られた人形。

人としての意思など微塵も与えられず、世界を救う為だけに捧げられる生贄。

それがシヴァ達だ。

辛いと思っただけではない。

それが日常だったのだから、シヴァ達にとってそれが正常だから

だ。

この身を悲観している訳ではない。

与えられたのは役割を果たすために必要なものだけだ。そこには人の感傷などない。仮にあったとしても、そういったものは捨てられ、壊され、消された。

「兄様……」

置いていかないで、離さないでとばかりに密着しているフラウはシヴァの首筋に顔を埋めた。

「どこまでもついていきます」

「我也だ」

彼らの、『勇者』の終幕はエンテレケイアを極めていけば、誰でも知ることはできる。

エンテレケイアにはこの世界の秘密が隠されている。

彼らの知る秘密はまだ一端。

だけれども、終演は知っている。

シヴァとしては、三人は付き合う必要はないと思っている。

幕引きに必要なのは、『勇者』である自分だけだ。

「私の命は貴方のものです。だから、貴方に全てを捧げるのは当然です」

「うむ。我らは異魂同心同体。そして、我が身はお主と共に生き、共に果てる存在だ。ならば、共に行くのは当然だろう」

「そうか」



「フラウ、セレナ。お前達は下がってる」

「御武運を」

「わかったわ」

フラウとしてはシヴァと共に戦いたいのには山々であったが、シヴァにとつては邪魔にしなければならないのは分かっている。二人の役目からこのような配置になってしまったが、できることならばシヴァに襲いかかる穢魔を殺戮したい衝動に駆られるが、今の彼女にとつてそれはシヴァを窮地に立たせるものでしかない。今は我慢の時だと自分に言い聞かせ、シヴァの邪魔にならぬ遥か後方に位置した。

彼女達の近くに土を踏みしめる音がしたので、振り返るとエリオス達が居た。

「……何の用ですか？」

フラウとしてはフレイス軍に混じって欲しかったのが本音だ。つまり正義感からシヴァの邪魔をして欲しくなかった。

「僕達も闘うことにしたんだ」

「そうですね。好きにして貰ってもかまわないですが、兄様の邪魔だけはしないでください」

「どうすれば、邪魔にならない？」

エリオスはシヴァを最も知っているであろうフラウ達に尋ねる。アタル達はシヴァと共に戦うつもりであるが、エリオスは浅慮

な真似をするつもりはなかった。

「不味い！ 戦端が開かれたぞ！」

穢魔がシヴァを敵として見定めたのか、群れをなして次々と襲いかかるうとするのを見てとったレイアとアタルはすぐさま彼に駆けつけようと、前傾姿勢を取り、シヴァの元へ駆けていった。

「馬鹿！ 戻ってこい！」

エリオスの静止も聞かず、四人はシヴァの元へ駆ける。

四人の行動にフラウは眉を顰めたが、放置することにした。彼らはすぐさま知ることになるのだ。スターリア王国が、世界が造り上げた『勇者』を。

「すまない」

確かめるべきものを確かめずに駆けて行った弟子達の行動を師としてエリオスは謝罪する。

「かまいません。いい機会ですから、彼らも知るべきです。世界に望まれた『勇者』の姿を」

シヴァはフラウ達が後方に下がったのを確認すると、自分の感情の大半を占めている殺戮衝動を解放した。

伏せていた双眸をゆっくりと開眼すると、是とする殺戮の最善を尽くすべく世界は改変された。

世界は黒と白と灰色の濃淡で構成されている。目を凝らせば、ヒ



ユレーが世界のあらゆるものに流れ、独自の形成を成している。五感が通常の機能を失っていくのが分かる。戦闘用に身体が入れ替わっていく いや、戻っていく。滅ぼすための兵器としての機能に最適化される。

自身の精神の内部に埋没し、自身を、世界を変革できる力を現出する。

「『イェシユレー具象』」

それはエンテレケイアに至った者のみが具象できる至高の武器。いや 具象できる者こそがエンテレケイアに至る資格を有するのだ。

力が噴出し、凝縮する。

世界からヒユレーを引き出し、貪る魔性の兵器。

所有者の渴望を叶えるために存在する想像の創造。

「天地陰陽、全てを無に還せ『無極』」

シヴァの手には一振りの剣が具現化された。

その剣は美しかった。恐ろしかった。切り裂かれそうなほど鋭く、その美しさ故に、近づこうとする者がいれば切り刻む破壊の剣。

白と黒の紋様が埋め込まれている虹色に輝く宝石を奪うように、共有するように、刀身を奔る。

シヴァは全身に雷光を纏う。風がシヴァから噴出し、嵐となりて荒れ狂う。

生まれる破壊衝動を穢魔に向けて、流出させた。

アタルとレイアは、いやアープとマーテルも茫然と立ち尽くして

いた。

雷光が、烈風が、閃光が、漆黒の闇がシヴァの周囲で荒れ狂い、近づくもの全てを呑み込んでいった。

四人はここにきて悟った。悟らずをえなかった。

シヴァは自分達を心配して、あんな事を言ったのではない。邪魔だから、周囲に人が居れば力を制限されるから自分達を要らないのだといったのだと。

「まさかとは思っていたが、噂が本当だったとはな」

エリオスとフラウ達が四人の背後にいた。接近するのに気付かないほど四人は茫然としていた。

「先生、噂とは？」

世間に行われているシヴァ達の、いや『勇者』と『聖女』の噂には二種類ある。

一つは大半が知っている光の噂。

品行方正、眉目秀麗、文武両道、清廉潔白など人が偶像に抱けうる、ありとあらゆる人が夢見る理想と仰ぎみる称賛が『勇者』と『聖女』に付いて回っている。アタル達が知っている、世間で流れている噂がこれだ。

もう一つが知る者が少ない闇の噂。

それは穢魔を単独で滅ぼす事が出来る様に、ありとあらゆる殺戮の訓練を施されており、穢魔だけでなく、力を得るために、世界中の行き場の無い子供達や老人、犯罪者を殺しているという根も葉もない噂。

エリオスも最初聞いた時、そんな馬鹿なと一蹴した。

だが、盗賊達を躊躇もなく殺した殺人の術にもしかと思ったのだ。エリオスは弟子達にその闇の噂を聞かせた。

誰もが、以前の自分の様にまさかと思ったが、目の前の現実と以前あった事を照らし合わせれば真実であると信じねばなるまい。

「噂は本当なのかい？」

恐る恐る真実を知るフラウに尋ねると、フラウはアタル達を冷笑した。

「本当ですよ」

誰もが齎された真実に愕然としたが、受け入れることなどできそうになかった。

『勇者』という偽りの光が彼らの心を縛っているのだ。

「どうして……どうしてなんだ！！ 『勇者』なんだろう！ 人を救うんだろ！ 世界を救うんだろ！ 『勇者』と『聖女』の子供が何でそんなことをするんだよ！！」

レイアの慟哭に、フラウは己の心が怒りに満ちていくのが分かる。できることなら、殺してやりたくなかったが、真実を打ち明けた方が打ちのめす事ができそうなので我慢した。

「『勇者』だからに決まってるじゃないですか」

淡々と、フラウは無感情な声質で告げた。

「っ！」

「『勇者』という甘美な響きに誘われ、各々が持つ理想の姿を投影する。『勇者』という偶像の本質を知らず、都合がいいように解釈

する。押しつけられる側としては迷惑この上ないですね」

自分達は生まれた時からその席に座ることを約束されていた。  
自分達の意味など、一度も考慮されていないし、黙殺されてきた。

「兄様が単独で戦うのは　いえ、戦わされるのは、かつて仲間が居たにもかかわらず失敗した者達の轍を踏まないため。そして、誰もが諦め、戦意を失くしたとしても、それにかまわず戦い続ける事が出来るようにするため。世界が求める『勇者』という役割を果たすために造られた殺戮人形で在り続けるのが兄様の役割です」

「……じゃあ、『聖女』は？」

「私の役割は、人々が傷ついた時に治癒し、血塗られた聖剣を人々の目から逸らさせることです」

そして、兄様に『勇者』を全うさせる人質が私の役割です。

後者の言葉は口に出さなかった。出したところで、意味はないからだ。

「だけど、たった一人で穢魔を殲滅できるわけがないじゃないか。傷を負うことだってあるし」

反論の言葉に力はなかった。  
アタルの言葉には一理ある。

だが、その程度の事を殺戮の刃を造り上げた者達が見越していない筈がない。

フラウはシヴァを指差す。

シヴァも数の暴力に抗しているが、無傷というわけではない。

その牙で、爪で時々彼の体は抉られるが、次の瞬間には傷はなく

なり、傷を負う前と同じ動きで穢魔を滅する。

「人間である父と亜人種<sup>アルコーン</sup>である母をもつ、ハーフである私達はある特殊な力を有しています。私が見つ力の一つが同調。これを利用して、兄様と私を繋ぐことで、ある特殊な体質になったのです。それはどちらか一方が無事ならば、例え一方が傷つこうとも無事な方に引つ張られ、双方無傷になるという体質です」

息を呑む気配がする。

これがフラウがシヴァと共に戦わない理由の一つ。

フラウが無事であるならば、シヴァはいくら傷つこうとも戦い続ける事が出来る。

だが、フラウは真実を全て語ってはいない。

フラウは確かに同調という力を持っているが、これだけではこのような体質にはなれない。

その事を語るつもりはない。真実は既に過去の事。語ったところで何かが変わるものではないし、得られるわけでもない。

亜人種<sup>アルコーン</sup>とは、エイコーンに存在するもう一つの人種。

彼らは人類とその姿を類似しているが、耳が尖っている、獣の耳や尻尾が生えているなど人類とは異なる姿をしている。

彼らは長寿で、類稀なる力を有し、容姿端麗、しかも老化はない上、主人と定めた者には絶対の忠誠を誓うので、人類の乱獲の元になつた。

今では彼らは一つの里に集結しており、その姿は滅多に見せない幻の種となっている。

人類とアルコーンでは子孫ができる事はほとんどない。

だが、稀につくれた場合、その子供は二つの人種にない特殊な力を有する事になる。

シヴァとフラウはその例に漏れず、特殊な力を有しており、それ

に目をつけたのがスターリア王国、世界だったのだ。

「じゃあ……あたし達は何のために存在するんだ？」

「知りませんよ、そんなこと」

仲間としての存在意義を剥がされ、レイアは泣きそうになる。

力が、意思が足りないからこそ認められないのだと思っていた。けれど、違ったのだ。初めからいらなかったのだ。

自分達など必要とされていなかったのだ。

心が折れそうになった時、肩に手を置かれた。

力強い手だった。無骨としており、逞しい手だった。

「彼と共に戦うのは、彼にとって邪魔にしかならないと分かった。だが、別の所で穢魔を削るのはいいだろうか？」

シヴァは穢魔と単独で戦い、その数を今も漸減している。だが、全ての穢魔に彼がその刃を届かせている訳ではない。

エリオスは彼の刃が届かない敵を討つてもいいかと問っているのだ。

「ええ。兄様の邪魔にさえならなかったらいいですよ」

「そうか。では、皆いくぞ！」

エリオスはハルバードを天に掲げ、自分に続けと弟子達を導く。

弟子達は立ち上がり、一步、一步その足で大地を踏みしめていく。

彼らの戦場はここからだった。

た。  
フレイス軍は目の前の現実を受け入れられず、茫然自失としてい

自分達の血肉を削り、戦友を失ってまで守ってきた戦場を一人の少年がいと容易く穢魔を駆逐していく。

シヴァの一振りが穢魔の体軀を断ち切る。

シヴァのエイドスが穢魔を蹂躪していく。

彼らが穢魔を殺すには、仲間と連携し、何度も武器を叩きつけたり、エイドスを浴びせなくてはならない。複数の穢魔に単独で挑むなど愚の骨頂。穢魔が単独ならば自分達はかるうじて対抗でき、複数ならばギリギリの線を渡る必要がある。十を超えれば、死を覚悟せねばならない。

だが、『勇者』はどうだ？

千を越える穢魔を前にしても臆さず立ち向かい、殲滅している。戦意を砕くには充分だった。これならば、自分達は戦わなくてもいいのではないかと考えたのだ。

自分の命を、戦友の命を失わずに済むと考えたのだ。

『勇者』に任せれば大丈夫だと彼らの内に芽生えた。

そんな彼らの心の変移を捉えたジャンは不味いと考えたのだ。

確かに、この場はそれで凌げる。

だが、『勇者』がいなくなればどうだ？

敵は穢魔だけではない。人間もいるのだ。

今は穢魔が居るからこそ、人間同士の戦いには発展しにくい。精々、盗賊ぐらいだ。

だが、穢魔が居なくなれば次は人間同士の戦争が始まるとジャンは思う。

その時に、腑抜けた兵士では国を守ることができない。

だから、兵士達に喝を入れねばなるまい。

「勇敢なる我が兵士たちよ！ 『勇者』だけにこの国を守らせるな！  
我が国は我が守るのだ！」

ジャンの勇猛なる命令が兵士たちの心に徐々に染み込んでいく。  
そうだ。我らの国は我らで守るのだ。  
友を。家族を。隣人を。我らの手で守るのだ。

「穢魔を殲滅するぞ！」

ジャンは穢魔の群れに突撃する。  
それに続く兵士達の士気は高まり、穢魔を殲滅せんと勇猛果敢に  
攻めていった。

コロニーを各国が攻略できない理由は二つある。

一つが穢魔の数量が軍のそれと比較して尚多いこと。

人間同士の戦争と違い、政治的背景や戦後の駆け引きなどを考慮  
せずに済むとはいえ軍の戦力の低下は免れない。過去、コロニー攻  
略後の隙を突かれ、人類同士の戦争に突入した例もある。

穢魔は定期的に野に放たれているものの、大規模な侵攻はコロニ  
ーが築かれてしまえば、大規模な侵攻は滅多にないことから防衛線  
を築くだけに留まる事がある。

二つ目が各コロニーに守護者の様に生息する厭魔と呼ばれる強大  
な力を持つ穢魔がいるからだ。

最近では、人型の厭魔が各地に出現しているが、こちらは神出鬼  
没なため、一つのコロニーに根付いたりはしていない。

故に、ここフレイス王国のコロニーにも厭魔が存在している事は  
忘れてはいけない。



その厭魔は己が巢を荒らしている人類を誅罰すべく、己が巢からのっそりと姿を現した。

牛と同じ大きさをしており、狼の姿をしている。尻尾は長く曲がりくねっており、尻尾の房まで体毛は覆われていた。小さな耳は真っ直ぐ立っており、口からはみ出ている犬歯は獲物を軽く噛み砕けそうなほど巨大だ。そして、特筆すべきは体毛が血の様に赤く染まっております、黒い縞模様が背中中で主張している。

その厭魔、ジェヴォーダンとフレイス王国で名付けられた厭魔は己が主に命じられた任務を全うすべくその体躯で疾風の様に駆けた。

襲撃は突然だった。

大地を駆け抜ける音がその兵士の耳に届き、その正体を確かめろべくその方向を見た途端、赤い閃光が彼の頭部を突き抜けた。

「ひー」

その厭魔が醸し出す雰囲気は凄烈で、見た者に恐慌を齎す。脚を一步踏み出すと、兵は恐れをなし、一步引き下がった。

赤い閃光が宙を舞い、兵の頭を噛み砕く。

兵の頭部を噛み砕く咀嚼音が静まり返った周囲に響いていく。

誰もが、ジェヴォーダンの傍から離れようとはしない。恐怖が彼らの身体を縛りつける。

ジェヴォーダンが口の中のもの呑み込むと、狩猟の始まりを告げる咆哮を平野に響き渡せる。

誰もが逃げ惑い、狩るものと狩られるものが逆転した。

狩猟という宴が始まったのだ。

ジャンは待ち焦がれた宿敵が現れたのを察した。  
あの咆哮は間違いない。父を、友人を殺した宿敵が現れたのだ。  
奴には一般兵では勝てない。  
だからこそ、自分が持ち場を離れたところで問題はない。

「副団長！ 指揮を頼む！」

「は！ お任せください！」

馬に命じ、奴の元へと駆けさせる。おそらく、途中で引き返そうとするだろうが、ある程度の距離を駆けてくれれば問題ない。奴には馬上では勝てないのだ。ならば、そちらの方が都合がよい。

ジャンは騎士団長としては異例の速さでその地位で登りつめたといってもいい。

そこまで、彼を掻き立てたのは十年程前、ジェヴォーダンに頭部を刈られた父を、友人を死体となつて、自分達の元へ送られた事が一因となっている。

復讐心も確かにあるが、同時にこうも思ったのだ。

あのような無残な死骸を晒したくないと。

自分も死は覚悟している。だが、顔を抉り取られ、所持品や鎧からでしか身元が分からない死体になるのは嫌だった。

だからこそ、強くなった。無様な死体になりたくなくて。

今、この恐怖の元となつた宿敵がいる。奴を倒さねば、安心することなどできはしない。

十年待った。今こそ、恐怖を断つべきだ。

フルアーマー  
全身鎧を身に纏い、バルディッシュを断頭台代わりに。

ジャンはジェヴォーダンと対峙する！

バルディッシュの重量を活かし、一撃必殺を主体とするジャンに対し、ジェヴォーダンはその巨軀からは想像できぬほどのスピードで攪乱し、ジャンに攻撃を加えていく。

上位の穢魔、つまり厭魔となる程デユナミスを行使する。ジェヴォーダンが使っているのはオーラと衝撃のエイドスだけだが、体格差、元々の身体能力の差もあってかジャンはバルディッシュの攻撃を当てる事が出来ず、牽制のデユナミスを当ててもたいした攻撃にはなっていない。

フルアーマー全身鎧であったからこそ、未だに持っているジャンは確信を持つて言える。

なんとか打開策を見出そうとも、突破口は見えず、加勢を期待しようにも、ジェヴォーダンの襲撃で戦線が崩壊し、兵はその対応に追われている。ここでジェヴォーダンを見逃せば、被害は拡大することが明白だったので、引くことはできない。

よって、ここを分水嶺とし、修羅となりて目の前にいる獣を粉砕する！

「おおおおおー！！！」

一つの弾丸となりて、疾風の如く迫り、バルディッシュを叩きつける。

地面が円状に粉碎するも、狙った獲物は側面に回り、ジャンを噛み砕こうとその顎を開く。

させじと、バルディッシュを横に振るも、ジェヴォーダンは難なかわし、その身を引き裂こうと何度もジャンに迫る。

だが、ジャンも懐に入られれば、成す術はないと分かっているこ

とからバルディッシュを振り回し、攻撃と牽制を同時にこなす。

事態は膠着状態に陥ったが、先に崩れたのはジャンだった。

何度も振り回していった結果が、彼のバルディッシュの攻撃の速度を落としたのだ。無論、人間同士であればジャンも成す術はあったのだから、相手は実力が格上の獣。

ジャンの隙を逃さず捉え、懐に入られ、押し倒される。

獣の牙がジャンに届きそうになった時、炎槍がジェヴォーダンを貫こうと空気を貪りながら迫ってきた。

ジェヴォーダンは即座に身を翻し、ジャンの上から離れる。

獣が唸る先にはエリオスがいた。

彼は戦況が傾いたところに加勢せんと、尽力していたのだ。

アタル達は周りの穢魔を片づけさせている。

アタルはともかく、レイア達ではまだ荷が重いと判断し、単独でジャンに加勢したのだ。

「すまない。助かった」

ジャンは警戒しつつ下がり、加勢に来てくれた英雄の弟子に感謝する。

「気にするな。それよりも奴を倒すぞ」

「ああ」

「俺が奴の動きを止める。お前はその隙に……」

エリオスはジャンがジェヴォーダンを止められない事は事前の動きから察していた。スタミナが切れている今は、下手に動きまわるよりも、一撃のために体力を回復すべきだと思ったのだ。

ジャンもそれが分かっているのか、反論はしなかった。

エリオスは炎の弾丸をジエヴォーダンに向けて発射しながら、自身も接近していった。弾丸は速射性を高めるために威力を落としているが、多少の牽制程度にはなっているようで、ジエヴォーダンは先ほどと違い、弾丸を避ける様に動く。

エリオスはジエヴォーダンの動きを制限するように弾丸を発射することでジエヴォーダンの動きを制限しているが、ジエヴォーダンは時にはエリオスの予測を見破るかのように、弾丸をその体躯に受けるのを構わずエリオスに攻撃を仕掛ける。

エリオスの身体に牙による裂傷が増えるが、エリオスは気にせずジエヴォーダンの行動を分析していた。

ジエヴォーダンは頭部を狙う傾向が高い事を分析したエリオスはある算段を立てる。

ふと、エリオスの身体が先ほどジャンが穿った地面に足を取られ、身体が傾く。

ジエヴォーダンはその隙を見逃さず、エリオスの頭部を噛み砕かんと、赤き閃光となりて、エリオスに肉迫する。

だが、それこそエリオスの狙いだった。

エリオスはデュナミスを用いることで、地面にその巨躯を叩きつけた。

予想よりはるかに早く、エリオスの身体が地面に沈んだ事によって、ジエヴォーダンの牙は目標を見失い、その体躯は宙を泳いだ。

その隙こそがエリオスが欲していた隙。

エリオスはジエヴォーダンの腹に向けて衝撃のエイドスを叩きつけた。

致命傷にはならなかったが、体躯は宙を投げ出され、ジエヴォーダンは苦悶の表情を浮かべた。

ようやく出来た隙を見逃さず、ジャンは必殺の意思をバルディッシュに込め、その刃はジェヴオーダンの首を断ちきらんと迫っていた。

数瞬後には、ジャンの予測に過たず、ジェヴオーダンの首は胴体から刎ね飛ばされるはずだった。

ジェヴオーダンは窮地に立たされている事を認識していた。

このままでは命じられた任務を果たせない。そう思った彼は、自身に秘められた力を解放した。

『ブリアー  
葬世』

それは、自身の渴望を阻害するものを葬る力。

己が世界を崩壊させるものを排除する破壊の具現。

『ディバウアーウルフ  
《貪り喰らう群狼》』

「がはっ！」

衝撃がエリオスを襲い、地面に身体を無理やり沈ませられた。

何事かと、ジェヴオーダンを見ると、真紅の毛を逆立たせ、王者の如く君臨する獣がいた。

ジャンは先ほどの衝撃で吹き飛ばされ、彼も地面に転がっていた。魔獣の咆哮がエリオス達を威嚇するように空気の壁となって叩きつけられる。

変化はそれだけではなかった。

ジエヴォーダンからは光の粒子が発し、狼の形を形成し、エリオス達にその牙を剥く。

光の狼が触れると、ジャンの鎧が弾け飛んだ。そこを次の狼が襲いかかり、咄嗟に腕を翳し、難を逃れようとしたが、腕がジャンから千切れ飛んだ。

「があー!!」

体力を消耗していたところに、腕が千切れ飛ぶという激痛が加わり、ジャンは意識が途絶えた。

エリオスにも光の狼は襲いかかったが、かろうじて避ける事ができ、その狼は地面にぶつかった。

ぶつかった地面が弾け飛んだことから、エリオスはこれが衝撃のエイドスだと悟った。

もつとも、彼の知るそれとは威力も形も異なるが、弾け飛んだ地面の衝撃に押され、エリオスは体勢を整えようとしたが、そこにジエヴォーダンが体当たりしたことで、彼の体は吹き飛ばされてしまった。

肋骨が折れた事をエリオスは悟るが、彼としては気にする暇もなかった。

追撃せんと、ジエヴォーダンが迫ってくるからだ。

ここまでか、とエリオスは諦めたが、ジエヴォーダンに肉薄した存在が彼の命を長らえさせた。

「させない!!」

アタルは敬愛する師匠を守るべく、その身を割り込ませたが、ジエヴォーダンは虫でも払う気安さでアタルを軽く撃退した。

それはアープも、レイアも同じだった。

光の狼が彼らに襲いかかり、彼らは呆気なく地面に横たわる事に

なつた。

一步、一步、死神が歩いてくる音がする。  
師に、仲間に、迫りくる死神を誰か退けてくれと思った。

誰か助けてくれ！

彼の願いが聞き届けられたのかは定かではない。  
確かなのは、魔性の獣がその歩みを止めていることだ。  
何事だと、彼は獣の見遣る先を見た。

そこには、青き血で染まった別の死神がいた。

セレナは刀身に付着した血糊を振り払う。

もう、この平野に残る穢魔は厭魔一匹だけ。

フラウを庇いながら、マーテルとエリオスの元へ向かう。

マーテルはエリオスを回復すべく、彼の傍にいたが、アタル達が  
撃退された事により、呆けていた。

「マーテル、彼らの回復を」

「はい！」

セレナが声をかけると、自分の役割を思い出したのか、治癒のデ  
ユナミスを発動させた。

フラウも別の者に対し、治癒のデユナミスを掛けていたが、セレ  
ナは何もしない。

いや、フラウを危険から守るべく動くのが、彼女だ。

彼女はジェヴォーダンからフラウを守るべく、威嚇していたが、



その必要はなさそうだ。

シヴァがその破壊を具現化した剣に獣も彼の剣の葬列に加えるべく、対峙している。

加勢はしない。邪魔になるからというのもあるが、シヴァがフラウを気にせず戦えるようにするのが彼女の役目だ。

もしかすると、他にも戦力が加わるかもしれないし、人間がフラウに危害を加えるかもしれない。

だから、彼女はフラウの元から離れない。それが彼女の存在意義だからだ。

冷酷ではあるが、自分達はこの役目に納得している。

シヴァもセレナになら、安心してフラウを任せられると思っている。

シヴァとジェヴォーダンがその刃を交えた。

アタルは傷ついた身体で、シヴァとジェヴォーダンの戦いを眼に焼き付けていた。

羨ましい　自分は足止めする事も叶わず、すぐにやられてしまったのに。

彼の心に羨望と嫉妬が芽生える。

どうしてなのだ？

彼ほどの力があれば、僕は僕が理想とする『英雄』に『勇者』になれる筈なのに

仲間を信じ、助け合い、人々を守る事が出来るのに、彼はその真逆を体現している。

悔しい　力のない自分が。無様に地面に這いつくばる事しかできない自分が。

レイアもアタルと同じことを思っていた。

彼ほどの力があれば、きっと世界を正すことができるのに、彼はその力を殺戮のためにしか使わない。

自分ならば、きっと 正しい事にしか使わない。

殺戮のためではなく、人を生かすために使うのに、彼は人を殺すためにしか使わない。

認められなかった。

自分が理想とする『勇者』がそんな姿をしているなんて。

自分が目指すべき『勇者』がそんな行動を取るなんて。

二人は奇しくも同じことを考えていた。

アープの心に一滴の闇の雫が垂れた。

やはり、駄目なのか？

『勇者』でも『英雄』の子でもない『平民』の子では『英雄』にはなれないのであろうか？

彼は飄々としていて、口には出さないが、実は自分も『英雄』になりたかった。

実力もない自分がそのような事を口に出しても、笑われるだけだ。ならば、小さい事を言っただけで自分を慰めて何が悪い。

どんなにでかい事を言っても実現できないのであれば、無意味だ。だけど……強くなりてえ。

『英雄』だと、こんな自分でも『英雄』になれるのだと吹聴した

い。  
彼はそう思った。

マーテルは嫉妬していた。

だが、そんな自分を神の使徒として恥じていた。

彼女が見遣る先には『聖女』。

彼女は自分が必死になって、一人治療をしていくうちに、二人、三人とその数を増やしていく。

悔しかった。自分の専売特許を奪われたようで。

同じ守られる存在なのに彼女は違う。

彼女は目撃していた。

フラウとセレナに穢魔が迫った時、セレナがその大半を切り捨てたが、彼女に穢魔が迫ろうとした時、強大なデュナミスで穢魔を滅殺した事を。

彼女は戦えないのではない。戦わないのだと悟った。

自分は戦えないのに、彼女は戦える。

しかも、治癒系や補助系のデュナミスでも一歩も二歩も先を進んでいる。

悔しかった。これほどの差がつけられていることが。

シスターとして生きるのであれば、『聖女』は羨望の的だった。

実際、彼女はフラウを羨望している。

だが、彼女に芽生えているのは、嫉妬だった。

彼女は自分よりも遥かに全てが上だった。

羨ましかった。憎かった。

相反する心を宗教心で封じこめ、治療に集中した。

光の狼がシヴァを喰らわんとその顎を開くが、一度もその牙がシヴァに届く事はなかった。

シヴァが纏う風の鎧が光の狼を吹き飛ばす。

狼の形を取っているとはいえ、エイドスである事に変わりはなく、シヴァにとってみれば気にする様なまでの事ではなかった。

彼の身体は一定以上の攻撃力を持つエイドスでなくては通ることはない。

とはいえ、これほど強力なエイドスならば、当たった衝撃までは殺すことはできないので、風の鎧で光の狼を吹き飛ばしているのだ。その、光の狼を発しているジェヴォーダンは今までとは打って変わって直接的な攻撃を避けていた。

彼は獣の本能で理解している。もし、接近してしまえば、自分の命は尽きるであろうと。

だから逃げ回り、必殺の機会を窺っていた。

ジェヴォーダンの瞬間的な早さと同程度のスピードを出すことはできるが、持続性はジェヴォーダンの方が上だった。

ジェヴォーダンは一定の距離を保ち、シヴァが近づこうとすると、それを察知し、身を翻す。

だから、ジェヴォーダンを倒すには、遠距離から攻撃して当てるか、動きを止めるしかない。

遠距離からの攻撃は今のところ上手くいってはいない。距離が開けているので、ジェヴォーダンが攻撃が到達する前に避けてしまうのだ。

大規模な攻撃をしたいのだが、今は些か消耗していることと、器の関係から避けたかった。

だからシヴァは動きを止めることにした。

したのだが、思わぬ事が起きた。

「全軍、奴を仕留める！」

穢魔を全て仕留め終わったことから、遊軍となっていた者達が義憤のためか、武功のためかはしらぬが、次々と襲いかかっている。ジェヴォーダンは突如とした現れた乱入者達を慌てることなく、撃退している。

光の狼が兵士達に次々と襲いかかる。

兵士達はその数を利用して、光の狼をその身に喰らいながらも、前に進んでいる。

ジェヴォーダンとしては彼らを撃退することなど容易い事だが、余りの数の多さに意識をシヴァから逸らしてしまった。

それがジェヴォーダンの敗因となった。

「ヴァジュラ《雷霆の矢》」

凝縮された雷霆の槍が主に命じられた敵を討ち滅ぼさんと、雷速で宙を駆け抜け、ジェヴォーダンの体躯を貫き、蛇の如くその身を這いずり回る。

ジェヴォーダンの息は既に絶え絶えとしており、最早生きているのが不思議なほどだった。

ジャンは片腕となりながらも、額に脂汗を掻きながらも、今度こそジェヴォーダンを断ち切るべくバルディッシュの柄を力強く握りしめた。

「オオオオオオオー！！！」

裂帛の気迫と共に、放たれた断頭の刃は今度こそ寸分違わずにジ

エヴォーダンの首を断ちきった。

ここにフレイス王国を苦しめていた一角は崩れ落ちたのだ。

彼らの戦いを遠くから眺めていた者がいた。

「ほう……あれが此度の贄か……哀れだな」

そう呟いた影は風と共に去っていった。

## 最終楽章 頂に立つ者、頂を目指す者

月が祝福するように、戦い抜いた兵士達を照らしている。

自分の武功を誇る者、友の死を嘆く者、生きれた事に感謝する者、祖国が一部とはいえ解放された事に喜びを得る者など、皆様々な感情の中、勝利の宴を開いていた。

「感謝する。そなた達のおかげで、コロニーを攻略する事が出来た。それに、命も助けてもらった」

ジャンはエリオスと杯を酌み交わしながら、今日の戦争を振り返り、自分達だけでは到底攻略できなかったと実感している。

彼は無くなってしまった左腕を意識する。利き腕でなかったことは幸いだと思っっているし、腕も綺麗なまま残っていたので、高位のデユナミスを使えば元通りにすることはできた。

だが、彼はそうしなかった。これは戒めなのだ。自分の力不足を象徴する。

これは祝福なのだ。コロニーを攻略し、祖国を解放した証なのだ。まだコロニーは一つ残っているし、これから自分は今まで以上に苦勞するだろう。

しかし、それも悪くないと思ったのだ。

腕一本で誇りを保つ事が出来るのであれば、安いものだと思った。

「いや、結局のところ最後には役立たずだったし、穢魔を殺した数も微々たるものだ」

一般兵よりは穢魔を殺した数は勝っているが、厭魔との闘いで自分は最後は成す術もなかった。未だ、力不足だとエリオスは実感し

ているのだ。

「謙遜なさるな。確かに穢魔を殺した数は微々たるものかもしれないが、それは我々も同じだ。その微々たるものが積もって穢魔を全て討伐できたのだ。それは誇るべきことだ。

それに、厭魔との闘いで役立たずだったのは私も同じだ。今は少し慰め合おうか」

「……そうだな」

お互い注いでくれる酒を呷りながら、エリオスとジャンは暫し無言で宴を楽しむ兵士達を眺めた。

アタルは酔っている兵士達に揉みくちやにされている。

アーブは酔っているのか、兵士達を囲って自分の英雄譚を語っている。

レイアとマールテルは女性兵士達と楽しくお喋りをしている。

穢魔との闘いで恐怖を覚えたに違いない。

戦友を失い、悲しみを覚え、嘆いたに違いない。

ただ今だけは勝利に酔いしれ、明日を夢見て楽しんでいる。遠い昔の事が思い出される。

彼も昔は尊敬していた人達とああして、過ごしたものだ。

エリオスは遠い過去に思いを馳せ、懐かしんだ。

「シヴァ達はどうしている？」

エリオスにはここにはいない人物達の行方を隣にいる戦友に訪ねた。



「『勇者』殿達ならば、コロニーの中にいる。何をしているかは知らぬが、王からも邪魔をするなどの通達が出征前にあった」

「何故だ？」

「私もそこまでは知らんよ。ただ、私達のより知らぬ何かがあるとは思っただが……」

エリオスもコロニーの中を見た。

そこには眩いばかりの魔晶石が数多く深部の一室にあった。

そういえば、昔旅をしていた時もこのようなことがあったと記憶している。

「彼らがここにいないのは気を遣っているかもしれないな」

「どっということだ？」

眉間に皺を寄せながら、語るジャンにエリオスは眉を顰めた。

「恥ずかしい事ではあるが、兵士の大半が『勇者』殿に畏怖を覚えているのだ。自分達が対処できなかった穢魔をあかも容易く大量に葬った『勇者』殿をな……」

「それは……」

エリオスとして彼の在り方に恐怖を覚えた事はある。

だが、彼がシヴァに対し、不変に接する事ができるのは、あの人達の子供であることと似たような力を傍で間近で見っていた事が大きい。

接点は何もない彼らが恐怖を覚えてしまつのも無理はないと思つたのだ。

次の言葉が形にならないでいたエリオスに、ジャンは次々と語つた。

「攻略前は、『勇者』殿の力を信じていなかったのだ。なまじ、コロニー攻略の困難さを知っているだけにな。だからこそ、最初は『勇者』殿を囮にして我らだけで攻略する気概だったのだ……微塵に砕けたがな」

「やはり、あの作戦はそういう意味だったのか」

「悪いとは思ってはいる。だが、覚悟もしていたらどう？」

「……まあな」

『勇者』と『聖女』に付いていくということはそういうこと。

『勇者』は誰よりも危険をその身に被らなければならぬ。それを以前の旅で学んでいた。

「これは弱音なのだが……今になって振り返ると、私達の方が必要なかったのではないかと思うよ。今後のためを思い、兵達を叱咤したのだが、結局は時間の差でしかなかったのではないかとね」

「それはこちらと同じだ。仲間の誰もが自分達の存在意義を疑っている」

「そうか……」

きつとこれは、これから直面する悩みだとエリオスは思う。

弟子達はどいつた選択をするのだろうか？

「それを含めて、もう一つのコロニーを攻略について考えねばなるまいな。このままでは軍としては良くない傾向になる」

「それがいいだろうな。こちらと同じ悩みを抱く事になるだろうしな」

「今後の事についてはこれまでにして、今はただ勝利を祝い、生を謳歌しようか」

「そうだな」

満天の星空の下、兵士達のざわめきをBGMとして、二人はもう一度杯を交わした。

シヴァ達はコロニー深部にある魔晶石が内部を埋め尽くしている一室に足を運んだ。

部屋の中央には柱があつて、その柱には眩い光を発する白い宝石があつた。

「これが『白の欠片』ですね」

「ああ。この地域は白の宝玉が管轄として配置されている。これはその一欠けらだ」

エンテレケイアによって示された知識には宝玉は五つあり、それぞれ一定地域を管轄している。

そして、その宝玉の欠片を集め、水晶門クリスタルゲートで欠片を一つにし、宝玉とするのが『勇者』としての役割を果たす上で重要な役割を示しているとのことだ。

「セレナ」

「何かしら？」

「俺はおそらく今晚動けない。護衛を頼んだぞ」

「わかったわ」

シヴァは『無極』を形成し、剣を宝石に触れさせると、宝石は溶ける様に剣に取り込まれていった。

「くー！」

シヴァは苦悶の表情を浮かべ、額からは脂汗が流れている。心なしか顔色も悪い。

「兄様！ 大丈夫ですか！」

「大、丈夫だ……これ、は取り込んだ、際に起こる、ことだから、気にしないで、いい」

フラウはシヴァを横たえ、デュナミスで包み込む。

「セレナ、頼んだわよ」

「任せて」

セレナは部屋から出て、彼女達の護衛を全うすべく、部屋から出た。

彼女の役割はこの間の護衛も役割に含まれている。

おそらくこれは一晩中続くだろう。

そう予測し、セレナは神経を張り巡らされた。

フラウはシヴァの衣服を脱がし、自分もまた全てを脱ぎ去った。未成熟ではあるが、成熟された時は如何ほどの輝きを放つのかわからない肢体が露わになる。

同調するには衣服は邪魔だった。調整するには余計な隔てなど害悪以外の何物でもない。

今、シヴァに起こっている現象は器の拡張だ。

今までの『勇者』達が拒んできた苦痛をシヴァは『勇者』の真の役割を果たすために受け入れねばならない。

触れていない箇所が無いように、肌と肌を密着させる。

胸の鼓動が高鳴りを際限なく高めるが、今は構っていられない。

唇と唇を重ね、内的接触も兼ねる。

もっと、この人が欲しくなるが、今は調整が先だ。

大抵において、受け入れられる欠片は一つ、二つが限界とされており、過去の『勇者』もその例に漏れない。

だが、シヴァは『勇者』の真の役割を果たすために五つの宝玉全てを受け入れねばならない。

器の拡張は身体を丸ごと入れ替えるのと変わりがない。異物、病原体といっても変わりがない。身体はこの異物を拒絶するために、もしくは受け入れるために免疫を造っているのだ。

人の器では一、二欠片が限界なのは、この欠片が魔晶石よりも純度が高いヒュレーの塊なせいだ。純度が高すぎるヒュレーは人間にとって害悪にしかならない。身体の構成が崩れてしまってもおかしくないのだ。

だからこそ、フラウがいる。

彼女とシヴァの体質と、フラウの能力から器の拡張を際限なく行うことはできる。

彼女の持つ『聖女』の重要な役割がこれだった。

シヴァが苦痛のためかフラウを腰を折らんばかりに強く抱きしめる。

フラウは苦痛に顔を歪めるが、シヴァはこの程度ではないと耐える。

彼女は少し嬉しかった。シヴァと共に苦痛を共有するのが、シヴァに痛めつけられるのが。

シヴァは過去、彼女のために、彼女のせいで、多くの傷を負った。贖罪にはなりはしないが、それでもシヴァが罰を与えてくれるようで嬉しいのだ。

サティがいつのまにか、本来の姿となっていて、フラウと同様に衣服を一切身に付けておらず、フラウと同じようにシヴァに抱きついている。

二人は笑いあう。

同じ男を愛する喜びを、一つになる喜びを共有しているのだ。

自然と口元に笑みが浮かんでしまった。

三人が一つになっていた時間がどれだけだったかは三人が知る由もない。

ただ 朝日が疲れてしまって深く眠りに付いている三人に申し

訳なさそうに貌を出した。

フレイス王国首都に凱旋し、次のコロニー攻略までウォードの施設に待機していたシヴァにアタルとレイアは宣言した。

「僕は君が『勇者』だとは認めない」

「あたしもだ。お前が『勇者』だと認めるわけにはいかない」

シヴァとしては実に下らなかつた。

自分は『勇者』などと自称した覚えはないし、なる気もない。

役割は果たす気だが、それは世界のためではなく、自分のためだ。二人がいう『勇者』になど自分は目指す気はない。

「認める、認めないに意味はないと思うがな。……で？　認めなければなんだというんだ？」

二人は決意を固めた顔で『勇者』であるシヴァにこう告げた。

「僕が『勇者』になる！　僕は僕が理想とする『勇者』になってみせる！！」

「あたしもだ。『勇者』になってあんなが間違っているという事を証明してみせる！！」

馬鹿らしかった。二人は『勇者』というものを勘違いしている。

だが、これはこれで都合が良かった。

自分が目的を果たすために、二人に二人の理想とする『勇者』を押しつければいいのだから。

「面白い。ならば、『勇者』<sup>俺</sup>を否定<sup>破壊</sup>してみろ」

こうして、『勇者』達の創世の詠が序曲を終え、次の組曲へと奏で始めた。



## 第一章 錯綜する思惑

シヴァとセレナは例の如く、二人で稽古をしていた。

観客はフラウとサティの二人のみ。フラウは昼食を用意して、二人の稽古が終わる時を待った。

剣閃が舞い、火花が散る様は暴力的ではあったが、剣を振るう二人の力量もあってかどこか芸術的なものがあつた。

シヴァは単独で戦い抜き、生命を刈ることに特化した殺戮の剣。

セレナは護衛を前提とした、守護の殺戮の剣。

異なるようで、似通っている二人の剣筋は何処までも澄み渡っており、何処か聖者の様な悟りの境地に至った者の剣だった。

稽古を終え、例の如くフラウに世話をして貰いながら、美味しそうに食事を取るシヴァは実は味はあまり分かっていなかった。正確に言うならば、フラウ達の作ったもの以外は味覚はあまり感じないのだ。

というのも、彼は旅の途中での毒殺などを防ぐために、幼少の頃から一日三食欠かさず、致死量ギリギリの毒が入った食事を取っていたのだ。

そのせいか、毒には免疫がついたものの、普段摂る食事には味覚を感じることはあまりなかった。

フラウ達を作ったと分かる食事ならば、味も分かることから精神的なものかもしれない。

それは、セレナも同じことだったが。

「兄様、お味はどうですか？」

「美味しいんじゃないか？」

「もう！　なんで疑問形なんですか！」

「比較対象がフラウのだけだからな。俺としてはこれ以上答えようがない」

フラウとしては複雑なものがあつた。自分の味以外を知らない事は独占しているようで嬉しくもあつたが、それに至つた経緯を知っているとなると悲しくなるのだ。

彼女はそのような訓練はシヴァほど受けてはいない。どちらかが無事ならば彼女達は無事なのだ。だから、一方だけにこの訓練は施された。もっとも、これも彼らを縛る鎖となつた事は言うまでもないが……。

「ならば、また食べ歩きをしようではないか！　シヴァもいつかは味覚が戻るかもしれんし」

涎を垂らしそうなサティに三人は苦笑を禁じ得なかつたが、反対することはなかつた。

「褒賞として、金銭はいくらか貰っているけど、無駄遣いはどうかと思つわよ」

「仕方がないではないか！　我らはこここのところ観光以外にすることがなくて暇なのだから」

そうなのだ。ここ一月ばかり、シヴァ達は暇を持て余している。

シヴァ達は未だにフレイス王国に滞在している。

というのも、コロニーの攻略が困難だというわけではない。

規模の方は西方のコロニーの方が上なのだ。攻略度からすれば、南方の方が遥かに楽だった。

それなのに、攻略が進まないのは単にフレイス軍にある。

フレイス軍は西方の攻略において、壊滅とはいかなくても、ジェヴォーダンのせいで相当の被害を被った。

それ自体は、元より無傷では済まないと思っていたので、再編成も然程滞りなく進んだ。

問題となっているのは、フレイス軍の士気だ。

『勇者』のおかげで、西方のコロニーは攻略できたものの、厭戦の雰囲気は兵の中で漂っており、南方は全て『勇者』に任せようと兵士達は思ってしまったのだ。

それは、西方の攻略に参加した兵達に多い傾向があり、その兵士達のまた聞きで首都で待機していた兵士たちにも蔓延してきているのだ。

それに頭を痛めた軍上層部は、暫くの間シヴァ達の参戦を封じ、南方は自分達だけで穢魔を間引きするから厭魔だけは退治してきてほしいと頼んだのだ。

シヴァ達としてはフレイス軍の思惑などどうでもよかったが、下手に逆らうのは面倒を呼び寄せる事になりかねないので、こうして一月ばかり首都に缶詰めになっている。

ちなみに、アタル達は参戦を許可されており、間引き作戦に参加させてもらっているのだ。

「俺としてはさっさと攻略して、次の国へと向かいたいのだがな」

「偶にはよいではないか！ こうして時間が空いたのだ。我らにかまうがよい！」

「そうですね、兄様。私はもっと兄様に甘えたいのですから」

「私としてもこういった時間は貴重だからね」

シヴァには趣味などない。空いた時間は訓練か、休息にあてる。というか、それしか知らないのだ。

だから、三人はこうしてシヴァを振り回している。

「さあ、覚悟するがよい！ まだまだこれからだぞ！」

シヴァの振り回される時間はまだまだ続く。

「フレイムランス  
《炎槍》」

形を成したアタルの炎槍は駆竜種を焼き貫く。

駆竜種が消えていくのを確認すると、次の敵を見定める。

鳥獣種はアーブの矢に撃ち抜かれ、墜落している。

「彼の者に無双なる力を《パワーブースト豪力強壯》」

「よし！ 集い、溶解し、形を成せ！ 《錬金の理》<sup>アルケミー</sup>」  
マーテルに強化してもらった腕力で、デユナミスで出した鉄のハンマーを振り回し、屍骨種を纏めて粉碎している。

レイアは錬金のエイドスに適性があつたらしく、それを使って攻撃手段を増やしている。

錬金といっても、永続的なものではない。術者の手元から離れてしまえば、すぐに霧散してしまうので、一時的な錬金だ。

故に、錬金のエイドスを操るものは武器の扱いに長けている方がよい。ああやって、鉄のハンマーを出したり、他の武器を出したりできるので、武器の形状変化による攻撃がメインとなっている。

とはいえ、本当に金属でできている訳ではない。あくまでエイドスが金属の形を取っているだけなので、アタルの炎とぶつかれば武器が小さくなるか、消滅してしまう。

水棲種が向かってきているので、アタルはそれを迎撃することにした。

水棲種はゲル状の人型の様なものをしており、物理攻撃はあまり効果がない。

故に、エイドスで攻撃するのが一般だ。  
下手に接近して攻撃すると、あの中に取り込まれてしまい、溶かされてしまうからだ。

大きめの炎弾を出し、水棲種を消滅させる。  
辺りを見渡すと、もう穢魔はいないようだ。

「大丈夫ですか？」

「ああ……ありがとう、助かったよ」

窮地に陥っていた兵士達を助けて回っている。

今回の攻略の趣旨はわかっているので、あまりでしゃばらないようにしている。

「ふう」

かれこれ、一月ばかりこのような事をしている。

自分は前に進んでいるのか、不安になる事がある。

シヴァにああ宣言したものの、どうすれば『勇者』になれるかわからない。

だから、今は少しでもいいから力をつけている。

幸い、力をつけるには今の状況は悪くない。

しかも、兵士達を助ける事が僕達に課せられた任務の一つになっているので、助けているという実感がある。

だけど、彼に追い付くにはまだ足りない。

(どうすればいいか、先生に相談しようかな？)

今後の指針を定め、アタルは兵士達を助けるべく、移動を開始した。

エリオスは他の兵士達と共に、厭魔が出てこないかを監視する斥候の任務に付いていた。

この厭魔は西方のコロニーと同種らしいので、対策は練る事が出来るが、実行するには厳しいという意見が出ている。

通常、厭魔は一定数の穢魔が減り、尚且つコロニーに人間が一定距離まで近づかないと出てこない。

とはいえ、出てきてしまえば自分達には対処ができないので、こうして監視をし、厭魔が出てくれば、すぐに退陣できるよう知らせるのが、エリオス達の役目だ。

エリオスは弟子達についてはあまり心配していない。

このところ、実力をつけてきており、この穢魔程度では後れを取ることはないと判断しているからだ。

だが、別の所で心配している。

アタルからシヴァとあった出来事について聞いている。やはりかと思っただが、これも弟子達の成長に繋がるので、口を挿むことはしていない。

だから、そのことで心配しているのではない。

意識しすぎて、無茶をしないかと心配しているのだ。身近にその目標がいれば、どうしてもその目標と自分を比べてしまい、無茶を行う可能性が出てくる。

出来れば、そうなる前には相談してきてほしいと思う。

(さて、あいつらはこれからどういう選択をするか……)

彼らのいう『勇者』になることは難しくはある。

だが、エリオスに彼らを止める意思はない。それは、彼らが考える事だからだ。

「エリオス殿、交代の時間です」

「ああ、わかった」

どうやら見張りの交代の時間のようなので、拠点に戻り、一休みする事にしよう。

そして、あいつらの戦闘はどうだったのかを確かめよう。

エリオスは少し固まった筋肉を解しながら、拠点に戻った。

夜の帳が降り、明日への活力を得るために拠点で身体を休め、夕食を取っていた時、アタルはエリオス達に相談事を話すべく、食事の手を止めた。

「先生、僕達の手で厭魔を倒すことはできないのでしょうか？」

それはアタルが気にしていた事柄。アタルは『勇者』になるためには力が必要だと思っている。その力をつけたという目印が厭魔の討伐だと目をつけたのだ。

「……実際、厳しいと言わざるを得んな。今回は前回と違い、敵の能力は判明しているため、対策は立てやすい。

だが、問題としているのは奴の第二段階に達した時に俺達が対抗できるかということだ」

エリオスが言っているのは、ジェヴォーダンの光の狼の事だ。彼らはジェヴォーダンが光の狼を出すまでは善戦していた。

しかし、光の狼を出されてからは一方的だった。

「それに、奴自身のスピードに俺達が追いつけるかだ。さらに、奴の動きを何とかしたとしても、奴自身の防御力を越えられる攻撃力が必要となる」

前回止めを刺したのはジャンだが、彼は防御力を無視し、攻撃だけに力を一点させていたからこそ、首を刎ね飛ばす事が出来たとエリオスは思っている。



「つまり、必要なのは三点。光の狼を何とかすること、動きを止めること、そして攻撃力、以上の三点が必要という事ですか？」

アーブはエリオスの言葉を要約し、ジエヴオーダンを倒すために必要なものを挙げる。

「ああ、その通りだ」

「皆の力を合わせれば何とかなるのではないですか？」

「そうだな。あたしもそう思う」

マーテルの言葉にレイアは賛同するが、エリオスは首肯しなかった。

「あくまで、それは上手くいった場合だ」

「でも、先生！ やってみなくっては分からないと思います！」

「……………」

エリオスはその言葉に賛成はしていない。『やってみなくては分からない』というのは、愚者の言葉である。戦う場合、勝利への布石のために、情報を集め、お互いの戦力を分析し、勝率が低ければ戦わないのも立派な選択でもある。

この場合、エリオスの見立てでは勝率は低いと思う。だから、反対すべきだろう。

だが、エリオスは反対しなかった。弟子達の成長に必要な事だとも思ったからだ。とはいえ、保険を打つ必要があるとも考えている。

「……わかった。ただし、もしもの時のためにシヴァに待機して貰う。倒せるのはシヴァが一番可能性が高いからな」

「わかりました」

アタルは若干不服ではあったが、エリオスの言うことも尤もだったので、反対はしなかった。

その後、アタル達はジエヴオーダンを倒すべく対策を練った。

「ようやく、俺達の出番らしい」

渡された通達書を三人に渡す。

この一月の間、フラウ達と有意義な時間を過ごしたのだが、シヴァにとってはあまり肌に合わなかった。

というよりも、殺戮の日々こそが彼の日常なのだ。

人間としては当たり前前に得られる、常識、倫理、道徳、愛情、陽だまりの様な日常、人として社会に適合するために必要な知識、行為など与えられることはなかった。

彼に与えられたのは『勇者』として必要になる知識、及び武力だけ。

フラウ達もその事を十分に承知しており、なおかつ『勇者』の役割を果たさなくはいけないため、本来ならばシヴァにこういったことは与えるべきではないとも考えているが、せめて愛情だけは与えたかったのだ。それが、彼を縛る鎖を強固にすると分かっていたとしても。

「長かったけど、それは仕方がない事ね。それより、これは何かしら？」

通達書に書かれていたのは、コロニーへの招致だけではない。コロニーに着いた際の行動の命令も通達されていた。

「こちらが指示するまでは穢魔、及び厭魔に手を出すな、ですか……何をしたいのですかね？」

フラウとしてはこの指示は理解できなかった。これでは徒に被害が拡大するだけではないかと思っただのだ。

「噂によると、軍の士気の低下が問題視されているようね。『勇者』に頼る声が多いとか」

一月の間、観光していただけではない。こまめに、情報は仕入れていたのだ。

その噂によると、西方の攻略に携わった者は厭戦気味だという。そこから、セレナは士気の上昇のために、自分達だけで攻略するのではないかと推測を立てたのだ。

「今さらだな」

シヴァの声に三人は同意する。

元々、世界が『勇者』に頼るのは決定事項なのだ。

問題が出たから、『勇者』に頼らないというのはある意味都合が良すぎだろうと四人は思うのだが……。

「まあ……これでどれくらい被害が拡大しようが、俺には関係ない。精々楽をさせてもらおう」

シヴァとしては欠片が手に入ればそれでいいのだ。

被害が拡大し、それでこの国の軍に致命傷ができようとも、一切

興味はない。コロニーを攻略してしまえば、この国に用はない。さつさと別の国に行くだけだ。

目下のところ、緊急を有する国はない。ならば、シヴァ達的意思で行動は決められる。シヴァ達が次に行くのと定めているのは、ローマーナ王国。

ローマーナ王国はフレイス王国の南に位置している国で、南方のコロニーを攻略した後に行ける場所としては最も近い。だから、シヴァ達はここを次の目的地として定めていた。

「それもそうね」

セレナ達から反対意見はあがらず、フレイス軍の指示に従う事に彼女達としてもシヴァと同じように異論はなかった。

招致させられたものの急がなければならぬ訳でもないのに、シヴァ達は周囲の景色を楽しみながら拠点となっている場所へと向かった。

一歩踏みしめるごとに大地の力強さを豊穡なる大地を感じ取れるが、シヴァにとってはある意味、虚構にすぎないものであるので、移動するための足場程度にしか認識していなかった。

「こうして四人で旅をするのも久しぶりだな」

サティは宙を駆け巡りながら、フレイス王国に辿りつくまでに過ごした日々を思い返す。

「そうね。私としてもこれが一番気を遣わなくていいから楽なんだけどね」

この四人で過ごした日々はそれなりに長い。といっても、シヴァは数年前まで三人の輪に加わることは滅多になかったが……。

「そういえば、あの人達はどうしているのでしょうか？」

「穢魔の間引きでしょう」

「それはそうですが……」

セレナとしてはあの五人に対し、特に思うことはない。護衛の邪魔にならなければそれでよく、厄介事を運んでこなればなおよい。その程度の認識でしかなかった。

「そういえばシヴァは、アタルとレイアに『勇者』であることを否定され、自分達が『勇者』になると宣言されたのであったな」

姿は見えなかったが、その場にはサティもそこにいた。二人は繋がっているようで、距離が離れていようと、その気になれば互いの感覚を共有することは可能だ。

「そういえば、そうだったな」

シヴァとしても、どうでもいい出来事だったので、つい忘れていた。

「兄様、何と答えたんですか？」

「『勇者』になれるものならなってみると言った」

「それはまた……」

セレナは苦笑する。アタルとレイアは『勇者』というものを勘違いしているらしい。セレナとしてもアタル達が目指す『勇者』というものがどんなものかは理解している。

だからこそ、滑稽だった。目指す頂というものがどんなものか理解していないらしい。

どちらの『勇者』の真実を知ろうとも彼らは苦悩するだろうが、知った事ではなかった。彼らには是非彼らの理想とする『勇者』を目指してほしいと思った。世界のために。

「何を勘違いしているのでしょうかね？」

「光に群がるのは人間の習性だろう？ 光を追及するという意味を知らず、光というものがどれほど醜悪なものかを見ようともしない者達がどうなるうと知った事ではない」

「それもそうですね」

シヴァの言葉の真意はここにいる誰もが知っている。

太陽<sup>光</sup>を目指すイカロスの翼を持つ二人がどうなるかはシヴァ達にも予測できないが、精々自分達の所業を覆い隠す光となって欲しいとシヴァ達は思った。

シヴァ達としては、『勇者』の役割を果たせればそれでいいのだ。二人が二人の目指す理想の『勇者』になろうとなるまいと興味はない。

その後の事を思えば、なつてほしいとも思うが、選ぶのは彼らなので結局のところ、人の選択は人に任せるべきだと思っている。

「来たぞ」

親しい気配が訪れてくるのが分かる。

ならば、歓迎せねばなるまい。

「私が対処するわね。腕が鈍るといけないから」

「わかった」

セレナは護衛交代の意思を告げると、シヴァは了承した。

二人のどちらが、穢魔を殺してもかまわないと思っっている。

コロニーの攻略はシヴァが担当となっっているが、それ以外に関しては二人はどちらでも構わないと思っっている。

二人は光と影のような存在。

もしもの時には役目を変えられるように、セレナはシヴァと同じような訓練を積みまされてきた。

だから、セレナにとっては穢魔の群れと戦う事に抵抗はない。

セレナの視線の向こうには、駆竜種が四、鳥獣種が二、屍骨種が三、豪獣種が一と群れをなし、セレナに襲いかかる。

セレナは風の刃をいくつも出し、鳥獣種を切り刻もうと宙を切り裂かせる。

鳥獣種とて、風を掴む翼をもっていることから、風の系統には強いが、避けられないように巧みに風の刃をずらすことで、逃げ道を塞ぎ、加速された鎌鼬が微塵に鳥獣種を切り刻む。

駆竜種が大地を駆け抜けてセレナに襲いかかるが、オーラを纏ったセレナのスピードに追い付かず、一匹、また一匹とその命を断たれていく。

屍骨種が四本の槍、計十二本の槍でセレナを穿こうとするが、その槍はセレナの残像を貫き、セレナの膨れ上がった光の刀身が屍骨

種の身体を粉々に砕く。

豪獣種が豪腕で大地を陥没させても、セレナの影を踏むことさえ叶わず、加速された水の砲弾が豪獣種の胸部を穴をあけて貫いた。セレナはシヴァと同じく、不得意とするものはない。どれも一定以上の効果を発揮させることはできるが、彼女の得意な系統は加速自身やエイドスを加速させ、神速で短期決戦で終わらせるのが護衛として彼女に求められた資質だった。

「私を抜かせたりはしない」

剣を鞘におさめ、シヴァ達の元に戻る。

「では、次は私が行きます」

十を超える群れがフラウ達の向き先を阻む。

だが、この程度の障害など障害にもなりえない。

フラウはシヴァが戦う時には戦わない。

それは、何も彼女が力を有していないわけではない。

シヴァ達にも劣らない、いや同等程度の実力は有している。

なのに戦わないのは、単にシヴァの邪魔になりたくないからだ。

訳あって、彼女達は繋がっている。

それ故に、コロニーの攻略際のように長期戦、消耗戦が前提となっている場合、彼女が力を使うのは、今現在において、シヴァの首を絞める事になりかねない。

だからこそ、戦わない。

本来ならば、シヴァに群がる者達を一掃したいにもかかわらず。

だが、今はその時ではない。



だから今はシヴァの手を煩わせずに済むことで、彼女の力は今までたまった鬱屈を穢魔に向ける事が出来る。

「潰れなさい」

風と重力の圧縮が十を超える穢魔の群れを一匹たりとも逃さず、その体躯を地面に押し潰した。

彼女は魔導師。この程度のデユナミスを操ることなど造作もない。

「兄様を傷つけることなど赦しはしない」

一歩も動かず、彼女は穢魔を殲滅した。

「となれば、我のターンだな！」

彼女は小さな体躯を宙に駆け巡らせながら、謳うように宣言した。

彼女が戦闘に立つことなどあまりない。

彼女は守護聖霊。

守護聖霊の役目は具象化された武器の制御。

なので、武器を具象化されてしまえば姿を現すことはできるが、制御に力のほとんどが割かれてしまうため、戦闘能力はほとんどないに等しい。

だが、それ以外では、守護聖霊の役目である術者の守護という役目を果たせる。

宙を駆け、穢魔の群れの中心に立つようにその矮躯を配置する。

「頂きます」

闇の顎がサティから発生し、穢魔を呑み込んでいく。  
彼女の特性は吸収。

シヴァの役に立ちたいという渴望から生まれた制限なき底なしの闇。

穢魔を吸収していき、ヒュレーに変えていく。

漆黒の闇が消えた時、サティの周りに存在する者などいなかった。

「御馳走様」

彼女が吸収したヒュレーはシヴァに取り込まれる。

シヴァの役に立つ事を謳うように告げる声は弾んでいた。

シヴァ達の進軍を止められる穢魔は存在せず、四人は一切の足止めもなく拠点へと足を運んで行った。

彼らにとって、穢魔を刈ることは買い物に行く程度の認識でしかなかった。

「下がってください！」

「はい！」

今日もまた、救援をメインに据え、救出活動を行っているのだが、厭魔戦を意識して戦い方を少し変えている。

まず、アープが弓ではなく、本来の魔導師たるスタイルに変化している。

「ヘイルバレット《雷弾》！ アイスウォール《氷壁》！」

氷弾が降り注ぎ、相手の行く手を阻むように氷の壁が姿を現す。氷の壁の高さは一メートル、幅も一メートルもないが、数は五つ以上ある。

駆竜種は突如現れた氷の壁に怯むも、すぐに乗り越えたり、壊したりして障害を失くす。

「降り注げ鉄塊！ 《ステイルレイン鋼鉄の降雨》！」

直径十センチ程の鋼鉄の塊が駆竜種に降り注ぐ。

致命傷には程遠いが、痛みから動きが止まる。

そこを《クイツクムトブ疾風迅雷》を掛けてもらい、一時的な軽さから素早さを増したアタルが斬りかかる。

そこを豪獣種が腕力にものをいわせて襲いかかるが、

「彼の者を災厄から守りたまえ 《アイ災厄から守護する輝く盾》！」

鏡のように光輝く盾がアタルの前に出現し、豪獣種の豪腕からアタルを守る。

盾は碎け散るが、レイアが横から襲いかかり、加速させた鉄塊を豪獣種にぶつけ、よろめいたところを水槌が豪獣種の頭部を強打し、高熱を帯びた炎剣が豪獣種の命脈を絶った。

「ありがとうございます！」

「治療を」

救出して貰った兵士はアタル達に一礼し、治療を行っている幕舎に向かった。

アタル達が行っているのは厭魔、ジエヴオーダンを意識した戦い。アーブが広範囲を攻撃し、敵の動きを封じる。

レイアが範囲攻撃やスピードで敵を攪乱、陽動し、意識を向けさせる。

マーテルがレイアとアタルのサポート、及び防御。

アタルが渾身の一撃で攻撃する。

それぞれの特性を生かしたコンビネーションで敵を倒す作戦だ。

問題となる光の狼だが、威力は強力だが、これは接触するものを選ばず破裂する傾向だったことから、数を活かすデユナミスで防ぐ作戦を立てている。

仲間達の力を活かす事ができれば、きっと勝てる信じ、アタルは次の救援へと向かった。

その日の夜、配給された食事に手をつけていたアタル達の元に、昼間彼らが救出していた兵士達が手に食事を持ってやってきた。

「自分達も一緒によろしいですか？」

「ええ、かまいませんよ」

兵士達も加わり、アタル達の輪はかなり広がった。

「まずはありがとうございます。おかげで助かりました」

「いえ……人として当然の真似をただけですよ」

兵士達が一様に感謝を告げる様を見て、アタル達は恐縮してしま

った。

照れが大分混じっていたが、アタル達としても当然の事をしただけなので、どこかこそばゆかった。

「それでもです。あの時は死を覚悟しましたから……」

兵士達はその時の光景を思い出したのか身震いしている。

「その……皆さんは穢魔と戦うことは怖くないんですか？」

兵士達の中の一人が西方にも南方にも攻略に参加しているアタル達に自分達が抱いている感情を吐露する。恐怖を紛らわせるためか、共感したいためかは定かではないが、明日も戦うために聞いておきたかったのだ。

「怖いですよ……でも、僕はだからといって憶したくはないんです。『勇者』になるにはこれくらいでへこたれるわけにはいきませんか」

「なるほど……凄いですね」

臆面もなく、自分の気持ちを吐露するアタル達に兵士達は尊敬の念を抱く。

彼らから勇気をもらい、明日も戦えるような気持を抱いていくのが分かる。

「さすがは『勇者』に同行する人達だ。『勇者』や『聖女』が穢魔なんか臆しないのは当然ですよね」

兵士の言葉にアタル達は涙面を浮かべそうになった。兵士が言っ

た言葉は自分達がかつて抱いていた感情だ。残酷なまでの押し付けを客観的に見た事によって自分達が行ってきた所業を垣間見た気がした。

「当然だろう。『勇者』なんだから、穢魔に立ち向かうのは当然だし、世界を救うのも当然だろう。凡人の俺達とはできが違うんだよ」

続く兵士達の言葉にアタル達は完全に凍りついた。顔が引きつくのが分かる。

シヴァ達の言葉が胸に蘇る。

「どうしました？」

「いえ……なんでもありませんよ」

その後は雑談をしながら、食事を取ったのだが、どこか食事の味がぼやけてしまい、食事を取った気はしなかった。

ジェヴォーダンも伏せていた身体を立ち上げた。

侵入者が彼女の領域に入ったのを感じ取ったからだ。

だが、唸りはしない。臨戦態勢にも入らない。

侵入者からは自分達と同じような臭いがした。同じ主を抱く同士の臭いがした。

「ジェヴォーダン！」

呼びかけに応え、ジェヴォーダンは侵入者の元へ近づく。

近寄ってきたジェヴォーダンの頭を撫でながら、ここに来た用事をジェヴォーダンに告げた。

ジエヴォーダンの尖った耳はぴくりとその声を聞き届けた。  
主からの命令がジエヴォーダンに告げられる。

ジエヴォーダンに否を唱える気など全くない。その身は主の命を  
果たすべく造られた身体。ならば、反対する理由など何処にもない。  
ジエヴォーダンは主の命令を叶えるべく行動に出た。

シヴァ達が拠点に着き、南方攻略は最終段階にはいった。

慌ただしく兵士達が準備する中、シヴァ達は暇を持て余していた。

「久しぶりだね」

シヴァがその声の所在を振り返ると、精悍な顔つきをしたアタル  
達が出た。

南方攻略に精を出した事が彼らに自信をつけたらしい。

「何の用だ？」

「実はお願いがあるんだ」

お願いという言葉にシヴァ達は眉一つ動かさずに、続く言葉を待  
った。

「今回厭魔を倒すのは僕達に任せてほしいんだ」

アタルの言葉にシヴァは間、髪もいれずに答えた。

「好きにしたらいい」

シヴァにとってみれば、誰が倒そうとも関係ない。欠片さえ手に入ればその過程など考慮するに値しなかった。

「ありがとう」

そう答えると、アタル達は打ち合わせに入るのか颯爽と去っていった。

「ライバル視されておるな」

からかうようなサティの言葉にシヴァは肩を竦めるだけだった。

シヴァ達は戦況を眺められる丘の上で南方に派遣された指揮官達と共に布陣を眺めていた。

ちなみにジャンは片腕のリハビリから、南方の攻略の参加を見送っている。

「では、攻略を開始せよ」

連絡専用の魔導器を手に、指揮官は攻略の狼煙をあげた。

今回の布陣は方陣。

厭魔の脅威を顧み、じつくりと攻略をフレイス軍は進める気だった。

「厭魔、未だ姿を見せません!」



斥候からの報告に安堵と苛立ちを指揮官は見せた。

厭魔の存在は戦況を傾ける。

故に今回は以前よりも細心の注意を払っているのだが、遠望の魔導器でコロニーを監視する斥候からは、未だ発見の報告はなかった。

「何故姿を見せないのでしょうか？」

「まだ、一定区域に近づいていないからかもしれぬ」

参謀の一人が疑問の声を挙げるも、誰も確かな返答を挙げる事が出来ずにいた。

厭魔の生態については未だ良く知られていない。

ただ、今までの攻略から、一定区域に近づくことと穢魔の数の減少が一定数に達すると出てくる傾向があることからこの二つを攻略の際の基準にしている面がある。

ゆつくりと水がこぼれ出す様に厭魔の数は減っていくも、一定区域に近づいても、穢魔の数が予定よりも減っているにもかかわらず、厭魔はその姿を見せない。

「いないのでしょうか？」

「そんな筈はない！　そろそろ現れる筈だ」

一向に姿を見せない厭魔に不安の糸がフレイス軍を絡みつくが、フレイス軍は糸を解くことはできず、ただ不安を抱えたまま攻略を進めていった。

その日、厭魔は姿を見せず、南方のコロニーの攻略は完遂された。

ここに、長年フレイス王国を苦しめていたコロニーは姿を消した。

## 第二章 水の都

シヴァ達はコロニー攻略後、予定通りロマーナ王国の首都に向かっていた。

ロマーナ王国は半島状の王国なので、時折潮風がシヴァ達の肌を掠める。

コロニー攻略の影響か、穢魔の数はこれまでよりは少なく、旅の進行の遅れも微々たるものだった。

「しかし、何で厭魔がいなかったんだらうな？」

アーブが疑問にしているのは、フレイス王国南部のコロニー攻略の際に、厭魔が現れなかった事だ。

本音を言えば、現れなかった事にホツとしているのが彼の心情だったのだが、現れるものと思っていたので肩すかしをくらった気分だったのだ。

「僕にもわからないよ……シヴァ君は何か知っているかい？」

「知っている訳ないだろう？ 俺よりも以前旅をしたエリオスに聞け」

エンテレケイアで現在厭魔の事について知っている事はアタル達と大差ない。あれが、欠片を守護するものだとは知っているが、それ以上の事は知らないのだ。もっと深い位階に至る事が出来れば、その限りではないだろうが、今はそれ以上の事は知らない。

だから、以前旅をしたというエリオスに聞くのが最善だと判断したのだ。

「先生は何故か知っていますか？」

エリオスはそう問われ、自身の記憶を探るが、少しだけ頭の片隅に引っかかったことがあるのでそれを話す。

「確かなことではないが、似たような事はあった」

「何があっただんですか!？」

レイアが身を乗り出してエリオスに詰め寄る。彼女としても気合が入っていただけに今回の事は気がかりだったのだ。

「本来、一つのコロニーに一体だけの筈の厭魔が二体現れたんだ。その二体を倒した後、その国のコロニーに行ったんだが、そこにはいなかったんだ」

「今回も同じでしょうか？」

エリオスは少し考え、頭を横に振る。

「分からない。その時は今回とは違い目撃例がなかったし、いる筈の厭魔がいないという事態にはなっていなかったんだ」

「そうですか……」

マーテルとしても自分の考えが正しいとは思っていなかったのだろ。さほどがっかりとした表情を見せず、呟いただけで口を閉ざした。

「引越した、っていうのはどうだ？」

アープは思いついたまま口にした。

「引越したって、なんで？」

「場所が気に入らなかったから？」

アープとしても思いついただけで、深く考えていなかったのだらう。レイアの突っ込みに返す返答は疑問形だった。

「本当に厭魔は何処に行ったんだらう？」

アタルは嘆息と共に己が疑問を愚痴る。自身が定めた目標が消えてしまったので、気落ちしているのだ。

「何処でもいいじゃないですか。現れたら倒せばいいだけですし」

「それもそうだな」

フラウの投げやりともいえる言葉にレイアは賛同し、この話題はこれで終わった。

ローマーナ王国の首都、ラローマはカナル・グランテ（大運河）が市街を二つに分けながら流れており、そこから派生している運河が数多くある。

そのため、市民達は市内の移動手段をゴンドラと呼ばれる小舟を多用しており、市民達や貨物の運搬を担っている。

そうした生活が人々の中心になっていることから『水の都』とロマーナ王国首都、ラローマは呼ばれている。

シヴァは首都に着き、旅の疲れを癒した翌日、ロマーナ王国から通達があり、ロマーナ宮殿に登城していたのだが、告げられた言葉に思わず眉を顰めてしまった。

「陛下、どういふことでしょうか？」

「どういふことも何も我が王国にはそなたらの力など必要ないのだ」

聞かされた言葉はコロニー攻略にシヴァ達は必要ないとのことだった。

それはそれで一向に構わないのだが、詳しい事情を求めてしまったのだ。

「我らの国にあるコロニーは南部にある一つだけ。我らが長年苦しめられてきたフレイス王国南部からの流出が無くなった今、我らだけでも十分だということだ」

続く言葉は傍に控えていた大臣から発せられた。

「その通りだ。折角来てもらって悪いのだが、我が軍の勇壮さを特にご覧いただこうか。『勇者』殿達はコロニー攻略まで、観光でもしているがよかるう」

場に嘲笑の雰囲気滲み出るがシヴァはそれに一切関わらなかった。

「わかりました。では、御用があれば御呼びください」

「呼びつけることなどないから、安心したまえ」

シヴァは礼節に則った礼を行い、その場から辞した。

シヴァがその旨を伝えると、一同は何とも言えない顔をした。

「観光してろって言われてもなあ……」

「ああ……」

アタル達はどうしたらいいかわからない態度を示したが、

「では、観光でもするとしましょうか」

「そうですね」

セレナとフラウはあっさりと受け入れた。

そんな二人の態度を見習ってか、二人に続く形で観光モードに誰もが入っていき、今までのこともあってか休息も兼ねて自由行動を取ることとなった。

「おお、やってる、やってる」

「すごい熱気だな」

アタルとアーブは自由行動をする際、何処に観光に行こうかと悩んでいた時、ここ首都ラローマで観光するとなったら、コロッセオ円形闘技場に行かないと損と言われたので、足を運ぶことになったのだ。

コロッセオでは騎士達の洗練された決闘や、闘技士と名ばかりの犯罪者達の血生臭い決闘、及び捕獲してきた穢魔との闘いが行われている。

それには当然、勝敗に関する賭博が公認で行われており、市民達が足を運ぶ一因となっている。

アーブも当然の如くそれを買っている。

熱狂の渦がコロッセオの中に渦巻く。

観客席を埋め尽くさんばかりの観客数と大気の壁が押し寄せてくるような喚声にアタルは酔いそうになる。

「でも、いいのかな？ 僕達が来てしまって」

「いいんじゃないか？ 先生も兵士達の決闘でも見て戦い方やデユナミスを学べ、って言っていた事だし」

観客席を行き交う売り子に、パンに具材を挟んだサンドウィッチとほぼ同義のロマーナ王国独特の呼び方のパニーノという軽食とビールを貰い、上機嫌でアタルにも勧める。

アーブのあまりの悪びれなさにアタルも気にするのも馬鹿らしく思い、彼と共にコロッセオを楽しむことにした。

観客の声援があがる。

どつやら開始の時刻らしい。

「はじまるぜ」



「ああ」

パニーノとビールを手にアタルも他の観客と同様、闘技場に注目した。

自由行動の際、シヴァはすぐさま訓練を行おうとしたのだが、フラウ達はそれを見咎め、市内観光に出かけることにした。

マーテル達もそれに付いていく事になり、珍しく七人での行動となったのだ。

彼らはどこにでもある喫茶店の屋外テーブルで少し遅めの昼食兼軽食を取っている。

だが、マーテルの姿は何処にも見れない。  
逸れたわけではない。

彼らの視界のすぐ先にあるロマーナ王国で有名なサン・ロランツオ聖堂を訪れている。

彼らはマーテルが戻ってくるまで軽く軽食を取る事にしたのだ。

エイコーンで広く布教されている宗教はどれも過去の偉人やそれ  
その概念的な神を崇めているが、マーテルが信仰している『太母<sup>マクナ・マ</sup>  
神教』は少し毛色が違う。

神である女神シュリーナを崇めている事には相違ないが、他の宗教とは違い、女神シュリーナは今現在実在している。

にもかかわらず、太母神教は信仰する者は少ない。

各地に必ずそれを崇める教会はあるのだが、信仰者は少ない。

太母神教は慈愛を説き、世界に対し真摯であろうとする事は教え

としては他とは大差ない。

だが、他とは決定的に違っているのは、デュナミス、特にエネルギーの抑制がその経典に記されている事だろう。

他には、女神シユリーナは実在しているが、救いも何も齎さない無能な神として人々の間では認識されている。

さらに、過去何人もの『勇者』や『聖女』が太母神教を邪教として謳ったことからひっそりとしか信仰されていない。

熱心に信仰するのは、実在する神故に他の宗教とは崇める対象がはっきりしているため、信仰の対象として相応しいと認識している者か、物好きか、アルゴーン亜人種程度のものである。

マーテルは実在している神故に、信仰を篤くしている。

というのも、彼女は元々内気な方なので、一人になる事が多く、家も宗教に熱心なほうなので、祈る日々が多いのだが、彼女が家で信仰されている宗教とは違い、太母神教を信仰するのは孤独な日々を、女神シユリーナが少しばかりの助言や愚痴を聞いてくれたからである。

今ではレイアという親友もでき、性格も変わっているとあまり言い難いが、肯定的に自己を見ており、それまで支えてくれた女神シユリーナに感謝の意味も込めて、信仰を捧げているのだ。

「兄様、あーん」

フラウはここロマーナ王国で名産品として有名な魚介類のパスタをシヴァをそのアメジストの様な瞳を輝かせてシヴァに食べさせている。

公衆の面前では、という気持ちもあるのだが、シヴァはフラウやサティに食べさせてもらっても味を感じるので、フラウはそれを免罪符にシヴァに恋人の様に食べさせるといふ行動をとっているのだ。

自覚ありで。

魚介類系も牛や豚などの家畜と同様、養殖がほとんどを占めるが、養殖の稚魚を大海に放流させ、それを漁獲するという手法も少ないながらも取られている。

ここ、ロマーナ王国は半島状の国で、海も近い。

なので、海産物が名産品として挙がっており、それを活かした風土料理がロマーナ王国に広まっているというわけだ。

魚介類やトマト、オリーブオイルを多用したパスタやピッツアが有名であり、サティも本来の姿に戻って、ロマーナ王国の料理を楽しんでいた。

セレナもカフェラッテを常人よりは機能しない舌であるものの、飲んで楽しんでいた。

レイアはその様を少々、呆れたように見ていた。彼女の手元にも、ピッツアとカプチーノがあり、郷土料理を楽しんでいた。

「先生はロマーナ王国に来た事があるんですか？」

レイアの質問にエリオスは読んでいたニュースペーパーから目を離し、話すための喉を潤すためかエスプレッソを飲む。

「いや、俺はないな。俺が同行したのはユナティア連合国だったから、こちらには来ていないんだ」

「そうなんですか……じゃあ他の人達からロマーナ王国について何か聞いていますか？」

エリオスは懐かしむように懐古に耽る。

フラウが今度はシヴァに食べさせてもらっていたが、彼らの両親も同じ事をしていた事を思い出す。

「話題にあがる事さえほとんどなかったからな。俺としてもあまり詳しくは知らないんだ。そうだな……例えば闘技場については賛否両論だったことやコロニーが美しかった事を聞いている」

「コロニーが美しい？」

レイアはそのことに頭を傾げた。

コロニーは外観的にはごつごつとした岩と変わらないのだ。

ロマーナ王国では違うのかと思った。

「外観の事ではない。外観は他と同じなのだが、深部が違うのだぞうだ」

「深部がですか？」

「ああ。俺は見えていないのだが、青く染まった部屋は幻想的で綺麗だったぞうだ」

「そうなんですか……」

攻略された際には見てみようと言った、先ほど気になった闘技場の事について尋ねた。

「闘技場が賛否両論とあったのは？」

「ああ、それは捕獲した穢魔を危険にもかわかわらず、何体も地下の牢に閉じ込めたり、騎士の洗練された決闘ならばともかく、闘技士

同士を戦わせたりして喜ぶ観客の気が知れないと憤った意見があったんだ」

「それはわかります」

「だけど、それが一大事業となつている事や兵士達の質を高めることにも繋がっていたので、結局は肯定的だったかな」

「なるほど」

そんな見方もあるのかと、レイアは感心する。

「アタル達が闘技場に行っているが、できればアーブには彼らの闘いを見てほしいな」

「何故ですか？」

「ローマーナ王国首都は『水の都』と呼ばれていることから、兵士達は水を利用したデュナミスに長けているんだ。水を得意とするアーブにはうってつけだろう？」

「なるほど。そうですね」

仲間であるアーブの弓と水のデュナミスを思い出す。確かに彼にとっては有意義ではあるう。

「でも、あいつは賭博に夢中になっていませんか？」

アーブの性格を思えば、そう思えてならなかった。

エリオスもそれを承知しているのか、否定の声はあがらず、苦笑

するだけだった。

「……アタルも付いてるし、多分大丈夫だろう」

「それもそうですね」

かの真面目な青年ならばきっとアープの分まで騎士達の闘いを観察するだろうと思った。

「すごく勉強になるな……」

アタルはリングで行われている決闘を見てそう思う。

炎と水と反対ではあるが、力の使い方は見習うべきところがあると思っっている。

水の強さは流動性と変化のしやすさにあると思う。

騎士の一人が水を高速で大量に飛ばす。

対戦相手の騎士は水の膜を広げ、それを防ぐ。

鞭状の水がその膜を呆気なく切り裂く。

その鞭をかわし、相手の騎士は氷の槍をいくつも飛ばし、破裂させる。

破碎し、その身を斬り裂こうとする氷の刃を氷の壁で受け止め、大量の水を相手の騎士にぶつける。

相手の騎士は氷の壁でそれを受け止めるが、その水は気体に変わり、水蒸気爆発を起こす。

氷の壁が壊れ、ダメージを負った騎士に先ほどのエイドスでヒュレーが切れかかっているだろう。オーラを纏い、その騎士に一気に呵成に斬りかかる。

相手の騎士はそれを受け身にまわりながらも反撃の機会を窺って

いるようだ。

「アーブはどう思う?」

アタルが友人の方を振り返ると、周りの観客同様に声援を送るアーブがいた。

「負けるんじゃないぞー!!」

顔を真っ赤にし、声を張り上げている。

どちらに賭けたかは知らないが、アーブは周りの者と同じように賭博を行っている。

賭博に夢中になっている親友に溜息をつく。

喚声と怒声が湧く。

リングを見ると劣勢を押し返すことができず、騎士は負けていた。

「ああー……!!」

負けた騎士に賭けていたのだろう。

悲痛な声を晒し、今にも泣きそうな顔をしていた。

「もう一回!!」

「こらこら! 無駄遣いはするなよ!」

「安心しろ! 勝って取り戻してやるから!」

そう言って、賭博のチケットを買えるところに向かった。

アタルは深く溜息をついた。

闘技場では賭博が一日に結構な頻度で行われている。

この賭博で身を滅ぼす者もいるとのことだ。  
アープがそうならないように見張るつもりだが、保険をかけた方がよさそうだ。

アタルはもう一度嘆息し、アープの後を追った。

「馬鹿か、おまえは」

闘技場での顛末を聞いたレイアの一言だった。

「うるへえ」

テーブルに突っ伏しているアープにはいつもの反論は出てこない。  
こころなしか、テーブルから水が滴り落ちる錯覚を起こす。  
闘技場で彼は賭博にことごとく負け、財産を散財したのだ。

「それに引き換え……」

アタルを見ると、彼の懐は膨らんでいる。

アタルはアープと違い、賭博に勝利し、アープの負け分を取り返したのだ。

「ちくしょう！ 何であいつばかり当たるんだよ！」

「それもそうですね。どうしたんですか？」

「アープの反対ばかりを選んだんだ」

マーテルの問いに答えられた返答にアープは顎が外れ、白い灰に



なった。

齎された答えにレイアは腹を抱えて爆笑する。

「ドンマイ！……クッ！」

「」

弟子の所業にエリオスは呆れるばかりだった。

「これに懲りたら節制することだな」

窘める声にアープは反応しなかった。  
なぜなら、彼は気絶していた。

「全くいい迷惑だったな」

ローマーナ王、ロムルスⅡローマーナⅡフェルディナンドは愚痴るが、  
ワインの芳醇な香りが彼の口腔内を支配すると、口を緩めた。つま  
みとして、サラミとチーズを用意してある。

「その通りですな。フレイス王国の尻拭いに我らは付き合わされ、  
今まで穢魔という異形の怪物の闊歩を許していたのですからな」

フレイス王国南部のコロニーの穢魔がローマーナ王国に流出し、彼  
らは北と南両挟みにあってしまい、苦汁を舐めさせられていたのだ。

「コロニーを墮とすことなど最早造作もない。しかも、我らは『勇  
者』の助けを乞うことなく果たすのだ。フレイス王国とは違っ」

「我らの軍ならば、きっと陛下の意向に沿う事が出来るでしょう」

「そして、人々は、世界は悟るのだ。我らがフレイス王国より優れていると……」

フレイス王国とロマーナ王国は実のところ、良好の仲とはいえない。寧ろ、険悪とも言ってもよい。

それには、二つの理由がある。

まず一つは、太陸続きのため、コロニ 建設前は幾度となく領土問題を起こした事。

過去、何度も戦争を行った経緯がある。

二つ目がコロニ 建設後の事だ。

フレイス王国南部にあるコロニーにいる穢魔が度々ロマーナ王国に侵攻してきたのだ。

これには表面は平静を保っていたが、内心では腸が煮えくりかえっていた。

だからこそ、示したかったのだ。

フレイス王国よりもロマーナ王国の方が優れていると。

その絶好の機会が訪れた。

フレイス王国は自国の問題を『勇者』に頼って解決した。

だが、ロマーナ王国が『勇者』に頼らず自国のコロニ を攻略したとしたら、どうだろう？

きっと、誰もがロマーナ王国の方が優れていると判断する筈だとロムルスは思った。

「準備にどれくらいかかる？」

「二週間もあれば……」

「そうか……」

ロマーナ王、ロムルスは確信している。

己の国の栄光がすぐそこまで来ていると。

精神を集中させ、自己の精神の内側に埋没する。

これは就寝前に行っている瞑想の様なものだ。

エンテレケイアに至った者はこの瞑想を行う事が自己の強化にも繋がる。

大地に奔るヒュレーの息吹が自分に吹き込まれるのを自覚する。

その感覚に逆らわず、自身のヒュレーと大地のヒュレーを溶け込ませる。

エネルギーとエンテレケイアの明確な違いは自身だけでなく、大地　つまり世界のヒュレーをさせる事にある。

初めの内は引き出す事に不慣れなため、余計な消費を行ってしまうが、高位になればなるほど自身のヒュレーを呼び水とするだけで、莫大な量のヒュレーを世界から引き出せる。

セレナは具象が行える第八位階に達し、第七位階である勝利に達したばかりであるため、未だにシヴァの様にはまだ扱えない。

エンテレケイアには四つの界層と十の位階がある。

四つ目の界層　『<sup>アッシュンチャー</sup> 励起』。

アッシュンチャーには二つの位階が含まれている。

エンテレケイアに至ったと判断できるのが、第三界層である『具<sup>イェッ</sup>象<sup>イラー</sup>』からである。

第四界層はその前段階にある。

第十位階である『<sup>マルクト</sup>王国』は今現在、セレナがやっている世界に循環するヒュレーを観測し、認識し、受容することだ。

エンテレケイアは世界からヒュレーを引き出す魔導の技。  
これができるなければ、先へは進めないのだ。

第九位階である『基礎』<sup>イェント</sup>は自己への、つまり精神への働きかけだ。自己を認識し、自己の渴望を理解している。その渴望を明確に具象できるのが、エンテレケイアに至れる者と至れない者とはつきりと隔てる。

エネルギーを一つでも極めている、というよりも自己の渴望と明瞭に結び付ける必要があるのである。

サテイがシヴァの守護聖霊となったのは実はここに理由がある。

『基礎』<sup>イェント</sup>は自己との対話であり、歩み寄りだ。

これができるなくては次の位階には進めない。

スターリア王国はシヴァの力を高めるためにエンテレケイアに至らせなければならなかった。

だから、このプロセスを弄り、シヴァをエンテレケイアに至らせたのだ。

その方法とは愛する者との融合だ。

通常、人は自分の願望を曝け出し、例え醜い欲望までも含めて自分だと認めることはできない。

だが、『基礎』<sup>イェント</sup>ではそういった部分も含めて、自己と向き合う必要性がある。

これこそがエンテレケイアに至れない者を分別する苦難の試練なのだ。

しかし、自分は駄目でも、他人を全肯定することは可能だ。

特に、男女関係 特に、絶望に日々喘いでいる状態で救いを齎したものであればなおさらだ。

サテイは生まれも生き方も精神の在り方も全てがシヴァを全肯定及び、慰め、愛する事を義務付けられ、植え付けられた シヴァに捧げられたシヴァ専用の少女だ。

シヴァが、サティが、フラウがそのことに気付いたのは、全てがもう手遅れになってしまった時、つまり守護聖霊としてのサティが誕生した時の事だ。

だからといって、シヴァ達はサティを否定することはなかった。彼らは絶対の味方を手にしたのだ。今までの事もあってか、断る道理は微塵もなかった。

実のところ、エネルギーへと至るためのプロセスは解明されている。

第八位階に達すれば、知識として流れ込むのだ。解明できない筈がない。

だが、それなのに一般的にはプロセスは解明されていないと流布されているのは、その流れ込む知識、知識タクトにある。

エンテレケイアは世界そのものを吸い上げると言ってもいい。しかし、その際にヒュレーだけでなく過去に起こった出来事も世界に秘められた秘密も同時に吸い上げるのだ。

位階が上がれば上がるほど、浸蝕が進めば進むほどその知識は増えていく。

その知識タクトの危険性を危惧した各国上層部、及び術者は事実を隠匿した。

その事実は巧妙に姿を消し、人々の間で語り継がれてもいる。

誰もそのことに気づいてはいないが。

悠久の時の中で失われてしまった真実もある。

それを知る者は最早ほんの一握りの者だけだが。

そして第三界層 『具象』イエンツィラーを司る、第八位階 栄光ホトは第九位

階と第十位階を複合させ、内的存在を具現化させる事にある。

内的存在は術者の使いやすい形を形成する。

守護聖霊も第八位階に到達できれば取得資格を持つ事が出来る。  
というのも、第八位階では胎児の様なもので声も耳を傾かなければ存在を確かめることは叶わない。第七位階でようやく術者と意思疎通ができ、第六位階でようやくサテイの様に実体を持つ事が出来る。

守護聖霊の存在の有無に『具象』<sup>イエンツィラー</sup>で具象化された武器　アゾー<sup>AZO</sup>  
トに優劣の差は生まれない。

守護聖霊はアゾートの制御を担ってはいるが、必ずしも絶対ではない。術者が制御する場合もあるのだ。

これは、アゾートと次の第二界層と関係しているのだが、今は割愛させてもらう。

第七位階　勝利<sup>ネツアク</sup>の目的はアゾートを使いこなせるようになる事。  
これは力の制御を意味している。

だから、セレナは強力だが、今は制御が未熟なため、消耗が激しいアゾートは通常戦闘では使っていない。

制御には今の様に瞑想するのが最適なのだ。

息を整えるために、深呼吸する。

どうやら、シヴァ達も瞑想を終わったようだ。

三人部屋なため、部屋がいつもよりは若干広い。  
見慣れた光景がセレナの心を落ち着ける。

ローマーナ王国は温暖な気候ではあるが、初夏に入ったためか、夜でも少々蒸し暑い。

部屋の中は空調を整える魔導器が発動しているために、外の蒸し暑さにもかかわらず、快適な環境となっている。

風呂上がりからあまり時間がたっていないためか、洗淨液の香料の芳香が部屋に充満している。

現在待機中なためか、暇を持て余しているためか、興が乗ったからかはセレナも理解はできない。

シヴァに近づく。

きょとんとしていたが、セレナはそれにかまわず押し倒してしまった。

「セレナ？」

シヴァもフラウも突然のセレナの行動に驚いている。

彼女にしては珍しい行為なのだ。

フラウやサティはしょっちゅう行っただが、セレナが行うことは稀なのだ。

次の言葉を言わず、唇を貪り、言葉を封じる。

シヴァの寝間着に手を掛け、裸に剥く。

時折、セレナも合間を縫って、自分の寝間着を脱ぎ捨てる。

激しいセレナの愛撫にシヴァは一切抵抗せず、任せたままにしていた。

「珍しいな。セレナがこういうことをするなんて」

「私だって偶にはムラムラするわ」

きっと、自分の行為は今までの鬱憤が溜まっていたからだろうと結論付ける。

結構な頻度で見せつけられるのだ。知らず知らずのうちに溜まってしまうのだらうと自分を納得させる。

セレナはシヴァを愛しているかと問われれば、閉口せざるをえない。

なぜなら、自分でもよくわからないからだ。

ただ、分かっている事はシヴァと自分は同類の徒だという事、行く末を共にする同士だという事、二つの事と幼少の頃の付き合いのためか、ひどく安心するという事だけである。

ずっと共に過ごすのだ。

ならば、時にはこのような醜態も晒し、鬱憤をぶつけるのも悪くはないと思う。

セレナは削られていく理性の中で自分に言い訳する。

「なんだったら、房中術ってことでいいじゃない」

それはシヴァに対する言い分か、自分に対する言い分かは定かではない。

今までも房中術は行ってきた。

例えば、安全と分かっている時や、今の様に暇な時など修行の合間に行ってきた。

火照るのだ。

フラウ達との睦み合いを見た時や、今の様な状態で世界に奔るヒュレーを取り入れた時などにセレナの身体は火照るのだ。

だから、持て余し気味なヒュレーをシヴァとの房中術で昇華する。シヴァとの行為は少しは繋がっているためか、より上位のヒュレーとの互換のためか、他に理由があるのかは定かではないが、ヒュレーと共に快樂が循環し、セレナを天上の歡喜へと導くのだ。

比較対象はシヴァしか知らないが、セレナはそれで満足している。

ああ……でも、欠片を取りこんだ後のシヴァに乱暴に犯されるのもいいかも。

ないに等しい理性の思考の刹那の中でそう思う。



セレナの情欲に塗れた相貌は下半身へと向かう。

欠片を取りこんだ後、フラウが調整してもなお、膨大なヒュレーがシヴァの体内に渦巻き、持て余し気味になっている。

その暴虐の渦をさんざん調整し、疲れ果てているフラウ達に向けさせないために、セレナも相手をするのだ。

例え、シヴァにさらに犯し抜かれようとも、フラウ達は喜んで受け入れるのであろうが、護衛の観点から見ても、好ましくない。もしくは、それを言い訳に、犯される事を承諾しているのかもしれない。

セレナの下半身にさらに疼きが発生する。

ならば、今の自分はなんだろうと、薄れゆく意識の中で思う。意趣返しとして、逆に犯してやろうといきこんでいるのか。

思考が千切れ千切れになり、ともに思考できない。

ならば、今はこの激情に委ねてみようか。

感情が希薄な自分は滅多にこのような事は起きない。

しかれば、委ねよう。全てを。

ふと、隣を見ると、妹分であるフラウが頬を膨らませている。自分とシヴァがこのような行為をする事を咎める娘ではない。あれは自分が蚊帳の外になっている事に拗ねている顔だ。

思い出す。

初めて彼女と会った時の事を。

フラウとセレナが初めて会ったのはセレナが八歳、フラウが七歳の頃だった。

初めてフラウとあった時、フラウは心が壊れていて、シヴァの様に一切生気を灯さず、人形のようにだった。

彼女がそうなった理由は自分もすぐに知る事になる。

自分が『聖女』の護衛になるのが決められたのは自分が生まれる前からだった。

いや、尽くす相手が国から個人に変わったただけの事。

フラウとセレナの生家は共に、スターリア王国では連綿と続く貴族の家系だった。

スターリア王国の、世界のためにと常軌を逸した狂気で支えられた、世界の真実を知る数少ない家系。

フラウ達は望まれて生まれてきたわけではない。

両親は望んだのであろうが、彼らの親類は許さなかった。

なぜなら、亜人種は世界に公認されている奴隷。

しかも、子孫を残す事を義務付けられた貴族にはそのような者など認められる筈がない。

その認識が変わったのが、ラクスが二人の子供を産んだ事。

彼らは今までの態度を豹変し、歓迎した。

人類と亜人種のハーフは特殊な力を持っている。

彼らの目的を叶えるには、シヴァ達は最適だったのだ。

あれから月日は流れ、シヴァ達は彼らの望んだ姿に変貌した。

あれから、狂気は続いているかは定かではない。

彼らは知っているのだ。

シヴァ達が最後の希望だと。

シヴァ達が目的を達成せねば、終わりだと。

妹分を呼び寄せ、キスをする。

あれから、時間と共に、心の傷も多少は癒えたのか、表情も豊かになった。

歪んでしまっている事に自覚はあるけれども、仕方がない。それしか、許されなかったのだから。

憎んだ事はないとは言えない。

今では理解しているが、結局は自分の処遇は変わらなかったのだ。愛しているだろう。

護衛として、彼女と多くの時間を過ごした。

一緒に街を歩いた。一緒に衣服を選びあった。一緒に食事をした。一緒に入浴した。一緒にベットに横になった。一緒に話した。一緒に諦めた。一緒に泣いた。一緒にふざけ合った。一緒に笑った。一緒に抱かれた。

多くの時間を共有した、他人、友人、家族、妹。

例え、植え付けられた感情でもあるけど、その感情と共に私は生きてきた。

私の可愛い、愛しい妹。呪縛

「後は宜しく」

体内で弾け飛んだものが私の意識を弾き飛ばした。

アーブは懲りていないのか、またもやコロッセオに行くと言い張り、監視役としてレイアが抜擢された。マーテルもそれについていくこととなった。

シヴァ達は市内からあまり離れるわけにはいかないから、日帰りできる範囲で周囲の穢魔を暇つぶしに倒すために出掛けた。

アタルとエリオスはコロニーの攻略が二週間後になることから、ウォードにある依頼を受けることにした。

少しばかり距離が遠かったが、攻略までは半分程度の日数が残ることから受けることにした。

これはその依頼の最中。

商人の荷物の運搬の護衛がアタル達の仕事になる。

アタルは大剣を炎で纏った炎剣ではなく、炎そのものを剣にする炎剣を取得しようと思っていた。

コロッセオで水の変化を富む状態を見て、自分にもできはしないかと考えた結果だった。

アタルの父もこれを取得していた事もあるだろう。

原理自体は簡単だ。

炎のエイドスに切断のエイドスを重ねるだけ。

だが、これが上手くいかない。

大剣を炎で纏った状態までは維持できるのだが、それ以上が上手

くいかない。

炎が気体である特性を生かし、射程を延ばそうとするも、霧散してしまう。

また、上手くいったとしてもヒュレーが薄い状態になってしまう。射程を自在に伸ばせる剣と言えば、耳触りは良いが、デユナミスの性質上、相手のヒュレーを浸蝕できる程の力を込めねば意味がない。

理想としては他の部分は薄く、相手に当たる部分だけ濃くできればよいのだ。

全てに均等にヒュレーを巡らせてしまえば、莫大な量のヒュレーを消費することになるので、それは現実的ではない。

ならば、別の形を取るか？

例えば

「《獅吼爆炎》！」

野獣の咆哮の様な轟音が、爆炎と共に豪獣種に叩きつけられる。

エリオスが使うデユナミスは得意とする炎と衝撃のエネルギー。炎と衝撃を複合させ、指定させた方向に爆炎を叩きつけ、対象を焼き飛ばす。

だが、アタルにはこれは未だ使えない。

爆炎自体は使えるのだが、肝心の方向の指定ができない。

方向を指定できねば、爆炎は全周囲に撒き散らされ、接近戦では術者をも巻き込んでしまうのだ。

オーラを纏い、駆竜種を袈裟斬りにする。

水棲種を細かな炎の刃で切り刻む。

(まだまだ遠いな……)

気合を入れ、残りの穢魔を片づけることにした。

風が海の匂いを運ぶ。

フレイス王国とは違う夜風にあタルは旅をしているのだと実感させられる。

「先生、父さんはエンテレケイアに至っていたんですね」

いま思い出すのは、父の背中。

父と同じように旅をしているだけにその違いが、実力差が露わになっている。

「ああ」

「どうすれば、父さんの様に至れるんでしょうか？」

目標を失ったアタルが次の目標として立てたのは、エンテレケイア。

これほど明確な目標もないとアタルは思っている。

「こればかりは俺にもわからん。俺も至ってないからな。もう少しだと思っただが……」

「そうですね……」

意気消沈しているアタルにエリオスはかつて師に同じ質問をした  
と思います。

自分も同じように意気消沈したのだと懐かしむ。

「俺も師に問うたことがあるのだが、返ってきた答えは『世界を感じ、己を知ること』だと返されたよ」

「『世界を感じ、己を知ること』ですか……」

「ああ。俺もそれが何であるかは問うたが、答えは教えてくれなかった。というよりも、これは己の感覚でしかないので、上手く伝授できないと実感しているよ」

「先生は答えが何だかわかるんですか!？」

「ああ。アタル、自分のヒュレーを意識できるか？」

アタルは己のヒュレーを改めて自覚する。

「はい」

かつて、師が教えてくれたようにエリオスもアタルに伝授する。

「では、俺のヒュレーは？」

エリオスがアタルの腕を掴むと、エリオスのヒュレーがアタルのヒュレーを浸蝕する。

アタルはこれが師のヒュレーだと悟った。

「わかります」

エリオスはアタルの腕を離す。

「では、世界にヒュレーが流れている事がわかるか？」

そういわれ、アタルは自身のそれとは違うヒュレーを探そうと、意識を広げるが、先ほどまでの鮮明なものとは異なり、茫洋として実体を掴めない。

「流れている事は分かりますが、実体が掴めません」

エリオスは頷く。

それはかつてエリオスが通った道だった。

エリオスも実体を掴めるようになるまで長い時を過ごした。

「流れの実体を掴み、受け入れられるようになる事が『世界を感じる』ことだ。俺ができるのはここまでだ。実体を掴めるようになることも、『己を知ること』も助けにはなれない。寧ろ、邪魔になるだけだ」

「いえ、ありがとうございます」

アタルは感謝していた。

道に迷いそうになると師は道を示してくれる。

ならば、弟子としてそれには応えねばならない。

「今度からはこの流れを掴めるように瞑想するのがいいだろう」

「はい！」



夜風がアタルの身体を冷やそうとするが、アタルの身体に宿った情熱は冷えそうにもなかった。

アーブはコロッセオを肩を落として後にした。

賭博に負けたのもそうだが、レイアに元金を取り返そうと、次の賭博に大量の賭け金を賭ける度に小突かれるのだ。

散財をすることはなかったが、アーブとしては不完全燃焼だった。彼としてはでかいのを一発賭けて、一発で取り戻したかったのだ。

今は二人の買い物に付き合い、その小休止として、カプチーノを飲んでいる。

見渡すと、観光客なのか、壁と一体化している三人の像が特徴的な泉に後ろ向きにコインを投げ入れている。

耳に挟んだところ、一枚でここに帰ることができ、二枚で大切な人と永遠に一緒にいる事ができ、三枚だと恋人や夫、妻と別れる事ができるらしい。

なんだそれと思ったが、アーブにとっては投げ入れられるコインの方が気にかかった。

もったいないと思うのだが、これも願掛けかと思えばそれ以上泉について考えるのをやめた。

アーブは今回のローマーナ王国の決定について思いを馳せた。

アーブとしてはローマーナ王国の決定に百万歳だった。

なにしろ、今回は無用な危険を冒さずに済む。

親友はこのことに不満を持っているようだが、自分はそうではな

い。

一般人としては無茶はあまりしたくないのだ。酒場に行き、噂話を聞いたところ、今回の決定はフレイス王国との確執にあるらしい。

ローマーナ王国の威信を見せつける行為だと耳に挟んだ。

馬鹿らしいとも思うが、そんなものかとも思う。

アーブ達の祖国、ユナティア連合国は世界に対する野心が強い。自分達こそが世界の覇者であり、世界をリードするのだと息巻いている。

親友はそんなところが嫌いでワードに所属したのだと思う。

一因でしかないだろうが。

目を閉じると、群衆のざわめきが耳を澄まさなくともアーブの聴覚を刺激する。

その中に粗い足音が混ざる。

どうやらレイア達が戻ってきたらしい。

まだ付き合わされるのかと気が重くなり、溜息をついた。

周囲の穢魔を一掃し、シヴァは一息をついた。

彼の力は白の欠片を取りこんだ事により、力を増している。

使いこなしているというわけではないが、馴染んではきている。

彼のヒュレーに対する感覚は鋭敏さを増し、世界のヒュレーの流れが手に取るように分かる。

だが、彼はローマーナ王国に入った時からフレイス王国とは異なる流れに違和感を感じていた。

フレイス王国が温暖、寒冷入り混じっているのであれば、ローマーナ王国は寒冷のみだけだった。

感覚的なものなので、言語化できないが、一方に偏っている。そんな違和感を抱いている。違和感の正体が判明しないので、彼は海が見える丘に向かった。そこでフラウ達が待っている。

「シヴァ、あーんだ」

サティがフラウがした事を羨ましがり、今度はサティがシヴァに食べさせていた。

食事はパニーノに似ているが、少し違う。

パンが表面を焼かれ、口を閉じている。

ホットサンドと呼ばれているらしい。

噛んだところから溶けたチーズが零れ、シヴァの口元に垂れる。

サティはすかさず、溶けたチーズを舐め取る。

フラウが羨ましそうに見ているが、誰も気にしていない。

ホットサンドの具はロマーナ王国では定番の物であり、トマトの瑞々しい歯ごたえや魚介類の海の風味がシヴァ達の口内に広がる。

サティはシヴァの膝に乗り、ホットサンドを食べさせてもらっている。

シヴァは丁度いいので、サティ達に先ほど感じた違和感を聞いてみる事にした。

「兄様もですか？」

「確かに、偏っている気はするわね」

「冷水に浸っている様な感覚だな」

誰もがシヴァが感じた違和感を感じている。  
フレイス王国という比較対象があったので、余計に感じるのだ。

「<sup>ダート</sup>知識から引き出せないのですか？」

こう言った事に関してはエンテレケイアに記されているので、フラウは尋ねたのだが、

「駄目だな。あと一步というところで、霧がかかる」

もどかしくはあるが、事実だった。

「この地の欠片を取り入れればわかるかもしれない」

ホットサンドを食べ終わったサティは小さくなり、シヴァの肩に止まった。

「今後このような事が起こるかもしれないから、ある意味丁度よかったのかもしれないわね」

そうだなと、シヴァ達は頷き、この話を打ち切った。

「ところで兄様……」

フラウが太腿をポンポンと叩いていることから、シヴァはフラウが何を言いたいのか理解した。

「最近甘えてくるな」

フラウの膝に頭を載せながら、ロマーナ王国に入ってからフラウの行動を振り返ると、甘える回数が増えていると思った。

「暇な時間は貴重ですからね。存分に甘えなくては」

「我も甘えるぞ！」

シヴァの腹でサティはゴロゴロと転がっている。

セレナはやれやれと肩を竦めた。

これが、彼女達のシヴァとのコミュニケーションだとセレナは理解している。

シヴァは常に全力投球で接しなくては、絶対に人の意を解しはしない。

人の機微な感情などシヴァが察する筈はないのだ。

セレナも穏やかな時間は旅に出るからしか心から味わっていない。

だから、彼女達を止めはしない。

自分達は絶望の道を歩むのだ。

決まりきった結末を演じるのだ。

これくらいは許してもらわねば困ると切に願った。

四人の穏やかな時間を邪魔する無粋な穢魔がいたが、その穢魔達は例外なくフラウの視線一つで撃退していた。

ローマーナ軍上層部は一堂に会し、南部の攻略についての話し合いを進めていた。

「コロニーは沿岸部にその牙城を構え、その周りを屯する穢魔は万は確実に上回っているといわれている。さらに……」

作戦の説明を行っていた男はコロニーとそこに生息する穢魔を映していた画像を切り換える。

この魔導器はカメラと呼ばれており、当時の事を写真及び、動画で記録する魔導器だ。

そのカメラに映されていた画像をスクリーンに映し出し、室内にいる者達全員に見られるようにしていた。

カメラに映し出された画像はここ最近のものであるが、次に映し出されたのは最近のものではなく、以前コロニーを攻略しようとした時に撮られたものだった。

その画像を見て室内にいる何人かは齒噛みした。

そこにはローマーナ王国において天敵とされる厭魔が映し出されていた。

厭魔の名はカクス。

身の丈が十メートルを超える巨人で、人型をしているが下半身は毛皮で覆われており、首が三つあり、獅子の頭部を持っている。

約十年前、独自にコロニー攻略をしたローマーナ王国はこのカクスに軍を蹂躪されてしまった。

その後、フレイス王国南部のコロニー建設もあってかコロニー攻略に乗り出せなかったのだが、虎視眈々とその機会を窺っていた。

「厭魔、カクスが我らの攻略の行く手を阻む。だが、我らとて足踏みなどしていない。奴を倒すべく、力を蓄えてきた！」

「その通り！」

「今度こそ倒してくれる！」

「奴など我らの敵ではない！」

次々と奮起の聲が上がる。

敗戦していたにもかかわらず、誰も士気を衰えさせていない。寧ろ、燃え上がる炎の様に勢いを増すばかりだった。

そんな彼らの雄姿を見て、説明していた男は力強く頷く。

コロッセオという一大事業が彼らにとって功を成したようだ。

コロッセオは元々、過去の遺産としてローマ王国は取り扱っていたが、穢魔の出現時から、穢魔との戦で人々が憶さぬように、闘技場を修復し、今の事業を築き上げたのだ。

闘技場で戦えるのは、軍の中でも誉れの高いものであり、強き者のため、兵士達はそこに出場できるように己を磨きあげた。

闘技士という場に似あわぬ存在がいたが、彼らは所詮、騎士の決闘のための余興にすぎないと彼らは認識していた。

「その厭魔を倒すために今一度、奴を検証する」

そして、画像が切り替わる。

「奴の攻撃手段はまず、その巨体を活かした踏みつけが一つ」

映し出された画像はカクスがその幅三メートルを超える巨大な足で踏みつける姿だ。

「この踏みつけはただの踏みつけではない。オーラによる強化と振動のエイドスを周囲に撒き散らし、近くにいた兵士達の動きを止め

てしまう」

足元からの振動で立てなくなるだけでなく、伝播する空気の振動が兵士達に叩きつけられるのだ。過去、何人もの兵士達が振動に動きを封じられたかと男達は腹を立てる。

「次に奴の棍棒だ」

画像が切り替わり、カクスが手に持った先の方の幅が極端に広い棍棒を振り下ろす姿が映し出された。

「踏みつけて動きを止め、棍棒で止めを刺す。これが奴の持つ攻撃パターンの一つだ。しかも、こちらにもオーラによる強化と振動のエイドスを付着している。これをどうにかしない限り、我らに勝ち目はない」

過去の敗戦で大敗を喫したのは妖魔に対する情報が不足していたからだと睨んでいた。

だからこそ、明らかになった奴の攻撃を防ぐために十年もの間、力を磨いたのだ。

「最後に、奴の三つの頭部から吐き出されるエイドスの炎だ」

画像が切り替わり、三つの頭部から火が吐き出され、周囲の兵士達を焼き殺す姿が映し出された。

室内に怒気が満ちる。拳を握りしめる音が室内に僅かに響く。

かつて、同胞を妖魔に殺された事を思い出し、当時の自分の無力さと仇を取って見せるという義憤が彼らの心に芽生える。

「このエイドスの厄介さはその攻撃の範囲の広さと込められたヒュ



レーの多さだ。単独で防げたものはおらず、複数で協力し合っただけで防いだのだが、その直後に棍棒による圧殺が死因となってしまう」

かつてその場にいた者達は目を閉じ、過去の光景を思い出す。

彼らが助かったのは、単にカクスから遠く離れていたという幸運でしかなかった。

カクスの傍にいた者は例外なく殺されており、生き残った者も敗戦の事実と敵の圧倒的なまでの強さに戦意を失ったものだ。

あれから時を経て、彼らの心に残ったのは、敗戦の惨めさと戦意の喪失ではなく、勝利への渴望と戦意の高揚だ。

再び目を開けると、次は周囲にいる穢魔への説明に入っていた。

「周囲の穢魔の大半を占めているのは屍骨種と水棲種との報告が入っている。屍骨種の方は問題ないのだが……水棲種の方は我らと少し相性が悪い」

その言葉に一同は返す言葉はなかった。

ローマーナ王国では水のエイドスを多用する兵士が大半だ。

その事を誇りに思っており、これからも変えるつもりはないのだ。だからこそ、水棲種は彼らにとって厄介な存在なのだ。

水棲種には水のエイドスが効きにくいので、水のエイドスは使えない。

よって、他の穢魔に比べ、水棲種は戦いにくいのだ。

「だが、多少相性が悪いからといって、引く我らではない！ そうだろう、皆の集！」

『おっ！』

ここに相性が悪いからといって、臆病になる者など何処にもいなかった。

彼らの表情は自信に充ち溢れ、負ける気などさらさらないとわんばかりだった。

「では、作戦の内容に入る」

次に出された画像はコロニー周辺の地図だった。

「コロニーは沿岸部にあるため、実質的には攻められるのは三方向のみといってもよい」

「海側からは攻められないのですか？」

「戦艦による遠距離攻撃による穢魔の殲滅を意味するのだな？」

「はい」

「それは不可能だ。なぜなら……」

言葉を区切り、画像と共に説明が入る。

「海皇種がコロニーの海側からの攻略を不可能にしている」

巨大な尾らしきものが戦艦を真っ二つに折り、海の底へと沈めていく姿が映し出されている。

海皇種とは大海に王者の如く君臨している穢魔で、五十メートル

は優に超える巨体なので、何も無い海原で攻撃されてしまえば、撃沈されるだけの末路を辿ってしまう。

通常海皇種は攻撃を仕掛けることはなく、真上を船が通り過ぎたとしても、無視してしまうため穢魔の中では安全な部類に入る。

だが、コロニーの近くにいる海皇種は別だ。

彼らはそれまでの行動が嘘のように積極的に船を沈める。小舟程度であれば見逃されることはあるが、戦艦クラスほどの巨大な船ともなれば、絶対に沈められてしまうのだ。

だから、コロニー近くを通る時は迂回するのが通例となっている。

「よって、陸地からしか攻めることはできないのだ」

質問した男も納得し、次の言葉を待った。

「まず、部隊は三つに分ける。各方面から攻めることが目的だ。次に……」

カクスが映し出される。

「カクスを攻略するには大人数では不向きだ。よって精鋭部隊を配置し、彼らにはカクスの全面から攻めてもらい、カクスを撃破して貰う。カクスを撃破しなければ我らに勝利はない。この精鋭部隊が鍵を握る。他の兵士達にやってもらうことはこの精鋭部隊をできるだけ消耗させずにカクスの元まで辿りつかせること。そして、他の穢魔の殲滅だ」

反対の声はあがらなかった。

彼らもカクスを倒さなければ勝利はない事が過去の敗戦で学んで

おり、数を頼んだところで蹂躪された経緯もあるので、有効だという事が理解できているのだ。

「次に、精鋭部隊の人員と各三方面から攻める部隊の指揮と部隊の配置についての説明に入る」

作戦会議は連日に及び、コロニー攻略への士気を高めていった。

寄せては返す漣が男の聴覚を刺激し、一定の間隔で響く音はまるで子守唄の様に眠りの園へと誘うかのようだった。

潮風が男の髪を靡かせる。

横たわっている叢もまた男の髪と同じように靡かせ、さらさらと音を立てる。

海の恵みの匂いを運んでくる海風が男の鼻腔を擦る。

海面に映る月が男の視覚を楽しませ、風情を感じさせる。

枕にしている巨体を丸ませている狼の体温が冷たい夜風で下がった男の体温を温めている。

「世界はこんなにも美しいのに、世界はこんなにも醜い」

男の眼には今映し出されている光景ともう一つの光景が交互に映し出されている。

男はこんなにも美しい世界を、醜い世界に変える人間に憎悪を抱くも、憎悪は直ぐに下火になり、男の任務が代わりに芽生えた。

「ジェヴォーダン」

名を呼ばれた狼は伏せていた耳をたて、片目だけ開けて男の話を

聞く態度を作る。

「頼んだぞ」

狼はオン、と一声啼いた。

「我らが主のためとはいえ、心が痛むね」

微かに哀愁の念を声に込めるが、それはすぐさま消え去った。

この道は彼らが選んだ路。

ならば、悲しむべきは自らの所業で犠牲になる者達ではなく、自らの目的が果たせない事を悲しむべきだ。

「僕には見えるよ、聞こえるよ。人々の自らの境遇を嘆く声が。それを齎した者に怨嗟の声を嘆く声が。家族を、友を、恋人を失い呪詛の声をあげ、呪い殺すかのような目で睨みつける人々が。日常が崩され、茫然と立ち尽くす人々が。

造り上げて見せよう、地獄を！ 我らが主のために。過去に誓った誓約のために。

『勇者』よ。君はその地獄を見て何を思う。何を感じる。どんな呪詛をその身に受ける？どんな重い荷物を背負わされる？ どれほどの願いを振り切る？

自らが起こした所業に立ち止まるかい？ 齎される不幸を嘆くかい？ 己が境遇に耐えきれず呪うかい？ 己の罪の重さに死にたいかい？

きつと、君は立ち止まらずに進むんだらうね、頂を目指して。多くのものを切り捨てて。早く来れるといいね、煉獄へ。

聞かせてもらおう。読ませてもらおう。君達の作り出す物語を」

男は幼子の様な無垢な笑みを浮かべて、高らかに謳いあげた。

### 第三楽章 氾濫

「お姉ちゃん達、またね〜」

「バイバイ」

「ええ、また会いましょう」

「ああ、またな」

子供達に見送られ、マーテルとレイアは快活な笑みを浮かべ、手を振り彼らとまた会う約束をした。

マーテルは教会を訪れ、その修道女たちと仲良くなり、こうして幾度となく孤児院に足を運んだ。

今日はレイアも付き添いとして、同行しており、子供達の相手をしたのだ。

「しかし、疲れたな」

「お疲れ様」

レイアが首を動かすと、小気味よい音がし、肩を回すと、固まっていた筋肉がほぐれていくのが傍目にも分かる。

自分に付き合っって子供達の相手をしていたレイアをマーテルは労う。

「しかし、何であたしはつか振り回されるんだ？」

レイアは子供達に懐かれ、子供たちの運動につきあったり、から

かわれたりして、追い駆け回したのだ　特に男の子を。

「性格の問題じゃないかしら？」

逆にマーテルは女の子やおとなしい子に懐かれ、室内で料理を教えたり、裁縫を教えたりなどして、レイアとは正反対の待遇を味わっていた。

「性格って……あたしってそんなに振り回されそうか？」

「うん……というよりも全力で相手をしてくれるから、懐かれるんじゃないかしら」

「それ、褒めてるのか？」

「子供達に好かれるのは貴重よ。やっぱり相手は子供っぽい人が遊びやすいから」

「そっか……っておい！」

「ふふふ」

からかうようなマーテルの言動にレイアは見せかけ上は激昂する。レイアも子供達に好かれるのは心地良いのだ。それがいかなる理由であろうと、その前には霞んでしまう。

「遠征まであと数日か……あたし達は何もしなくてもいいんだろっか？」

レイアはやれることがあるならば、しないと気が済まない性質だ。何もするなという、通達が彼女を迷い子の様に気持ちを迷わせる。

「でも、何もするなという通達がある以上するわけにもいかないわ。私達はあくまで雇われ者だから」

マーテルとて今の現状に齒がゆいものを感じているが、ウォードに所属している以上、国の許可なく行動することは越権行為になりかねない。

最悪、罰せられることもあるのだ。

「でも、シヴァがいるんだし、何とかならないかな？」

「そのシヴァさんが釘を刺され、行動しないんだから私達ではどうしようもないよ」

『勇者』であるシヴァは独自にコロニー攻略を行うことも可能であるが、緊急でもない限り、基本的に国の監督の元で攻略を行わなくてはならない。

無論、無視はできるのであるが、無用な軋轢は生みたくないので、シヴァは行動しないでいた。

「もどかしいなあ」

「この国の軍を信じてあげたら？」

「はあ……でも暇なんだよ」

「アーブさんは充実してるみたいだけど？」



「あの馬鹿は放っておけ」

アープは闘技場に通り詰めだった。もちろん、無駄遣いをしないように持ち金をあまり持たせないようにしていた。

「シヴァさん達みたいに観光したら？」

「あれはちょっと……」

時折、シヴァ達は穢魔狩りに出かけたり、訓練を行ってはいるのだが、観光にも精を出している。

そのせいか、シヴァ達はラローマでは少しばかり有名になっている。

『女を侍らしているハーレム男』 『バカップルズ』 『歩く砂糖雨』 など数々の通り名を残している。

美男美女であるため、見た目もよく、多くの人が物珍しさ見たさに街を出歩いている。

余談ではあるが、カップルができたり、バカップルになる者が続出したり、それを察した喫茶店や菓子店など様々なカップル専用の商品を新メニューとして店に出したりしている。

もちろん、フラウ達はそれに目をつけ、シヴァを引っ張り回した。それを見た者が店に利益を落としていくことから、『福の神』として扱われていたりもする。

「じゃあ、エリオスさんの為に着飾ったら？」

反応は劇的だった。

レイアの顔は瞬時に、ここロマーナ王国の名産品のトマトの様に赤くなった。

「にゃ、にゃにをひってるんにゃ？」

呂律も回っておらず、誰が見ても一目瞭然だった。

「あら、気付いてないと思った？ 私とあなたは付き合いが長いのよ」

友人が師であるエリオスを常に目で追っている事にマールテルは気づいていた。

強くなるために見ているのかと思ったが、エリオスが一週間ほど出掛けていた時に、少し寂しがっていたからそうではないかと当たりをつけたのだ。

「しょ、しょれは……師を尊敬するのは当然の事だろう？」

言い訳を思い付き、平静を取り戻したのか、呂律も直ってきた。顔は紅かったが。

「そう……じゃあ、私も服とか選びたいからレイアも付き合い合ってくれるかしら？」

「そうか、ならばあたしもつきあおう」

ぎこちなく足を進める親友にマールテルは可愛いものを見るかのような慈しむ笑顔でレイアを見守った。

アープはコロッセオを後にし、酒場で酒を飲んでいた。

「いやー、今回は快勝だぜ！」

アープは初めての快勝を祝福するため、何回もコロッセオに通い、そこで仲良くなった者達と一緒に祝杯を挙げる。

「ち！ 羨ましい野郎だぜ。こっちは負けたっというのによ」

酒気を帯びた息を吐きながら、中年の男はアープを妬む。

「まあまあ、そんなときもありますよ」

その中年を慰めるのは、アープと同じ位の年頃の青年。

彼らは席が隣になり、三人とも負けてしまった時に、お互いを慰めるために今と同じように酒場に行き、交流を深めたのだ。

「しかし、お前さん達いいのか？ もうすぐ、遠征だつてのにこんなところで油を売つてて」

「僕は下っ端でこの街の警備でしかありませんからね。それとはあまり関係ないですよ」

青年はローマーナ王国兵士ではあるものの、新入りで実戦経験もなく、力も素人に毛が生えた程度の実力しかないことから居残り組なのだ。

青年もその事に安堵しており、こうして彼らと酒を酌み交わしているのだ。

「俺達は手伝うなどお偉いさんから通達があつたからな。こうして自分の実力向上のためにコロッセオに通いつめているのさ」

「本当にそれだけかあ？」

「本当さ」

白々しく口笛を吹くが、半分は賭博目当てだった。

だが、アーブとてコロッセオに通った後は、彼らのデュナミスを参考に自分のデュナミスを昇華していったのだ。

アーブとてここに来てから実力が増したと実感しているのだ。

「そうらしいですね。僕達の噂でも『勇者様』達は遠征に行くとな上から通達があったと聞いています」

「手伝ってもらえばいいのに、何を考えてるのかねえ？」

「僕のような下っ端にはわかりかねます。アーブさんは分かりますか？」

アーブは自分が『勇者』達に同行している事を話してはいない。要らぬ厄介事に巻き込まれかねないと師から釘を刺されたので、黙秘しているのだ。

「聞いた話だと、国の威信ってやつらしいぜ。自分達がフレイス王国よりも優れているのだと諸外国に示したいらしい」

「そんなもんかね。確かにフレイス王国とは昔から争っていたけどよ」

「北部の方ではフレイス王国からの穢魔の流出に恨みを抱いている方は大勢いるそうですからね。それもわからなくもないです」

「しかし、遠征に失敗しちまったらそれまでだろ？」

「大丈夫ですよ。軍の実力は皆が知ってのとおりですし、負ける筈がありません」

アープはつまみであるチーズやサラミ、ハムを喰いながら、コロッセオには民衆の不安を取り除くという効果もあつたんだなと感心した。

「そうだな。俺達は信じて待つくらいしかできないんだし、信じて待つとしようか！」

「では、その景気祝いと行きましようか」

アープ達はもう一度酒を酌み交わし、祝杯を挙げた。

アタルは今、猛烈に後悔していた。

顔は愛想笑いを張りつかせ、胃はキリキリと音を立てながら痛みを発し、冷汗はとめどなくアタルの頬を滴り落ちる。

どうして、こうなった？

アタルはこうなった原因を探るべく過去に思いを馳せた。

依頼が終わり、ラローマに戻ったアタルは時々、アープと共にコロッセオに通い、師やレイア達と共に訓練したり、時には観光したりして、暇を潰していた。

彼もレイアと同じく、遠征に共に行けない事に頭を悩めていたが、

国の誇りという物をレイアよりは理解していたので、なんとか自分を騙し、遠征までの日々を待っていた。

彼が久しぶりにこの街をゆっくり眺めてみると、何故かカップルが増大していた。それも人目も憚らずにいちやつくカップルが。

それは街ゆく人々だけの变化だけではなかった。

喫茶店や菓子店もカップル専用の商品を目玉として売り出し、街にはピンク色の空気がそこかしこに流れていた。

街を離れている間に、何があったのだらうと街にある軽食店で、聞いてみたところ、ある美男美女のバカップルが原因で街にカップルが続出し、店もそれに合わせた新商品を出しているということだ。何と傍迷惑な存在なんだ、その原因のバカップルはと憤るアタルだったが、その美男美女のバカップルの特徴を聞いたところ、自分達の仲間の特徴と類似していたことから、何も言えなくなった。

その後、軽食店を出て、ショートカットの為に裏路地に入ったところ。

嫌がる女性二人に言い寄る二人の男がいたので、アタルは自身の正義心に従い、当然の如く、女性二人を庇い、男二人を撃退した。

その後だったのだ。アタルの苦難は。

女性二人はまるで王子様の如く助けしてくれたアタルにお礼がしたいと、謙遜するアタルを引き連れて今流行りのカップル専用の喫茶店に入ったのだ。

そして、二人は頼んだのだ。カップル専用の商品を二つも。

その後の事は形容がしがたい。

あーんと、勧めてくる女性二人の目が獲物を前にした蛇の如くアタルを睨みつけてくるのだ。私の方を先に食べてくれるよね、と双方睨みを効かせながら。

ちなみに、この女性二人は独り身で、このカップル続出の混乱に乗じて彼氏を作ろうと目論んでいたところ、王子様の如く助けられたアタルに目をつけ、自分の彼氏にしようとしていたのだ。

そんなことを知らないアタルはただ、二人の女性に臆してしまい、

こうして差し出される二つのスプーンを前に、硬直しているのだ  
た。

どうにかできないかと辺りを見渡したところ、シヴァを目にして  
声をかけようとしたが、その隣に恋人の如く腕を組むフラウを見て、  
声を失った。

アタルはフラウに一目惚れしたといってもいい。

だが、その後のシヴァとのいちやつきや『勇者』や『聖女』の幻  
想を壊され、ほぼ失恋してしまったと言ってもいいが、初恋の傷は  
まだ癒えず、今も淡い恋心を抱いてしまっているのだ。

フラウ達はアタルの事を一応は気づいてはいたのだが、どうでも  
よかったので無視した。

硬直しているアタルに二人は痺れを切らし、アタルにどっちにす  
るかを迫った。

「さあ！ どっちにするの！？」

アタルにはどちらも選べず、二人に同時に口に突っ込まれるとい  
う事態が発生した。

その後、エリオスがそんなアタルを目にし、助け船を出そうとし  
たが、レイア達に捕まり何処かへ去っていった。

彼を助けてくれたのは親友であるアーブで、二人の女性を相手に  
一日だけデートをする羽目になったのだが、日が沈む頃には二人の  
頬に夕焼けと同じ色の紅葉が見頃となった。

これは夢だ。

幼い頃に経験した悪夢だ。

今もその悪夢が私を蝕む。





悪夢は今も私を苛み、私を責める。  
私をここから解放してくれるのはただ一人だけ。

「フラウ」

兄様の感情の籠らない優しい声が私の耳朶に溶けるように響く。  
兄様が魔されていた私を起こしてくれていたようだ。  
セレナもサティも心配そうに私を見ている。

「また、見たのか？」

私はこくりと頷く。

今では大分治まっていたが、どうやら再発したらしい。

「兄様……」

私と言えば、兄様はきつと答えてくれる。これは甘えだ。だけど、  
兄様以外に私を罰してほしい存在はいない。

「私にお仕置きしてください」

「わかった」

これが一番いい方法だと悟ってからは、これを行うようにしている。

兄様は私を恨んではないが、私はそれでは気が済まない。

私が甘えるのは兄様を愛していることと贖罪のためだ。  
兄様に私の全てを捧げるのが、私の贖罪なのだ。

目隠しをされ、兄様の姿が見えない。だけど、兄様の体温が兄様の所在を告げる。

今回はこういう趣向なのだろう。

視界を閉ざされた私の五感の一つが閉ざされたことで、他が鋭敏になる。

兄様の舌が私の肌を這うように舐めてくださる。他にも舌の感触がすることから二人も混じっているのだろう。

生まれた時から意思を持つ事を剥奪された私達は大人達の都合のいいように造られた。

その中で唯一持つてもいいと許可された感情は兄様に対する愛情だけだ。

兄様だけを視界におさめ、兄様の事だけを思い、兄様だけに尽くす。

徹底的な依存だけが私に持つ事が許可された感情だった。

何故そうするかは後ほど知る事になったのだが、幼い頃に課せられた全てはそれを育む為のものだった。

それが切り離せないほどの感情になってからようやく他の感情を持つ事を許可された。

肌が強く吸われ、私の身体に次々と紅い跡を残す。吸引する力は痛みを発するほどだが、これは罰なのだ。兄様が下さる仕置き跡

が私の身体に刻まれる事が悦楽へと導く。

痛みが心地よく感じてしまう。罰にならないかもしれないが、兄様が痛みだけを発するものを私にする事を嫌うのだ。だから、本当の罰は別だ。

傍からすれば私達は禁忌を犯しているのだろう。誰からも後ろ指を指されてもおかしくない行為だが、私はそれを下らないと吐き捨てる。

人々が後生大事に持っている倫理観や道德など、人々が互いに牽制する為の方便にすぎず、己の獣欲を押さえる為の鎖にすぎない。

法がいい例だろう。あれは幾度となく改正され、国ごとに違った様相を見せる。

人は法を守らんがために人になると言うが、法の書の分厚さを見るがいい。

あれは、法を制定しなくては人々は罪を犯すという何よりの証拠ではないか。

法を守ることで、人々の社会に秩序が生まれることは否定しない。人が人として社会の中で生きるには必要だとも思える。

だが、私達はその倫理観や道德、普遍、常識から切り離されて生きてきた。

誰も私達に社会の中を生きる事を望む者はおらず、社会の外を生きる事を私達に強要し、刻みつけた。

私達が生きてきたのは、人間が後生大事に抱えたものから切り離された環境なのだ。

私達には犯した罪の意識から目を背ける為の自己弁護など、人々に対する贖罪など必要ない。ただ、己の目的だけを追求する。

昂った私を縛りつけ、兄様達だけで楽しんでいる。  
縛りつけられている為に自分を慰める事が出来ない。

ただ、彼女達があげる嬌声から自分も貰かれる想像をすることし  
かできない。

これが今回兄様が私に下さる罰の形なのだ。

私を罰せられるのは、兄様だけ。

私を傷つかせるのは、兄様だけ。

私が捧げ、望み、尽くすのは、兄様だけ。

だって、私は。

私の心は飢餓から狂いそうだった。

きっと私は懇願するのだ。

卑しい雌犬の様に。主人に命を握られている奴隷の様に。

それでもいい。

私は『聖女』ではなく、一人の女。

兄様だけの女なのだから。

街は活気に充ち溢れ、まるで祭りごとの最中のような喧騒に包ま  
れている。

一系乱れぬ行進は華やかさとは無縁ではあるが、確かな実力と統  
率を感じさせ、人々に安心感を齎す。

出征の門出に相応しい、悠久の空が何一つ遮らせる事もない快晴  
である。

人々はこの勇壮なる軍が勝利を凱旋の花束と共に自分達に齎すに

違わないと確信に満ちていた。

行進を一目見ようと、住む家の窓から数多くある石橋から、今日特別に配置された見物用の小舟から 人々は勇敢たる兵士達を見送っている。

アタル達もその一人であり、彼らは軍が街を出ると、人々と同じように日常へと戻っていった。

「あたし達も参加したかった……な！」

レイアはアタルへと金属鎚を叩きつけながら、攻略に参加できなかった事を愚痴る。

「し……かたないだろ。僕達は所詮雇われ者なんだから」

アタルは衝撃をエイドスで拡散・吸収しながら重量に勝る鎚を大剣で受け止め、反発のエイドスと共に、鎚を押し返す。

「でも……手伝えるのに手伝えないのは辛いぜ」

レイアは押し返される鎚に同じように反発のエイドスを付加し、罅迫り合いに持ち込む。

硬直状態に陥ったのを見逃す筈もなく、アタルの側面から水の鞭が自身を加速、及びしならせてアタルに急襲する。

「いいじゃねえか。楽ができて……」

アーブが操る水の鞭の脅威を察した、アタルは大剣の力を抜き、レイアの身体を泳がせた。

「と……」

レイアは泳ぐ身体を立て直そうとするが、横からは鞭が迫り、アタルの代わりにレイアを襲おうとその身を唸らせる。

だが、レイアに当たろうとした瞬間、水は鞭の形を解き、地面に零れようとするが、次は槍の形をして、レイアをやり過ぎ、アタルを貫こうとする。

「コロッセオに通っている成果が出てるじゃないか！」

炎槍をぶつけ、相殺し、爆裂の炎をアープへと向ける。

「当然よ！ 碌に通ってはいないぜ！ とはいえ、暫くは休場だがな」

水の盾を二重に敷き、爆裂の炎をその身に届かせない。

コロッセオは目玉である騎士の決闘をコロニー攻略の為に、人員が確保できなかったため、休場となったのだ。

開催されるのは、攻略後、暫く立ってからと目処が立っている。

「いい機会だろ！ お前は賭博に嵌りすぎなんだよ！」

槌を解き、槍に戻したレイアは槍を加速させ、アタルへと薙ぎ払う。

アタルは大剣でそれを防ぐと同時に、炎弾をレイアへと放つ。

空気を貪りながら、レイアへと迫る炎弾だが、光の盾がレイアへの攻撃を防ぐ。

「そうですね。賭博は身を破滅させる娯楽です。神の使徒としても見過ごすわけにはいきません」

巨大な氷柱がアタルを押し潰そうと重力に従い、落下する。

「いやいや、どう見ても俺は節制していたでしょう？」

「嘘つけ！！」

バックステップで避けたアタルはアープへと炎槍をいくつも飛ばす。何故か、鉄塊がその中にも含まれていたが。

「あぶ！」

サイドステップで大半を避けたのだが、躲せないいくつかは氷の盾が防いだ。

「というか、お前は俺に向けるなよ！今は味方だろ！」

「すまん。つい……」

三対一の模擬戦である筈なのに、味方であるレイアにアープは怒鳴るが、レイアは柳に風とばかりに気にした様子はなかった。

その後の訓練は激しさを増し、終わった時には三人とも疲れ切っていた。

「マールテルに治療と疲労回復のデユナミスをかけてもらいながら、アタル達はこれからの事を話す。」

「攻略が終わるまでどうする？」

「どうするもなにも訓練しかやることないだろ」

「そりゃ……そうだけど」

アタルの指摘にアールプは意気消沈する。

「今までコロッセオを楽しんでいただけに、今の時間は彼にとって  
は苦痛ともいえるのだ。」

「あたしもシヴァについていけばよかったかな」

シヴァ達は軍の出征に付いていつている。

「とはいっても、あくまでそれは非公式であり、ただの観測に止めるだけだった。」

「それは先生にもシヴァにも止められただろう。観測にはお前は邪魔だった。」

「だってよ……」

「拗ねるレイアではあるが、シヴァ達がアタル達を連れていかなかったのはこの点にある。」

「あくまで観測に止めるだけなので、介入しそうな人物の同行は避けたのだ。」



その監督役としてエリオスも残っている。

「待つしかできないというのも辛いものですね」

「ああ」

コロニーをギリギリ見下ろせる丘で、シヴァは穢魔にもローマーナ軍にも察知されないように隠密に観察していた。

シヴァがローマーナ軍に付いていったのは加勢する為ではない。出てくるであろう厭魔の能力を洞察するためだ。

ローマーナ王国からは介入するなどの通達があった。故に彼は何が起こったとしても介入する気はない。

「しかし、ローマーナ王国も馬鹿な選択をしたものね。折角使える駒があるのに使わないなんて」

「勝てるという幻想に取り憑かれているのだろ。それが、虚妄が生み出した幻想になるのか、現実になるのかは定かではないがな」

シヴァとしては人の情思が絡む、特に国の様な巨大すぎる人の思惑など気にも留める気はない。

彼にとつては自分にとつては有益か無益か、それとも邪魔になるのかという損得勘定でしか測る気はない。

故に今回の出来事は彼にとつては取るに足らない出来事だった。

要は、欠片が手に入ればそれで良いのだ。

『勇者』としての誉れも、矜持も持ち合わせておらず、武功を挙げることでも人々に感謝される事もシヴァは興味の一片すら抱かない。

「我としてもどうでもいいな。失敗したとしても数は減らせるだろうからな」

「私としてはどれくらいかかるのかが気にかかりますね」

野宿する事に抵抗はないが、それでもベットなどがあつた方が良く、食事も野宿では摂取できる物が限られるので、早めに終わる方が都合が良いのであつた。

「それこそ、彼ら次第ですね」

セレナの見遣る先には拠点を建設するローマーナ軍の姿があつた。

ある幕舎の一つで、今回の攻略の最高責任者であるマリクス・レガトウスは友人である今回編成された精鋭部隊隊長ガイウス・シーザーと語り合つていた。

「長いようで短かつたな」

「ああ……ようやく死んでいった戦友達に報いることができる」

マリクスもガイウスも共に以前の攻略に参加した身であると同時に、敗残者でもある。

その時に受けた屈辱を返す為に彼らは生き恥を晒して生きてきた。

「あれから兵士達は戦う事を恐れ、一時はもう二度と戦うことはできないかと思つたよ」

「だが、私達は兵士達の誇りを取り戻し、勇敢に戦う事を誉れとすることを兵士達に教示することができた。だから、ここにいる」

「ああ、その通りだな。友よ」

マリクスはこの日の為に二本のワインを用意した。

一つは今飲んでいる勝利を誓うワイン。

もう一つは勝利した後の祝福のワイン。

ローマーナ王国はワインの生産を他国よりも多く扱っており、マリクスはローマーナのワインワインこそ世界一だと信じている。

チーズを一つまみする。ワインの生産が盛んな為かワインに合うつまみもローマーナ王国は多彩な色を放っている。

勝利を誓うワインをグラスの中で揺らすと、最高級のルビーの様に光り輝いている。

ローマーナ王国は誉れある国だとマリクスは確信している。

このようなものを生み出せる国が断じて穢魔程度に負ける筈はないと。

「何故だろうな。勝利すると一片の疑いもないほど確信しているのに、どこか不安を抱いている自分がいるよ」

ガイウスは揺らめくルビーの輝きを目にしながら、その輝きを曇らせる闇が瞳の中に映っていた。

「戦場を前にして、ナーバスになっているだけだよ。隊長の君がそんな様では付いてくる部下が可哀想だろ」

彼とて、一抹の不安はある。

しかし、最高責任者として表に出すことはしない。上司の不安は部下に伝播してしまう為、彼は己の勝利を信じ込まねばならない。

「私もセンチメンタリズムになっていたようだ。確かにこれでは部下も浮かばれない」

「そうとも。我らの役割は最善を尽くし、勝利を信じることだ」

マリクスはクラスを掲げ、不敵な笑みを浮かべる。

「それでは私達の勝利を祝って」

ガイウスもグラスを掲げ、マリクス同様不敵な笑みを浮かべる。

「乾杯！」

交差するグラスは勝利の鐘の様に音を奏でた。

「全軍配置に着きました！」

伝令役の兵士が各軍が配置に着いた事を告げる。

「御苦労。下がりましたえ」

「ハ！」

伝令役の兵士は敬礼し、マリクスの元から去っていった。

「さて、地上部にいる穢魔が思ったより数は少ないがどう思っ？」

マリクスは隣にいるガイウスに意見を窺う。

穢魔は巢とも言えるコロニーに生息しており、そこから溢れているものが地上を徘徊していると言われるが、以前の偵察よりも数は大分少なくなっている。

そのことに若干の不安を覚え、そのことを悟られないようにガイウスに問うたのだ。

「私とて測りかねます。とはいえ、数が減っているのであれば、私達にとっては好機ではないですかな」

「ふむ、確かにそうだな。今の内に削減できるのであれば、後々こちらに優位に働くだらう」

マリクスは思考を切り替え、最善を果たすべく指揮官としての顔に戻った。

「それでは、全軍！ 作戦を開始せよ！」

『オオオオオオオオオ！！』

兵士達は指揮官の号令の元に、祖国を取り戻すべく勇壮たる雄叫びを平野に響かせた。

「始まったようですね」

兵士達の鬨の声はシヴァ達の所まで届いており、観賞の合図を示した。

シヴァ達は風が優雅にそよぐ平野の上とは思えない様相でローマーナ軍の攻略を観賞していた。

簡易テーブルの上には、紅茶とクッキーが用意されており、ここが平野の上でなければ、優雅な午後の一時を見る者に味合わせたいだろう。

この簡易テーブルと紅茶のカップ及び、皿はデユナミスで出したものだ。

《錬金の理》<sup>アルケミー</sup>は何も、武器の生成だけが目的のデユナミスではない。

元々、物が無い時の代用品として用いられるのが一般的だ。

とはいえ、シヴァ達が出しているカップや皿の様に麗美な紋様を描くとなると、相当の熟練を要するし、長時間出すことは消耗も激しい。

「我としては……さっさと終わってほしいと……思うぞ」

守護聖霊としての身長に戻ったサティは両手で一枚のクッキーを頬張りながら、戦いを観賞している。傍らにはサティ専用の小さいカップも置いてある。

サティは菓子などを食べるころはこうして、守護聖霊の身長に戻ることが多い。こうして小さい身体で菓子を頬張るのはお得感があるらしい。

「穢魔の構成はどうなっているのですか？」

フラウはシヴァ達のカップに紅茶を嬉しそうに注ぎながら、穢魔の構成数を聞く。場合によっては最初だけフラウの出動もありえるからだ。

「屍骨種や水棲種が多いみたいだな」

注がれた紅茶をゆっくりと口にしながら、穢魔の陣の構成を調べ

ていたシヴァはローマーナ王国のコロニーはその二つの種が多い事を確認した。

「では、私が最初減らした方がよろしいですね」

シヴァの役に立てることを嬉しそうに告げるフラウ。

屍骨種も水棲種も動きが遅いので、範囲攻撃の方が有利な面があるのだ。

とはいえ、フラウも回復という役目もあり、ヒュレーの消費を少なくする必要があるため、最初の方しか戦うことはできないが。

「穢魔自体はどうでもいいですね。あれは数の多さが厄介なだけだから」

穢魔は確かに最も厄介な点は数の多さにあるが、一般兵にとってはそのようではない。

今も彼らは複数で単独の穢魔を撃破している。

穢魔を殺すことに慣れすぎた三人にとっては最早穢魔など歯牙にかけ気はあまりないのだ。

「厭魔はでておるのか？ ……はむ」

「今のところ姿は見えないわね」

彼らが警戒すべきは厭魔であり、『勇者』の役目は厭魔を倒すことでもある。

単騎で戦場の趨勢を変えてしまう異形の災厄。

これをどうにかすることがシヴァの役目ではあるが、同時にシヴァは滑稽だとも思っていた。

単騎で戦場の趨勢を変えるのは厭魔だけでなく、『勇者』である

シヴァも同じことだ。その立場が違っただけの災厄の守護剣。それが自分の立場だと理解しているだけに、そのことを認識している者がこの世界にどれだけいるのか……。

「サテイ、口に跡が残っているわよ」

フラウがクッキーを一枚たいらげたサテイの口元を拭く。  
サテイは擦ったそうにそれを受け入れている。

「すまないな。よし、次だ！」

サテイは次のクッキーの攻略に笑顔で取り掛かった。  
ここにいる誰もが、サテイの行動を咎めず、笑って彼女の行動を受け入れていた。

シヴァが守るべきはこの世界だと思う。  
この世界を守るべきだと思うことに誘導されたことは否めないが、それでも彼は道化であろうとも守り続ける。  
この世界だけはきつと変わらないから。

「あら、戦局が変わったみたいね」

彼らが遠望する先は戦いの歌劇を次の章へと進めていた。

ある兵士はこう思った。

勝てる。きつと、祖国を取り戻せると。

戦場は混戦の様相を見せており、正確な状況を把握することはできなかつた。



それでも、自分達は穢魔を水が染み込んでいくように穢魔の群れを駆逐していつてるのを景色の変化で察知していた。

班として組んでいる仲間の兵士が屍骨種の腕を砕いた。

そこを自分ができる精一杯のエイドスで屍骨種の存在を粉碎した。そこを別の屍骨種が貫こうと襲いかかるが、別の仲間がカバーしてくれて、生きながらえた。

きつと、自分達は生きて帰れると、仲間を、そして自分の力を信じ、苦難を乗り越えた。

ふと、彼の身体に影が包み込むように覆いかぶさった。

雲が太陽の光を遮ったのかと見上げると、三頭の頭を持つ獅子の巨人が彼らを虫けらを見るような眼で見下していた。

厭魔の巨躯の放つ凄烈な威圧に、彼は絶対的な力の彼我の差を感じ取り、生きて帰れる気が全くなかった。

カクスは己が巢の穢魔が刻一刻と減っていく様を、感じ取っていた。

彼はこの一帯の主。変化を把握できない筈もない。

その巨躯をのっそりと立ち上がらせる様は、鈍重さを顕しているようではあるが、同時に泰然として不動の在り様を周囲に誇示しているようでもあった。

日の光が彼の六つある臉を刺激する。

虫けらどもが踏みつけてみるといわんばかりに群がっている。

ああ、いいだろう

己が罪を自覚していない魯鈍な虫けらどもよ

知るがいい！これが大地の怒りだ！

「我らが精鋭達！ 頼んだぞ！」

カクスの姿を見止めたマリクスは直ぐに指示を飛ばし、カクスを迎え撃つ態勢を整えた。

マリクスの指示を受けたガイウスは彼に付いてくる精鋭達に檄を飛ばす。

「我らが戦友よ！ 今こそ決戦の刻が来た！ 天に見せつけよ、我らが勇姿を！ 大地に刻みつける、我らが誇りを！ 我らが祖国に齎すのだ、勝利の凱旋を！」

ガイウスの勇烈な檄に、精鋭達は感化され、負けはしない、勝利を我らの手にと、ローマ王国中に届かせるように鬨の声を挙げる。

「いざ、進め！ 祖国の為に！！」

構成員を十名からなる四つの班は、カクスを取り囲むようにローマ一ナ兵が死力を尽くして開けてくれた活路を大地を蹴り上げて進軍した。

カクスは逃げようとする兵士を造作もなく踏みつける。

足には潰れた感触がするが、彼はそのような些事を気にせず、手に持った棍棒を地面に叩きつけた。

大地に亀裂でも奔りそうなほどの衝撃と共に、轟音が戦場に響き渡る。

大地が揺れたことにより、兵士達は立っていられず、足を止めてしまった。

そこをまるで影響を受けていない水棲種が襲いかかり、兵士達を

鎧を、肉体を溶かしていく。

逃げようにも足元の揺れがおさまらず、逃げることは困難だった。襲いかかるのは水棲種だけでない。

まるで、天をも焦がしそうな業火が兵士達を骨まで焼き尽くさんとはかりに唸りをあげて、絶望を撒き散らしていく。

その業火に焼き尽くされまいと盾を発動させるも、別の穢魔が襲いかかり、嘲笑うかのように犠牲者を増やしていく。

勝てない。死にたくない。助けて。

押し寄せてくる絶望が兵士達の心に蔓延していく。

誰もが勝利を諦め、絶望に膝を折りそうになった時、光芒が兵士達の傍を駆け巡る。

「我らがロマーナ軍兵士達よ！ 伏せた顔をあげよ！ 貴様らの眼には何が映る？ 絶望が貴様達の視界を塞ぐか？ 死の風が貴様達の頬を撫でるか？ 死神の足音が貴様らの耳に聞こえるか？ いいや、そんなものはない！ なぜなら私達が絶望を断ち切るからだ！」

兵士達が顔をあげると、精鋭部隊が穢魔を薙ぎ払い、道を拓く。厭魔の攻撃を防ぎ、勇敢に立ち向かっている。

希望は歩いた道の先にあった。

生にしがみつけそうな藁があった。

光が道標の様に行く末を照らしている。

兵士達は折っていた膝を、震える足を無理やり立たせる。

生まれて初めて立った動物の様にふるぶると震えているが、大地に足を生やしている。

一歩踏み出す。

足取りは重い。だが、歩くことができる。

二歩踏み出す。

足に力が戻ってくるような活力が身体の底から湧き上がってくる。

三歩踏み出す。

いまや、足の震えは止まり、確かな足跡を大地に刻んでいる。

四歩踏み出す。

伏せていた顔はしっかりと前を見つめ、彼らの行く先を見据えている。

五歩踏み出す。

大地を走り抜け、前へ、前へと駆け抜けている。

「行くぞ！！ 我らの明日へ！！」

『オオオオオオオオオオオオオオ！！』

兵士達の喊声は荒波の様な怒号と化し、水が氾濫を起こすかのよう  
に戦場に溢れかえり、洪水のように穢魔達を呑み込んでいった。

カクスは群がる虫けらどもの質が格段に上がっている事を認識して  
いた。

試しに、振動のエイドスと共に大地を鳴動させんばかりに踏み込  
みを行うと、虫けらどもは、周囲一帯に振動が及ばないように、取  
り囲むようにエイドスの壁を築き上げ、振動を吸収・拡散させた。

動けるようになった他の虫けらは、濁流の如き勢いで同胞を駆逐  
していった。

これは不味いと棍棒を振り回すが、虫けらどもは忌々しいことに、棍棒の軌道を大量の水をぶつけ逸らしたり、氷の壁を何枚も棍棒の行く手を遮る様に出現させ、棍棒の速度を減衰させ回避し、または勢いを失くした棍棒を受け止めていた。

他の虫けらは最早同胞程度では倒すことはできず、全滅も時間の問題となっている。

させじと、三つの頭部から炎のエイドスを放射するも水の盾が次々と打ち消していき、遂には今まで虫けらを焼き尽くしていた炎は何者も燃やさず消滅した。

最早今現在残るのは自分だけであり、一斉に虫けらどもは牙を向けてきている。

ガイウスは逸る心を抑えることに苦心していた。

悪夢の結晶たるカクスがその身に傷を増やしていき、自分の掌に落ちていかせるような錯覚をガイウスに齎していた。

ガイウス達が四方を取り囲んだことで、カクスの攻撃は功を成すことができず、次第に戦局はこちらに傾いていった。

十名からなる班の七割は防御に回している。カクスの恐ろしいところはその攻撃力と広範囲に及ぼすエイドスにある。

それを封じてしまえば、カクスは現状のように痛手を負い、窮地

に立たせることが可能である。

また、兵士達にも被害を及ぼさないことで、穢魔の殲滅にも一役買っており、攻略ももはや時間の問題となっていた。

兵士達が地上部の穢魔の殲滅を完了した雄叫びをあげる。

ならば、自分達もその声に応えねばなるまいと自分自身に喝を入れた。

四方から最大攻撃による厭魔の討伐を戦友に命じる。

「水の結晶よ」

溢れ出る力の波動が周囲を凍てつかせていく。

「縛する白き鎖と永劫の眠りを妨げぬ氷櫃を彼の者に与えたまえ」

凍てつく周囲とは裏腹に、心はマグマのように煮え滾っている。

「しからは冰雪の献花を手向けとして送ろう」

さらばだ、悪夢よ。私達は覚醒の時がきた。

「フリーズ・ヒューラル  
《氷枢花葬》！」

凝縮された冷気は、花卉が咲き乱れるかのように、冷気の球が通る跡を凍結させていく。

四方からいくつもの冷気の球がカクスを絡め取ろうと、白き鎖を

伸ばしながら彗星の尾の如く向かっていく。

カクスはそれを撃ち落とそうと、同じように凝縮した炎の球を冷気の球にぶつけるも、三つの頭部から発せられる三つの炎の球では残り十の流星は撃ち落とすことはできなかった。

カクスの身体に当たった流星は、凝縮された凍気を解放させ、その身を枢の中へと閉じ込めんとするように凍結の領域を増やしていく。

次々と流星は着弾していき、カクスの身体に凍結が広がっていく。断末魔が平野に響き渡るが、その断末魔さえも氷の枢の中に閉ざされていく。

やがて、凍結がカクスの全身に行き渡った時、氷櫃が完成した。氷櫃の周囲には、氷櫃の中にいる者の冥福を送ろうとするかのように、氷の花が百花繚乱とばかりに咲き乱れた。

静寂が場を支配した。

暗い土の中から芽が出て、蕾になり、大輪の花を咲かせていくように、徐々に、ゆっくりと、自分達が成した事の戦果が全身に染み渡っていった。

歓声が湧き上がる。

「いいやったー！！」

「勝った！ 勝ったんだ！！」

「祖国を解放出来たんだ！！」

「人間様を舐めるんじゃないぞ！！ 化け物どもが！」

「俺達は生きて帰れることができるんだ！」

「仇を討ったぞ！ 友よ！」

「やっと、悪夢から解放されるんだ！！」

歓声は鳴りやまず、いつまでも響き渡っている。

誰もが涙を流し、横にいる戦友達と抱き合っている。

誰も自らの喜びを隠そうとも、涙を流す事を止めなかった。

誰もが、勝利に酔いしれ、明日も生きれる事を胸の内に噛み締めていた。

マリクスは涙を流し、この戦果を迎える事が出来た英雄達に感謝の念を送っていた。

祖国は解放された。悪夢から解放された。ローマーナ王国に勝利の凱旋を齎すことができる。

そのことに胸が一杯で、言葉を口にすることは今の感動を貶してしまう気がして、黙したまま感涙の涙を垂れ流しにした。

「ようやく、終わりましたね」

参謀が同じように号泣しながらマリクスに話し掛ける。

「ああ、ようやく」

ふと、カクスを凝視してみると、氷櫃の中にいるカクスが熱を発しているかのように、灼熱の色を灯している。

氷が蒸発していつているようにも見える。

「まさか！」



ありえない凶事にマリクスが愕然としていて、それを嘲笑うかのように氷の柩が音を立てて崩れ去った。

それはまるで、自分達の希望が崩壊していくかのような音色でもあった。

カクスは己を恥じた。

無力な虫けらと思っていた輩がどうやら害虫だったことに気付かないとは。

もし、この身がこの地特有の耐性をつけていなければ、敗れ去っていたことを認めた。

だから、これからは全力で害虫どもを追い払おう。

一片の欠片も残さず、焼き尽くす事を誓おう。

さあ、刮目するがいい。

これが貴様らを焼き払う煉獄の炎だ。

『フリーアー  
葬世』

天をも焦がす炎で我が主に捧げよう。

『ヴァルカンスミス  
《赫焉の炎鎚》』

ガイウスは目の前で起こっている現実を信じることができず、茫然自失となってしまった。

だからだろう。次の対処が遅れてしまった。

カクスがその手に握る炎鎚を大地を揺らさんとばかりの速度で、豪風をその腕に巻き込みながら叩きつける。

ガイウスは何故かそれをスローモーションで捉えた。

これは死の間際に起きる走馬灯のようなものかと、体感速度が遅いなか、意識はそのような思考を流した。

身体が自分の意思を越えて勝手に水の盾を作り上げた。

目を覆わんばかりの閃光と生物の存在を許さぬ熱と大地の鳴動が場を支配した。

閃光が晴れた時、周囲の光景にガイウスは我を失った。

煉獄の炎が周囲一帯に広がり、形あるものを炎が舐めるかのように溶かしていく。

見るといつのまにか大地が少しばかり盛り上がっている。

いいや、自分が陥没した大地に居るのだと遅まきながら悟った。

焼け焦げた戦友達の死骸が目につく。

何人かは息をしているが、もはや絶命寸前で数分と待たずに死んでしまうだろう。

彼らを助けようと動くが、身体はバランスを失い、地面に倒れこんだ。

気付かなかったが、両腕が無い。肘から先が無くなり、肘は焦げて黒ずみになっている。

身体を見下すと、全身火傷だらけで、無事な場所などほとんどない。

自分が怪我をしていることに気付き、今さらながら全身に激痛が走る。

喘ぐと、熱せられた空気が喉を焼き、呼吸が困難となった。

薄れゆく意識の中、ガイウスは友に願いを託した。

(祖国を 頼む！)

炎がやがて彼の身体を包み込み、骨一つ残さず溶かしていった。

マリクスはカクスが齎した業火の炎が自身の戦意までも燃やしていったのを立ちすくんだまま感じ取っていた。

この場にいる誰もが放心しており、カクスの傍にいた兵士達が燃えていくのを呆然と眺めていた。

そのショックから立ち直ったのは指揮官としての矜持からか、マリクスは放心していた己を叱咤し、退却の指示を出した。

「全軍に通達する！ 退却せよ」

「しかし！」

「これ以上の継戦は不可能だ！ 速やかに実行せよ！」

「りよ、了解！」

参謀はマリクスの怒声に一瞬立ちすくむも、すぐに全軍に退却の指示を出す。

だが、遅かった。

カクスは遠方にあつた本陣に炎鎚を投げつけ、本陣を炎の海とした。

「っ！」

かろうじて、マリクスは意識を保っていた。

おそらく、投げつけてきた炎鎚をなんとかしようとする誰かが防御壁

を張ったのだと直感で察した。

だが、衝撃に身体が動かず炎がその身を焦がそうと迫ってくるのに、身体を叱咤するも言うことは聞かず、逃げられそうもなかった。死神の足音が響いてくる。

大地を揺らしながら歩いてくる。

マリクスの身体が影に覆われた。

見上げると、三頭の獅子を持つ巨人が虫を見るような目で見下していた。

マリクスは己が死期を悟った。

再びカクスが炎鎚を天に翳している。まるで天に捧げるかのよう

に。

諦観からマリクスは目を閉じた。

(勇者殿……祖国を、頼みます)

彼の身体は痛みを感じる間もなく蒸発した。

シヴァ達はその光景を一秒たりとも逃さず見ていた。

「どうやら、炎のエイドスを極限にまで高め、付加した振動のエイドスと拡散のエイドスを叩きつけるのが、奴の葬世みたいだな」

「ええ、しかもそれを投げつけることで遠距離攻撃も可能みたいね」

「爆炎と要領は同じみたいね」

「規模と威力は半端ではないがな」

シヴァ達は今のカクスの葬世を見て、それがどのような原理で発動されたのかを冷静に分析していた。

「兄様、今すぐ倒しますか？」

今ならば、カクスは単身であり、余計な邪魔がされず、戦うことができる。フラウは指摘する。

「やめておこう。俺としてもその方が都合がいいが、後で余計な悶着をつけられたくないからな」

「その方が無難でしょうね。どうせ次は私達を討伐隊として派遣するでしょうから」

だが、シヴァ達からは応諾の声は上がらなかった。

彼らにとってみれば、余程の戦力差が無ければ、逃走という選択肢はない。(命じられれば別だが)

カクスの討伐は多少の手間がかかるが、可能だと冷徹に判断を下している。過小も過大な判断も下してはいない。ただ在るがままに考察した結果だった。

彼らにはローマーナ軍を助ける気など毛頭ない。

事前に手を出さないと命令されたのだ。ならば、何が起こったとしても、それは彼らの選択したことだと解釈して、命令された通りに手を出さなかった。例え、全滅したとしても。

「さて、ではラローマに戻るうか」

「ええ」

シヴァ達は《アルケミ錬金の理》で用意した簡易ティーセットを消し、その場を後にした。

特に急ぐことでもなかったので、ゆっくりと旅路を進んだ。

しかし、ラローマに行き着いた彼らが目にしたのは、ラローマの変貌した都市の姿だったのだ。

優美で華やかだった煉瓦の建築物は、いまや見る影もなく崩れ去っている。

都市中を広大に奔っていた運河は、水底まで姿を現しており、小舟の名残だけが水が流れていた証だった。

炎が街に所々その勢力を伸ばしていたのか、黒煙が立ち昇っていた。

建物が崩れ去った際の塵が空気を澱ませ、嗅ぎ慣れた血の匂いがそこかしこに充満している。

見ると、建物の崩壊に巻き込まれたのか、血がそこから流れており、道の所々に血痕や腕や足などの人間の一部分が無造作に転がっている。

当然ながら、死体も転がっている。

人々の悲痛な叫び声が、家族を、友人を、恋人を喪失した悲嘆の声が、齎したものに呪詛を吐きかける怨嗟の音がそこらじゅうに流れている。

「何があつたんでしょうか？」

フラウは少しばかり顔を青褪めながらシヴァに問いかける。

シヴァの鋭敏な聴覚はその原因たるを拾い上げた。

「どつやら、穢魔の襲撃があつたらしい」

シヴァはいつもどおり、全く心を読ませない無表情な顔で、事の原因を伝えた。

彼はこれらの光景を見ても、思うことは全くない。このような光景を見ても立ち止まらないように造り上げられているからだ。

「みたいね。詳細は分からないけど」

彼女の聴覚にも原因は届いているが、詳細は人々の声からは知ることはできない。

「とりあえず、施設に向かった方がよいのではないか？」

サテイの提案にシヴァ達は頷く。

第六感なのだろう。シヴァの中の何かが呟く。

「フラウ、お前達はいつでも旅立てるように準備しておけ」

「？ 分かりました」

シヴァの言うことは理解できなかったが、フラウがシヴァの指示に反することなどありえないので疑問に思いながらも頷いた。

シヴァ達は行く先で助けがなく、死にかけている者達を軽く助けながら、ウオードへと向かった。

フラウ、セレナ、サテイはウオード内でシヴァとは別れ、いつでも旅立てるように準備だけして待機した。

## 第四章 枯渴

その異変は唐突だった。

「何だ、これは？」

養殖業を営んでいた男はまるで魚達が何か怯えているように動き回っていることに気づく。

このようなことはかつてないことであり、魚達にストレスを与えることは品質に関わることなので、すぐに原因を究明しようとしたが、原因を探ることができず、謎の事態だと国に報告しようとした。

ここ、ロマーナ王国は漁業が盛んであり、港には漁船が数多くある。

また、ワインや海産物の出荷なども陸路だけでなく、海路も利用することから、貨物船が港を数多く出入りしている。

故に、港の管理は厳重であり、それを管理する施設も充実していた。

港の出入船を管理していた職員達はまるで嵐の到来を予感させるような悪寒を感じ取っていた。

だが、空は晴れており、天気が急激に崩れることはないように思えた。

気のせいかと思い、各々の持ち場となっている仕事にかかるが、船の出入りに注意を払っていた職員はある異変が起こっていることに気付いた。



「ん、何だ？」

船が入りする以外に、湾内にある海面に変化を齎すものは存在していなかった。

だが、突如として海面が盛り上がっていくではないか。

まるで巨大な何か海底から出現するように。

海面の上昇に伴い、出入りしていた貨物船や漁船、湾内に停泊していた多くの船が転覆の憂き目にあうが、そのようなことは些事ではなかった。

海皇種がその巨大な姿を湾内にいる全ての者に誇示するように、海面を突き破って登場した。

海皇種は流線型の体型と壁のような頭部をしており、広げれば全長にも達するような巨大なひれがまるで港を覆わんとばかりに広げられていた。その巨軀と黒光りする表面の鱗のようなものから、何処に目がついているかでさえ一目では分かりづらい。

そして、その巨軀を陸地へと僅かに乗り出すと、モップのような口を開いた。

海皇種は貨物船を丸ごと呑み込んだとしても余りある巨大な口を開くと、そこからは大量の穢魔が続々と出現してきている。

その穢魔の群れを先導しているのは、真紅の身体を陽光の元に煌めかせる狼、ジエヴォーダンであった。

ジエヴォーダンはロマーナ王国に声高らかに宣告するような咆哮を指揮者の如くあげると、多数の穢魔の足音が協奏曲の如く奏でられる。

体内の何処にこれほどまでの穢魔を蓄えているのかと疑問に思うが、実はそうではない。

海皇種の口腔内には回廊門が設置されており、そこはロマーナ王国南部のコロニーと繋がっていた。

南部の攻略の際、地上部に穢魔が少なかったのはそういうわけで

ある。

この侵攻は南部の攻略とほぼ同時刻に敢行されているのであった。

忘我の域にあつた港湾施設の責任者は、我を取り戻すとすぐに傍にいる職員に命令を下す。

「すぐに、王宮に穢魔襲撃の連絡と港湾警備隊に連絡を！」

「は、はい！」

指示を受けた職員はすぐさま実行に移ろうとはしたが

「ぎゃー！」

突如として起こつた水の襲撃に行動することは叶わなかつた。

海皇種が港湾施設を無差別に水のエイドスを放つた結果が、ここにも降りかかつていた。

「うわあああああー！」

「助けてくれ！」

「逃げるー！！！」

港にいた職員、船夫、市民は突然に湧いた穢魔を恐れ、悲鳴をあげて、我先にと逃げ出す。

穢魔は逃げ遅れた者達を次々とその毒牙にかけ、犠牲者の数を増

やしていった。中には、穢魔でなく逃げるときに転んでしまい、我先にと逃げ出す人々に踏まれたことで息が絶えた者もいたが……。

「早く！ 早く逃げてください！」

遅まきながらも港湾警備隊が出動するも、もはや人々の誘導は穢魔の恐怖に怯える人々の耳には届かず、警備隊が身体を張って穢魔の進行を遅らせるしかなかった。  
しかも

「来るな！ 来るな——！！」

「ちくしょう、ちくしょう！」

「助けてくれ！」

港湾警備隊は人間相手の訓練は積んではいるものの、穢魔の相手はほとんど素人に変わりはない。

よって、多少は抵抗したものの、穢魔の物量に押されて全滅することとなった。

王宮の一室、王の執務室でロムルスはいつもの責務をこなしていた。

彼の後ろには様々な装丁を凝らした本が所狭しと並んでおり、彼の机には本日済ませなければいけない書類が積まれていた。

彼は本日攻略を行うと、マリクスから秘密回線で連絡があったが、特に心配はしていない。

誇るべきロマーナ軍の英雄達が勝利を齎してくれると信じている

からだ。

この世界、エイコーンの連絡手段は手紙という手段が用いられることもあるが、もっぱら連結水晶と呼ばれる魔導器が使用される。これは特殊な技法で創られた魔晶石を個別に登録することで、他の魔晶石と連結することができ、魔晶石が埋め込まれた装置を用いることにより、リアルタイムで離れた場所にいる者と会話できる代物だ。

ロムルスが書類を処理していると、何やら外が騒がしくなっている。

不審に思い、連絡を取ろうと連結水晶に手を伸ばしたのだが、誰かが慌てて王の執務室に入ってきたので中断した。

「何事だ！ 騒々しいぞ！」

王の威厳に満ちた声と威圧を伴った碧の瞳に乱入者、大臣は委縮してしまい、ノックも無く入室した不敬を謝罪した。

「お許しください、陛下！ 何分、緊急事態だったものですから…」

「よい。それで何が起こったのだ？」

「湾内から海皇種が出現し、都市内に多数の穢魔が侵入しました」

「何だと！？」

一瞬何かの冗談かとロムルスは訝しんだが、大臣の青褪めた表情

と頬を流れる冷や汗がそれを真実だと色付けていた。

「現在、港湾警備隊と待機させておいた兵士達で穢魔の殲滅と市民の救助を命じておりますが、それが破れるのも時間の問題かと……です。攻略に派遣した軍を呼び戻す許可をいただきたいのですか……」

「むう……」

ロムルスはどの選択を選ぶか、思考を巡らせた。

大臣の言うとおりに、軍を呼び戻すことは可能であるが、それまで都市が持つか保証はない。

それならば、知らせずに攻略に専念させるか？

それとも、それまで持つと信じて呼び戻すか？

二つの考えがロムルスの脳内を駆け巡るが、不意に『勇者』を待機させていた事を思い出した。

彼の者は単独で穢魔を退けたと報告もある。

ならば、都市内にいる者達と協力すれば、何とかなるのではないかと判断した。

「よし、ならば勇者に」

言葉は続かなかった。

爆発音とともに、原因不明の振動が王宮を崩壊させるように震撼させる。

「な、何事だ!？」

棚にあった本が揺れにより、棚から次々と落ちていく。机の上に置いてあった書類も床にばら撒かれていく。

揺れが治まり、原因を探ろうと待機していると、鎧を纏った王宮兵士達が早急に駆けつけてきた。

「陛下、ご無事ですか！」

「何があつた!?!」

「何者かに襲撃されて、王宮に大穴が空きました。ここは危険です！すぐに地下の避難所に避難してください！」

「わかった。ワードに連絡して、勇者を穢魔の討伐に向かわせよ！」

「は!」

隊長らしき王宮兵は部下の一人に目配せすると、連絡に向かわせた。

「それでは、護衛に付きます」

「ああ、頼む」

避難所からでも指示を出せることもあり、国のため自身の安全を確保する必要があるので、ロムルスと大臣は護衛の伴い避難所へと向かった。

「さてと、僕も仕事をしないとね」

男はそう言って、王宮にほど近い屋根の上からエネルギーを放つ。

ただし、男の掌に集められるヒュレーは常識では考えられないほど高密度で、如何ほどの修練を行えばこの域まで辿りつけるのかと思わせるほどだった。

「アクアプローション  
《水爆殺》」

男が放った水球は掌ほどの大きさのものだったが、それが王宮の壁に衝突すると水球はそれほどの水がその水球の中に凝縮されていたのか、多量の水とともに、まるで音速にでも到達するような速度で周囲に破壊の渦を撒き散らした。

それは王宮を震撼させるほどの威力だった。

「ふむ、これで少しは上の方も混乱するだろう。後は」

男は懐から炎を封じ込めたかのような真紅の水晶を出すと、近くの水路に放り出した。

すると、水晶が落ちた場所からまるで血のような紅が滲みだすと、ラローマ全体に流れる水路をその紅で侵食していく。

やがて、紅がラローマ全体に広がると、水路の水が砂漠に水滴を落とすかのように、みるみるうちに枯渇していく。

水底にまで到達するまで時間はさほど変わらなかった。

ラローマじゅうに流れる水は一滴残さず、その姿を消してしまった。

ラローマに流れる水は海と繋がっているため、すぐに水路が満たされるかと思われるが、そうはならなかった。

大海、港に通じる水路がまるで見えない壁に遮られているかのように、海水は流れ込まなかった。

「ふむ、僕の仕事はこれでおしまい。ジェヴォーダンには上手くやってくれるかな？」

ジェヴォーダンは壁を蹴り上げ、屋根伝いに目的地へと向かっていった。

遮るものがない屋根の上、さらにジェヴォーダンの身体能力もあってか一陣の風となっていた。

同胞の匂いが目的地を告げる。微かではあるが、ジェヴォーダンの鼻はその匂いをかぎ分けていた。

目的地である円形闘技場に着くと、匂いの元がある地下へと向かった。

そこで目にしたのは同胞の無残な姿だ。

むせかえる程の血の匂いが地下には充満している。

同胞達は動きがとれないほど痛めつけられており、無傷な者など誰もいない。

ジェヴォーダンは知る由もなかったが、闘技場で穢魔を討伐する際、これまでギリギリ生かしておいた穢魔をデュナミスで回復させて、出場させていたのだ。

「な、何だ？」

この男は同胞達の監視員だと理解したジェヴォーダンはその頭部を噛み砕いた。

他にもいたが、全て皆殺しにして、この地下に人間は一人も存在しなくなった。



ジェヴォーダンの首には以前、見られなかった首輪があり、これは今回のために用意されたものだった。

ジェヴォーダンは首輪に自身のヒュレーを流す。

すると、首輪の魔導器が勝手に登録されたデユナミスを紡ぎ出す。光がジェヴォーダンから放たれ、それを受けた穢魔の傷がみるみるうちに塞がれていく。

光が治まった時、ジェヴォーダンは消耗の激しさから立っていらなかった。

穢魔が体当たりで、その爪で拘束されていた牢を破壊する。

冷たい床からジェヴォーダンは弱弱しく立ち上がり、一声鳴くと穢魔はその命令に従う。

暗い牢獄から解放された喜びか、穢魔達が一斉に叫び声をあげると、周囲の建物を破壊し、港の穢魔達と合流すべく、港へと向かい始めた。

突然の爆発音と悲鳴からアタル達は訓練を中止した。

「何だ!?!」

「何が起こったのでしょうか?」

「これは爆発音?」

「どっちからだ!?!」

突然に湧いて出た異常事態にアタル達は落ち着きを失くす。

「落ち着け! 何が起こったのか、確かめるぞ」

エリオスはそういうとウォード施設へと向かい始め、アタル達はすぐさまエリオスの背を追いはじめた。

「何があったのですか？」

エリオスのどっしりと落ち着いた態度に、慌てふためいていた職員も落ちつき、気を取り戻す。

一つ深呼吸すると、事態を確認すべく連結水晶で責任者の元へと連絡を取った。

「先生！何か分かりましたか？」

「今確認中だ」

エリオス達が少し待っていると、相手も確認を取っているようだった。

「はい……はい……そんなことが……わかりました……少し待つてほしい？ ……え、あ、はいわかりました。お伝えします」

相手の方も確認が終わったらしく、エリオス達に向かい合った。

「手短にお話しします。現在、港の方から穢魔が多数侵入しており、被害が続出しているそうです。王宮の方にも被害があったそうです。穢魔の姿が見当たらず、原因は不明。こちらはあちらで処理するそうです。皆さんには港の方の穢魔を対処してほしいとのことです」

「わかりました。お前達いくぞ！」

『はい！』

急ぐアタル達に職員は声をかけた。

「あ、待ってください！ 『勇者』様はどこですか！？」

彼女は『勇者』であるシヴァの姿が見当たらないことに気づき、アタル達にその所在を尋ねたのだ。 助けてもらおう為に。

「彼は今いません！」

アタルはそう答えると、急いで港へと向かった。

「何で？ 『勇者』ならこんな時に私達を助けるのは当然でしょ？」

彼女の呟きは誰にも届かず、虚空に消えた。

その後、彼女は他のウォードに所属している者達が現状を訪ねてきたことで、忙しさを増していった。

アタル達は目の前の地獄のような鮮血の光景に茫然としてしまった。

駆竜種が逃げ惑う人達をその牙で、その爪で血染めにしていく。

豪獣種が人々が暮らしていた家を、その丸太のような腕で粉碎し、腰を抜かして逃げ遅れた人々に降り注ぎ、ある者は生き埋めに、またある者は瓦礫に身体を挿まれる。

鳥獣種が腕を千切り、その腕を地面に落していく。

甲虫種が通つた後には、身元が分からないほど挽肉と化した人の塊が存在している。

屍骨種がその槍で人々を何人も刺し貫いていく。

水棲種が取り込まれた人は骨まで溶かされていく。

穢魔が人々を襲う姿に、

人体の一部が無くなり、痛みを訴える男に、

恋人を失くし、その亡骸に縋りつく女に、

動かぬ母親に抱きかかえられ、赤子のように泣く子供に、

アタル達は初めて直面する地獄に我を忘れてしまった。

「何をしている!!」

エリオスの怒声に我に返り、次にこみあげてきたのは穢魔に対する憤怒だった。

「くそ——————!!」

それは茫然としてしまった自分への怒りか、この光景を作り上げた穢魔への怒りか。

アタルの激情を込めた炎が穢魔を焼き尽くしていく。

「マール！ 怪我人の治療を頼む！」

「はい！」

アタルは自身の愚かさに腹が立てていた。茫然としている暇などないだろうに、と自身を叱咤する。

それ以上に腹が立てているのは、今現在襲撃している穢魔だ。

どうしてそんなことができる、と穢魔の残酷さに怒りが込み上げている。

恐怖に怯え、逃げ惑う人々の歪んだ表情が目には焼きつく。身体の一部を失くし、喪失の嘆きが心を痛める。

親しい、そして大事な人々を失くし、悲痛の声を叫ぶ人々の慟哭が耳を離れない。

こんな光景を作りだした穢魔が憎い。焼き尽くしたい。そんな怒りを込めて、目の前の駆竜種を力任せに斬る。

「アタル！ 先に進み過ぎだ！」

アタルはエリオスの声に我に返る。いつの間にかエリオス達と距離が開きすぎていた。

すぐに戻らなくては、と狭窄していた視野が戻ると、自身が知る街の景色が異なる事に気づく。

アタル自身その違和感に見当はつかないが、彼の記憶は異を唱えていた。

「どうしたんだ？」

辺りを見渡すアタルを不審に思ったのか、レイアが問いかける。

「いや……なんだか、景色が違う気がするんだ」

「そりゃあ、これだけ破壊されてれば違ってくるだろう」

レイアが言うとおり、美しかった街並みは無残な姿を晒しているが、アタルの直感は違つと告げている。

「アタルの違和感は水路の事だろう」

「水路……あ！」

エリオスがアタルが感じていた違和感の正体を暴く。ラローマに流れる水路の水が今は全く流れていない。

覗きこむと底の深さは五メートルは優に超えそうであった。普通に落ちればただでは済まないだろう。

「なんで、こうなってるんだ？」

アープの疑問は尤もだった。ここは海と繋がっているため、水路の水が枯渇することなどあり得ない。

「さあな、とにかく救出が先だ！」

「はい！」

アタル達は答えが出ない疑問を棚上げにし、人々を救出させる方を優先させた。

(そういえば……南部の攻略はどうなっているんだろうか?)

「状況はどうなっている！」

苛立ちを滲ませながらロムルスは怒声を上げる。苛立ちのためか何度も掻いた綺麗にセットされていた金髪は乱れていた。

「今のところ芳しくありません！原因不明の水路の水の枯渇が人

々の間に不安を蔓延させているのも理由の一つです」

「クソ！ 勇者は何をやっている！？ こういった時に役に立つのが『勇者』ではないのか！？」

「……………その勇者ですが、報告によると現在いないようです」

「何！？ 逃げ出したのか！？」

「それも不明です。彼に同行している仲間達に聞いたところ『今はいない』としか報告は届いておりません」

どれほどの罵詈雑言を心中で喚いているのか、ロムルスの顔は憎しみに歪んでいた。

別の兵士がロムルスの元に血相を変えて報告に駆けつけた。

「申し上げます！ 市内にも多数の穢魔が出現したとの報告がありました。目撃証言の場所からおそらく捕獲したコロッセオの穢魔かと！」

「何い！？」

次から次へと齎される凶報にロムルスは怒りのためか、奥歯を噛み砕いてしまった。

「市民の誘導を急げ！ 穢魔から出来るだけ引き離すんだ！」

『はっ！』

君命を受け、部下達に指示を出すため、新たな報告を手に入れる

ために兵士達は奔走する。

「何故、こうなった!!」

ロムルスの怒りは止まることを知らず、高まっていた。

(今頃は誉れある我が軍が勝利の報告を齎す筈だったのに、何処でこうなった!? 何故こうなってしまった!? 我が国の栄光が目の前まで来ていたのに!)

ロムルスの抱いていた幻想はもはや、彼の掌から零れていった。

人々を襲っていた穢魔は可能な限り斃し、市民の誘導も持ち直したが、アタル達は息が乱れ切っていて、いつ斃されてもおかしくはなかった。

街の構造故か、平野とは違い、全方位ではなく前面からしかほとんど敵は来ないとはいえ、敵の数が桁違いだ。穢魔は列をなし、アタル達が築く防衛線をいつ突破してもおかしくはなかった。

何しろ、まともに戦える人員が攻略の方に取り掛かっているので、残された兵士達では心元ないのだ。

必然的にアタル達への負担が増し、疲労は溜まる一方だった。

「はあ、はあ……アタル大丈夫か?」

「……そっちこそ」

アープもいつもの軽口をたたく余裕は今はない。アタルもそんな余裕などとうに失っているのだ。

気力だけで持っていると言っても過言ではない。

だが、彼らは引くことができない。彼らの後ろには守るべき市民



がいるのだから。

鳥獣種が群れを超えて襲いかかる。アタルはオーラを纏わず、生身のまま鳥獣種を切り裂いた。大剣の切れ味が鈍くなっていると、アタルは青い血で塗れた大剣を見下ろして渋い顔をする。剣が折れるのも時間の問題だと思った。

「くそ!!」

レイアの槍が折れている。疲れで鈍くなった身体が槍の穂先をずらしてしまい、甲虫種の固い所を攻撃してしまったようだ。

すぐにデュナミスで槍を補強し、甲虫種を貫く。

「レイア、一度下がれ!」

「でも!」

「武器がなくては戦えないだろう!」

エリオスの忠告にレイアは反論しかけるも、続く言葉が彼女の現状を表していたので渋々ながらも下がっていった。

レイアは武器だけでなく、手も足も傷だらけで、疲労も甚だしい。師の判断は正しいと言わざるを得ないとアタルは思った。

「貴方達も一度下がってください!」

兵士達の言葉にアタルは口を開こうとしたが、

「大丈夫です! 貴方達が戻るまで、何とか持ちこたえて見せますから!」

笑って言う兵士達の言葉に口を噤んだ。

「アタル一旦、下がるぞ」

「ああ。少しの間だけ頼みます」

「任せてください!!」

兵士達の善意に感謝し、疲労を取るために、前線から下がった。

前線から引き下がったことで身体は休めるものの、精神は休めることはなかった。

今現在、アタル達がいるのは街で最も面積がある広場。ここは有事の際の避難所の一つとして指定されている。

もちろん、地下もあるのだが、そちらは穢魔が進路を邪魔しているのでそちらに移動することはできない。

無論、ここだけではないだろうが、大多数の市民はこの広場に集っており、怪我人なども纏めて放置されているので、人々の不安は募るばかりだった。

「ねえ!? いつになったら穢魔を倒せるの!??」

「ただ今、対処中ですよ……」

「あんたら兵士だろ!?! なら俺達のためにさっさと倒せよ!」

「そうよ、そうよ! こんな時のための軍人でしょ!?! なら、ちゃんと役に立ちなさいよ!」

「ですから」

民衆の不安はいつ暴動に発展してもおかしくないほど高まったり、それに対処するっ兵士達の忍耐もいつ切れてもおかしくなかった。

治癒のデュナミスを使える者達が慌ただしく動いているのを横目に、アタル達は彼らに混じっているマーテルを探した。

さすがに、この現状で忙殺している者達に声を掛けるのは憚られ、知り合いであるマーテルか、軍事用の救急要員を探していたのだ。

「マーテル！」

レイアがマーテルを見かけたのか、喧騒が漂っている広場に掻き消されないように、大声をあげる。

マーテルも丁度一区切りついていたのか、すぐにアタル達の元へと駆け寄る。

彼女の激務を物語るように、彼女の修道服は所々血に塗れ、顔色も些か悪い。

「大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ。それより、どうしたの？」

「ああ……悪いが、治癒と疲労回復を頼めるか？」

「わかったわ」

マーテルから発せられる淡い光がアタル達を一人ずつ包み込み、癒していく。

アタル達も少々顔色が悪かったが、マーテルの治癒を受けたこと

で、血色がよくなった。

「ありがとう。マーテル、武器を支給しているところを知らないか？ あたしの槍、壊れちゃって」

「ああ、それなら……あそこにあるローマーナ王国の旗が見える？」

マーテルが指差す先には、ローマーナの国旗である、左から緑、白、赤と並ぶ柄に剣にSPQRと刀身に刻まれた剣が紋様となっている旗が群衆で見えない事が無いように、広場の何処からでも確かめられるように聳え立っていた。

「あそこで、身分を証明すれば武器と魔晶石を貰えるから」

「ありがとう。マーテルも無茶をするなよな」

「神の使徒として、必ず人々の治療を放っておく訳にはいかないわ」

聞きようによっては、無茶をすると宣言しているが、付き合いが長いレイアは言っても聞かない事を承知しているのでそれに付き合い合わず、さっさと旗の元へと向かった。

「アタルさん達もお気をつけて」

「マーテルも無茶しないで」

「はい」

アタル達の用も終わったことで、マーテルは次の患者の元へと足早に去っていった。

ウオードが発行している身分証明を兵士達に見せたアタル達は今回の戦いで限界を迎えた武器を交換する。お世辞にも、ここにある物は良質とはいえず、量産品の類ではあったが、現状で贅沢は言えず、我慢することとなった。

そして、支給されたもう一つの物品　魔晶石に意識を集中させる。魔晶石が配布されるのは、消耗してしまったヒュレーを補充させるためである。

魔晶石から染み込んでくるヒュレーが血液が全身を巡るように、染み渡っていく。

万全とはいえないものの、直前に比べれば、十分に回復したと言える部類であり、アタルは再び前線に立つ気合を入れるために、頬を叩く。

「よし！」

下火になっていた炎が新たな燃料を投下されて、再び燃え上がるように、アタルの瞳にも再び炎が宿る。

「すみません。次は僕達どちらの前線に行けばよろしいのでしょうか？」

広場に行く道は数多くあり、兵士達はそれを塞ぐように防衛線を張っている。

故に突破されないために、こつやって前線と回復を交互に行うことで、相手の波状攻撃にも耐えているのだ。

「そうですね……」

今、前線を指揮している男は上がっている報告からもちそうになり所を告げようとしたが、齎された報告に驚愕することとなった。

「お伝えします！ C地区の前線の兵士が最早壊滅状態です！ 至急、応援を要請します！」

「何だと！？ すまないが、至急そちらに向かってくれないか？」

「わかりました！」

前線が崩壊したと報告されたのは先ほどまでアタル達がいた前線。交代を告げてくれた兵士達の横顔が脳裏に浮かぶが、それをすぐさま振り払い、助けに入るべく、全速力でその前線へと駆けつけていった。

アタル達が息を切らして全速力でその場所に行くと、そこに生ある命はなかった。

どの兵士も頭部や腕を引きちぎられた無残な姿で骸を晒し、人々の暮らしを否定するように壁や地面に彼らの血が撒き散らされていた。

穢魔の姿は見当たらなかったが、この惨劇を作りだしたであろう張本人の厭魔、ジェヴォーダンが血を口元から垂らしながら悠然とその姿を晒していた。

「ジェヴォーダン！」

アタルは新たに手に入れた大剣の柄を握り潰さんとばかりに握る。

そうしなければ、彼は今にもジェヴォーダンに斬りかかりそうだった。

アタルは許せなかった。この惨劇を作りだしたジェヴォーダンが、ジェヴォーダンが引き裂いた兵士達にも家族や友人、恋人がいるだろう。だが、ジェヴォーダンは彼らとは永遠に会えないようにしたのだ。その牙で。

アタルの心の憤怒は臨界点までできていた。

憤怒の心が理性の檻を燃やし尽くさんとばかりに暴れ回る。

その意思を示すかのように、アタルの大剣は高熱を帯び、周囲に熱気を孕んだ風を静かに吹かせていた。

開始の合図は瓦礫が崩れ、地面に音を立てて落ちた音だった。

ジェヴォーダンはその体軀をバネのように縮ませ、伸びる反動で大地を駆ける。

アタルは地面を砕き、風のようにジェヴォーダンに突撃した。

アタルの高熱を帯びた炎剣は一撃も掠ることが無く、空を切っていた。

それどころか彼はジェヴォーダンの動きに翻弄されていた。  
というのも

「くそ！ 壁まで利用するのは反則だろ！」

アープの泣き言がアタル達以外誰もいない街並みに響く。

ジェヴォーダンは地面だけでなく、時には壁を利用し、アタル達に三次元的に攻撃を仕掛けていたのだ。

アープの水の鞭がジェヴォーダンがいた場所を引き裂くも、ジェヴォーダンの影を引き裂くだけで、後ろの壁にしか鞭は当たっていない。

「泣き言を言うな！」

レイアの鉄塊が発射されるも、ジェヴォーダンのスピードについていけず、何度も地面を穿つ。

ジェヴォーダンの牙がアタルの頭部を掠め、アタルの額からはだらりと血が流れる。

「先生がいればまだ何とかなつたのによ！」

エリオスは別の場所の対応に追われ、アタル達にはついていかなかった。

よつて、今現在この場にいるのはアタル達三人とジェヴォーダンのみ。

「穢魔がいなければマシだろ！」

穢魔は何故かこの場にはいない。その理由は定かではないが、それを考える余裕はアタル達には与えられず、ただ幸運としか享受する他なかった。

頭部への攻撃により、よろめいてしまったアタルはその場に膝をつくも何もしないという愚拳を犯さなかった。

炎弾が空を貪りながら目標へと向かうも、ジェヴォーダンの影を燃やすばかりで一向に当たらない。当たらなかった弾丸は時には民家へと入り込み、黒煙を上げる。

ジェヴォーダンはその身をアープへと突進するが、氷の壁が所々に生えてきて、その進路を邪魔する。

足止めになることはなかったが、ジェヴォーダンはその速度を僅かに落とした。そこをレイアが槍を薙ぎ払うが、掠ることもなく空を切るだけ。



ジエヴォーダンは横に避けた後、宙で身体を翻し、レイアの方へと突進する。

レイアは咄嗟に、鉄の盾を眼前に翳すも、ジエヴォーダンの突進の勢いまでは殺すことができず、壁に叩きつけられた。

「がはっ！」

ジエヴォーダンはレイアに追撃を行おうとするも、横から高速で宙を舞う水の槌がジエヴォーダンを叩きつけようと迫るので、ジエヴォーダンは避けるだけで追撃を行わなかった。

「はあああああ！」

アタルが裂帛の気合と共にジエヴォーダんに斬りかかり、レイアから離すと、アープがレイアに治癒のデユナミスをかける。

「サンキュ」

「俺のはあまり効果が無いから無茶すんなよ」

アープは治癒のデユナミスを修めてはいるものの、応急処置程度の効果しか発揮しない。

「そもそも……言ってもらえないだろ」

レイアは身体が痛むのか、声は少し途切れがちだ。

「確かにな。しかし、何で光の狼を出さないんだろっな」

電弾でアタルの援護をしながら、己が疑問を吐露する。

アープの言う通り、光の狼が出されれば、自分達は直ぐにでもやられることはレイアも理解している。

「さあな。出さないなら、出させないまま斃すしかないだろ」

レイアも鉄塊を撃ち出しながら、アタルを援護する。

「なら、大技で決めるしかないか」

相手の実力を引き出さずに一気に斃すことを決めたアープはレイアに合図する。

アープの実力では大技を出す際、詠唱を行わなくてはならない。それを理解しているレイアは首肯し、彼の盾になることを決めた。

「わかった。あまり持たないからさっさとしろよ」

「了解」

レイアは奮闘しているアタルの元へと駆ける。ただし、アープへの道は彼女が塞いでいる。

アープは精神を集中させるために、目を閉じる。

本来そのような行為は自殺行為でしかないが、彼の仲間が自分への攻撃を防いでくれると信じ、自分のなすべき事をする。

「命を育みし恵みの雨はあらゆるものに恩恵を齎す」

紡がれる強大なヒュレーにジェヴォーダンは阻止すべく、アープへと肉薄しようとするが、レイアにその道を塞がれる。

「だが、過ぎた恩恵は災厄となり、あらゆるものを滅ぼす」

レイアは時間を稼ぐべく、鉄の壁を用意するが、ことごとくを破壊され、強力な突進を受けたレイアはガードした槍ごと民家の壁に叩きつけられ、気を失った。

「汝が身を以てその理を知れ」

その稼いだ時間と隙でアタルはジェヴォーダンへと炎剣を叩きつけることに成功したものの、その鋼のような毛皮を切り裂くことはできず、表面を焦がすだけだった。

自慢の毛皮を焦がされたジェヴォーダンはその爪でアタルの身体を引っ掻き、血を流し弱ったアタルを近くにある水路へと弾き飛ばした。

邪魔者が居なくなったことでジェヴォーダンがアープへと向き直った時には詠唱は完成していた。

「デルミニイ  
《崩水災禍》」

矢の形に形成した水がアープの頭上にいくつも出現し、主人の命令を待つかのように炎を描きながら宙を踊る。

「水の災厄を受けてみな！」

アープの命を受けた一矢がジェヴォーダンを貫こうと目にも止ま

らぬ速度で迫る。

だが、相手も常識外の獣。たかが一矢、躲すのは造作もない。一矢ならば。

水の矢はジェヴォーダンの直前まで迫ると爆ぜた。豪雨のごとき水の散弾は地面に数えきれないほどの弾痕を豪雨が降り注ぐように地面に穿つ。

ジェヴォーダンは何とかその一矢は躲せたものの、警戒し、アーブに近づくことはできない。

「まだまだ！」

アーブは一矢だけでなく、二矢、三矢とその数を増やしていく。アーブとしても後ろにある合計十矢を一斉に放ちたいが、今の彼の力量では一、二矢ずつしか放つことはできない。

ジェヴォーダンはアーブに近づくことはできず、その身に水の散弾の痕を刻まれていく。

一見、アーブが優位に立っているが、実はそうではない。

これは今現在の彼にとつては諸刃の剣なのだ。もしも、後ろの矢が尽きてしまえば、ヒュレーは彼にはもう残っていない。

故に、これが彼に許された最後のチャンスだったのだ。

出来る限り最速で、ジェヴォーダンに当てようとすると、ギリギリを掠めるだけで決定打を浴びせることは叶わなかったが、残り四矢というところでようやくやくまとともに喰らい、真紅の毛皮にジェヴォーダンの血の色が混じる。

アーブはこれで決めねば後が無いと思い、自身の限界を超えて四矢全てを一斉に放つ。

ジェヴォーダンは降りかかる水の災厄を避けられないと判断したのか、散弾の豪雨の中を走り抜けた。

その結果、ジェヴォーダンのその身は水の災厄を一身に受け、真紅の毛皮は自身のそれか毛皮のそれか分からないほど真紅がジェヴ

オーダンを彩った。

アープはジェヴォーダンの爪を茫然とした意識の中、身体を引き裂かれ、そのまま意識を失った。

ジェヴォーダンはその爪でアープを引き裂くと、アープ達に止めを刺すことなくその身を翻した。

自身の深い傷もそうだが、彼女の目的は既に達成された事を人間には聞こえない音で察していたのでこの場を去ることにしたのだ。

「ジェヴォーダン！ 大丈夫かい？」

同じ主を抱く同士の男がジェヴォーダンが深い傷を負っているのを見て、すぐさま治癒のデユナミスを使用する。

「全く、消耗が激しいのに無茶をすることはないだろ！」

男は窘めるように、ジェヴォーダンを叱る。ジェヴォーダンの耳は痛い事を聞きたくないように伏せられる。

ジェヴォーダンが葬世を使わなかったのは、アタル達を侮っていたわけではない。

ただ、闘技場地下で彼女の使用した治癒のデユナミスが自身の適性に合わなかったことと、捕獲されていた穢魔の数が多かったことが相俟って使用できる程のヒュレーを残していなかったのだ。

「目的はもう達成したんだ。他の穢魔はもう港の海皇種の回廊門を潜ってる。後は僕達だけだ。雑魚にかまう必要はないんだ」

ジェヴォーダンは返事をするように一声鳴く。

「さあ、もうこの地に用はない。君も回廊門へ行こう」

ジエヴォーダンは来た時と同じように屋根へと駆けのぼり、屋根伝いに港へと向かっていった。

残された男はちらりとアタルを見る。

「蛙の子は蛙か」

哀愁を含ませた声で呟くと、男はフードを被り直し、この場を去っていった。

ロムルスは栄光の見る影もないラローマの街並みを幽鬼じみた表情でふらふらと彷徨っていた。

彼は穢魔の撤退の報告を受けた後、民衆の不安を取り除くために避難所から出て民衆が集まっている広場へと向かおうと街を一望した時愕然とした。

優美な煉瓦の街並みは廃墟と見紛うほど壊されており、首都全体を優雅に流れる運河は大干ばつにでもあったかのように干上がっている。

民家から火の手が上がったことを証明するかのように黒煙が立ち上り、まるで空を支える柱のようでもあった。

平和を謳歌していた愛すべき無辜の民は傷つき、悲嘆に暮れている。

『水の都』と称賛された都はもう人々の記憶にしか存在していなかった。

ロムルスは沸々と怒りが込み上げてくるが、怒りをぶつける対象がないこともあって、絶望が彼の心を支配していく。彼の自身に充ち溢れた端正な容貌は数十年の月日が流れたかのように老けていく。

「陛下！」

広場に到着したロムルスは兵士達に敬礼されるが、今はそれよりも優先すべき事柄があるので、兵士達にはそちらを優先させた。

「この責任者は誰だ？」

「は！ 私でございます」

広場で陣頭指揮を取っていた年配の兵士はロムルスの呼び出しに応じ、参上した。

「そうか、現状を説明せよ」

「は！」

齎される報告はロムルスの頭を悩ませるものだったが、唯一の救いは街の破壊は場所によっては被害が少ないことだ。

穢魔が侵入した港からこの広場までの破壊状況は相当のものであり、コロッセオの付近もそれは同じようなものであった。

しかし、そこから離れた場所はほとんど無傷であり、水路の水が流れていない以外以前と変わらぬ姿だということだ。

大臣達がいくつかの避難所を回っているの、その情報も後に統括するが、今後の復興プランを今現在得ている情報からある程度で

はあるが、いくつか検証していると、ロムルスの世界に『勇者』であるシヴァの姿が目に入った。

襲撃の最中、一向に姿を見せなかった『勇者』に彼の心は次第に憤怒に染まっていき、何故姿を見せなかったのかを糾すためにシヴァを呼びつけた。

「勇者よ、貴様今まで何処で何をしていた!？」

怒りの矛先を向けられる相手が目の前に現れたからか、ロムルスの顔は頭に血が上っているのが傍目からも分かる程、赤く染まっていた。

シヴァは礼節に則った態度のまま、淡々と無表情にロムルスの詰問に答えた。

「ローマーナ軍のコロニー攻略を遠目で観測しておりました」

ロムルスはシヴァの答えに暫し、怒りを忘れた。

襲撃ですっかり彼の頭から抜けてしまっていたが、確かにコロニー攻略を命じたのは彼であり、彼は勝利の一報を待っていたのだ。

「そうか。貴様は我が軍の勝利をいち早く報告にしに来たのだな」

ロムルスは破顔し、『勇者』が姿を見せなかった事を不問にしようとした。首都の襲撃は手痛い損害だったが、コロニーを攻略したとなれば、絶望に喘いでいる民にも慰めになるだろうと思いい、彼らが戻った今後の事を目論んだ。

「いえ、攻略には失敗し、全滅しました」



ロムルスは世界に亀裂が奔る音を聞いた。

何を言っているんだ、こいつは？

それが、ロムルスの抱いた最初の感想だった。

あの勇壮な兵士達が、我が国に栄光を齎す無双の軍が攻略に失敗し、全滅しただと？

ありえない。そんな筈はない。我らが誇りが我らが祖国を汚す不浄の怪物にやられるなどという馬鹿げた話があるものか。そのような諧謔で我らの笑いを取るのか？ 愚かにも程があるぞ。そもそも全滅したのならば何故貴様がここにいる。貴様がここにいる事が何よりの証拠ではないか？

「全滅したというなら、何故貴様はここにいる。もう少し笑える冗談を言え」

「私が無事なのは、被害が及ばない遠方からそれを観察したためであり、討伐軍が全滅したというのは冗談ではありません」

何を言っている。『勇者』であるならば、我らの役に立つのは当然であろう。それが世界の奴隷たる『勇者』の役割なのだから。まさか、貴様は見捨てたのか？ 『勇者』たる身で苦境に陥った人々を救うことなく見捨てたのか！？

「まさか、貴様……我らが軍が窮地に立たされていたのを、ただ指

を啜えて見ていたのではないだろうな」

「その通りですが」

「ふざけるな!!」

ロムルスの怒声が広場中に響き渡り、誰もがロムルスとシヴァにその目を向けた。

シヴァはロムルスの怒鳴り声を聞いても表情一つ変えず、ただロムルスを何も載っていない透明な瞳で観察するだけだった。

「『勇者』が我らを助けず、見捨てただと!! 恥を知れ!!」

「私は陛下の命を従い、何も手出しをしなかっただけです……」

確かにここに来た当初、王はその口で介入は不要と宣言しており、シヴァはその命令を忠実に守ったにすぎない。

だが、そのような戯言は憤怒と絶望に心を支配された王には関係なかった。

「そのような詭弁を申すな! 貴様は『勇者』なのだろう! ならば苦境に立たされた者を救うのは当然ではないか!」

ロムルスの罵声はなお続くが、シヴァは無表情にロムルスを見上げるだけで、無言のまま聞き流す。

そんなシヴァの態度が気に食わず、都市の壊滅と軍の壊滅という

二つの凶事が重なったこともあってか、怒りの矛先を向けられる妥当な対象がいたことで、ロムルスの怒りは際限なく高まっていく。シヴァはそんなロムルスの罵倒を聞き飽きたのか、人間味が無い抑揚のない声で切り出した。

「ならば、コロニーを攻略してもよろしいでしょうか？」

「貴様のせいのできなくなったのに、そのような妄言を申すか！」

「私一人で可能ですございます」

ロムルスはこの一言で怒りが飽和し、目の前の澄ました顔をする男に明確な殺意が芽生えた。

「ならば！ 貴様一人で貴様が犯した罪を贖ってこい！」

「かしこまりました」

シヴァはそのことを何の気負いもなく請け負うと、ロムルスに背を向けた。

『コロニー攻略の許可を貰った。だから、お前達は街の外へ出る。ただし、広場は通るな』

『わかった』

念話を通し、待機しているフラウ達に話し掛ける。

用件を告げると、シヴァも街の外へ出ようと、ロムルスに背を向け、十歩ほど歩いた頃だろうか。不意にシヴァに向かって石が投げられた。

シヴァはそれを顔を向けることなく余裕で避けた。

シヴァが投石された方向を見ると、どうやら子供がシヴァに向かって石を投げつけたらしく投げた態勢でいた。

「『勇者』ならちゃんと僕達を守れよ！ お前が守らなかったから父ちゃんも、母ちゃんも死んだんだぞ！」

ロムルスとの会話は広場にいた者達に聞き届けられており、人々を守る憧れのヒーローだった『勇者』が、自分達を守らずに見捨てたという事実と両親を喪失した痛みから、『勇者』へとその憎しみの感情を子供はぶつけたのであった。

そういうと、子供は両親を失った憎しみを込めて石をもう一度投げるが、シヴァには届かなかった。

そして、その子供の投石が皮切りになった。

「そつだ！ 『勇者』ならちゃんと俺達を守れよ！」

「『勇者』なんでしょ！ ならちゃんと私達を救いなさいよ！」

「お前のせいで俺達はこんな目にあっているんだ！ 謝罪しろ！」

「あの人を返して！ 返してよお！」

「役に立たない『勇者』なんて死んじまえ！」

「そうだ！ 死ね！」

自らの悲痛な経験から目を逸らす為の恰好の生贄が現れたことで人々は無責任な悪罵を次々とシヴァへと浴びせる。

また、罵声だけでなく子供がそうしたようにシヴァへと全力で投石する。

シヴァはそれを億劫に思い、デュナミスの膜で全身を包み込む。

謝罪もせず、自分達の痛みを受けないシヴァに人々は益々怒りを募らせ、投石と悪罵は激しさを増していき、いまや投げられる物や浴びせる悪罵があれば、誰もがシヴァに悪意のシャワーを浴びせていく。

シヴァはそんな人々の悪意の塊の渦の中を平然としたまま、沈痛な表情も見せず、いつも通り無感情に歩いていく。

罵倒も悪意もシヴァの足取りを変わらせることなく、何事もなかったように歩き続ける。

それはまるで少年の行く先を暗示しているかのようだった。

## 第五楽章 水は方円の器に随う

「待たせたな」

シヴァは街の外で既に待機していたフラウ達に声をかける。

「……………」

だが、いつもなら返ってくる返事はなかった。

フラウとサティの両手は白くなるほど握りしめられており、彼女達の瞳は激憤に染まっていた。彼女達は見たのだ。ローマーナ市民がシヴァに何をしたのかを。

「シヴァよ、虐殺してもよいか？」

「いいですね。私もお手伝いします」

「放っておけ」

今にも虐殺を起こしてしまいそうな、二人をシヴァは止めた。

だが、別にシヴァは人道的観点からそのようなことを述べたのではない。ただ単にどうでもよかつたからだ。

『勇者』になれば、人々の悪意は避けて通ることはできない。それは称号に纏わる業といっても過言ではなかった。

『勇者』を造る際、そのような些末事で決して心を痛めないように、悲嘆に暮れて足を止めないように徹底的にシヴァの心は絶殺された。

故に、彼は望みを抱かない。悲嘆に暮れない。己が境遇を悲観しない。感情も、希望も、絶望も何も生み出さない虚無の塊。

ただ、一つの目的だけを求め続ける殺戮人形。世界の奴隷。

「さっさとこの国のコロニーを攻略して、次の国に向かうぞ」

余計なものを見ずに、目的だけを見据えるシヴァの背中をフラウ達は哀愁を含ませた表情で追った。

アタルが目を覚ますと、そこは天幕の内側だとおぼろげな意識で悟った。

「目が覚めたか？」

「……先生？」

声をかけた主が、エリオスだと分かったアタルは身を苛む激痛を無視し、身体を起こそうとするが、エリオスに止められる。

「無理をするな。枯れた水路に落ちたことでお前の全身は相当痛めている筈だ。幸い、落ちた時に無意識に防御の膜を張ったため、その程度で済んだがな。今は正直、人手が足りないことで後回しにされているんだ。だから、今は休め」

「はい……ところでアープ達は？」

意識が回復したことで、自分なぜこのような状態になっているかを思い出したアタルは、仲間達の安否を問う。

「安心しろ。あいつらも無事だ。もつとも、怪我の具合はお前とそ  
うは変わらないがな」

「そうですか……」

エリオスの安心させるような笑みと仲間の無事を知った安心感か  
らアタルの瞼は降りていく。

「今はゆっくり眠れ」

「はい」

アタルの安らぎを得たかのような表情で眠りについた。

エリオスはアタル達が眠る天幕から出る。

広場には同じような天幕がいくつもあり、そこにはアタル達のよ  
うに怪我を負い、身体を休める者や、家を失い、路頭に迷っている  
者など様々な境遇の者達が負陰の感情を顔に張り付かせていた。

かつて、これより悲惨な出来事を見てきたエリオスは、冷静に事  
の状況を検分したところ、街全体に被害が及ばなかったただけましだ  
と思っている。

しかし、不幸とは比べることに意味はない。その不幸をどうする  
のかが大事だと、エリオスはかつて教えられた。

これからローマーナ王は、ラローマ市民は、ローマーナ王国はどうす  
るのかはエリオスの手の及ぶところではない。ウォードに属する一  
員として復興の手助けをするが、それしかできないのだ。

広場のある一角に血に染まっている布が何かを隠す様に広がって



いる。そして、その前には遺族であろう人々が永遠に失ってしまった人を悼んで、悲しみの涙を隠すことなく流している。

アタル達があ列に加わっていたかもしれないと、エリオスはぞつとした。今回、アタル達が助かったのは、単に運が良かっただけなのだ。理由は知らないが、おそらく見逃されたのであろうと推測を立てている。

治癒のデユナミスを専門とする治癒士や神父、修道女達がようやく落ち着きを見せてきている。マートルは行使しすぎて、気絶したとの報告を受けている。

(これからこの国はどうなるのだろうか?)

復興もそうだが、コロニーの事も残っているのだ。国力が落ちてしまい、侵略の憂き目に会うのではないかとも思っているのだ。何しろ、フレイス王国とは険悪の仲であり、あちらは十分な戦力を残しているのだ。そうなってもおかしくはなかった。

(そういえば、攻略の結果はどうなったのであるのか?)

その結果次第で、ローマーナ王国の今後の未来を決定づけるのである。もし、勝利できれば、復興は早く進むかもしれない。だが、もし全滅ともなれば……。

そこまで考えた時、大臣らしき人物が護衛を引き連れて広場に入ってくるのをエリオスは目撃した。今まで陣頭で指揮を取っていた騎士が大臣と暫く話した後、こちらを見ている。どうやら、今回の防衛で活躍したことに目をつけられたのだとエリオスは推測を立てる。

ふと、エリオスの耳に遠くからの喧騒が聞こえてきた。詳細は分からないが、ここまで聞こえてくるのだ。かなりの騒ぎなのだろう。兵士達の何人かはそちらの方へ向かっている。

(とりあえず、いま必要なのは攻略の結果か……)

エリオスは攻略の結果が齎されるまで、待機することにした。

「まだ拗ねているのか？」

幼児のような姿になっているサティはシヴァの膝の上で、いかにも不満を抱いていますよと言いたげに頬を膨らませている。それは横にいるフラウも一緒だった。

月がほとんど見えない暗闇の中、焚火も焚かずにシヴァ達は野宿していた。

通常であれば焚火を焚くのだが、シヴァ達は夜目もきくので、かえって余計な光源が無い方がよく見えるのだ。

「当然であろう。夫を誹謗されて怒らぬ妻はおらぬ」

「そうです。妻としては当然の行為です。しかも、理不尽な罵倒だったのですから」

ふたりはますます頬を膨らませ、怒気を纏わせている。

ちなみに、二人は妹と守護聖霊という関係であって、シヴァとは夫婦関係にない。

しかし、二人はそんなことも構いなしに妻を名乗っている。それは、シヴァ以外を夫にする気はないという二人の決意の証だった。

「あんなのは今さらだろう」

シヴァ達にとってみれば、あの程度の誹謗中傷など聞き慣れたものであり、記憶に留める価値もないものだった。あれよりひどい罵詈雑言などスターリア王国では日常茶飯事だったのだ。シヴァにとってみれば、二人が何故怒っているのかを理解できない。

「確かに今さらだが、腹が立つものは立つのだ！」

「そうです！ それとこれとは話が別です！」

今の二人には何を言っても無駄だと悟ったシヴァは隣にいるセレナに二人を慰めてもらおうと思った。

「セレナ」

続く言葉はなかった。

相も変わらず無表情ではあり、そのクールビューティーな美貌も健在ではあったが、雰囲気は一変していた。

セレナは何人も寄せ付けない兇刃のような受動的な雰囲気を放っているが、今は全てを切り裂く狂剣のような能動的な雰囲気を放っている。

「何？」

「何って……」

セレナが放っている剣気はどうやら無意識らしく、本人は自覚していないようだ。

「セレナも我らと同じ気持ちのようだな」

「当然ですね」

二人はセレナの態度が至極当然なものとなししているようで、セレナの態度を受け入れている。

打つべく手が無くなったシヴァはため息をつき、就寝用の魔導器

を発動させた。

極上の羽毛のような感触に包まれ、外界とは空気が遮断されたかのような清浄な空気が四人を覆う。

これで、例えば雨が降ろうとも四人を濡らすことはなく、気配は以前と何ら変わりなく察することができる空間ができあがった。

「ほら、寝るぞ」

ベットと何ら変わらない感触の床にシヴァは横になり、剣をすぐ取れる位置に置く。

三人は不満は残っているものの、シヴァが横になるというならば、横にならざるをえず、四人が入っても余裕がある毛布を自分達に被せる。

毛布の中に四人分の体温が蓄熱され、就寝するにはもってこいの温度となる。

「我は不満なんだぞ」

シヴァはなおも愚痴るサティの頭を優しく撫でる。シヴァは彼女は自分の代わりに怒っているのだと何となく察する。

「む、もつと撫でる」

サティはシヴァに撫でられることに気が向いてきたのか、大好きな御主人様に撫でられて喜んでいようであり、ブンブンと振る尻尾が幻視しているようだった。

「私も不満です」

「私もよ」

サテイが撫でられるのを羨ましく思ったのか、両隣りにいる二人から催促の声かけられる。

「……………撫でにくいのだが」

今のシヴァの体勢では腕の関節の関係で二人を撫でることは叶わない。

「ええ」

「だから」

「つまりだな」

三人の気持ちは一つになっているのか、淀みなく言葉を続ける。

『不満があるから解消に付き合え（付き合ってください）（付き合いなさい）』

唱和の声はシヴァの耳に響き、寄せられる体温がシヴァを逃さぬように包み込む。

「……………」

僅かに残る月光がシヴァ達を覗く隙間のようでもあった。

「……………」

「おっさんは死んじまったのか」

闘技場仲間である兵士の青年が生きていたことに喜びを感じていたアープは、もう一人の仲間である中年の男性の訃報に悲痛な表情を浮かべる。

「ああ、彼はコロッセオに通うのが好きだから、その近くに居住を構えていたんだけど、それが裏目に出たみたいなんだ」

青年の顔は激務のためか、疲労を顔に浮かべており、顔にも煤や土埃、血が付着していることが碌に休憩も取っていないようだ。

「……………そうか」

アープも青年も仲間の冥福を祈っているのか、暫くの間沈黙が流れた。

「ねえ…………アープ」

「なんだ？」

青年はひどく疲れた顔をして、懺悔室で懺悔する罪人のように告白する。

「僕は兵士を辞めようと思う」

青年は元々、勤務に熱心な方ではなく、周りの人間に比べ、怠惰であったと言ってもいい。そんな彼が兵士職についたのは、彼の父が彼と同じく兵士であったことから、流されるように兵士になったのだ。

だが、此度の襲撃で彼は知ってしまった。死神が彼の首を断とう

とする鎌の酷薄な冷刃を。彼には最早それに逆らえる気概など  
ありはしなかった。

だから、彼は逃げるのだ。その鎌が彼の首を断つ前に。

「君はそんな僕を軽蔑するかい？」

青年はまるで否定される事を怖がる子供のような面様を表す。

アーブはそんな青年を見て、静かに顔を横に振った。

「しねえよ。そう思っちゃっても仕方がないと思う」

「ありがとう」

そこに込められた感情はどれほどのものか。青年は救いを得られ  
た信者のような笑みを浮かべる。

「君は戦い続けるのかい？」

それはここでリタイアする自分とは違い、尚も戦う事を選ぶアー  
ブに対しての心配の念だった。

「ああ。といつても、いつかはお前みたいに俺も逃げちまうかもな」

アーブは軽く笑みを浮かべ、おどけるように青年に告げる。

「それでも、君は凄いと思うよ。僕はここまでだから……」

青年は眩しいものを見るかのような表情だった。

「俺は意地っ張りだからな。いつか、またこの地に来たらもう」

「一度酒を飲み会おっせ」

「ああ。だから、君も死ぬなよ」

二人は確かな友誼と約束を交わし合い、固く握手した。

再びまた会えるように。

泣き叫ぶ子供達をあやし終わったレイアは、神父達の勧めもあって、コーヒ―を御馳走になっていた。

「わざわざ来てくださってありがとうございます」

「いえ、今のあたしにはこれくらいしかできませんから」

苦いコーヒ―を飲んだかのような渋面をレイアは見せる。彼女は今の自分が齒がゆかった。治癒も碌に使えず、今は復興の算段を口マーナ王国上層部が立てている上に、ほとんどの仕事を兵士達や街の人々が協力して行っているので、できることがほとんどない。しかも、怪我を負っていたこともあって無理は避けていた。

「いえいえ、それだけでもありがたいですよ。なにしろ、被害はこちらにはなかったにせよ、子供達は空気に敏感なため、不安になる子も多い」

神父は苦笑を浮かべており、これまで騒動のためか疲労も顔に出ている。



「むしろ、大変になるのはこれからですね」

シスターは悲愴な雰囲気を漂わせ、何かに憂慮しているようだった。

「何かあるんですか？」

「今回の騒動で孤児になる子は多いということです。彼らは心に傷を負っていることから、痛みから逃れるために自分の殻に閉じこもったり、痛みを誤魔化すために他者を攻撃する子もでてくるでしょう」

「あ」

レイアは目の前の被害にばかり目を向けていて、その後がどうなるかに目を向けていなかったことに気付いた。

「また、これは小耳に挿んだ事ですが、攻略に失敗したとの噂が流れています」

「え」

レイアにとって、そのことは寝耳に水だった。彼女はこちらの事ばかりに気を取られ、もう一つの方を忘れていたのだ。

「ど、どういふことですか!？」

「私も詳しくは存じていませんが、全滅したという噂だけは流れています」

「そのことなら私も聞きましたよ」

続く神父の言葉はシスターが聞いた噂を補足するものだった。

「何でも、その噂の出元は勇者様で、勇者様はロマーナ軍を見捨てたとか、それを償うために単身で討伐に向かったとか……」

レイアはその噂がおそらく真実だということがわかる。シヴァが偵察に行っていたことは確かであり、見捨てるという選択肢も彼なら取りそうだからだ。もつとも、レイアとしても償うためということには懐疑的だ。

「……すみません。その噂はどこで流れてますか？」

「今ではおそらくどこもかしこも流れていますよ。人の口に戸は立てられませんから……」

「ありがとうございます。少し、その噂を確かめたいのでこれで退室します」

突然の申し出に神父は瞠目したが、すぐに柔らかな顔に戻った。

「事情は存じませんが、構いませんよ。できれば、また来て頂くと子供達も喜びます」

「はい。機会があれば」

彼女達は笑顔で別れを交わす。

レイアが退室し、子供達の部屋を通りかかると、一人の男の子が部屋から出ていた。

「どうしたんだ？」

「あ、レイア姉ちゃん」

子供はレイアが現れたことに驚くが、すぐに何かを秘めているような顔つきに戻り、レイアに誓いを立てるように宣言した。

「俺、強くなるよ。そして、皆を守るんだ」

少年の瞳は悲嘆に暮れるわけでもなく、皆を守るといふ使命感に燃えていた。

レイアはそんな少年を見て、微かに笑った。

「そうか……頑張れよ」

レイアは優しく少年の頭を撫でる。自分もこんな時があったと、レイアは懐かしむ。

「うん！」

少年の瞳は輝き、前を向いていた。

「この役立たず……！」

怒りに顔を赤く染めた男が礼拝堂の扉を荒々しく音を立て、立ち去る。

マーテルはその怒声にビクリと身体を竦ませるが、一つ深呼吸をして男が開け放った扉を潜る。

その礼拝堂は十人ほどが入ればやっとの大きさで、最低限の掃除はされているが、どこを見ても古めかしく、崩れ去ってもおかしくはなかった。

マーテルはぎしりと音が鳴る床を歩き、この礼拝堂で唯一の偶像である女神シュリーナの像の前に膝まづく。

「女神シュリーナ、我が声をお聞きください」

マーテルはヒュレーを像へと流し、シュリーナへと接続する。

『マーテルか……そのままではきつかろう。腰をかけるがよい』

「はい」

マーテルは最前列のぼろぼろの長椅子に座る。

声はシュリーナの像から発せられており、光が像に注いでいることもあってかどこか神々しくもあった。

『それで、何用だ。……ああ、そこにいるというのなら先ほどの者と似たようなものか』

「先ほどの男の人はやはり……」

『ああ。死んだ者を生き返してほしいと頼まれたよ。もしくは、今の状況を何とかしてほしいと頼み込んでおった。妾にはそのようなことはできんということとはわかりきっておるのに』

聞こえてくる神の声はどこか呆れているようであった。

それも当然であろう。女神シュリーナは役立たずの神として知られており、困難に直面したからといって、救いを齎すことなどできはしないのだ。

『それで、マーテルは何用かな？』

女神シュリーナは友人に気安く話し掛ける口調でマーテルに用件はなんだと尋ねる。

「その……愚痴になりますけどよろしいでしょうか？」

『構わんよ。それぐらいしか妾にはできることはない』

「私は 私の無力さを噛み締めているのです」

マーテルの白皙の頬に雫が零れる。

マーテルの脳裏に浮かぶのは、動かぬ軀と化した親の前で泣き崩れる子供。それをただ見ているだけの自分。治癒のデュナミスを使用するも、自分の力が無い故に助けられなかった人々。

「私は力が無い事が悔しかった！ 助けられない人がいることが悔しかった！ 『聖女』ならばできることが私にできない事が悔しいのです！」

初めは淡々としていたが、大量の水が溢れだし土手が決壊するよ  
うに、最後は声を張り上げ、泣き叫ぶマーテル。彼女の脳裏には常  
に助けられなかった人々の聞こえない怨嗟の声が絶えず、責め立て  
るように響く。

『……以上か？』

「はい」

沈黙を保ったまま聞いていたマーテルの独白に対する返答を、シリーナは神父が経典を読み上げるように告げる。

「人は常にその時に持ち合わせている選択の数だけしか選ぶことは叶わぬ。今回、お主が助けられなかったのは確かにお主の力が無いからだ」

「はい」

「かといって、全てがお主のせいというわけではない。例え、その者に不幸が襲いかかったとしても、どうにかするべきはその者自身であつて、他人ではない。他人を利用するという手を使うのであれば別だがな」

「でも」

「力が欲しいか？」

「え？」

それは悪魔の囁きにも似た誘惑の声だった。

「何者をも助けられる力が欲しいか？」

「はい」

その悪魔の手をマーテルは起こった悲劇を見てしまったマーテル

は解けなかった。

『ならば、至れ エンテレケイアに。あれに至れるのであれば、助けられる数は今よりも数段増すだろう』

「どうすれば至れるのですか？」

『あれに至るのであれば、全てを受け入れるのだな。具体的な方法は仲間にでも聞けばよからう』

「はい。ありがとうございました」

マーテルは祈っていた両の手を解き、立ち上がる。長椅子からは軋む音がした。

『なに、悩める子羊を導くのは神の仕事でもある。妾は精力的ではないがな』

「では、失礼します」

マーテルは丁寧に頭を下げ、先ほどの男とは違い、扉を静かに開け、礼拝堂から立ち去った。

礼拝堂の中に静謐が戻り、漏れこむ光だけがこの場を変化させていた。

『もっとも、導くのは地獄かもしれんがな。 あれに至るというのはそういうことだよ』

神の声は静謐の空間に響くが、誰の耳にも届かず、虚空へと消えていった。

王宮のあちこちが破壊されているため、外観からでは廃墟のそれに等しいが、謁見の間はそれを感じさせず、栄光と繁栄を感じさせる贅を尽くした造りが、ロマーナ王国の権威と荘厳な空気を作りだしている。もつとも、それは虚栄にすぎないが……。

「アタル＝イグニード、招致に応じ参上しました」

アタルも度重なる経験を積んだのだろう。礼節に則った礼は洗練されており、微塵も動揺を表に出してはいない。

「よく来たな。まずは面を上げよ」

「は！」

謁見の主であるロムルスの声は威厳に満ちていたものの、その端正な顔は何処か疲れ切った老人のようでもあり、狂気を宿した狂人のようでもあった。

「まずは、そなた達の尽力に感謝しよう。そなた達のおかげで我が民の多くは救われた」

「もったいないお言葉です。私は人として、当然の事をしたまでです」

「そうか……」



アタルの言葉にロムルスは満足げに頷く。まるで、この反応こそが彼の望んでいたものであるかのよう。

「君は現状を見てどう思う？」

「それは……」

アタルはさすがに直接述べるのは、失礼に値すると思い口籠る。

「よい、私とて現状は把握しておる。故に、忌憚なく述べよ」

「はい。穢魔の突然の襲撃により、人々は穢魔という異形の恐怖に怯え、自分達の日々の生活に絶望を感じていると思われます」

今回のような事例は、過去ほとんどないと言ってもよかった。それだけに、人々はもう一度あるかもしれないとその脅威に恐れを抱き、いつ崩れてもおかしくない砂上の楼閣のような不安定な爆弾を抱えている。

アタルは街を見てきてそう思った。

「私も同じことを感じ取っておる。しかし、その恐怖を取り除こうとも私達にはその術はない。それを理解しておるか？」

「はい。ローマーナ軍壊滅の事を仰っているのですね」

アタルはローマーナ軍が壊滅したという噂をここに来る前に小耳に挿んだのだ。

ロムルスは苦虫を噛んだような表情で、重苦しい雰囲気醸し出す。

「その通りだ。このままでは、人々はやがて来る恐怖に怯えてしまい、その絶望から短慮な行動に走る者が出てきてしまい、治安は悪化し、暴動が起こってしまうだろう」

アタルにもその想像は容易だった。そもそも、盗賊などという悪党が世に蔓延るのは、穢魔という分かりやすい恐怖から目を逸らすために、刹那の快楽に生きようとする者が後を絶たないからだ。

このままでは、ローマーナ王国にもその兆しが出るのも時間の問題だろう。

「そこでだ。私達は全戦力を結集することを決意した。君にはその旗頭になってほしい」

「な  
」

それは突然の申し出だった。戦力がほとんどないというのに、遠征するという狂気の沙汰でしかない行動もそうだが、何より『勇者』を差し置いて、アタルを旗頭にするのは正常な試みではない。

「な、何故僕なのですか？」

余りの衝撃にアタルは一人称が戻ってしまふ。

そのことをロムルスは気にせず、論説を述べる。

「簡単な事だよ。まず君は襲撃に対し、穢魔の矢面になり、人々を守った。それは周知の事実であり、誰もが知ることだ。そこに君が英雄の子だという肩書きがあるならば、誰もがそれにふさわしいと判断するだろう」

「それなら、『勇者』だつて」

アタルがそれを口にした時、ロムルスに不快感がありありと映った。それはまるで、不倶戴天の敵を憎んでいるような表情でもあった。

「あれは我が軍を、我が民を見捨てた裏切り者だ！！ そのことは我が民とて十二分に周知してある。故に、あれが旗頭になることなどありえん！」

ロムルスの座る玉座が怒気を発するロムルスの握力に悲鳴をあげる。

「しかし、僕達では戦力が不足しているのは否めません！」

憤怒の顔が一転して、慈愛の表情を浮かべる。

「なに、あれが単身で滅ぼすというのだ。そなた達はそれを見ていただけでよい。そなた達が行うのは、遠征を行い、民にその事実を示すこと。そして、奴の戦果を掠め取るだけでよいのだ」

「しかし、それでは！」

ロムルスは見る者を縛りつけるような冷酷な瞳でアタルを睨みつける。

「それでは、なんだ。貴様は我が国が、民がどうなるかと構わないというのか。あの『勇者』のように！！」

「そうではありません。このようなことが許されるのでしょうか！」

アタルは人の戦果を掠めるような卑怯者になりたくなくて、必死に抗弁する。

「私が許すと言っているのだ。この国の王である　この私が！  
『勇者』ならば、そのことを責めはすまいよ。今回の事態はあれが齎したようなものだからな。それに、貴様もウォードに所属しているのだろう。ならば、窮地に立たされている我が国のために働くのは当然の事ではないか？」

「それは　」

ロムルスと言っていることに、一片の間違ひもない。ただ、アタルは自分の感情だけで否定しているだけだった。

「後ほど、遠征の件について連絡する。下がるがよい」

「　はい」

アタルは迷いを抱えたまま、謁見の間を辞した。

「確かに、今のこの国には必要な事ではあるな」

アタルが謁見の間で依頼されてきた事を話した後の、エリオスの第一声がこれだった。

「そんなことが許される筈ないじゃないか！」

逆にレイアは、アタルと同じように憤っており、そのような不正など許せないと息巻いている。

「だが、実際にこの国に必要なのは、希望だ」

「でも、先生！ 僕には他人の戦果を掠めるようなことは……」

アタルの拳は震えており、苦悩の表情を顔に張り付かせている。

「……………例え、『勇者』が戦果を齎したとしても、この国の人間は拒絶するかもしれないな」

「な！ どういうことですか!？」

エリオスは裡に溜めているものを出さないように淡々と話す。

「これは後で聞いたことだが、ローマーナ軍壊滅の報告を齎したのは、シヴァらしい」

「確かに、それは全滅となったのなら、おかしくはないが……」

「問題はその後だ。ローマーナ王は軍を見捨てた事を罪に問い、民衆は『勇者』にそのことで罵声と石を浴びせたらしい」

『え!?!?』

四人は聞かされた事実を耳を疑った。『勇者』に罵声と石を浴びせた？

「ど、どうしてですか！？ 介入するなと通達したのはローマーナ王国でしよう！？」

マーテルの糾弾は四人の心の内を代弁していた。

「そんなことは自分達が被った悲劇の前には霞んでしまっただろう。『勇者』という称号を名乗っているのなら、自分達に襲いかかる悲劇を防ぐのは当然だと、な」

「そ、そんな……」

誰もが意気消沈し、言葉を紡げなくなる。

「だから、全てが丸く収まるには、ローマーナ王が言ったやり方が一番いいんだろうな」

「で、でも……そんなのが正しいんでしょうか？」

「正しいさ。大多数の人間がそれで救われるんだから……真実は自分の犯した罪を浮き彫りにするだけ。今のこの国にそれが耐えられるとは限らない。」

ならば、今は欺瞞に満ちた事実を民衆に曝け出し、時が経ち、心の傷が癒えてから真実を白日の元に曝け出せばいい」

悲痛な表情を浮かべる弟子達にエリオスは容赦なく正論を叩きつけた。

「でも、それじゃシヴァ君が……」

「あいつなら了承するだろう。それくらい分かっている筈だ」

アタルの反論はエリオスの指摘した事実の前には容赦なく沈んでいった。

「それしかないんでしょうか？」

「少なくとも今は、な」

静謐の時間が流れ、ただ祭り上げられる時を待った。

「さて、始めようか」

シヴァは剣を抜き、今尚蠢いている数千の穢魔に対峙する。敵意を察したのか、一斉に襲いかかるうとする様は全てを呑み込もうとする濁流の如き奔流だった。

「兄様、開戦の狼煙は私に任せてください」

玲瓏たる美音で紡がれる言の葉は、群れをなして襲いかかる穢魔の集団を前にしても、いつもと変わりはない。

フラウの見据える先には濁流の如き穢魔の進軍。それを蹴散らす祝詞を紡ぐ。

「灼熱の劫火よ。天を焦がし、大地を焼き尽くせ。天地万物全てを灰塵と還せ」

詠うように紡がれる力の顕現を指す言葉はフラウの周囲に何の変化も齎さなかった。

しかし

「フレミネンス  
《天焦地焰》」

そのエネルギーの名称を紡ぐと、虚空から現出した光球がまるで、小型の太陽のように光り輝きながら、フラウの掌に舞い降りた。灼熱の意思は感じられず、ただ空間を照らし出すような光であった。

フラウがその光球を穢魔の群れに掌を向け、導くと光球はその姿からは予想もしない速さで穢魔の群れに到達すると、その真の姿を顕在させた。

空気が破裂するような炸裂音と共に、灼熱の世界がこの世に現出した。

紅炎は天をも燃やさんとばかりにその姿を拡大させ、荒れ狂い猛る焰は、大地に存在するあらゆるものを灰塵に還そうと、舌端を伸ばしていく。

世界を焼いている劫火は視界さえも歪ませ、灼熱の世界に存在する世界の輪郭を掴ませない。

数百を優に超える同胞を灰塵と化されても、穢魔は足を止めず、シヴァ達へと突き進んでくるが、灼熱の世界は越えられないのか迂回している。

「兄様、これ以上は兄様の足手纏いになるので、失礼します」

「ああ、御苦労さま」

シヴァは丁寧に頭を下げるフラウを優しく撫でる。

それを陶然とする様は灼熱の世界を生み出した魔女とは思えない姿だった。



「御武運を」

フラウはできれば、もっと撫でてほしかったが、邪魔になるだけなので、すぐさま退散する。 祝福のキスを残して。

「さて、まだ大分残っているようだが、『無極』の使用は控えるの  
だろう?」

彼らは一心同体。故に、シヴァの心の内は把握していた。

「ああ、何があるか分からないからな。できるだけ消耗は防ぎたい。  
……長丁場になるぞ」

シヴァは剣を握りしめ、戦闘用に身体を作り変えていく。彼の身体には、いくつもの剣が鞘に収められている。

「シヴァとならば、いくらでも踊りきって見せようぞ。 我も少しだけなら参戦してもいいのだろう?」

「ああ。それまで離れるなよ」

「我がシヴァから離れるなどありえんよ」

サティは不敵な笑みを浮かべるが、シヴァは殺意の波動を撒き散らし、人形のように無表情である。

「では、始めようか舞踏会を!」

サティの掛け声とともにシヴァは穢魔の群れへと突撃するため大地を駆けた。

それはいつかの焼き回しだった。

違うところがあるとすれば、役者が違い、観衆が求めるものが異なることだろう。

アタルはローマーナ軍治安部隊を除く、全部隊を背後に引き連れながら、観衆の視線が刺すように鋭利だと感じ取っていた。

それも仕方ないだろう。

先日彼らに降り懸かった悲劇は彼の記憶から薄れたわけではない。むしろ、今も尚彼らの心に憎悪の炎が荒れ狂っている。

ローマーナ軍壊滅の報を聞き、絶望に身を襲っていた者でさえ、藁にでもしがみつくような、飢餓に耐えている餓鬼のように、自分達を守ってくれた英雄に縋りつこうとしている。

アタルはひしひしと感じる彼らの視線に悟った。

この遠征が失敗に終われば、この国は終わりだと。

自分達が失敗すれば、行き場を失くした絶望が暴れ狂い、この国全体を呑み込んでしまうと。

エリオスの言っている事が身に染みて理解できた。今のこの国に他者を思いやる余裕などない。

「しつかりと前を向け」

いつの間にか顔を伏せていたのか、それとも暗い表情を出していたのか、思案に耽っていたアタルには察することはできないが、エリオスは心構えの事を言っているのだろう。

先頭に立つアタルが暗い顔をしていたら、それが民衆にも伝播してしまう。それをエリオスは危惧しているのだろう。

アタルは顔をあげ、しつかりと前を向く。

だが、彼の心は下を向いていた。

「驅竜種が、鳥獣種が、シヴァを仕止めようと自身の牙を突きたてようとするが、一向に当たらず、シヴァの剣の錆となってその姿を消した。」

屍骨種や水棲種が数を活かし、シヴァを呑み込もうとするが、サティの闇の顎に逆に呑み込まれていった。

シヴァがデユナミスをほとんど使わないのは理由がある。

彼らの現状ではヒュレーの多量の消費は命取りになる。疲れならば取ることは可能なので、こうしてシヴァはただの斬撃で、サティは吸収のエイドスで抗している。

とはいえ、サティは長時間は戦えない。顕現するヒュレーとエイドスの使用で消費するヒュレーは、現在吸収しているヒュレーよりも上回る。シヴァが使用を最低限に控えているからこそ、現状の様に戦えるのだが、戦いが激化してしまえば、その限りではない。

守護聖霊は術者を守護する役目を負うが、それは術者の意識外や緊急時の守護が目的とされるので、長時間の戦い向きではない。

しかも、サティは特殊な例で守護聖霊になったためか、体質によるものかヒュレーを保持する器は通常のそれよりも少ない。とはいえ、シヴァの器の拡張に伴い、サティのそれも拡張されるのだが、現状では長時間の戦闘は無理だった。

サティはシヴァを守護できる最低限のそれを残し、シヴァだけで

戦うことになったが、シヴァの戦意は薄れることなく、殺戮人形としての本分を果たすため、まずは殺意を高めていった。

そうして、どれだけの血に塗れ、どれだけの穢魔を斬り伏せ、どれだけの爪牙がシヴァの身体を抉っていったか分からなくなった頃、シヴァの周囲に静謐が訪れた。

それは至極簡単な理由だった。数千の数を誇った穢魔がシヴァの剣の葬列に加わっただけだった。

シヴァの身体にはいくつかの剣が鞘に収まっていたが、最早シヴァの手にある一本だけとなっていた。他の剣は戦闘の最中に、負荷に耐えきれず全て折れてしまっていた。今、シヴァの手にある剣も悲鳴をあげており、いつ折れてもおかしくはなかった。

シヴァの全身も青い血と赤い血に塗れ、汗と血で塗れた服が身体を重くしていた。また服を買い替える必要があるとシヴァはため息をついた。

シヴァは厭魔を斃そうと足を進めた時、フラウから念話が届いた。

『何だ？』

『兄様、厭魔を斃すのは少し待って頂けないでしょうか？』

『どうしてだ？』

『簡易連絡の魔導器に連絡があつたのですが、どうも討伐隊を派遣したから、厭魔を斃すのはそれに合わせてほしいということですよ。目撃証言を作るそうですから』

『……わかった』

シヴァは念話を切ると、少し息をつく。噎せ返るような血臭が周囲の空気に漂っているが、それに慣れ親しんでいるシヴァには何も

感じない。

辺り一面に青い血が穢魔の名残のように撒き散らされているが、見慣れているシヴァは何も感じない。

ただ、ここが自分のいるべき場所だと再確認しただけだ。

戦闘が終わったからか、彼に色彩が、嗅覚が戻るが、戻る前と比べると変わらず、彼に変化を齎すものなど何もなかった。

サティがシヴァの肩に顕現する。

「シヴァよ、疲れたであろう？ 我らが癒してやるから覚悟せよ」

彼女はいつもと変わらずシヴァに甘える。正常な者であれば、吐き気を催す凄惨な場に居ても、彼女は変わらなかつた。シヴァだけを心配し、シヴァだけを慕う。

「より疲れさせられる気がするが、気のせいかな？」

「気のせいだ！ 断じて、いい機会だから、搾りとってくれようと画策するわけがない！ マッサージするだけだ！」

「マッサージだけで終わるのか？」

「……………もちろんだ」

「……………そうか」

彼らのやり取りは誰もいない平野に響く。

そして、彼らは彼らを待つ者の所へ戻るべく足を進めた。傍にある青い海のような、青い血の海を歩き続けながら。

夜の帳が降りた事もあって、コロニーまでの休憩地点として、天幕を野外に張ってはいるものの、その住人である兵士達の顔色は冴えない。

それも当然だろう。自分達よりも遙かに実力を有していた軍を壊滅した相手の所へ向かうのだ。彼らの実力は居残り組であつたことから、その程度はたかが知れている。彼らは自分達が蹂躪される様しか脳裏に浮かべておらず、勝てるなどという希望は微塵も抱いていなかった。

もちろん、彼らには戦う必要はないという事前通達も、緘口令も敷かれているが、万が一『勇者』が厭魔の討伐に失敗した際、彼らは悪夢の権化に立ち向かわねばならず、敗北の未来しか想像できない彼らの士気は最底辺を彷徨っていることは言うまでもない。

「本当にこれでいいのか？」

レイアは再三に渡って、疑問に思っている事を口走るが、アタル達の顔は一向に晴れず、顔を伏せているだけだった。

「……………従うしかないだろ。これが今のところ、一番いいんだから」

やっとのことで絞り出された声は、アタル自身も納得していないことがあると分かる程低かった。

「いいわけないだろ！　こんなことが正しいって言えるのかよ！」

レイアは今回の決定を良く思っておらず、何度もこの事を憤っており、度々悟されるが、どうしても認められず、アタル達に癩癩を

ぶつける。

「じゃあ、どうしろって言うんだよ！ 君だって見ただろう、聞いただろう、感じただろう！ 市民達の絶望の表情を、憤怒の声を、憎悪を抱く視線を！」

アタル自身もこの事に納得してはいないが、遠征の時の民衆の言葉なき視線が訴える感情を察したアタルはこうするしかないと、悟ってしまった。

アタルの怒声はレイアを怯ませたが、彼女も負けじと訴える。

「だけど！ 民衆だってきつと正しい方を選択してくれる筈だ！ 彼らならきつと自分達の罪を悔い改め、乗り越えてくれる筈だ！」

「乗り越えられなかったらどうするんだよ！ 治安が悪化し、もっと被害が出るかもしれない！ フレイス王国のように盗賊が跋扈するかもしれない！」

「人はそんなに弱くない！ そんな選択をするもんか！」

「可能性の話をしているんだ！ このままだと悪化する可能性の方が高いだろ！」

「可能性の高い、低いの問題じゃないだろ！ 人が正しい選択をすると思ってるのが『勇者』の役目だろ！」

「違う！ 多数の人間が幸せになるように行動するのが『勇者』だ！ 君の行動じゃ多数の人間が不幸になる！」

「違う！ 人として正しい様を見せつけて導くのが『勇者』だ！」

断じてお前の言うような行動を取るのが『勇者』じゃない！」

二人の論争は激しさを増し、妥協点は交えず、平行線のままだった。二人は各々の信じる『勇者』を論ずるが、二人の言葉は現実の前では儚き幻想となり、霧がかかる未来の前では結像することはなかった。

そんな二人の争論に口を挿んだのはアープだった。

「でも、実際俺達が取れる行動は限られてる。細い針の穴を通すような可能性しか残っていない」

二人は静まり返り、アープの言葉に耳を傾ける。まるで、論争の熱に水が差されるような空気だった。

「二人の主張を通すなら、俺達が取らなきゃいけない選択肢は俺達が厭魔を斃すことだ」

「じゃあ、あたし達が斃せば」

「ジエヴォーダンに負けた俺達がか？」

レイアは言葉を失った。彼女達は本気を出していないと思われるジエヴォーダンに敗北を喫したのだ。ならば、同等程度の力を持つと思われるカクスに勝利できる保証など何処にもなかった。

「だったら、ここにいる兵士達と協力して」

「もしも、それで兵士達が亡くなってしまえば、この国はほとんどの軍事力を失ってしまいます。ですから、私達が求める結果は兵士を無傷で勝利の凱旋をさせること。今の私達では不可能です」



アタル達に齎された希望はマーテルの言葉に封鎖されてしまった。二人は沈痛な表情を浮かべ、黙したまま顔を伏せる。

アタル達が斃せればいいのだが、それは役者不足だった。

仮にアタル達が勝利したとしても、アタル達にも死亡者が出ることは想像に難くない。そうなれば、輝かしい栄光に一点の汚れを残す。もしかすると、名誉の死と称えられるかもしれないが、民衆の顔を曇らせるかもしれない可能性は防ぎたかった。

アタル達に現在求められているのは完全無欠の勝利。それを成すにはシヴァの戦果を掠め取るという虚構の栄光しか成す術はなかった。

「あたし（僕）は」

続く言葉はなく、彼らの夜は更けていった。

アタル達の天幕から声が漏れないようにしていたエリオスは嘆息していた。

何も彼らの論争を聞き、呆れたわけではない。これは彼らが通らねばならない険しい道を思い、そしてそれに対し、何の導きも与えることができない自分に対する思いが、行き場のない気持ちとなり、溜息が出たのだ。

彼らの論争を聞くと若いとは思うが、同時に汚れてしまった自分を自覚せざるをえない。

かつては、彼らのようにエリオスも自身と現実の擦れ違いに葛藤したものだっただ。

しかし、年を経て、色んなものが見えてしまうと、感情よりも理論を優先させ、下手な選択肢を取れなくなった。

それを成長するというのだろうが、エリオスはそれを認めてはいなかった。

エリオスは彼らの葛藤は尊いものだと思うし、それは決して蔑視するものではないと思う。

人は夢を見て、理想を見る生き物だ。それは往々にして、現実との狭間で消えては逝くものであるが、それは諦めるという理由にはならない。誰もが現実を生き続けるが、理想を夢見る事を忘れてはいけないと思う。特に彼らのように未来ある若者には。

だから、エリオスは彼らが理想を夢見る事を止めるなどという愚拳は犯さない。それが子供達を導く、大人の役割だと思うから。理想を夢見る事を忘れ、現実という地獄をいつまでものさばらせるような真似はさせたくはなかった。

エリオスは夜空を見上げる。新月が近いためか、月の光が翳っている。

いつかこの夜空に浮かぶ月のように満面の月が地上を照らせばいいのにとエリオスは願った。

「兄様、して欲しい事があつたら言ってくださいね」

フラウはシヴァの身体をマッサージし、穢魔の殲滅で疲れた体を癒す。本来であるならば、疲労回復のデユナミスで事は足りるのであり、フラウは既にそれをかけている。

なのに、フラウがこのような無駄な行為をするのは、単にシヴァの世話を自分の手でしたいという女心であった。

「ん……」

シヴァもそれを十分承知しており、ただ彼女に身を任せていた。

フラウの繊細な指がシヴァの身体を滑るようになぞっていく。微弱の電流を流し、筋肉を解していく様は熟練の技を思わせる。

「しかし、また面倒なことになったな」

サティもフラウと同じように、その小さな身体でマッサージをしており、マッサージ中の話題として挙げたのは、彼らに与えられた任務の事だった。

「いきなり連絡が来た時は何だと思ったけどね」

連結水晶は離れた相手と会話できる便利な代物ではあるが、水晶の番号と共に場所の登録も行う必要があるので、携帯には不向きだ。故に、そとで使用する時は簡易型のそれを使用するのだが、使用範囲があまり広くないのがデメリットといえよう。

また、連結水晶には単一の連結水晶にしか繋がらない、秘密用の回線を用いるために使用される簡易型の魔導器があり、マリクスが使用したのはそれだ。

一方、シヴァ達が連絡を受けたのは、対となっている水晶同士にしか連絡できない連絡用の魔導器であり、エリオス達から連絡があったのはそれだった。

「大方、復興用の土気高揚に利用するのだろうか」

シヴァとしては、自らの戦果を横取りされることになるのが気にしない。

邪魔にさえならなければ、また目的さえ果たせれば、どれだけ利用されようが一向に構わなかった。

「成功したら、報酬があるそうですよ」

「口止め料だろうよ」

サティの手が少しばかり強くシヴァに食い込む。

「下手に称えられるよりは、余程ましな選択だな」

「そうね。もしも戦勝用のパーティが開かれ、出席することになったらぞっとするわ。お偉方のご機嫌取りなんて真っ平だわ」

その様を想像したのか、セレナは身震いする。

彼女とて貴族の娘として相応の教育は受けてはいるが、権謀術数の渦巻く場は彼女の気質に合わず、嫌っていた。愛想笑いやお世辞程度を言うことは可能であるが、そういった取り繕いはむしろ嫌いであつた。

「だったら、報酬の方がいいですね。余計な気を回さずに済みますし」

フラウの言葉に誰もが頷いた。全員が世界を巡る上で、必要な教育として受けてはいたものの、人間というものがどれだけ醜悪なことを腹の中に溜めているか、嫌になる程理解しているために、そういった面倒を回避できるのなら回避することに異存はないと、全員の心の内は固まっていた。

「むふふ、ここがよいのか、ここがよいのか」

場の空気を一変させるためか、サティがシヴァをマッサージしながら、変な事を言い出した。にやにやと笑い、実に好色の中年が浮かべそうな表情をしている。

「……何を言ってるんだ？」

「ただのノリだ！」

呆れるシヴァにサティは実に偉そうに踏ん返り返っている。

それに興が乗ったのかは分からないが、フラウもセレナも便乗していった。

「兄様のココ、すごく……硬いですよ」

「あら、本当！ ガッチガチじゃない」

楽しそうに便乗する二人にシヴァはため息をつくとき、要求は何だと問うた。

「要求だなんて兄様……私は兄様に気持ち良くなってもらいたいだけですよ」

「ええ。偶には私達が気持ちよくしてあげようと思っただけよ」

「奉仕するのが、我らの生き甲斐だしな」

フフフと妖艶に笑う三人の攻勢の前には、シヴァは白旗をあげるより道はなかった。

「ここもすっかり寂しくなったものだ」

ローマ軍の攻勢もあり、一時的に減ったものの、ラローマからの補充もあって賑わいを見せていた南部のコロニーではあったが、シヴァの襲撃により残るはカクスとジェヴオーダンのみになってしまった。

カクスもジェヴオーダンも消費してしまったヒュレーを回復すべく、男の眼の前で今も尚眠りにについている。

「この地にもう用はないけど、君達はどうする？」

カクスとジェヴオーダンは微かながら目を開け、男に訴える。自分達はここで闘うと。戦意が籠った瞳に男は微笑を浮かべる。

「それが君達の矜持か。それが君達の宿命とはいえ少しばかり悲しいよ」

暫しの沈黙が流れ、風が吹きこんできて男のローブのフードが零れ、男の紫紺の髪が風に攫われる。

カクスとジェヴオーダンが再び目を閉じると、ヒュレーが湯気のように湧き出て、その煙が形を成し結晶となる。

「これは魂魄結晶クリフォトか……もしも、君達が敗北したのであれば、これを与えるに相応しい英雄に渡してほしいという君達の意味かな？」

両名はこくりと頷き、再び眠りに就いた。

「確かに承ったよ。今度君達に立ち向かうのは集団ではなく、個人だ。だからこそ、君達は自分達という試練に対して乗り越えた者に対する褒賞として、または敬意を表してこれを渡すというわけか」

男は目を閉じ、男がかつて歩んだ道程を振り返る。かつて、知ら

なかった事を知ってしまった今となつては、自分の行動は何だったのだろうかと疑問に思うことは多々ある。

だけど、今は後悔していない。かつて選んだ道は虚構の道標であったが、それでも 知ってしまった今となつても間違いだらけだったとしても後悔はしていない。

知らなかった故に歩んだ道と知ってしまった後で選んだ道は交差しないものではなく、ただの裏表の結果でしかない。きつとどちらにも成り得た。

選んでしまった故に、引き返す道は無くなってしまったけど、それでも歩みを止めようとは思わない。

「君達はどう思う？」

男の仲間達へと向けた呟きは微かに聞こえる波の音に掻き消されるほどだったが、海を越えてその者達へと届くかのようだった。

潮風がシヴァの髪を撫でていき、シヴァの背に広がる平野までも吹きぬけていく。

以前あった青い血の海は跡形もなく消え失せている。穢魔の血は大地の上では一定時間が経つと、何事もなかったかのように元の大地へと戻る。

空はどこまでも青く突き抜けており、空でも飛べそうだった。

微かな振動が聞こえ、カクスがその巨体を巣穴から出現させる。

シヴァには何故か、カクスが決闘にでも向かうような戦士の目をしている気がした。

両者は睨み合うが、言葉はなかった。ただ、この静謐を壊す言葉を紡ぐ。

「イェツィラー具象、『無極』」

己の意思を貫くための力を形成する。

シヴァから放たれるプレツシャーが周囲の景色を歪ませる錯覚を齎す。

カクスは己が最大の武器である炎槌を手に具現化する。

炎槌から放たれる熱はシヴァとは異なり、物理的に視覚を揺らめかせる。

シヴァは半歩引き、剣を地の方へと下げ、いつでも動ける体勢を作る。

カクスは天に掲げ、いつでも振り下ろせる体勢を作る。

静寂の一瞬後、シヴァは大地を疾駆し、カクスは咆哮と共に炎鎚を振り下ろす。

小人と巨人の決闘が幕を開いた。

そのほぼ同時刻。

シヴァから少し離れたところで、セレナとフラウ、ジエヴォーダンが対峙していた。

驚きはなかった。ただ、来たか、とだけセレナは思った。

「フラウ、下がっていて」

「援護は？」

「必要ない。他に居るかもしれないから気をつけて」

フラウはセレナの言葉に頷き、彼女を目視でき、尚且つ邪魔にな



らない所へと退避した。

セレナは迅速に決着すべく、己が持つ最強の武器を形成した。

「イエツィラー 具象、シュテラーゼ 天星光翔翼」

星の光を集めたような優美な装飾が施された細剣がセレナの手に具象化され、セレナの背には光の翼が陽光にも負けず光り輝いている。

光の翼を背に持つセレナは彼女の美貌も相俟って、まるで女神を守護する戦天使。

女神の加護を一身に受け、女神を外敵から守護する守り手こそが今の彼女に相応しい。

対するジエヴォーダンはその戦乙女に対峙するに相応しく、真紅の毛皮を逆立て、唸りをあげる。セレナの威容に一步も引かず、牙を剥く様は魔狼と冠するに何ら遜色はなく、敵手としては役者不足足りえない。

ここに、守護者と討伐者の、美女と野獣の劇が開幕となった。

カクスが投げた炎鎚をシヴァは直撃しないように躲す。炎ではあるものの、それは質量をもったそれであり、直撃するのは体格と膂力差もあって、得策ではなかった。

とはいえ、直撃しなければ大丈夫という問題ではない。

豪風がシヴァの傍を通り過ぎ、地面に衝突すると炎鎚が爆ぜ、地面に大穴が穿たれ炎と轟音、そして地面の振動がシヴァを襲う。

シヴァはそれを水と風を身体に纏い、足に吸収のエイドスを貼り付けることで回避する。

しかし、これらの恐ろしさは直接的なものだけでなく、副次的なものも脅威と化す。

シヴァは空気を吸い込むと、熱を伴った空気がシヴァの喉を焼こうと入り込んでくる。水を纏い、回避するもののいずれは炎の海に囲まれ、熱と熱風により焦がされることは想像に難くない。シヴァの身体は回復すると言っても、限りがあるのだ。シヴァとフラウのヒュレーが尽きてしまえば回復することは不可能。長期決戦は得策ではなかった。

カクスが次の炎鎚を投げ、シヴァはそれを躲すも先ほどまでとは距離が短くなったこともあってか、颯風がシヴァを叩きつける。

だが、シヴァはその風を利用し、綿密なヒュレーの風の手操作で自身を後押しする推進剤とすることでカクスの足元まで接近した。

有効な攻撃を与えられる距離まで接近した代償か、カクスの炎鎚が逃れられぬ死の鉄槌となってシヴァに振り下ろされていた。

シヴァとカクスの闘いが力と力を競う決闘ならば、セレナとジェヴォーダンの闘いは速度を競い合う決闘だった。

移動の際に起こる風が嵐となり、何人たりとも近づかせない聖域となる。地を駆け巡る流星と天を飛び回る流星は時には交差し、時には円を描くように動き回る。それはまるで、夜天の星の円環を早送りで見ているような光景だった。

宙を飛翔することで、優位に立てるのかといえばそうではない。セレナはまだまだ制御が未熟なため、長時間の飛行は不可能だ。それ故に、飛び回るといっても跳ね回ると言った方がセレナの動きの的を得ていると言えるだろう。

瞬間的な速度で勝っているセレナに対し、平均的な速度で勝っているジェヴォーダンとの闘いはセレナの優位で事を運んでいるのだが、セレナが勝利を掴めない理由はジェヴォーダンの葬世にあった。ジェヴォーダンの葬世は何も地上を這いずり回るだけではない。

今現在のセレナのように、宙を走り回ることが可能なのだ。

これは衝撃のエイドスが元となっているため、物理法則に縛られないのが理由となる。

しかも、数の多さもあってか今一つ決め手に欠けていたのだ。

威力に関しては通常よりも上ではあるものの、セレナ自身それを持て余し気味なので、今のところ三次元的な動きをとれる事が通常時との違いになる。

光の狼がセレナを食い破ろうと何匹も襲いかかるが、セレナはそれを撃退する。避ける真似はしない。これには追尾機能でもあるのか、躲しても幾度となく襲いかかり、放置しておけばその数を増やすだけなので軽くエイドスを当てるだけで対処する。

ジェヴォーダンの戦法の上手い所は、自身の身体能力を上手く活かし、大地を駆け巡る術に長けているところだろう。その点はさすが獣というべきだろう。

さらに、直線距離を光の狼で埋め尽くすことで必然的にセレナの移動を誘導し、自身に近づけさせないようにしている。これが、街中であれば決着はとうにしているだろうが、ここは平野。起伏が少ない故に、ジェヴォーダンは自在に走りまわれる。

空中に迫ってきた光の狼を適当なエイドスで撃退し、大地の方へ迂回して突撃するもジェヴォーダンはそれを察知し、光の狼を設置しながらセレナから遠さがる。光翼を利用して大地を滑るように飛ぶも、宙を風のように舞いながら迫るも結果は同じ。ジェヴォーダンは長期戦覚悟でセレナのミスを待ち続ける。

幾度となくジェヴォーダンの戦略を検証した結果、セレナの冷徹な思考は二つの打開策を導き出した。

一つが光の狼の群れを突破し、最短距離で突撃すること。だが、これには多少の被弾も覚悟しなくてはいけなかった。

もう一つがジェヴォーダンがセレナを誘導するように、セレナもジェヴォーダンの行動を牽制し、動きを縛りつけること。これには、相手の動きを最後まで読み取る必要があるが、そのようなことはセ

レナにとってはもう造作もないが、少々手間がかかると踏んでいる。この二つの内、セレナが選んだのは最短距離で突撃すること。

護衛の任務を果たさなくてはいけないので、時間をかけるわけにはいかない。フラウとて多少の事ではやられはしないが、万が一ということもあり得る。今こうしている間にもフラウに危機が訪れてもおかしくはない。

だからセレナは覚悟を決め、突撃する事を選んだ。

「万物を貫き通す矛、万物を防ぎ通さぬ盾」

デユナミスは通常、術者の傍から放つ形を取るが、それは術者のヒュレーを元に構成させるものなので、術者から距離が遠くなるとヒュレーの構成が難しくなるからだ。

魔導師は範囲攻撃を行う際、術者から放つ場合と相手の頭上などにエイドスを放ち、相手に落とす場合がある。

魔導師が後者のエイドスを使用する際、集中し動けなくなるのは自身とエイドスを構成する地点を結んでいるからだ。自身のエイドスを糸のように伸ばし、ヒュレーを送り込むパイプにすることでその地点へのエイドスの構成を可能にする。

もし、術者が動き回ってしまえば相当の熟練者でもない限り、そのパイプは切れてしまい、エイドスの構成は不可能になる。

よって、戦闘においては術者から放つ放射型が主体となる。

セレナは詠唱に集中しながらも、襲いかかる光の狼を避ける。撃退はしない。今はエネルギーの構成に力を割いているので、その余裕はない。

「矛と盾、その混成した結晶を刮目せよ」

セレナを群狼が包囲しているが、セレナはジェヴォーダンのみを視界に入れていた。

例え、囲まれていようと関係はない。  
突破すればいいだけのことだから。

「バランス 矛盾を否定する理」

セレナが流線型の金属に包まれ、ジェヴォーダンへと突撃する。  
ジェヴォーダンへの道を塞ごうとする狼藉者は流線型の先にある  
幾重にも重なった尖槍が貫けられないものが無いとばかりに刺し貫  
いていく。

尖槍は削られる度にその刃を換えていき、決して切れ味を落とす  
ことなく貫くという本分を貫いていた。

セレナを阻害しようとする邪魔者達は流線型の盾の鎧を剥ぎとろ  
うと、餌に集る獣のように群がるが、幾重にも重なる盾の鎧を突破  
することは叶わなかった。

驚異的な速度で迫る金属の流星がジェヴォーダンに尖槍を突き通  
そうとするのは時間の問題ではあるが、同時に盾の鎧が突破される  
のも時間の問題ではあった。

バランス 矛盾を否定する理 は《アルケミー 錬金の理》と本質的な部分では同じで  
あり、加速のエイドスなどを付加はしているものエイドスである  
ため、光の狼が接触し続ければその盾の鎧を食い破ることは可能で  
はある。

加速され、濃縮された時間の中、セレナはジェヴォーダンのみを  
見続けていた。ジェヴォーダンが回避、後退しながら葬世を繰り返す  
すものセレナの尖槍からは逃れられない。僅かな隙間を突破し、  
尚且つ最短距離で突き進む。言うは易しだが、行動するのは難しく  
はあるもののセレナは実行している。

逃れられないと知ったジェヴォーダンが取った行動は自身の最大  
加速による体当たりとありつただけの葬世。相手を突破した方が勝ち  
という至極簡潔な決着方法。

盾の鎧が食い破られ、セレナが露出するも、セレナが取った行動

は防御ではなく、さらなる加速。攻撃される前に攻撃するという至極簡単な理屈。

銀の閃光と赤い閃光が交差する。

セレナの槍はジェヴォーダンを貫き、ジェヴォーダンの牙も、葬世もあと一歩のところまで届かなかった。

光の狼がジェヴォーダンの意識が途絶えているから霧散する。

「ニールド  
《千針槍》」

ジェヴォーダンを貫いた槍から錬成された数多くの針の槍がジェヴォーダンの身体を体内から弾け、ジェヴォーダンを完全に絶命させた。

青き血がセレナの美しい顔にかかるが、それはセレナ的美貌を損なわせるものではない。禁忌的な魅惑を引き出すかのようにもあつた。

ジェヴォーダンの身体が消えていき、セレナと大地にかかった血潮だけがジェヴォーダンの痕を残していた。

セレナは顔に付いた血を拭いとると、すぐさまフラウの元へ向かった。

振り下ろされる炎槌は、シヴァから見上げるとまるで炎の海が空から降ってくるようでもあつた。万物を燃やし潰すであろう炎の鉄槌は空気を貪りながら、シヴァへと迫る。逃れる術はなく、立ち向かうしかない選択肢を迫られたシヴァは迷いを生じることなく、思考回路を全力でそれに傾ける。

「カラドホルツ  
《蒼雷剣》」

『無極』に稲妻が凝縮したかのように纏わりつく。触れれば感電死

することは確實であろう程の放電現象が刀身部分に起こり、青き稲妻が絶えず音を立てながら自己主張を繰り返す。

シヴァは柄を握りしめ、斬るべく処を見定めるために、炎の空を凝視する。

カクスはこの敵を倒すべく、最初から全力で一切の隙を与えず連続で攻撃を仕掛けていた。その甲斐あつての事だろう。敵は己の炎槌の殺傷範囲に入ってきて、正面から打ち破るしか方法はない局面へと移行している。

カクスとの体格差を考慮するならば、十倍以上も差があるシヴァではカクスの膂力に敗北するのは一目瞭然だった。

一切の慈悲もなく、打開策を考える暇も与えず、カクスは己が全力の葬世をシヴァへと叩きつけている。骨をも溶かすであろう劫火は容赦なくカクスの手中で渦巻いている。

轟音と共に大地の鳴動が周囲一帯に広がる。

通常《ヴァルカンスミス赫焉の炎鎚》は炎と振動の拡散方向を全方位に放射するよう設定してあるが、今回のそれは一点に集中させ、破壊力を増幅させてある。

その結果、大地はひび割れ、マグマのように煮え滾っている。この炎熱地獄には生物が存在できる余地はないと確信できるほどだ。

蒸発したのか、それとも……

カクスは訝しんだが、炎が視界を遮り、確認も儘ならないので警戒したまま、炎槌を持った手を引き上げようとしたその時、蒼雷の一閃がカクスの手を横切った。

シヴァは《蒼雷剣》<sup>カラドボルツ</sup>で伸ばした稲妻の刀身でカクスの手を斬り飛ばしたとはいえ、自身も無事ではない。《赫焉の炎鎚》<sup>ヴァルカンスミス</sup>の炎はシヴァにも届き、服だけでなく身体も焼けただれている。戦闘状態にあるシヴァには痛覚は精神までは手を伸ばさないものの、肉体にはダメージが残り、動きに支障が出てしまうのは人体の構造上仕方ない面がある。

シヴァは肉体が悲鳴をあげているにもかかわらず、次の一手を繰り出した。

「《雷霆の矢》<sup>ヴァージュラ</sup>」

雷霆の矢は《蒼雷剣》<sup>カラドボルツ</sup>の副次効果である痺れによって硬化しているカクスの斬り飛ばされた手の傷口に寸分違わず命中する。

激痛が走る傷口にさらなる激痛と、カクスを身体を這いずり回る雷の蛇がカクスを絡め取ったことで、絶叫をあげることしかカクスは激痛を耐える術はなかった。

シヴァは熱で溶けている地面を回避するため、エイドスで足場を作りながらカクスの足元へと疾駆する。

疾走した勢いを利用して、大地を踏み砕かんばかりに踏み込み、カクスの体重を支える大木を思わせる足を、木を伐採するように薙ぎ払う。

足を断ち切られてしまったカクスは、もう片方の足で身体を支えようとすると、そちらもシヴァに薙ぎ払われてしまい、支えを失ってしまった巨体は重力に逆らうことなく、倒れ込んでいった。

カクスの巨体が倒れ込んでしまったゆえに地響きと砂塵が宙に舞い散る。熱による陽炎と土煙が視覚を遮るもシヴァは目標とするものに一直線に詰め寄る。

度重なる激痛で最早意識をまともを保つことも困難になったカクスは、蒼雷の刃を躲すことなど出来る筈もなく、三頭の獅子は蒼雷の刃によって胴体から切り離された。



アタルはその光景を一瞬たりとも逃さず捉えていた。自分にはできないことを容易く行うシヴァに嫉妬が湧きおこるも、自分の無力さの方がアタルの心の内を占めていた。

きつと、自分では炎槌を防ぐことも厭魔の手足を切断することもできず、ローマ軍と同じ末路を辿ることが容易に想像できた。

アタルの胸に燃え上がる感情ほのおは力の渴望。力があれば街への襲撃で被害は減らすことができ、厭魔を斃す事ができる。今抱いている惨めな感情を抱く必要はない。他人の戦果を盗み取る必要もない。

アタルの後ろでは歓声が湧きあがっているが、それは祖国の解放を喜ぶ歓声ではなく、戦わずに済んだという生への執着から生じた歓声だった。

アタルは自分が情けなかった。虚構の栄光を民衆に捧げなくてはいけない自分が。兵士達にそのような歓声しかあげさせることができない自分が。

「ラローマに戻るぞ」

エリオスはそんなアタルの心中を慮ってか、肩を叩くだけで、それ以上何も言わなかった。

アタルは自分の掌が強く握りしめていたため、爪が肌を食いこみ血が流れていたことに初めて気づいた。その掌を暫く見詰めると、気分を入れ替えるように目を閉じた。

風がアタルに強く吹き、アタルの赤みがかった金髪がそよぐ。それと同時に、心の内に芽生えている炎に風が吹き込んだかのようだった。

目を開けると、陽光が眩しく感じられ、目を細めてしまった。陽光を発する太陽にアタルは手を伸ばし、掴むように握りしめる。

(いつか、きつと……)

あの太陽のように光り輝き、人々を守り、導く存在になって見せる。

アタルは未だ未熟な自分にそう誓った。

フラウ達の元に向かったシヴァは早速フラウに心配そうな目で見られた。

「兄様、大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ、問題ない」

問題ないと口にするシヴァだったが、確かに彼の身体には傷は見当たらなかった。

しかし、彼の服は襤褸屑と化していて服としての機能をほとんど果たしていなかった。

「大丈夫じゃないですか!？」

「怪我はしていないだろう?」

「怪我の有無の問題ではありません! 傷を負ったという事実が大事なのです!」

相も変わらず無表情で平然としているシヴァに、フラウは猛然と叱りつける。シヴァは放っておけばどんな傷を負っても平然と無視するのだ。誰かがそれを心配しなくてはいけないと思っているフラ

ウは真つ先にそれを実行する。  
フラウは肌のほとんどの露出しているシヴァに離さぬようにぎゅ  
っと抱きつく。

「『勇者』である兄様を心配する人などいません。きっと、誰もが『勇者』の齎す結果にばかり目が眩み、そこに至るまでの過程に目を配る人などいないでしょう。だからこそ、私はいつも兄様を心配するのです。私だけはいつも兄様の身を案じるのです」

瞳を涙で潤ませるフラウに、シヴァは何も言わず優しく抱きしめ、  
梳くように髪を撫でる。

「当然、私も心配しておるぞ」

サティはシヴァの肩に出現し、そのままシヴァが無事であったことと勝利の祝福を込めて頬にキスをする。

それを見て、何もしないフラウではない。彼女も負けじとシヴァ  
に行く。

「何をやってるの……」

そんな二人を呆れた顔で見ながら、セレナはシヴァに予備の服を  
渡す。

「綺麗にしますね」

砂塵や煤で汚れているシヴァの身体を、フラウは汚れを取り払う  
それ専用のデユナミスを発動させ、清潔な状態にした。

そして、着替え終わったシヴァ達は欠片を取り込むべく、コロニ  
ー内部へと向かっていった。

コロニー深部へと到達したシヴァ達は目に映った光景に目を奪われた。

内部にある海に繋がっているだろう水たまりが原因だろうか、数十メートルにも及ぶ広大な空間は水面から放たれる紺碧の光は、広大な空間に照射され、部屋全体が紺碧に染まり、神秘的な空間を作り出している。

透明である筈の魔晶石さえも青みを帯びており、空間の幻想性をさらに高めている。

しかし、その中で異彩を放つのは青の空間にただ一つだけある白の欠片が青の輝きにも負けず、絶えず白の光を放出している。

「少し、いいかな？」

そんな光景に意識を傾けていた四人は突如として掛けられた声に緊張を覚えた。

『無極』を具象させたシヴァはすぐさま二人を下がらせ、いつでも斬りかけられるように体勢を整える。

「警戒しなくてもいい。僕は今君達と争う気はない」

殺意の放射に身を晒されながらも、ロープを着た男は飄々とした態度を崩さず、友人に話しかけるように気安く話す。

「貴様は誰だ？」

滲み出る膨大なヒュレーから男を強敵と認識したシヴァは警戒を解かず、誰何した。

「正式な名乗りはいずれするつもりだから今はするつもりはないよ。そうだね、君達の敵にもなるし、味方にもなる者と名乗っておこうか」

「それで、そんなお前が何の用だ？」

「君達にこれを渡そうと思ってね」

男がロープの内側から出した物は黒い水球。シヴァ達に敵意を見せないためにゆっくりと掲げる。

「それは……」

「魂魄結晶。クリフオト知識から引き出せるだろう？」ダウト

シヴァは引き出すまでもなくそれを知っていた。

「能力・知識を継承させるあれか……それでそれをどうするつもりだ？」

「君達が斃した厭魔に褒賞として渡すように言われたのでね。君達にはこれを渡すつもりだよ」

「何故自分で受け継がない。それだけのものだ、大分力は増すだろう」

人間程度ならまだしも、一騎当千を地でいく厭魔のそれならば力は飛躍的に増すことはシヴァは直感的に理解している。だからこそ、男の行動は理解できなかったのだ。

「それが同胞の願いだからね。無下にはできないよ」

「厭魔が同胞だと？」

目の前の男は人間にしか見えない。にもかかわらず、厭魔を同胞とするならば人型の厭魔か、もしくは人間の裏切り者かとシヴァは推察する。

「同じ目的を持つのであれば、同胞には違いない。君達とも同胞にはなれるし、不倶戴天の敵にもなりうる。そのことは君達が世界を救うのであればいずれ分かる筈だ」

男の言葉には偽証している様子もなく、真実を語っているようにも思える。そう判断したシヴァは警戒しながらも、話を聞く態度を続ける。

「これはここに置いていくよ。使うのは君達の自由だ。　　いずれ、また会おう」

男はそう言うと、剣を抜いているシヴァにあっさりと背を向け、この場から去っていった。例え、襲いかかれても問題はないと言わんばかりに。

男の気配が去っていたことでシヴァは一息をつき、警戒を解く。

「……相当強いわね」

「ああ、もしも闘ったのであれば勝てたかは分からないな」

絶えず漲る殺意が行動に移らなかったのは、相手の実力が自分よりも上だと認識したため。今戦うのは得策ではないと、本能的に理解したためだ。

「兄様、魂魄結晶クリフオトはどうしますか？」

「貰えるものならば貰っておくさ。力はこれからも必要だ」

シヴァは二つの黒い水球を手に取ると、もう一方をセレナに渡す。セレナに渡した黒い水球には狼が渦巻いている事が分かったので、受け取るに相応しい相手に渡したのだ。

自身のヒュレーを黒い水球に流し込むと、カクスの能力と知識が濁流のようにシヴァに流れ込む。その中には襲撃事件の真相が語られていた。

「なるほど。そういうことか」

シヴァはこの地で感じた違和感の理由を察した。

「真実は知らない方が幸せね」

セレナも事情を察し、サティとフラウはシヴァから流れ込んでくるそれで理解した。

「調和……ですか」

「襲撃した理由が分かると取った行動の正しさが分かるというものだな」

「あいつらが受け入れるとは思えないがな」

シヴァが肩を竦め、嘲笑すると三人はそれに同意した。

自分達の犯した罪を自覚させないまま、訪れた悲劇を嘆けばいいとそう思った。そうしていれば、自分達の罪から目を背くことができるから。

「じゃあ、さっさと欠片を受け入れてこの地から去るとしましょうか」

「そうだな。欠片が手に入ればこの地にもう用はない。おそらく、今回のような事態はこれからも起こるのだろうか」

「それでも我らは進み続けるのだろうか？」

サティの言葉には同意はなかった。これはただの事実確認でしかない。とつくの昔に逃げ道は無くなったのだ。

「兄様、調整しますね」

フラウの弾むような声は、それを誤魔化しているようでもあった。

我先にと前に居る人々を押しつけ、仇を取ってくれた英雄を一目にしようと犇めく現在解放されている王宮の庭に居る民衆をアタルは笑顔を張りつかせたまま、冷めた心で見下していた。

水路に水が戻ったことで攻略の完遂を知ったロムルスとラローマ



の住民はアタル達を歓迎の眼差しで迎え入れ、アタル達を称賛した。誰もがアタルの名を歓声と共に呼び、偉業を賛美する様は表舞台に立ち、脚光を浴びることになった英雄の息子を、新たに誕生した英雄譚を謳いあげるかのようだった。

こんな筈ではなかった。

称賛されるべきはローマーナ軍であり、『勇者』であるシヴァの筈だった。

どこかで狂った歯車は軋みをあげた部品を弾き飛ばし、狂った歯車を戻すべく、新たな部品を組み込んだ。

偶々、人々を襲撃から救い、

偶々、英雄の息子であったために少年達の心の葛藤を無視し、大多数の民衆のためにアタル達は人々の心を癒すために捧げられた犠牲。

斯くも正しき虚構の英雄譚は幕を上がり、人々の間で語り継がれるだろう。

人々の傷が癒えるまで。

もしくは、真実は永遠に闇の中で息を嚙めるかもしれない。誰も暴く気などないのだから。輝かしい栄光の前では、この程度の真実など目を向ける価値はないのだから。

アタルは虚構の座に立ちながら誓った。

今度こそはきつと、自分達の力で本物の座に立ってみせると。

人々の心模様を示すかのように空は澄み渡っている。

だが、アタル達の心は雨が降っていた。

ラローマ中に歓声ばかりでなく、礼賛も水が染み込んでいくよう

に響き渡るが、少年達の慰めにはならず、雨は晴れることはなかった。

## 最終楽章 覆水盆に返らず

これはある一人の青年の物語である。

戦うのが怖くなった僕は逃げるように軍を辞めた。他の兵士達には蔑むような目で見られたが構わなかった。死にたくはなかったから。

攻略に参加していた父の訃報が届けられたことでその思いは益々強くなり、僕は励む同僚達を尻目に死が渦巻く場を去っていった。

兵士を辞めてしまった僕は次の職は何にしようかと悩みながら帰宅した時、僕を待っていたのは生還した事を喜ばれるのではなく、兵士を辞める事をいい判断と褒めるでもなく、兵士を辞めた事を憎む親族の視線だった。

母は言った。

何故、兵士を辞めたのかと。父の後を継ぎ、父のように国を守って生きる誇り高い生き方をすべきだと。

祖父は言った。

僕は臆病者だと。逃げて恥ずかしくはないのかと。

祖母は言った。

他の人を御覧なさい。皆、大切なものを失い、悲嘆に暮れているのにそこから目を逸らすのかと。

僕は彼女達を説得した。

死にたくはないのだと。僕には力が無い。このままでは死ぬことになるのだから、死の危険が無い仕事に就きたいのだと。

僕の声は届かなかった。彼らは僕を蔑視し、近所に顔向けできないと。こんな息子がいる事が恥ずかしいと滂沱し、僕の身を案じる

ことはなかった。

僕は彼女らの軽蔑の視線に耐えられず、また逃げるように家を去っていった。

それから借家を借り、職に就けた僕を待っていたのは死に怯えない日々ではなかった。

死神の鎌が首筋を撫でることは無くなったけど、代わりに晒されることになったのは軽蔑の視線だった。

初めは誰もが優しく接していたけれど、僕が元兵士だと聞くと彼らは一様に蔑視の視線を向けた。五体満足なのに、どうして兵士を辞めたのかと問い詰められた僕は正直に逃げたのだと話すと、彼らは掌を返すように僕を蔑んだ。

誰もが僕を軽蔑し、辛く当り、避けるようになった。

僕はそんな職場に耐えきれず、またもや逃げるように去っていった。

その後の職場でも同じだった。

誰もが最初は僕に優しくするが、元兵士だと聞くと態度を豹変した。

死にたくないと願う僕の声は届かず、彼らは軽蔑の視線だけを向けて、僕から遠ざかっていった。

この街から離れようとも思ったが、この街を愛していることと約束があったから離れようとは思わなかった。

そんな僕が最後に辿りついた場所は闘技場だった。

皮肉としか言いようがない。

コロッセオは復興とほぼ同時に開催されることになった。

開催理由は皆から大切なものを奪っていった穢魔の討伐が見たかったから。

騎士の華やかな決闘は最早誰も望んではおらず、穢魔の討伐ばかりを人々は望んだ。

穢魔の相手は兵士ではなく、罪人や職にあぶれた者なる闘技士。失っても構わない人達が自らの血肉を削り、必死に穢魔と戦うのだ。

僕もその一員だ。

人々の熱狂は襲撃以前よりも増している。王自身も観戦に来てい  
るほどだ。

でも、少しだけ以前と変わった点がある。デモンストレーション  
として、人々は穢魔の拷問を行うことだ。

誰もが穢魔の血潮を狂ったように喜ぶ様は常軌を逸していた。

以前のような闘技場は、もうないと嫌でも理解した。

闘技士としての僕は少しながら兵士としての経験もあってか、連  
勝を重ね、ちよつとした有名人となった。

親族は揃って僕を誇りだと言い、近所の人達にも自慢できると誇  
らしげに語ってくる。そして、家に帰らないかと誘われたが、何か  
と理由をつけてやんわりと断った。家に帰る気などとうに失せてい  
た。

かつていた職場の人達は親しげに寄ってきて、自分達は僕と友人だ  
と周りに自慢げに口にした。僕は何も言わず、口元に愛想笑いを浮  
かべるだけの日々だった。

子供達が穢魔を討伐する僕を憧れた瞳で見る。僕のように穢魔を  
倒して、人々を守るようになるかと夢見ているが、僕はそんな子供  
達に『僕の様にはなるな』とはどうしても口にはできなかつた。

そんな日々が続く、僕はそんな人達から逃げるように酒に溺れた。  
かつて壊れた通い慣れた酒場は時を経て、元の姿を取り戻したが、  
かつてのような酒は飲めそうもなかつた。かつての日々が思い出さ  
れる。兵士だった頃の僕は闘技場仲間と勝つたり、負けたりで一喜  
一憂して酒を飲み交わしたものだつた。

だけど、今は僕一人で飲んでいる。

かつてのような輝かしい日々は戻らないと認識しているが、酒に

溺れて見ている夢の中では僕はかつての僕に戻っていた。

そして、酒ゆめから醒めると悪夢のような現実の日々を生きるのだ。

今日も僕は死神の鎌が首筋を撫でる闘技場で穢魔と戦う。

湧きおこる歓声は僕への賛辞ではない。僕が穢魔を殺す事を望む声だ。

聞き慣れた殺戮を促す声が耳に木霊する。ここに出場した当初はこの声に身を竦ませ、耳から離れず眠れぬ日々を過ごしたものだ。

だけど、今ではそんなこともなくなった。人は慣れるものだと誰かが言っていた気がするが、その通りだった。

闘技場で負けて死んだ闘技士に齎されるのは人々の悲痛の声ではない。

穢魔に負けた事を罵倒する声だ。その時には、人々は手に持ったものを闘技場へと投げ入れる。誰も 闘技士の事を悼むことなどしない。

そして、勝利した穢魔はその場で闘技士皆で襲いかかり、拷問するのだ。できるだけ生かした状態で無惨な真似をするのが習わしとなっている。

誰もそれを止めようとはしない。聞いたところによると、穢魔は人々に討伐されるべき存在であって、人間様に危害を与えるべきではないという。だから、人間に危害を加えた惨たらしく死ぬべきであり、異形の怪物なのだからそれが当然の末路らしい。

拷問方法は百を超え、残酷であればある程人々はそれを称賛し、失敗すれば人々は落胆し、しくじった者には容赦なく罵声を浴びせる。

闘技士仲間には僕は人間と穢魔、どちらがマシな存在かと詮もない事を問うたことがある。返ってきた答えは人間だった。化物よりは人間の方が遥かに上等だし、優れていると声高らかに主張した。そ

して、そんな質問をした僕を呆れたような目で見た。

僕は震えそうになる足を意志の力で無理やり抑え込み、穢魔に對峙する。

今日はいつもと違い、一対一ではなく一対三という初の試みだった。

有名になりつつある僕を闘技場の運営委員は目玉とするらしく、他の者とは明確に処遇の差をつけられた。

僕は反対するも聞き届けられることはなく、逆に脅される始末。もう、ここにしか居場所がない僕は逆らうことはできず、駆竜種三体に挑むことになった。

昔と違い、穢魔と戦うことに慣れた僕は一対一ならばそう後れはとらない。

だが、一対複数で穢魔と対峙して勝利できれば、一人前と見なされるほど困難な出来事だった。僕の力は戦い方が上手くなって、対処法が分かっているだけで、力そのものがあがったわけではない。不安を胸に抱えながら、今日も僕は生きるために闘う。

僕はこの国の兵士の例に倣っているように水系統のデユナミスが得意だ。

そして、僕はいつも穢魔と対峙することは苦手だから遠距離から攻撃してきた。接近戦など他の兵士に比べればお粗末なものだ。

相手を近づかせないように水の刃を飛ばし牽制する。大抵は躲されるが、いくつかは相手に傷を負わせることができた。父や他の兵

士達ならば一撃の元で深い傷を負わせたり、一撃で殺すことも可能だろう。

だけど、僕程度では表面を少しばかり削ることしかできない。そうであつたとしても、今まではそれで上手くやってきた。一対一だから逃げながら少しずつ削ればいいのだから。

僕が有名になつた理由としてこの戦法が人々の心を打つたことと連勝している事が原因となつていているらしい。

彼らが云うには手に汗握る展開で見ている方は面白いとのことだ。僕は怒りを抑えるのに必死になつた。僕が必死に生きるために戦つているのに、彼らは娯楽程度でしかないのだ。

だけど、後で冷静に考えてみれば僕もそうだつた。僕が兵士だつた頃は人々と同じように闘技士の闘いを展開をはらはらしながら観戦したものだ。偶に兵士が穢魔と戦うことはあつたが、一方的すぎてつまらなかつたと覚えている。

何のことはない。僕も彼らと同じ穴の貉だつたのだ。

ただあの頃とは立場が違うだけで。

英雄譚なんかそうだろう？

強い主人公は忌避され、誰もが見飽きる。勝つことが決まつているのだから物語としては起伏が無いと人々は評する。そんな人物の使い所は強敵か、越えるべき壁としか人々は求めない。

人々が求めるのは、自分達に近い人物で地べたに這いずり回りながら前に進む人物で、天上を優雅に舞う人物ではない。

そんな人物達を地べたに墮とす物語を誰もが好むのだ。自分達とは違う存在だから。

昔の僕ならば後者の人物を求めていただろう。

だけど、今の僕は前者の人物こそを求める。だって、そうなればもう死の恐怖に怯えることはないのだから。あの『勇者』のように易々と厭魔さえも葬ることができればどんなにいいだろう。あんな人物がいてくれるならばどんなに安心できるだろう。

でも、彼はもういない。



そして、僕は地べたを這いずり回る屑だ。

傷つきながらも前進する穢魔は僕の憧れでもあった。彼らは決して迷わずに人間を排除しようとする。僕は傷つき膝を折ってしまった人間だ。今も葛藤しながらも前に進んでいるかどうか分からない闇の中で蹲っている。

一度彼らが傷ついている牢屋に入った事があるが彼らは何故か僕を襲わなかった。きつと、傷のせいで碌に動けず、僕程度の人間なんか気にかける気はなかったのだろう。

僕はいつも通り逃げながらデュナミスを発射するが、今日はいつもと違い、一対三だ。一体に構ってばかりいると、他の二体が容赦なく僕を襲うだろう。

だから、出来るだけ均等に割り当てながら、逃げ道を確保し続ける。

きつと人々はこの熾烈な戦いを僕が制する劇的な勝利を望んでいるのだろう。

それとも、逃げ続けてばかりの僕を蔑む瞳で見下し、罵声しているのかな。目の前の事に集中しているから分からないや。

だけど、現実はその甘くはなかった。

一体は何とかして斃したけど、他の一体に僕は爪で挟られてしまい、深手を負う。

人々のどよめきが聞こえるが、そんなのには構っていられない。何とか決った個体を斃したが、もう一体が僕に襲いかかる。

今にも意識を失いそうな身体を叱咤し、逃げ続けながら攻撃するも、命の水は刻々と流れていき、死も目前に迫っていた。

だけど、彼らからは静止の声は出ない。寧ろ、命の危機に瀕している僕を応援する声援や殺せという殺戮を催促する声、そして不甲

斐ない僕を悪罵する声だけだった。

彼らは僕が勝てるかと信じているのか。それとも、僕が死んでもどうでもいいのか。その心の内は理解できないが、確かなのは死神の鎌は僕の首に食い込んでいる事だけだ。

そして僕は出血多量のせい膝をついてしまった。抵抗する気力などもう何処にもない。ただ、穢魔の爪が僕を抉るのを待つだけだ。

死神の鎌はもう僕の首を半分断ち切っている。

目が霞んでいるためか、コロッセオに来ている家族も見えない。彼らは最前列で僕の姿を見ている筈だ。

お母さん、僕の勇敢な姿を見てくれましたか？ 父と同じように僕も死にます。こんな結末で満足してくれますか？

お爺さん、臆病者の僕はこうなりたくなくて逃げたのです。逃げずに立ち向かって、このように死ねばあなたも僕を恥だと思わずに済みますか？

お婆さん、僕も他の人達と同じように無惨な骸を晒します。かつて襲撃された時に死んだ故人のように死にます。これで御近所の人に顔向けできますか？

職場に居た人達、僕の死を悼んでくれますか？ それとも馬鹿な奴と嘲笑いますか？ それとも僕などいなかったように振舞いますか？

コロッセオに来ている民衆の方々、今までの闘技士のように死んだ僕に罵詈雑言を浴びせますか？ それとも、僕の死を悲しんでくれますか？

どうなるかは僕にはわからない。だって、僕は死んでしまい、結果を見届けることができないのだから。

僕はあの時逃げなければこんな結果にならなかったのだろうか？

逃げることは罪だというのか？ ならば、きっとこの結末は妥当だ。

僕に憧れた子供達、僕の死で君達に伝えられなかった事を伝えます。君達はどうするのか？ 闘う事を辞めるのかな？ それとも闘う事を選ぶのかな？ そんな君達はどんな結末を迎えるのかな？ 零れたミルクはコップには戻らない。

全てはもう遅い。

これは走馬灯だろうか？

僕はある日の僕に戻っていた。

賭博の勝敗の結果で、僕は酒を飲んでいる。

分からない結末だったから、自分達が信じた結末を祈って、そうなるように祈って祝杯をあげたその日。

別に祝杯を挙げることに意味はなかった。ただ、気の合う彼らと酒を酌み交わすことに意味があったのだ。賭博の勝敗の結果をつまみにし、彼らと愚痴り合う。

そして、べろんべろんに酔った僕は肩を寄せ合いながら千鳥足で帰宅するのだ。

また、酒を飲もうと約束を交わし、明日がまた来る事を当然のように享受するのだ。

今の僕にはもう望めない光景だった。

僕は英雄になることも、有名になることも望んではいなかった。

ただ、下らない日々を生き、死の恐怖に怯えない日々を送り、い

つかまた彼らと酒を飲み会えればそれで充分だったのに。

どこで道を間違えたんだろうか。

僕は人々に問いたい。

死に怯えて逃げることは罪ですか？

一度兵士になったのであれば兵士を辞めてはいけないのですか？

あなた達のように他人にそれを押しつけて、あなた達のように安  
穩とした日々を送っては駄目なのでしょうか？

そんな人としての生活を送ることは守る立場に一度でも立ってし  
まった僕には許されないのでしょうか？

もう僕にその答えを見つけることは叶いません。

そして、その答えを聞くことも叶いません。

ただ、このような結末を認められず、どうするのが正しかったの  
かを知りたかっただけなのです。

アープ、君だけはこんな僕の生き方を肯定してくれたね。君は今  
何をしているのだろうか。僕とは違い、今も穢魔に立ち向かってい  
るのかな。それとも僕のように膝を折り、逃げたのだろうか。

どちらを選んだとしても、僕はそれを歓迎するよ。だって、君は  
逃げる僕を歓迎してくれたのだから。

駆竜種が僕の命の灯を消してしまった。

避けたかった死神の鎌が僕の首を完全に断ち切った。

僕はもう何も見えないけれど、何もできないけれど、祈るよ。

かつて僕達が見えない結末を望んだ結果を得られるように信じて

祈ったように、祈り続けるよ。君が僕とは違う結末を迎えることができるように。

僕にはそれしかもうできないから。

ああ　もう意識が薄れてきた。

一つだけ、気がかりな事があるんだ。

それは家族の事でも、職場の人達でも、闘技士仲間でも、子供達でも、ラローマ市民の事でも、自分の事でもない。

ごめん、アープ。

酒をまた酌み交わそうって約束果たせないや。

こうして、一人の青年の物語は幕を閉じた。

## 最終楽章 覆水盆に返らず（後書き）

どちらかといえばハッピーエンド主義ですが、この作品では後味が悪くとも、バットエンド気味であってもこの方がいいと判断した場合、今回のようになります。

ですから、最後は後味が良くなっては駄目だという方や勧善懲悪を望む方は合わないと思います。

悪人であろうと生き残りますし、場合によっては最終局面であろうとボロ負けすることもあります。そういうのに飽き飽きしている面もありますから、この作品ではそういったこともこの組曲のようにあります。

そんな容赦ない作品でもよければこれからもよろしくお願いします。

## 第一章 潮騒の調

夕焼けが水平線を彩った紅き世界は星々が煌めく黒き世界の来訪を告げている。

己の矮小さを否応がなしに自覚させられる広大な海は潮騒が旋律を奏で、命の恵みを育んできた母なる海は生命の香りを運び、海の潜在的な恐怖を感じさせる冷風は身体を撫でていく。

大海が奏でる協奏曲は甲板で寛いでいるシヴァ達にその調べを聞き届けてさせていた。

「海皇種は襲つてこないとは云われているが、こつも陸地から離れてしまつとそら恐ろしいものを感じてしまつな」

「次の場所へ行くには船で渡れば最短なのだから仕方ないわ」

ローマーナ王国からの航路のためにワインも豊富に用意されているが、護衛の事もあるのでセレナは果汁のジュースを飲んでいる。

もつとも、シヴァ達にとってしてみれば自ら隙を晒すことになるアルコールなど摂取することはないのだが。

「次の国はどのような処なのでしょうね」

「すぐにでも来て欲しいとの連絡があつたものの、緊急を要するものでもないらしい。ただ、三つのコロニーがあるから不安は早く取り除きたいのだから」

ウォードには他国への回廊門があるが、使用するには双方の国の許可が必要であり、通る幅は精々一人分程度なので、『勇者』による援軍や連絡要員しか通ることは許されない。

今回連絡はあったものの、次の国はこちらにして欲しいという連絡しかなかったのでシヴァ達は回廊門を使わず航路を選んだ。

次の国であるクセルギリア共和国はローマーナ王国の東の海を一日程度渡った距離だったこともあるだろう。シヴァ達は優雅な廻船の旅を満喫していた。

この世界の船は帆船が利用されてもいるが、ただの帆船ではなく魔導器を推力に利用した船も数多く利用されている。

当然の事だが、船には推進の魔導器だけでなく、馬車と同じように揺れを防ぐための魔導器も設置されている。

なので、船酔いもすることなく快適な航海を過ごしていた。

四人の間に暫しの沈黙が流れたが、気まずくなることは無い。会話が無くとも確かな信頼で結ばれていることもあるが、元々四人とも無口な性格なこともあるだろう。サティやフラウが主体となって会話を盛り上げるが、それはこの四人の中のみ限定されており、他の者に対しては不要な会話をしようとはしない。

「そういえば、あの四人は第十位階に至るべく瞑想しているのだったな」

「少しばかり熱心な気もしますが、何か思うことがあったのでしよう」

「今は丁度することもなく暇だし、いい機会ではないかしら」

「……………」

ちなみにシヴァはアタル達の事を同行者として認めてはいるものの、顔だけは覚えていたが名前は覚えていない。

シヴァが覚えるのは権力者などの覚えていなければ面倒を引き起こす者だけにすぎず、それ以外の人間に関しては彼に有益と判断さ



れるか、興味を持たない限りは覚えられないことは無い。

太陽が沈み、夜の世界が顔を出し始めたのでシヴァ達は夕食を摂るべく、船内へと足を運んだ。

自身に流れるヒュレーは明確に把握できるものの、世界に流れるヒュレーの掴みにくさを実感させられるアタルは絶望から目が眩みそうだった。

性急だとは自覚はしている。だが、時間も事情も何もかもがアタルを待つてはくれない。全ては無情に時が流れ、アタルは時代の奔流に翻弄されてしまうのだ。

故にそれに抗う力が必要なのだ。二度と屈辱を再現しないように、自らが目指す『勇者』を体現できるように。

レイア達もそれは同様だった。彼女達はローマーナ王国で起こった悲劇に自分の無力さを噛み締めてしまったのだ。

己が思想を体現するには力が必要で、その力の象徴がエンテレケイアだったのだ。どれほどの無茶を重ねようとも、至らなければ先へと進めない焦躁感アタル達を容赦なく灼いていった。

アタル達の脳裏をかすめるのは、ローマーナ王国での出来事と合流した時のシヴァ達との遣り取りだった。

以前として復興中ではあるが、できる限りの贅を凝らされた食事は穢魔の襲撃の恐怖を取り除いた英雄、アタル達に供物として捧げられたが、同時に襲撃の渦中にいたため家族や家を失った者達の慰めのためにも、復興を支えるであろう兵士や街の人々にも例外なく配給された。

裏には贅を凝らした食事を配給することで、これからの生活から一時的に目を逸らさせ、自棄を起こさないための人心操作の一面があつたことは否めない。

しかし、曇っていた人々の表情は今は輝きを取り戻し、束の間の祝宴を互いに同じような立場に陥ってしまった者同士や襲撃の被害から運良く免れた者達も同じように食事を共にした事を忘れてはいけないだろう。

例え、冷徹な計算の元に人々の感情を操作していたとしても、そこに人々の笑顔があるのであればそれは間違いも無く善なのだ。

煌びやかな衣装に身を包んだアタル達は戦勝パーティーに出席することになったのだが、長時間の間、ローマーナ王国の重鎮達の再三とかかる勧誘にアタル達は張り付いてしまった愛想笑いが解けなかった。

「此度は我が国をお救い頂き、ありがとうございました。どうですか、このまま我が国の兵となられるのは？ 貴公であるならばできるかぎりの立場を用意させていただきますが……」

「いえ、私達にはコロニーを攻略するという使命があるので、誠に申し上げにくいのですが断らせて頂けないでしょうか？」

「なんと！ それは崇高な使命ですな。気が変わりましたら、いつでも申し付けください。我が国はいつでも貴公を歓迎しますので」

このように虚構の英雄である事を知りながらも、ローマーナ軍へと誘いをかける者は後を絶たない。

それもそうだろう。彼らは軍事力の要である軍の大半を失ってし

まったのだ。元々あった北のフレイス軍や穢魔の侵攻を妨げるために張られた防衛線の軍や南部コロニー周辺の被害を防ぐために設けられた防衛軍、及び海軍は有してはいるものの戦力を派遣するために設けられた首都の常備軍は壊滅状態だ。

彼らに今現在求められるのは即戦力の補充と将の養成。

前者に関してはウオードに所属している者達から引き抜くことは可能ではあるが、後者に関しては火急を要する必要な案件でもある。だが、救国の英雄アタル達ならばその条件を満たすことは可能だ。同じように煌びやかな衣装に身を包んだエリオス、アープ。そして、華やかなドレスで着飾ったレイアやマーテルも再三にわたる勧誘を受けている。

実力の有無はこの際、関係は無いのだ。大切なのは将が兵を求心できる存在であり、纏められること。救国の英雄であるアタル達ならば、人々はその光を求め、憧れてわらわらと群がることは明白だ。しかも、世界を救わなければならないために各国は利用できないもの、引き留めることはできない『勇者』とは違い、供であるアタル達ならば勧誘が成功すれば引き留めることは可能である。

だからこそ、ローマーナ王国の重鎮達はアタル達を引き留めようと必死に勧誘しているのだった。　　祖国を守るために。

それが分かっているからこそ彼らに強く断れないアタル達は、こうして愛想笑いが表情となるほど顔に張り付かせたまま彼らに接待しているのだった。

勧誘にやってくるのは重鎮ばかりではない。

「どうか、この国のためにこのまま滞在してはくれないでしょうか？」

「大丈夫ですよ。僕達がいなくともこの国はとても強い。きっと、彼らならこの国を守ってくれるでしょう」

「しかし、私は不安なのです。あなたのような強い人がいてくれるのであれば私も安心できるのですが……」

胸元や背中が露出が多いドレスを身に纏い、女性の美貌を引き立てるように飾られた宝石を見せつけるように晒す女性達は、アタルに慰めてほしいといわんばかりの不安な顔を見せ、時には涙を流したり、時には科を作り、アタルを誘惑するように寄り掛かったりとあの手この手でアタル達を引き留めようとする。

エリオスはこういった誘惑に耐性があるのか、軽く往なしているようだが、慣れていないアープは鼻の下を伸ばし、エリオスから窘められている。

それは男性陣ばかりではない。マーテルやレイアにも先ほどから引つ切り無しに、髪を整え、アタル達よりも洗練された身のこなしと魅力を引き上げる礼服を身に纏った男性達が周囲の女性を赤面させるほどの口説き文句でマーテル達を愛を囁いている。

免疫がない二人はあたふたと慌て、顔をトマトのようにずっと顔を赤く染め上げている。エリオスが二人のフォローしているが、彼のフォローが無ければお持ち帰りをされていたかもしれない。

裏があると分かっているものの、彼らの事情を察しているアタル達は強く拒絶することはできず、多大な辛苦を強いられ、祝いの席でもあるにもかかわらず、心休まることは無かった。

不謹慎ではあるが、出席できなかったシヴァ達を羨んだアタル達であった。

破壊の爪痕は今も尚色濃く残っているものの、人々の表情は心なしか襲撃直後に比べ明るくなっており、元の生活に戻ろうと活気づ

いている。

兵士達は治安が悪化しないように見回り、建築士や大工の元に家を建て直し、友人や隣人達と話し込んでいる広場に居る人々の姿は襲撃前と変わらず確かに色づいていた。

嘘で固めた栄光ではあったものの、こうして人々の活気づいた姿を見ると、人の逞しさを垣間見ることができ、またそれを取り戻せるのであったのならば、偽りの英雄の効果もあったのだとさめざめと実感できた。

（嘘で塗り固めようと人も人は幸せになれるか……）

師は言っていた。真実とは暴くことで意味を持つものと、暴いてはいけないものがあると。真実の隠蔽は悪印象を齎すが、偽りとは人の為にこそあり、それで人々が安寧の時を過ごせるのであればそれは間違いなく是だと。正しい事が人々の幸せに直結することは時としてはないのだと。

レイアはそれに対し、思う事があったのだろうが、師の言葉と人々の活気を目の前にしては口を閉じざるをえなかった。

「ここだよ」

アーブの目の前にあるのはただの墓だった。

穢魔の襲撃で亡くなり、身元が判明している者は既に簡易的な葬儀を行い、既に埋められている。

アーブ達の目の前にある墓は彼らの闘技場仲間で、酒飲み仲間。

アーブ達はもうすぐこの国を去るので、その前に友人の元を訪れたかったのだ。

「おっさん、別れを言いに来たぜ」

彼が懐から出したのは一瓶の酒。

「アーブ」

青年も同様に酒を出すと、瓶を交わし合う。

軽快な音を奏でる瓶が他の者もいる共同墓地に微かに響くが、彼らも彼らとて死者に別れを告げに来ているので気に留めなかった。

アーブ達は詮を抜くと、彼が好んで飲んでいた酒を彼にも飲ませるかのように墓にかける。そして、彼らはいつものように酒を飲むのだ。まるで、彼らの仲間がいるかのように。

「いつも飲んでいた酒場は壊れてしまったから、ここで飲むことになっただけどいいよな」

アーブは彼がいるかのように話しかけ、酒を呷る。彼の瞳には二度と味わうことがない彼との酒を寂しがる感情が宿っていた。

「彼はそんなことは気にしませんよ。酒は何処で飲んでも上手いと言っていましたから」

「違いない」

彼らは仲間の事を思い出し、笑いあう。

最後の時を涙で締めくくるとような気はしたくなかった。ただ、死者を生者との惜別を笑って締めくくりたかったのだ。

彼らは遠征を共にはしたが、その事を口にはしない。遠征の事は緘口令が敷かれており、彼らはその意図を察していたのだ。

その成果が確かな実を結んではいる以上、彼らは口に出す愚拳を犯さない。

「今、この国は死者を悼み、生者は復興を見据え、前へと進もうとしている。これでいいんだよな？」

「僕はそれでいいと思います。どう理屈を唱えたところで僕達は彼らを残して前に進まなければならぬ。その一助となるのである。ば、多少の嘘があるうと気にしてはいけません」と

「　　そうだな」

それは祭り上げられた友人への慰めか　　。青年の言葉は確かにアープへと届いた。

死者への別れを済ませた彼らは共同墓地を出て行き、彼らの戻るべき場所へと戻ることにした。

「じゃあ、また飲もうぜ」

「ええ、必ず」

彼らは大仰な別れをしない。明日もまた会えるような気安さで、彼らは別れていった。

教会に設置されている鐘の荘嚴なる音色が正午を告げる。

教会に植えられている菜園で作業を行っていた子供達は、我先にと作業によって空腹となった腹を満たすべく孤児院の中へと駆けつけていった。

子供達のざわめきは以前よりその数を増し、賑わいを見せてはいるものの、歓迎すべき類いの賑わいではないのかもしれない。

子供達の声が増えるということは、それだけ子供達の身の上に不幸が降りかかったという証なのだから　　。

「神父様、孤児院の方はどうですか？」

孤児院を訪れたマーテルとレイアは近況を尋ねるべく、神父へと問いを投げ掛けた。

齢四十を超える神父は皺が増えてきた顔の皺をさらに深めながら、苦笑交じりにその問いに答える。

「子供達が増えたことで賑やかになったのは良いのですが、あまり歓迎すべき事態ではありません。本来ならば、ここに来るべきではないのですから」

「　　そうですね」

神学学校に通っていたマーテルは度々孤児院を訪れていた。フレイス王国では孤児になった子供は兵を親に持つ子供や盗賊に殺された者達が大半を占めていた。

穢魔は通常、子供のような一定以上の体格を持たない人間を殺すことはあまり無いとも云われている。子供が死ぬのは大抵の場合は、穢魔の爪牙によるものではなく、建物の崩壊や親が殺される際などの巻き添えのケースの方が多いとされている。

なので、それを信じている者は子供達を離れた場所に置こうとするものの、本能的な恐怖に耐えられず、それを実行できる者は少ない。

沈黙が場を支配し、時計の音がカチカチとマーテル達の耳を刺激する。

不意にノックの音が静寂を壊した。



「どうぞ」

「失礼します」

孤児院に勤めている三十前後であろうシスターが昼食を届けに来たのか、食欲をそそる香りが昼食を乗せたカートから漂う。

「あなた達もどうぞ」

「「ありがとうございます」」

昼食を用意してくれたシスターに感謝すると、配膳を手伝うべく近寄るとシスターの後ろに見知らぬ女の子が一人隠れているのに気付いた。

「その女の子は？」

「ああ……この子は」

前に出るように女の子を促す。

その女の子の少しだけ長い金髪はまるで争った跡のように乱れ、それを示すかのように頬が女の子の白い肌と比べ赤く腫れており、目からは涙が、鼻からは鼻水が今にも零れようとしている。唇はむすつとしており、閉ざされている。

何があったのかを昼食を配膳しながら、シスターは答える。

「今度入ってきた子なのだけど、他にも入ってきた子はいるので、その内の一人の男の子と喧嘩しちゃってね」

「喧嘩の内容は？」

「『勇者様』に関して、ですよ」

「『勇者』？」

レイアの形の良い眉がピクリと動く。

「ええ。男の子は『勇者様』は僕達を見捨てた犯罪者と言い張り、この子は『勇者様』と『聖女様』が助けてくれたと主張して、それで意見が食い違ってしまったって、喧嘩となってしまったのですよ」

「ホントだもん！」

女の子は甲高い声で力強く言い切ると、それ以上は口を閉ざした。誰も自分の事を信じてはくれないとばかりに。

「その事で今、孤児院は真つ二つ。街で噂が流れているからそれを信じる子達と『勇者様』がそんなことをする筈がない子達が言い争っています」

「ああ、それで少しばかり喧騒がすると思いました」

神父は部屋の外に耳を傾けていたのか、合点がいったとばかりに声をあげる。

「あなた達はその事に関して何か御存じですか？」

シスターはレイア達が救国の英雄だと知っている。だからこそ、その筋で何か知っていないかと尋ねたのだ。

不確かな憶測では事態は收拾できないと思ったから。

「それは……」

レイアは言葉に詰まった。シヴァが見捨てたという事実の一部とはいえ事実なのだから。

「ねえ、『勇者様』と『聖女様』が助けに来てたって言うていたけれど何があつたか話してくれる？」

マーテルは女の子の目線に合わせるようにしゃがみ、女の子が安心できるような優しい声色で詳細を尋ねる。

自分の話をちゃんと聞いてくれる存在がいてくれて、嬉しくなったのが女の子は固く閉ざしていた口を開け、しどろもどろに懸命に説明する。

「あのね……アタシ、壊れたお家に身体を挟まれて動けなかったの。それでね、誰も助けってくれなかったのに、黒いお兄ちゃんが手を翳すと、瓦礫が無くなってね。その後、白いお姉ちゃんが光ると痛みもなくなつてたの。だから、きつとあの人達が『勇者様』と『聖女様』なの」

マーテルは女の子の言う黒い男の人と白い女の人に心当たりがあった。それを確認まで持つていくために、もう一つの質問をする。

「その二人の他に誰かいなかった？」

「いたよ。小さい女の子と表情がない女の人」

「そう……」

マーテルは女の子を助けたのがシヴァ達だと分かったが

「その人達は『勇者様』と『聖女様』だよな？」

不安そうに聞く女の子にマーテルはにこりと笑って答えた。

「ええ、そうよ。でも」

肯定された言葉に女の子は顔を破顔させるも、続くマーテルの不安を誘う言葉に顔を曇らせた。

どうということなのかと、目配せするシスター達にレイアは真実を述べた。

「穢魔の襲撃があつた際、『勇者』はこの街に居ませんでした」

「何処に居たの？」

「敵の偵察へと出掛け、遠目から攻略の様子を観測していたようです」

「その……軍が全滅しそうになった時、手助けしなかつたんですか？」

神父は責めている訳ではないが、言いにくそうだとわかる口調で真相を知ろうとレイアに疑問を投げ掛ける。

「しようと思えばできたのでしょうか、『勇者』は事前通達で手出し無用との命令があつたので、それを忠実に果たしたそうです」

「確かにそんな命令も噂話ではありましたが、耳に挿んだことはありません」

「ですから、軍を見捨てたといえれば見捨てたのは事実です。しかし……」

レイアは女の子の方に向き直った。

「あの子を助けたのもまた事実だと思います。彼らがこの街に戻ってきた時に助けたのだと思います」

「なるほど……子供達が言っていることはどちらも真実ではあるということですか……」

神父はさほど上等とはいえないソファに寄り掛かり、今得た情報を染み込ませるように息を吸い、考えを巡らせるように息を吐く。

「じゃあ、誰が悪いの？」

女の子の不意の言葉に一同は時を止めた。

初めから、『勇者』を戦力として組み込まなかったロムルスだろうか？

いや、元々その国の問題はその国自身で解決すべきことであって、『勇者』という外部からの要素を前提とするのは、国として健全な在り方ではないだろう。

失敗には終わったものの、彼は失敗を取り戻すべく国を安定させようと最善の手を尽くしている。今も、彼は碌に休まずに仕事に取り掛かっていると聞いている。

では、攻略に失敗した軍が原因であろうか？

彼らは街の襲撃の予見を見過ごし、攻略にも失敗している。

しかし、今回の事例は過去に例はあまり見られないことであり、予見することは難しい。力不足という軍にあるまじき失態を犯したものの、勝敗においてはどちらに傾いたとしても不思議はなく、保障することなどではしない。今回は彼らが敗北の側に立っただけなのだ。無論失敗した以上、責められるのは至極当然なのだろうが、もう彼らはこの世にはいない。罰を受けているといえは受けているだろう。

では、軍を見捨てた『勇者』か？

確かに彼が街か、軍にでもいれば被害は今よりも少なく、悲劇も減らすことは可能だったろう。

だが、彼らは最高権力者に行動を抑制されていた。『勇者』は多少の越権行為は許されてはいるものの、通常国の命令には従わなければならぬ。失敗に終わったから彼を責めるべきなのだろうか。

では、街への襲撃の被害を防げなかったその時に街に居たアタル達を含め兵士達のせいなのだろうか？

元々、彼らは戦力不足を通達されており、それ故に居残り組だったのだ。

それに、突然の襲撃でまともに対応できなかったこともあるだろう。戦力になり得たアタル達も数が少なかったことから彼らがいない地域の侵攻は容易く突破された。

責められるべきは誰なのか。

彼女らの中にたくさんのIFが駆け巡る。

もしも、ロムルスが最初から『勇者』を戦力に取り込んでいれば。

もしも、軍が襲撃を予見し、攻略に成功していれば。

もしも、『勇者』が街に居れば、もしくは軍を手助けすれば。

もしも、街への侵攻に対応したアタル達に力があれば。

今回の様にはならなかった。嘘で固めた栄光で民衆を慰めることは無かった。

何かの歯車が狂ってさえいなければ、ローマーナ王国という一つの

巨大な機構は悲劇を生みだすことは無かった。この女の子のように泣く人間が増えることは無かった。

だが、ふと彼女達の中で全ての元凶が過った。

「全ては穢魔が悪いんだ。あいつらがいなければこんなことにはならなかった」

レイアの言葉を否定する者などこの部屋にはいなかった。誰もがレイアのその言葉が正しいと断言できるのであった。

「穢魔なんか皆いなくなっちゃえばいいのに……」

そう呟いた女の子の囁きはどこかそら恐ろしかった。

「恨みを抱えてはいけませんよ」

女の子の情操を危ぶんだ神父はすかさず口を挟んだ。

「どうして？」

それはシンプルな問いだったが、そこに孕んだ問いは幾重にも重なっていた。

元凶たるものを恨んではどうしていけないのか。邪悪なものを忌み嫌ってはどうしていけないのか。自分達からたくさんものを奪ったものにどうして憎悪を抱いてはいけないのか。

子供であるが故に感受性豊かな女の子の心の裡は瞳に宿っていた。迷える者達をこれまで説法してきたように女の子を導く。彼女が道を誤らないように。

「恨みを抱えるのは人としては仕方がない面もあります。ですが、

それに囚われてはいけないのです」

「どうして？ 穢魔は皆の敵だよ」

「恨みを抱えたままでは、あなたは幸せになれないからです。憎しみを抱えたままでは、憎悪の炎がやがてあなた自身を灼いてしまいます。そんなことは亡くなったあなたのご両親も私も望んではいません」

神父は慈愛を抱いている瞳で女の子を優しく見る。まるで彼女の親であるかのように。

マーテルは女の子を憎しみから守るようにぎゅっと抱きかかえる。女の子は心の底からは納得はしていないだろうが、彼女の言葉を信じてくれたマーテル達の心配そうな顔を見て了承の意味を込めた首肯をする。

シスターは安心するように胸に手を当てる。

「では、あなたも私達と一緒に昼食を摂りましょうか」

マーテル達は女の子と楽しそうに談笑した。

アタルが俯瞰する情景は、かつて彼が祭り上げられた王宮の庭。今はもう奔めく人々も、彼らが織り成すざわめきも過去の出来事であり、踏み荒らされた芝生の後だけがその残滓だった。

だが、アタルの目にも耳にも群がる人々の幻視が、彼を讃える幻聴が彼の視覚と聴覚を刺激する。

街の方を見遣ると、そこかしこに崩れた建物の残骸が目につくも、それを修復しようとする人々の姿も垣間見ることができる。



あれから数日が経ち、アタル達が今もラローマに残っているのはローマ王国に仕えるためではなく、英雄がいるという安心感からの治安の安定のためと穢魔の襲撃で消耗してしまった武器の修復および、贈呈のためだった。

アタル達には彼らに合わせた武器が褒賞として贈呈されることになり、武器職人や魔導器生産者達が救国の英雄達のために、腕を揮っている。

なので、各々好きに時間を過ごしているのだ。

数日の間に人々の治安が悪化するという凶報は耳に届くことはなく、アタル達の役目も終えようとしていた。

「こんな所に居たのか……」

「先生」

エリオスが細やかな彩色と細工が施されたガラス扉をゆっくりと開けて姿を現した。

エリオスもアタルと一緒に手摺に手をついて、人々の活気が溢れ始めている街並みを遠望する。

「これでよかったですでしょうか？」

「……不満か？」

不満かと問われれば、少し違った。人々の治安は悪化することなく、人々は生きるために前を向こうとしている。それを不満と覚える気などなかった。

ただ、納得はいかなかった。こんなのはアタルが目指した頂ではなかった。

「僕は『英雄』とは……『勇者』とはもつと光り輝いているものだ  
とと思っていました。だけど、今の僕の立場は塗金メッキでしかない。祭り  
上げられることでしか人々を助けることは、守ることはできない」

『英雄』である父は子供であつたアタルの目に輝いていた。だから、  
アタルもその輝きに焦がれて『英雄』を、『勇者』を目指したのだ。  
だけど、実際に目の当たりにした『勇者』は虚無の塊でしかなく、  
アタルが目指す『勇者』とは真逆を体現した存在だつた。

シヴァを否定したものの、アタルができたことといえばメッキに  
なることだけ。シヴァがいなければ、ローマーナ王国は終わっていた  
と確信を持って言える。

「前の『勇者』であるルドラも、『聖女』であるラクスも、『英雄』  
であるお前の父も言っていたよ。麓から見える景色と頂から見える  
景色は異なる」と

「父さん達も？」

「ああ……特に二人は『勇者』も『聖女』も毛嫌いしていたからな」

「あのお二人が？」

アタルの記憶に残る微かな記憶の残滓ではそう見えなかった。

「ルドラなんかはシヴァに似ていて、不満は口に出さなかったが、  
ラクスは思いつきり口に出して面倒臭いと言っていたな」

そう語るエリオスの顔と声調はどこか楽しげであつた。

「じゃあ、何でお二人は辞めなかったのでしょうか？」

「人々が許すと思うか？」

エリオスに宿る瞳の感情はどこか冷酷だった。

「一度でも人目に晒された宝石は人々の目から逃れることはできない。ありとあらゆる手段を用いて人の目に晒され続ける。」

しかも、その宝石には賛辞や羨望だけでなく、その珠玉の輝きを手にしようと目論む者、手に入らない妬ましさやその曇りなき輝きからその価値を貶めようとあらゆる悪意や陰謀が必ず付いて回る」

「……………」

「シヴァやフラウを見ていると、どうなるかはわかるだろうか？ 人々はそれを決して許さないし、何度も舞台に立たされるだろう、強制的にな。」

そうじゃないと、信じたかったんだが……………」

物の見事に裏切られたな、とそう語るエリオスの言葉にはスターリア王国にか、目を逸らし続けていた自分にか憎悪が滾っているようだった。

「彼はずっと、この景色を見ていたのか……………」

それはシヴァ達に対する憐憫か、同じように立ってしまった自分への慰めか…………。哀愁を含んだ青い瞳は煉瓦の街並みを映してはいなかった。

「これは言わなかったことだが、師はお前が『英雄』を指さなくとも構わないと思っていたんだ」

「父さんが？」

『英雄』である父が自分と同じ頂に立たなくてもいい？ アタルは親の意思を継いでほしいものとはかり思っていた。

「ああ。自分の立つ場所がどのような場所かを知っているから、そこを目指すのは自分の意思である必要があると思っていたのだろう。アタル、おまえはこれからどうする？ 今回のようなことはこれからもあるかもしれないぞ」

それは師としての忠告だった。今回のような事にいちいち心を痛めていては遠からじ壊れると、エリオスは予測を立てているのだ。だからこそ、逃げられるかもしれない今の内に逃がしてやりたかったのだ。

「僕は 諦めません。これからも僕は『勇者』を目指します」

頂がどのようなものかを知ってしまった今でも心の内に芽生える炎は燃え盛っているのだ。ならば、この炎が燃え尽きるまで目指し続けようと誓ったのだ。

「そうか」

エリオスはそれ以上何も言わず、アタルの頭を撫でた。

二人の関係は師弟ではあるものの、まるで親子のようでもあった。

一向に掴めない世界のヒュレーの流れにアタルは苛立ちを覚える。彼の心が荒んでいるのは自身の力の上昇が感じられないもどかしさだけではなく、定期船に乗り込む前のシヴァとの遣り取りのせいもあつた。

無用な引き留めが行われることもなく、アタル達はラローマを後にした。

ロムルスは下手な事をしてアタル達の印象を悪くするような愚者ではなく、彼らがない事を前提とした政策にすぐに切り替えた。

アタル達が向かうのは、ロマーナ王国南東部にある港町、ルツチエ。

シヴァ達はこの港町で次の国へと向かうために待機しており、アタル達は特例で回廊門を使った移動を許可された。

野を徘徊する穢魔の数はコロニーが攻略されたことでその数は減少の一途を辿ることにはなるのだが、その数は依然として多く、距離の事もあるので定期船に間に合わないこともあり得る。よって、これまでの治安の礼も兼ねて使用の許可が下りたのだった。

アタル達はウォード内にある回廊門を伝って、港町ルツチエに降り立つ。

ルツチエは主にロマーナ王国東部方面での輸出を担っている港町の一つであり、クセルギリア共和国への定期船もこの町から出航している。

定期船の出航も近いためか、そう多くはないものの港町は人で賑わっている。

港の方では定期船の準備をしている職員や輸出するものを船内に運び込んでいる船夫が忙しそうに動き回っている。

シヴァ達は港近くにあるウォードの施設に定期船の出航まで泊っ

ており、アタル達も今現在ウォード施設内に居ることから会える時までそう遠くはない。

だが、アタル達の進む足取りは遅かった。

彼らはシヴァ達の戦果を盗み取った存在だ。国からの命令という免罪符とシヴァ達の了承があったという事実は知っているものの、彼らの罪悪感はまだ心の内に残っており、その表れとして足取りが重くなったのだ。良心の呵責からやや体調が悪化していることもあるだろう。

彼らの後ろめたさに心の準備が整うまでもなく、負い目の象徴であるシヴァ達がウォード内にある食堂でいつも通りの態度で昼食を摂っていた。

尻すぼみするアタル達に構わず、エリオスは注文した昼食を持ってシヴァ達の隣のテーブルに陣取る。アタル達はそれに続く形となるのだが、昼食の最中に会話はなかった。昼食の最中であろうと、多少の賑わいを見せるアタル達だが、後ろめたさから会話が飛び出ることとはなく、黙々と昼食を摂る羽目になった。唯一戦果を掠め取った事を気に病んでいないエリオスは食事中に会話をする人物ではなく、またシヴァ達も気を遣うということもしなかったこともあって、静謐がアタル達を支配したのは言うまでもない。

変化を齎したのは昼食を食べ終えたエリオスだった。

「俺達がない間、何か変わったことはあったか？」

「特にない」

「そうか。次に向かう国は？」

「クセルギリア共和国から緊急ではないが、要請はあった。他の国からの緊急の連絡もないことと、この国から近いこともあってそこにした」

「なるほど」

それだけ言うと、エリオスは口を閉ざした。

事務的な会話ではあったが、シヴァが会話する時はこういった会話になりがちなので、エリオスは特に気分を害することもなく次の国へと思いを馳せた。

次の国であるクセルギリア共和国は多少ではあるものの縁があったからだ。

エリオスが話の先陣を切ったこともあるだろう。アタル達はシヴァに自分達が犯した所業をどう思っているか、恐る恐る尋ねる。

「その……君達はあれでよかったのかい？」

シヴァは一瞬、アタル達が何を言っているのかさっぱり見当も付かなかったが、サティから伝わるローマーナ王国からの依頼が脳裏をかすめ、ようやくアタル達が何を言いたいのかおぼろげながら理解できた。

「別に俺達にとってはどうでもいいことだ」

本当に何でもないかのように告げるシヴァにアタル達はホッと安心する。

「しかし、穢魔のせいであんなことになったんだ、許せないよな」

気の緩みから湧き立つように口を開くレイア達だったが、シヴァが口にした次の一言に完全に凍りついた。

「奴らがああなったのは自業自得だ。寧ろ、襲われてよかったんじ

やないか？」

シヴァが言った言葉にアタル達は理解するのに時間がかかった。襲われてよかった？ あれ程の悲劇を前にしてそう口にするシヴァを許せず、アタルとレイアに激情が駆け巡る。

「ふざけるな！！ あんなにも多くの人が亡くなったんだぞ！！」

「そうだ！！ あれだけの惨劇を目にしてお前はよくそんな事を言えるな！！」

叩きつけた手がテーブルに振動を伝え、コップに入っていた水が床へと零れる。

荒れ狂う激情が波動となって空気を伝播する。それはまるで二人の憤怒が周囲へと伝わるようでもあった。二人とは違い行動には出ず、口には出さなかったが、アープとマーテルも同様だった。

だが、そんな四人の感情の嵐を目の当たりにしてもいつも通りシヴァの様子は変わらなかった。まるで、彼らの激情など取るに足らないかのよう。

「だからどうした」

「平和に生きていた無辜の民が理不尽に被害を被ったんだぞ！！」

「無辜の民だと？ くだらない。無辜の民などこの世には存在しない幻想の産物だ。奴らは自分がそうだと思っただけでいくつもの罪を重ねているし、自分達が他者を容赦なく傷つけるのを戸惑わない牙を隠し持っていることを気づくこともしない善人を装った極悪人だ」



「それこそお前の偏見だ！！　ただそこで平和を謳歌していた人達が理不尽に平和を奪われる理由など何処にもない！！」

「ただそこに居るといっただけで理由は充分だ。他者からすればそこに居るといっただけで攻撃する理由にも略奪する理由にも如何なる目に合う理由になる。……場所に限らず、な」

最後の呟いた言葉はアタル達の耳には届かなかつたが、惨劇を目の当たりにし、人々の悲嘆に暮れる姿を目にしてきたアタル達はシヴァを許すことができず、怒りに我を忘れて敵意を持って殴りかかった。

敵意を感じ取ったシヴァはアタルとレイアを椅子に座ったまま、衝撃のエイドスで容赦なく吹き飛ばした。

吹き飛ばされた二人は床に叩きつけられ、また他のテーブルをけたたましい音を立て巻き込んでいった。

人が少ないとはいえ、昼食時に突然発生したいがみ合いに戦々恐々としていた者達は驚きに声ならぬ悲鳴をあげたが、ウォードでは素行が悪い者達が所属していることもあり、こういったことは頻繁ではないものの、起こってもおかしくはないこともあり、すぐに落ち着きを取り戻し、遠巻きにシヴァ達を観察した。

シヴァが二人を吹き飛ばしたのは敵意による条件反射的なものであり、殺意に因るのであれば二人に致命傷を負わせていただろうが、敵意ということもあって一応は手加減されていた。

ちなみに、ラローマでシヴァが市民達を攻撃しなかったのは遠距離からの攻撃であったため、シヴァに選択できる余裕があった事が原因となる。

もしも、彼らがシヴァに攻撃する際、近接攻撃を選択した場合アタル達と同じ運命を辿っていたことは言うまでもない。　例え、女子供であっても。

吹き飛ばされた二人は足にまでダメージが伝わってはいえるものの、

手加減されたこともあつてすぐに立ち上がる。

「くそ!!!」

攻撃を受けて我に返った二人は、自身の嫌悪感とシヴァへの苛立ちもあつてシヴァ達に背を向け足早に去り、アーブ達もそれを追う。

「待て！ 食器とテーブルはちゃんと片付けていけ！」

少しいが外れている気がしなくてもないエリオスの一言に、四人はピタリと足を止め、自分達がぶつかって倒れたテーブルを戻し、食器を返却口に返却してから足早に去っていった。

場に変な空気が漂つてる気がしなくてもないが、それを気にするシヴァ達ではない。

フラウ達はシヴァ達が言い争っている間も優雅に食後のデザートと紅茶を堪能しており、彼らの諍いには微塵も興味を抱いてはいなかった。

彼女達にとつてしてみれば、シヴァの口上は事実であり、とりたて気にすることでもないし、シヴァが傷つけられない限り他人がどうなるかと考慮に値するものでもなかった。

「さっきのはどういふことなんだ？」

エリオスはシヴァが無駄な事を口にしないタイプであり、理由もなく虚言を言う人間ではない事を短い付き合いながらもなんとなく理解している。

だからこそ気になったのだ。先ほどのシヴァの真意を。

「どういうことも何も真実を述べただけだが」

「襲撃された方がいいということはどういうことだ？」

エリオスが気になったのはその口述。まるで襲撃されることが正しいと云わんばかりの言葉。

「そのままの意味だ。あれだけで済んだ事が奴らの僥倖だ」

「何か理由があるのか？」

「どんな理由があろうが悲劇を体験した身の上の者にとってしてみれば許容できるものではない。他人に被らせた傷はすぐに忘れるのに、自分が傷つけられればいつまでも忘れないのが人間だろう？」

しかも、際限なく贖罪を求めくせに自分がいつの間にか加害者側に回っていたとしても、気付かずいつまでも厚かましく被害者面を続ける。ならば、いつまでも可哀想な被害者でいればいい。他人に虐げられる弱者でいればいい。加害者や強者に全てを擦り付けて、な」

シヴァは明確な理由を述べず、確信を得られないはぐらかされた答えだが、エリオスは、根拠となった理由があると睨んだ。

「襲撃された理由は教えてくれないのか？」

「人は見たい真実だけを見るからな。自分の目で見て、目の前に叩きつけられないと自分にとって都合の悪い真実を受け入れようとはしないだろう」

「……どうすれば、お前達の言う真実に辿りつける？」

シヴァはてつきり先ほど出ていった同行者達と同じ反応をするのかと思ったが、冷静に受け入れようとする目の前の人物に少しだけ驚き、真実を話すことにした。

「……確か、以前旅をしたと聞いていたな」

「ああ」

「では、『欠片』と『魂魄結晶』クリフォトという言葉に心当たりはあるか？」

エリオスは少し記憶を辿るとそれに該当する記憶を探り当てた。

「あれにあるのか？」

「エンテレケイアに至っているか？」

「いや、まだ第九位階だ」

「『欠片』は器の拡張をメインとするが、ある程度までの位階に達していれば知識も流れ込む。第九位階ならば、『欠片』よりも厭魔クリフォトの『魂魄結晶』の方がいいだろう」

「だが、厭魔のそれは中々手に入らないと聞くが……」

「完全なそれならばな。元々、『欠片』と『魂魄結晶』クリフォトは多少ながらも連結している。断片的な力と知識ならば、『欠片』を俺が加工すれば不完全な『魂魄結晶』クリフォトとなる。その中にお前が求めるそれが入

るかもしれない。手に入らなくとも位階が上がればいつかは手に入るだろう。クセルギリア共和国にはコロニーが複数あると聞く。俺にとつて『白の欠片』は後一、二個あれば十分だ。『欠片』は一つお前が受け入れればいい」

前から思っていた疑問をエリオスはシヴァに問いかける。

「師達からは口を濁されていたが、『欠片』とは一体何なんだ？ ルドラ達は優先的に取り入れていたようだが、師達も取り入れていたし……」

エリオスには与えられることはなかったが、過去彼らと旅をした時、必ずルドラ達は欠片を取り入れていた。絶対に必要不可欠なようであるかのように。

「それも位階が上がれば知ることができる。知った情報を受け入れるかは別の話だがな」

口を閉ざすかのようにコーヒーを啜るシヴァにこれ以上の事は知ることにはできないと察したエリオスは弟子達がどうしているのか気にかかり、後を追うことにした。

「そこまでにして、俺達も夕食を摂るぞ」

エリオスの中止を促す声に、瞑想に耽っていたアタル達は意識を外界へと向ける。

「先生、世界のヒュレーを掴むコツってないんですか？」

アープは弱音を吐いているが、それはアタル達に共通する心の代弁でもあった。

「こればかりはな……エンテレケイアがエネルギーを極めた先にあると云われている所以は、エネルギーを使用すればするほどヒュレーが自身との侵蝕度を増す。それによって、自身のそれと世界のヒュレーの違いをより明確に感じられるからだ。だから、天性による才覚か、努力によつて感性を磨くかの二択しかない」

「……ということは先に侵蝕度を増した方が早いかな？」

アープはどちらの選択肢の方が早いか考え込む。

「エネルギーの熟練度をあげた方がいいかもしれないけど、どうすればより早く上達できるのだろうか？」

レイアは使用すればするほど侵蝕度を増すと云われているが、どうすればより早く増すかに重点を置いた。

「だったら、こうしたらどうだろうか？」

アタルの掌には小さな炎が出現した。

「できる限りデュナミスを継続させるんだ。規模よりも継続させる事を意識して」

「その方がいいかもしれませんね」

マールテルは防御用のデュナミスを小さく発動させる。アープとレイアもそれに続く。

「それはいいが暴走させるなよ。特に、アタル……お前は炎なんだから飛び火させるなよ」

室内であることを考慮し、アタルに注意を促す。エリオスとしても、これが最適かと思っている。規模が小さな分歩みは少ないであろうが、意識して継続させる分、瞬間のそれよりは自身のそれと世界のそれとを比較的意识できる筈だと思った。

これが最も安全に上達できるものとエリオスは思っている。

「よし、頑張るぞ！」

一刻も早く上達すべく、アタル達は一歩ずつでも前に進んでいく。

黎明の刻を迎え、船室の窓から見える水平線の上にはいくつもの彩色の層が重なっている。

セレナはこの時間が好きだった。命の眠りし静寂と命の覚醒し始める刻を告げる暁がまるでシヴァとフラウが混じり合っていて、彼らの間に自分達がいるような気がして。

セレナが身体を起こしたことでシヴァも起きていることは分かっている。だが、彼はフラウとサティが包んでいるため身動きが取れず、彼女達を起こしたくないから起きれない。

シヴァもセレナもフラウも無防備になりやすい睡眠時に襲われても対応できるように訓練されている。幼少の頃から続けられたそれは条件反射に近く、彼らの近くに元からいなければ自動的に襲撃者に

対し攻撃を行う。

サティはシヴァ達とは違うが、守護聖霊の本分を果たすべく敵意や殺意に対し、自動的に術式が組まれる。

やや乱れてしまっている毛布を掛け直す。

先日、シヴァがアタル達と揉めたがセレナは特に思うことはない。セレナも彼らを同行者としてみているが、それ以上にはならない。セレナにとっては彼らがシヴァと道を違えようとも一向に構わず、同行するならば利用するだけだった。

シヴァと同様、ただ一人で護衛することが大前提となっているセレナにとっては彼らはいてもいなくてもどちらでもよい。

信頼できるのはシヴァ達だけであり、彼ら以外にはどうしても信用することはできない。常に彼らが裏切る可能性を頭の隅においている。その辺りの事は徹底的に教育された。

特に、国という化物が関わるのであれば人は容易く裏切る。国という巨大な組織の前には、個人で立ち向かうことはできず、立ち向かえたとしても場合によっては人質をとるということも可能なので、天涯孤独であり、何か保証できるものでもない限り油断できないのだ。

サティが何か食べている夢でも見ているのか、シヴァに噛みついてる。

少々痛そうにはしているが、拷問されようとも平然とできるシヴァならば問題はあるまい。

朝と昼の間に定期船は到着予定であり、朝食まで時間はある。

瞑想でもして時間を潰すかと考えたが、久しぶりに安全と判断できる船内なので二度寝することにした。

四人で入っているため狭い事この上ないが、護衛的にはこれがいなのだ。

侵入者に対し、武器か素手で対応するよりもデュナミスで遠距離から攻撃した方がよく、防御のデュナミスも張り巡らせているので都合がいいのだ。



シヴァ達は戦闘時以外において、即時対応用に防御のデユナミスと肉体に負荷をかける訓練用のデユナミスを常に発動させている。

これはいわば癖のようなものであり、例え街中であろうと襲われる時は容赦なく襲われることが、いやそういう時にこそ狙われやすいので常に気を張り巡らせているのだ。

シヴァが嘆息しているが、気にするセレナではない。

すぐに睡眠のスイッチを入れて浅い眠りに就いた。

## 第二楽章 過去の偉業と現在の現状

一日程度の航海を終え、海から大地へと降り立ったシヴァ達はすぐさまここ、ティルナの街中にあるウオード施設へ向かう。

施設内ではクセルギリア共和国の使者がシヴァ達の到着を今か今かと待ち焦がれていた。

使者は仕立ての良い服を纏う老紳士で、彼の立ち振る舞いは相当の年月を高貴な者に仕えていたであろう洗練さが窺える。

「お待ちしておりました勇者様、聖女様。そして、同伴している皆様。私の名はイスマイル・エルベニア。此度は我らが国に来訪して頂き、ありがとうございます」

嫌味にならないほどの丁寧さでイスマイルは腰を折る。

シヴァとしては彼の態度がどうであろうが気にせず、用件だけを果たす。

「率直で悪いのですが、私達はどちらに向かえばよろしいでしょうか？」

シヴァ達に伝えられたのはここに使者を送るという用件だけ。それ以上の事は聞いていない。状況は一刻と変わるので、下手に指定しない方がいいと睨んだのだろう。

「御説明させていただきます。貴方様方が向かわれるのはクセルギリア共和国の中心部、サフィールでございます。そこまでは回廊門を用いて移動いたしますので、ご説明の方はそれから」

「わかりました」

人好きのする笑みを浮かべながら案内するイスマイルの背をシヴァ達は追う。

複雑な術式が描かれている縁に、全身鏡のような形をした回廊門は既に起動準備が整っているのか青白い光の渦が渦巻いているようだった。

「では、皆様お通りください」

イスマイルが道を譲ったことでシヴァ達は彼の目の前を通過し、回廊門を潜り抜ける。一瞬、景色が歪むと先ほどまでいた施設とは微妙な差異があった。

全員が潜り抜けた後、後を追うようにイスマイルも姿を現す。

「こちらに」

イスマイルの後を追いつ、ウォード施設内を出ると、豪華な馬車が既に二台用意されており、御者が扉を開けて待っていた。

「王宮の方で説明いたしますので、お乗りいただけますかな？」

シヴァ達はいつものメンバーに分かれて、馬車に乗り込む。

馬車が走り出す。当然の如く振動はなく、快適なものだった。

馬車の窓はどうやら術式が刻まれており、外側から馬車に居る人物が見えないようにする術式と見えるようにする術式が刻まれている。

馬車の窓から見えるサフィールの街並みは新旧が入り混じっているようで、今までの街並みと比べちぐはぐな印象を拭えない。

まるでそこにあった文化に別の文化が重ねていったようである。

一体感など微塵もなく様々な人の営みを重ねてきた街、それがサ

フィールと呼ばれる街の第一印象だった。

王宮らしき場所に辿りついたシヴァ達であったが、今までの国の王宮が豪華絢爛だったのに対し、この国の王宮は王宮というよりも巨大な大使館と呼ばれるのに相応しく、王に対する民衆の畏敬よりも質実剛健、機能を優先させている印象を受ける。

しかも、品が良いという印象はあるが、華やかさに欠けており、国力が不足していると言われても言い返せない類いの絵画や壺などの置物、カーペットやテーブル、椅子などの家具であった。

シヴァ達が案内されたのは食事を摂る大部屋で、昼食の時間故に話はその後にするらしく、二十人は座れるであろう長いテーブルには次々と料理が運ばれてくる。

料理はヨーグルトなどの発酵食品をふんだんに使った冷たいスープやサラダ、羊肉や豚肉をハーブや野菜などで味を調えた挽肉料理が振舞われ、今はビルコフ・チャイと呼ばれるハーブティーでシヴァ達は食後の時間を過ごしていた。

シヴァ達が食事を摂った事を従者から聞いたのであろう、クセルギリア共和国の王が謁見を申し出ている事が伝えられる。

了承の旨を伝えたシヴァ達であったが、王自らがシヴァ達の元へと来るらしく、シヴァ達はそのまま待機となった。

そうして、幾ばくかの時間が流れた時、シヴァ達が入って来た扉とは逆の場所にある上座にいち早く座れる場所にある扉が開かれた。最初に入ってきたのはここまでシヴァを案内してきたイスマイルで、彼は扉を開けると恭しく礼を取り、続く人物を招き入れた。

華やかなマントを纏ってはいるものの、身に纏ってる服は品の良だけの服であり豪奢ではない。

しかも、それを身に纏っている人物には覇気というものは微塵も

感じられず、服に着られているという印象は拭えない。

紫紺の髪が綺麗に整えられており、顔つきも温和な印象ではあるが整っており、王というよりも宰相や文官といった役職の方が王よりも相応しい人物であった。

シヴァ達はすぐさま立ち上がり、膝をつこうとするが、

「気にしなくていいよ。そのまま座っているといい」

と穏やかな物言いでシヴァ達に着席を促す。

王にそういわれ、命令に反するのは愚策と判断したシヴァ達はすぐさま従うが、アタル達はシヴァ達に若干遅れて着席した。

続いて入室した人物は先の人物とは正反対であった。

紫紺の髪はほとんど白髪へと変わってはいるものの、若い頃はさぞ鍛えこまれていたであろう鋼の肉体は上品な服の上からでもその頑強さを窺える。

厳格な雰囲気を用意、峻厳たる意志の様が面様に出ており、それを示すかのように髭は鋭角であった。

先ほどの男が文官ならば、こちらは武官であることを峻烈に示しているかのようにだった。

続いて入室したのは気品のあるドレスを纏った紫紺の長髪を緩やかに纏めた女性ではあるが、深窓の姫というよりも戦場で華々しく鮮烈に舞踏する戦乙女といった凛々しい雰囲気をしており、まるでその何もかも見通すかのような聡明さを感じさせる瞳は常にシヴァやフラウを意識しているかのようにだった。

三人が上座に座ると、王と思わしき温和な男が口火を切った。

「まずは自己紹介をしておこう。私は現クセルギリア共和国代表のレオンⅡブルグリアⅡスタンティルス。彼が私の父のクレイオスⅡブルグリアⅡスタンティルスで先代の代表だ。そして、彼女が私の娘でテオリノンⅡブルグリアⅡスタンティルス」

紹介された二人は礼をする。

「初めに、我が国に援護しに来てくれた事を感謝しよう。早速で悪いのだが、説明に入ってもいいかな？」

シヴァ達は話を促すためにこくりと頷く。

「……ああ！ 一つ注意しておくことがある。我が国ではそちらとは習慣が一つ異なり、肯定する時君達は頷くようだけど、我が国では首を横に振る。否定する時はその逆だ。国際基準に則り、習慣を改めようという意見はあるのだが、身に付いた習性というのは消えなくてね。実現の兆しが見えないんだ。この事は頭の片隅にでも置いてくればいい」

シヴァは奇妙な習慣だとも思ったが、自分達の習慣が当然の行為となるのはそれを認めている者の中でしか通用しないと思に至り、すぐにそれに対する感傷を消し去った。

「少し長くなるけど、これも大事な事なのでクセルギリア共和国の建国から遡らせてもらおうよ。」

クセルギリア共和国が建国してからまだ、十数年しか経っていない。元々、クセルギリア共和国の領土では四つ、いやそれ以上の国が互いに領土侵犯を起こして幾度となく戦争が勃発してきた。この半島では建国、侵略、内戦を繰り返すことは珍しい事ではない。十数年前には四つの国に分かれており、まず私達がいる中央のブルグリア、北のルーミア、西のマクセリア、南のグルシアが互いに牽制あつて、鎬を削っていた。

その四つの国が統一されたきっかけは、君達の父君と母君が私達の国だったブルグリアに協力してくれたことだった。四つの国の国

境にそれぞれあつたコロニーがあつたんだが、彼らが懸け橋となつてくれたことで四つの国は互いに協力し合つて攻略したことで私達は統一という手段を取ることができたんだ」

レオンもクレイオスもその過去の出来事が彼らの中で特別の何かに区分されているのだろう。厳つい顔立ちであるクレイオスでさえも顔つきを和らげていた。

「先代の王である父がその発案者であることから、代表として父が統一することになったのだが、父がその四つの国を纏めて治めるのではなく、それぞれの国をそれぞれの党首が治めることになったんだ。代表である父の務めはその四つの国が共同の議題があがった時に議会の議長を務めたり、世界会議の代表を務めるだけなんだ」

一息入れるためか、それとも喉の渴きを潤すためかレオンは用意されていたハーブティーを一口飲む。

「この国が統一された後、ルドラ殿達は旅立たれていったんだ。私の弟である、ゼノン「ブルグリア」スタンティルスはルドラ殿達と一緒にね」

「……確か二つ名は『水舞闘士』」

アタルの呟きは静まり返っていた室内に波紋の如く広がる。

「『七英雄』の一人と呼ばれてはいるが、私にとってはただの弟にすぎないよ。……彼らが最後の水晶門に向かい、そして連絡が途絶えた。おそらくは死んでしまったのだらうと皆がそう思っている。そして、彼らの死が共和国に亀裂を生じさせた」

レオンは弟の死を悼む表情を一瞬だけ見せたが、すぐに切り替え、説明の続きに入る。

「彼らの消息が途絶えたすぐ直後に、彼らの功績を消すがごとく穢魔が続々と出現し、この国は以前のような姿に戻った。弟の死が原因かは知らないが、私達を代表の座として相応しくないと騒ぎ立て、あわよくばそのままクセルギリア共和国そのものを支配下にしようとする動きが出てきているんだ。」

幸いにして内戦にまでは発展していない。私達の元の国を塞ぐかのように国境線沿いにコロニーが築かれた事によって、他の領土に攻め込もうとすれば防衛線が薄くなり、穢魔がコロニーから流出する事態や他国からの侵略を避けられないからね。

不謹慎ではあるが、穢魔のおかげで膠着状態に陥っているといっても過言ではない」

「ならば、このままでもよろしいのでは？」

シヴァの問いにクレイオスがしゃがれた声で答える。その口調には多大な苦勞が滲み出ていた。

「そもいかなのだ。民衆の不安は穢魔に囲まれているという事態で日増しに高まっておる。いつ崩壊してもおかしくはないくらいだ。こちらに対しての流出は国土が山岳地帯を占める割合が三分の一を占めるから幸いにして少ないが、三つも防衛線があるため、一つあたりの密度が下がることは避けられない。まあ、元々侵略を防ぐために防衛線は三つ張ってあったので問題はないがな」

「私達のみではコロニーは攻略できず、さらに他の領土の軍隊の助力を期待すれば貸しを作ることになり、そこから侵略の魔の手が迫ってくる。」



そこで『勇者』である君達に助力を願ったのだが、了承して貰えるだろうか？」

了承も何もシヴァには選択権など元から持っていない。彼の全ては『勇者』としての任務を全うすることにある。なので、否定の言葉など出る筈もなかった。

「それは構いませんが、どこから攻略していくのですか？」

シヴァの問いにレオン達は言葉に詰まった。頭痛がしているかのように彼らは顔を顰めている。

「非常に言いにくいのだが……三つ同時に攻略することになる」

『はっ』

レオンから発せられた言の葉に誰もが呆気にとられた。

快晴としての様相も見せず、また雨天としての様相も見せない曇天は共和国の行き先を暗示しているかのようだった。

晴天になるのか、雨天になるのかは誰も計りしれず、世界を流れる風だけが転機を知っているのかもしれない。

剥き出しになっている地面とエイドスを霧散させる性質を持つ魔導器が埋めこまれている壁に囲まれた、この国の最大の施設である大使館のような王宮の一角にある訓練場。ここでウオードに所属しており、これまで穢魔の侵攻を防ぐ一助となった実力者の二人と面会をすることになっている。

二人は『勇者』との同伴を希望しており、それを聞いたシヴァは

実力を測るためここに来たのだ。もつとも、二人の方もそれを希望していたのだが……。

今回のコロニー攻略の作戦は三か所同時に行われることになっている。

そうなった理由は、それぞれの国が先にこちらを何とかしろ、と絶えず要求しており、現在代表としての力量を疑われているレオンではどれか一つを先に攻略すると、他の二つの国が差別だとケチをつけられてしまう。最悪の場合、戦後は離反を招いてしまうのではないかと危惧しており、苦肉の策として三つ同時攻略を敢行する羽目になったのだ。

三つの国が先に攻略を声高に主張する理由として、攻略に遅れれば遅れるほど他の国に対する牽制が弱くなってしまふことが危惧されている。

ようするに、攻略後の隙をつかれて、侵略されるのではないかと懸念しているのだ。

この主張に対し、レオン達はどうにか大多数の穢魔をそちら側が対処すること、そしてレオン達が対処するのは厭魔だけという提案にまでこじつける事が出来た。

最初の案としてはどちらも半数を出すことが提案されたが、さすがに三箇所に分散されることから戦力の密度の低下を招くことが懸念されたので、先の案に落ち着いたのだった。

とはいえ、レオン達が派遣する戦力の質が三国の間で疑問視されており、どう分配するかをレオン達はシヴァ達の戦力を見極めたいで決定しなければならなかった。

クセルギリア共和国は砂上の楼閣に等しい状態であったが、シヴァには何の関係もなかった。

「待たせてしまったな」

色彩の基調は緑ではあるが、服の袖などの刺繍のライン部分は白で染まっているブルグリアの軍服らしきものに身を包んだテオリノンが緩やかに纏められていた長髪をポニーテールで纏め、背に刀身がいくつもの節に分かれている彼女と同じ位の細長い剣を背負っている。

テオリノンの後ろに付き従っている二人が件の二人なのだろう。

一人はシヴァほどの漆黒の髪ではないけども、淡く茶混じりの黒髪で、茶の瞳を持った拳法着を身に纏った無愛想な男。

もう一人が、何を考えているか窺い知れない笑みを浮かべるロ―ブで身を包んだ森の深緑のような髪と瞳を持つ男。

「シヴァ殿、こちらが我が国にこれまで助勢してくれた恩人で、そなた達に同行を申し込んでいる人物だ」

テオリノンが脇に避けると二人が前に出る。

「私はウィル＝ロンディレス」

「宋飛」

緑の青年はにこやかに名を名乗り、黒の青年は無愛想に名乗る。

シヴァは宋飛の態度を一切気にせず、同行する目的だけを尋ねる。

「同行の目的は？」

シヴァとしては弱かろうが別に気にはしない。自分ひとりで事を成すつもりだから、彼らが死のうと一切興味はないし、助けるつもりもない。

しかし、同行する栄誉だけを求めて旅の阻害になる者は容赦なく切り捨てるつもりだった。シヴァが同行を求める者を選ぶ基準は有

害か否かそれだけだった。

「恋人を探している」

一瞬、宋飛から飛び出した言葉にシヴァは訝しんだ。恋人を探す目的で旅に同行するのかと。それならば、同行する必要はないと思っただが、ウィルが宋飛の言葉を補足する形で彼の言葉の真意を説明する。

「誤解を招く言い方はしないでください。彼の目的は闘いを求めること。普通の闘いではなく、自身の全霊に相応しい相手との決闘です。あなたに付いていけば強者と出会えると踏んで同行を求めているのです。何しろ、彼が求めている相手は行方知らず。ならば、その相手の代わりを探さなくてはならないということです。」

そして、私の目的は「

まるで相手を見定めるかのような瞳でシヴァをにこやかな笑顔で見詰めている。

「『勇者』に相応しい人物を見定めること。なので、『勇者』と名高いあなたに同行を求めるのです。もしも、あなた以上に相応しい人物がいればそちらに付いていきます。」

あ、もちろんそれまでは協力しますよ」

底の知れない笑顔はシヴァにとっては慣れ親しんでいるものなので気にはしないが、ただ彼の見定める目がなんとなくシヴァは気にかかった。

「好きにしる」

それは同行を認める言葉。彼らの目的ならば、シヴァは一向に構わなかった。

「では、戦力を測りたいので模擬戦を行ってほしいのだが……」

テオリノンはシヴァの実力をこの目で見れる事が嬉しいのか、子供のように目を輝かせ、声も弾んでいる。

クレイオスも訓練場に入ってきて、観戦の態をしている。戦力を見定め、どう分散するかを図るために。

「僕にやらせてくれないか」

意気込んで乱入してきたのはアタル。彼は戦意に充ち溢れており、瞳には炎が宿っていた。

シヴァとしては一向に構わなかったが、相手が了承するかは分からなかった。

シヴァが視線を向けると、両名共にこくりと頷く。

「好きにしる」

シヴァは後ろに下がり、後のことはアタルに任せた。

「では、あと一人お願いできるか？」

シヴァの勇姿を見ることができなくて、気落ちしているのかテオリノンの声は落胆が僅かに滲んでいた。

「あたしがやる」

レイアがすぐさま参戦の意思を示す。アタル同様熱気が渦巻いて

いた。

「では、純粹に実力を図りたいので一対一でお願いできるかな？」

ウィルの提案にアタル達も賛同し、先にアタルと宋飛のカードが組まれることになった。

シヴァ達は決闘の邪魔にならぬよう観戦用に設置されている場所へと下がる。エリオスは審判役として残った。

「シヴァ殿、アタル殿の実力は如何ほどですか？」

テオリノンが発した疑問の答えをクレイオスも聞きたがっているのか、視線をシヴァと隣に居る孫に向けている。

「彼は実力で言えば私達の中では平均といったところでしょうか」

アタルの実力はアープやレイアに対しては勝利できるものの、師であるエリオスには一歩か二歩ほど届かない。シヴァ達には言わずもがな。

なので、パーティーの平均を知るのであればアタルは最適といえた。

「そうですか……さて、『灼熱の騎士』の息子の実力はどれ程なのか……」

テオリノンの瞳はまるで大好きな芝居を見るかのように輝いてい

た。

アタルが自身の意志を外界へと放出し、唸り猛る炎であるならば、宋飛は自身の意志を内部に秘め、その中で燃え盛り熱をあげる炎。両者の意志は相手の炎を呑み込もうと、その時を今か今かと待ち望んでおり、張り詰められていく空気は臨界を迎えるかのように膨れ上がっていく。

「俺の名は宋飛。最高の闘いを待ち望む男だ」

アタルはこれが決闘を行う際の名乗りだと気付き、すぐさまその自らの名を相手に告げる。

「僕の名はアタル。イグニード。『勇者』を目指す者だ」

凄烈な意志を瞳に込め、吐き出される声は世界に宣言するかのよう  
に力強い。

「『勇者』ね……どうやら楽しめるかどうかは微妙だな」

聞かせる意思はないのであろう呟きは、静寂が支配しているため  
にアタルにも届く。

馬鹿にされたのかと勘ぐるが、どうやら自己の価値観を優先して  
いるかのようでもあったので、眉を顰めるだけで終わった。

「まあ、いい……確かめるか」

そう呟いた直後、宋飛の身体はまるで今までそこにいたかのように突然出現する。

豪風を伴った拳はアタルを粉微塵に砕かんと襲いかかるが、ロマーナ王国でアタルのために造られた炎を形作ったかのような大剣の腹で受け止め、反発のエイドスで後方に吹き飛び、体勢を整える。

「開始の合図もない内に不意打ちとはやってくれますね」

「不意打ち？ 馬鹿を言うな。名乗りを挙げた後ならば、いつ闘おうと本人達の自由だ。貴様の試合に付き合っつもりはない。俺が求めているのは死合なんだよ」

再度襲いかかる宋飛の動きに戸惑うも、持ち前の反射神経でかろうじて回避、防御を行う。

死風を伴う蹴撃はアタルの鼻先を掠め、鞭のようなしなりの拳撃はアタルを惑わす。

宋飛の恐るべきところはその大岩を砕きそうな拳でも、大地を陥没させそうな脚でもなく、オーラの練度と巧みな拳法にある。

アタルが剣という刃物を持っているにもかかわらず、宋飛はなんの躊躇もせずに襲いかかる。命知らずというわけではない、ただ必要ないだけだ。

現に

「くそ！ なんて硬さだ」

「貴様はオーラの集束が甘い。その程度では俺に傷一つ付けられん」  
アタルの剣を腕を盾代わりにして真っ向から受け止めている。

通常、戦闘においてヒュレーを元にオーラとエイドスを使い分けて戦闘を行う。



オーラは近接攻撃を行うために全身、または一部に纏い、強化して生身のそれよりも強力な攻撃や防御で戦闘を行う。

対して、エイドスは遠距離攻撃を行うために、多様な属性を持つ攻撃を形、性質を変化させて攻撃する。

この二つは自身のヒュレーを元に構成されているので、共存することができる。術者はその戦闘スタイルに応じて、オーラとエイドスの割合を分配するのだ。

例えば、近接戦闘を好むのであればオーラに多く振り分け、魔導師ならばエイドスに多く振り分ける。

その過程において、オーラとエイドスはそれぞれ分配を多く振り分けた方に適性を増していく。どちらも選ぶことは可能ではあるが、その練度に差がつくのだ。

なので、今の宋飛のようにオーラの練度によっては刃物であろうと、身体を傷つけることなく防ぐことは可能なのだ。

「フレイムランス  
《炎槍》！」

「その程度のエイドスで俺を傷つけることは叶わん」

近距離では分が悪いと踏んだアタルは炎槍をいくつも繰り出すも、宋飛の拳の前では風前の灯。呆気なく撃ち落とされる。

「ええ、分かっていますよ」

直撃しようがたいしたダメージを与えられないと悟っていたアタルは、炎槍を弾幕代わりにして宋飛の視界を塞ぐと同時に宋飛の方へと疾走し、渾身の集束したオーラを叩きこむ。

「ほう」

宋飛は少しだけ感心するも、予想の範疇とばかりにしたり晒う。両手で炎槍を弾き飛ばしていたので、拳で対処するのでは間に合わないと悟った宋飛は下方から襲いかかるアタルの剣閃を脚を割り込ませることで防ぐ。

オーラの集束と衝撃を付加していたせいで双方は弾き飛ばされるも、宋飛は予想していたのか接触と同時にもう片方の脚力で宙に浮き、衝撃の反動を利用して宙で翻り体勢を整える。

アタルもこれで決まるとは思っておらず、弾かれたと同時に足に吸収と拡散を付加して、慣性を無視して、いつでも動けるように対処した。

「あなたはエイドスを使わないんですね」

これまで宋飛の攻撃はオーラの集束による拳法と性質を付加するだけで遠距離攻撃は一切しなかった。

「趣味じゃない。大体、遠距離で倒して何が面白い。相手を自分の肉体だけで対処し、語り合うことにこそ闘いの極致に至れるというものだ。接触し合うからこそ語り合えるのだ。遠距離だけの語り合<sup>れんあ</sup>いで満足できるほど俺は子供じゃない。互いに密着し合いながらの語り合<sup>れんあ</sup>いの先にこそ絶頂があるのだ」

これまで無愛想だった宋飛の顔が闘いに魅入られた狂人のそれに変わる。

彼は闘争に快樂を見出した戦鬼。だからこそ、共に絶頂へと誘ってくれる恋人を欲しているのだ。殺し愛を行うために。

「僕には理解できませんね」

「貴様は遠距離で満足できるクチのようだな。貴様じゃ俺は満足で

きない。精々自慰<sup>せいご</sup>にでも耽<sup>た</sup>っている」

宋飛が残念そうに嘆くと、次の瞬間にはアタルの目の前にこれま  
どとは段違いの速度で接近する。

踏み込みのあまりの強さに大地が陥没する。その踏み込みの強さ  
から繰り出される拳は如何ほどのものか、まるで鉄球が高速で飛ん  
でくる錯覚をアタルに齎した。

かろうじて防御が間に合い、大剣が拳に接触する刹那、幻のよう  
にその拳は掻き消える。

アタルがその様に驚愕する間もなく、続いてやってきた衝撃がア  
タルの横腹を襲う。

「  
がはっ！」

まるで横腹を抉り取られたような痛みがアタルの横腹に発生し、  
痛みは全身を駆け巡り、吹き飛ばされたアタルの身体は壁に叩きつ  
けられる。

全身を駆け巡る痛みと何が起こったか分からない衝撃がアタルの  
身体を地面へと這い蹲ばらせる。

「はて、一体何が起こったのでしょうか？ 勇者殿、分かりますか  
？」

テオリノンの目には宋飛が直線に進んだ後、何もせず<sup>な</sup>にアタルの  
側面へと迂回し、殴ったように見えた。アタルが何故、正面から攻  
撃がくるかのように防御したのかが分からないのだ。彼女に分かる  
理由としては、アタルが攻撃に反応できなかったという理由が浮か  
び上がるが、それにしても反応した後の硬直が不可解なのだ。何故

ならば、オーラを前面に集束していた。見失ったのであれば、集束から纏衣へと変移するのが通常であるのに、アタルは集束のままだった。

「おそらく幻影の類でしょう。真華連合国の魔導技術には幻影の類のデュナミスも研究されています。規模としては個人の域にすぎませんが、近接攻撃においては無類の強さを誇ると云われています。先のあれは、正面からの攻撃を幻影に任せ、彼自身は側面に回ってから攻撃したのです」

「なるほど」

シヴァ自身の中には、彼が何をしたのかを察することなど造作もない。シヴァが学んだ技術には真華連合国のそれも含まれており、シヴァ自身もそれを使える。

穢魔戦ではさほど意味がないので使わないが、幻影は対人戦でこそ威力を発揮する類いのものだ。

彼の行く手を阻むものは穢魔だけでなく、人間も含まれる。

如何なる障害にも屈しないためには、いくつもの対策が必要であり、対処法ができなくてはならない。

だから、幻影を使う相手との対戦も考慮されている。過去、シヴァはその使い手と闘い、一人も例外なく殺害してきた。

だが、練度においては宋飛と歴然の差である事も認識している。

そして、彼が超一流の戦士であることも

「英雄の息子と聞いて、少しは期待したが……期待外れか」

蹲っているアタルを冷めた目で見下し、嘆息しながら不満だと声

にも、態度にも示している。

元々、彼には探し求めている恋人のそれとは違うことは『勇者』  
になりたいという口述から分かっている。

彼が求めている人物はそんな正義感溢れる人物ではない。

彼同様に闘争に狂気を見出し、共に絶頂へと誘いあう人物なのだ。  
つまみ程度にはなるかと思っただが、弱すぎる。まだ、彼自身の力  
を見せてはいない。

頭を掻き、つまらなそうに去ろうとしたその時

「ま、ただ……僕は、まだ闘える！」

剣を杖代わりによるよると立ち上がり、今にも倒れそうであった。  
砂を全身に塗り、ふらふらと立っている状態は敗者のそれに等し  
い。

だが、彼の瞳は戦意に満ちている。

まだ、負けてはいないと。また闘えると。英雄の息子はこの程度  
の事では屈指はしないと。

炎が周囲を貪るかのように彼の戦意は燃え上がっており、宋飛に  
もそれは伝わる。

「ほう」

宋飛は目を細め、口元には笑みが僅かに浮かぶ。

力は足りないようだが、意志は上々と、アタルを見定める。

「では、見せてみる。貴様の戦意を！」

悠然と構え、宋飛はアタルに攻撃を仕掛けない。待っている  
のだ、彼の攻撃を。

「煽りの風を受けて、劫火の渦よ、顕現せよ。荒れ狂い、その炎嵐にて焼き尽くせ！」

まともに動けない事は、彼自身理解している。だからこそ、彼は力ある言葉を紡ぐ。彼自身が今できる最善を尽くして。

「フラマ・ベントウス  
《赫炎嵐舞》」

何物をも燃やし尽くすであろう劫火の炎は宋飛を逃さぬように、灼熱の渦の中に閉じ込める。

渦巻く炎の嵐は大地を燃やし、天を燃やし、燃え尽きる事を知らないかのように炎の輪舞ロンドを踊り続ける。

「……兄様、あの人達、これが実力の確認で、殺し合う必要はないこと忘れていませんか？」

彼らの主張にも、闘いにも一切興味はないフラウはシヴァの腕を胸に抱き、肩に頭を乗せて彼らの闘いを適当に観戦していたのだが、どうみても相手を殺すつもりのアタルのエネルギーを見てそう評した。

「目の前の事にばかり目が向き、過去の事にも先の事にも目が向かず、当初の目的を見失う典型的な視野狭窄だな」

「仮に死んだとしてもそれまでだったということでしょう。もっとも、実力の差を理解しているからこそ、全力で対峙しているのですようけどね」

サテイは興味がないのか、それとも飽きたのかシヴァの膝の上で寝ていた。

この程度では相手を倒すことができないと、実力の彼我の差を思い知ったアタルは次なる一手を繰り出す。

「我が指先から放たれるは紅蓮の大地。地の底に封じられし、灼熱の世界を知れ！」

人差し指を灼熱の渦へと向ける。まるで、そこから何かが放たれるように。

「テラ・エクスハティオ  
《焦熱世界》」

放たれし紅蓮を纏った大地の塊は、炎の嵐に取り込まれている宋飛を焼圧殺しようと宙を駆け抜ける。

（ やったか ）

宋飛は灼熱の嵐から出ておらず、紅蓮の大地はその渦の中に居る者を消し炭にしようと渦の中へと飛び込んでいく。

自身の使える中で最大級のエネルギーを二連発で放ったのだ。消耗は甚大で、自身が負った怪我の事もあってこれ以上戦うことはできそうにもなかった。

しかし

「イエッイラー  
具象、『羅刹甲鎧』」

力の噴出が湧き起こり、揮われた拳が紅蓮の大地を粉碎し、拳の風圧で炎の嵐が跡形もなく消し飛んだ。

消した張本人である宋飛の手足には血のように赤く染まっている手甲と脚甲が凄烈な存在感を放っていた。

宋飛の手足に存在している甲は動きを阻害しないように肘までを、そして膝までを覆っており、金属質にもかかわらず、布のように柔軟と異なる性質を宿している。

「見事だ。貴様の攻撃は受け取る気にはなれんが、多少は心が震えたぞ。しかし、如何せんこの程度では満足できん。精進すれば、恋人候補程度には考えてやらんでもない。これは貴様に対する返答だ。貴様に合わせて手加減してやるから……さっさと逝け」

大地が罅割れ、一瞬地震が起こったかのような振動が発生するほどの踏み込みと、身体全体を連動させて放たれる拳撃が合わさり、空気の壁が音を立てて粉碎していくかのような拳圧へと変化していく。

放たれた拳は距離を経ても衰えることなく、空気の壁を突き破り、アタルの腹部へと直撃した。

アタルが持つ気力の耐久力を根こそぎ吹き飛ばすような遠当ては、最早限界に近かったアタルに耐えられる道理はなく、アタルは闇の中へと沈んでいった。

「マーテル、アタルの治療を頼む」

「は、はい」



怪我をしても、すぐに治療ができるようにと待機させていたマーテルをアタルへと向かわせる。

エリオスは頭痛を僅かでも抑えるために溜息をつく。

頭痛の種はアタルの無様さではない。誰であろうと敗北はつきものであると理解しているエリオスはそのようなことでは怒りはしない。無論、生死が関わる場面での敗北は許す気はないが、それはまた別だ。

彼を悩ませているのは、アタルの暴走についてだ。

今の闘いでは、下手をすれば死者が出てもおかしくはなかった。

実力者だからこそ、胸を借りるつもりで全力で相手をしたのだろうが、限度というものがある。

訓練というか、試合である以上一定以上の力を振り絞るのは得策ではない。ましてや、これは実力を測るためのものだ。その意味ではアタルの行動は正しいといえるだろうが、やりすぎな面があることは否めない。

これは後で説教する必要があると思うが、同時に悩ましい事がある。

どうやら、予想以上に勝敗を拘泥し、力への執着が増しているようだった。

これまでの事を思えば、無理はないと思うのだが、今回のように暴走して貰っては困るのだ。

これからの事を思えば、その向上心は好ましいのだが、どうすれば暴走を抑えられる程度にまで落ち着かせることができるのか、その匙加減が難しいのだ。

治療も終わり、アタルも覚醒しているが、その足元は覚束ない。肉体的にも、精神的にもだ。二重の意味でアタルは今不安定なところがある。

レイアはどうだろうか、ともう一人の闘いを見て、今後の方針を決めようとエリオスは思った。

レイアは目の前に居る人物を不審に思っている。

何も臆している訳ではない。実力が不足しているとは十分承知している。だからこそ相手の実力に怯えている訳ではない。

ただ、不可解なのだ。彼のまるで、どんな色を見せてくれるのか、どう染め上げようかと悩んでいるような観察者のような瞳が。

「……かかってこないのか？」

「ええ。どうぞ貴女からかかってきてください。私に貴女がどんな種をお持ちか見せてください」

ニコニコと笑うだけで、一向に戦意を見せない相手に拍子抜けするも、自分程度であれば如何様にもできるという態度が何だか気に食わなかった。

「では、いくぞ！」

どんな相手なのか読めない相手には、遠距離攻撃で相手の出方を見ろというエリオスの教えに従い、鉄塊を発射する。

「ふふ……そう初対面の相手にはいきなり全力でぶつけ、一気に倒すか、相手が手札を切るのを待つという手段が常套だ。遠距離攻撃がないのであればともかく、あるのであればそれを活用すべきだ。無闇に突っ込んで相手の策に溺れる可能性もありますからね」

空を切り裂く鉄塊を軌道が読めているように難なく躲すウィルに隙はない。

攻撃を難なく躲されるレイアは舌打ちをして、次なる手を繰り出す。

続いて出したのはレイアの身長を遥かに超える十メートル程度の長さの槍。彼我の距離は十メートル前後。伸ばせば当たる長さだ。

しかし、長すぎるだけに扱いにくく、突きのスピードも遅い。

故に、ウィルにはサイドステップで容易く避けられるが、その程度の事は計算済みだった。

真っ直ぐだった槍が折れ曲がり、ウィルを穿とうと追従する。いくら避けようと槍は付いて回り、ウィルを逃がさない。

さらに、躲そうとすれば槍から槍が生えてくるというおまけつきだ。

「なかなか面白い鬼ごっこですね」

風のように優雅に舞うように躲すウィルに動き回る槍は突き刺さることはなかった。

その動きに感心するも、茫然とするレイアではなかった。彼女はウィルを突き刺せないと悟ると、自身も接近し、肉弾戦へと持ち込む。

蛇のように蠢いていた槍が花が散るがごとく爆ぜる。降り注ぐ鉄の雨にさすがに躲す余裕などないのか、初めて防御態勢を取った。

しかし、ウィルの前に張られた光の壁に槍の花はことごとく散っていった。

「次は直接タッチだ！」

レイアの空気を切り裂く薙ぎ払いはウィルの細い体を押し折るべく迫るが、ウィルを守るように出現する光の壁の前には無力だった。

「まだまだ！」

驟雨の如き槍閃がウィルの身体を突き抜けようとするが、何かに逸らされてしまい一向に槍の穂先が届くことはない。

「どうしました？ 私に触るのではないのですか？」

子供の遊びに付き合うような親のように戦意は一切見せず、攻撃を避けるだけでレイアには敵意を見せない。

余裕をかましている優男に一発かましてやると意気込むレイアは、まず攻撃を逸らしている何かを確かめるべく突きと同時に針を派生させ、面での攻撃を行う。

針は通常戦闘において牽制程度にしか役に立たない。なぜなら、相手の体を覆うオーラの前には針は届かず、霧散の一途を辿ってしまっからだ。

だが、今はそれが必要だった。

ウィルの身体を覆うのはオーラではなく、別の何かだ。それを確かめるべく放たれた攻撃は当然の結果として、ウィルに届くことはなかった。

しかし、何をウィルが覆っているかという事だけは判明した。

「風か！」

「ふふ……正解です」

ウィルは風の鎧を纏い、レイアの攻撃をことごとく逸らしていたのだ。しかも、瞬間的に。

「それで、どうしますか？ 貴女の攻撃は今まで届かなかった。しかし、私が扱うのは風だということが判明した。貴女はどんな対処をしますか？」

出来の悪い生徒を見守る教師のような瞳で、生徒の出す答えを待ち望んでいる。

どんな答えが飛び出すかをわくわくしながら待ち望んでいるのだ。それに対するレイアの答えは　一点突破だ。

レイアにはアープのような魔導師タイプではなく、前線で戦う戦士タイプの人間だ。アタルはその中間となるのだが、先のアタルのようなエネルギーはレイアには使えない。消耗が激しすぎて、放てば気絶してしまうのだ。

だからこそ、消耗が少ない前衛タイプの戦士になっている。適性がそちらに向いていることもある。

槍の穂先を相手へと向け、身体は獲物を狙う肉食動物のように、低く構える。身体のバネを活かせるように、獲物に喰らいつけるように力を溜めるのだ。

どうしようもないほど隙だらけであることはレイア自身も承知しているが、ウィルはレイアが何をするかを楽しみにしているのだ。

だからこそ、胸を借りるつもりで全力で相手をする。彼はきつと自分の全てに対処できるという予感を抱いたままで。

「閃光の如く駆け抜ける！　雷鳴の如く疾走せよ！　我は貫くものなり！」

ロマーナ王国で贈呈された槍は前線で耐えきれるように、ヒュレの消耗と耐久性を魔導器を埋め込むことで性能を上げている。柄の部分に埋め込まれている結晶がきらりと輝く。

「『紫電一閃（エクレア・レクレール）』！」

レイアの身体が雷鳴の如く疾走すると、銀の一閃が閃光の如く宙を駆け抜ける。

紫電を帯びた銀の一閃がウィルを空気の壁ごと貫こうとする。

「いいですね。だが、惜しむべきは点よりも面の方がよい。特に、私のように受け流すタイプにはね」

「ああ、だからこれにしたんだ！」

銀の一閃は無数の閃光に変化する。点から面への変化は点への対応に応じていたウィルは面食らった。

しかし、それだけだ。若干の遅れは生じさせたものの光の壁は虚しくも突破できない。

だが

「もう一閃！」

エイドスによる銀の一閃とレイア自身による二つの一閃がウィルに襲いかかる。

『紫電一閃（エクレア・レクレール）』とは銀の一閃が点、もしくは面で攻撃した後、術者自身の一閃でも襲いかかる二段構えの一閃。光の壁が銀の一閃を受けたことで消滅し、レイアの一閃は吸い込まれるようにウィルへと迫っていくが、ウィルの身には届くことはなかった。

レイアの目は驚愕で開かれる。

ウィルは雷鳴の如き一閃を受け流すのではなく、受け止めているのだ。素手で。

「よかったですよ。……では、ここまでにしましょうか。実力を確かめる事においてはもう十分でしょう」

「あ、ああ……」

何でもない事のようにこの事態を受け流すウィルにレイアは戦慄を覚える。彼と自分の間にどれだけの実力差があるのかと。

「中々、鍛えがいのありそうな人達です。心躍りますね」

ウィルの顔は喜悦に満ちていた。彼の趣味は他人の成長を促し、見守る事だった。

「なるほど。彼女は我らの一般兵よりは強いが、将官クラスには勝てるかどうかといったところか。対してアタル殿は将官クラスと同等だな」

クレイオスは先ほどの二戦を見て、自分達の兵と比べての実力を割り出した。

「シヴァ殿、彼女はあなた達の中ではどのくらいですか？」

「治療役を除けば最弱かと」

シヴァは余計な脚色をせずに事実だけを告げる。

「ふむ……アタル殿が平均となるのであればどうするか……」

クレイオスはどう戦力を分配するか検討する。ある程度厭魔の戦力は把握しているが、多少の相性などもあるのでそのあたりも考慮せねばならないのだ。

「攻略の戦力の分配について一つよろしいでしょうか？」

「何かな？」

「私と聖女、そしてその護衛は一つにして貰いたいのです。それが叶うのであれば、一人でも攻略して見せます」

シヴァとしては譲れない問題だった。フラウ達から目を離したくないのだ。できるだけ、彼女達が傍に居て貰わなくては困る。何かあった時に駆けつける事ができないのだから。

「ふむ……」

クレイオスはフレイス王国、及びローマーナ王国でのシヴァの活躍は密偵から報告があがっているので、シヴァが言っている事が誇大妄想の類ではない事を理解している。

それに、シヴァの様子が尋常ではない事は切り裂かれるような剣気から察することはできる。下手に反対すればシヴァの機嫌を損なってしまう、攻略に支障が出る可能性もある。そのことを吟味すればシヴァの要求を断るのは得策ではない。

ならば、彼の要求を呑み、その上で最善を尽くした方が得策かとクレイオスは判断する。

そこには彼の両親に対する恩があったことも否定できない。

さて、どう分配したものかと考えを巡らしたその時、傍らに居る孫娘から声がかかった。

「お爺様、シヴァ殿と模擬戦をしてもよろしいでしょうか？」



テオリノンが懇願するような瞳でクレイオスを見詰めていた。必要はないだろうが、シヴァ殿の実力を確かめるのに丁度いいか  
と思い、クレイオスは許可する。

クレイオスから許可が下りたことで、テオリノンは輝かんばかり  
の笑みを浮かべる。

「さあ、シヴァ殿！ 模擬戦を行いましょう！」

シヴァとしては一国の姫君と対戦するという行為に気は乗らない。  
傷でも付けてしまえば、厄介事を引き起こしかねないからだ。

しかし、許可が下りたことで断った方が面倒を引き起こすそうな  
ことと、先ほどの要求の事もあって受けざるを得なかった。

訓練場に戻る最中に他者からは分からないようにシヴァは嘆息し  
たのだった。

一向にやる気が起きない対戦ではあるものの、鬨いの場に出て油  
断するシヴァではない。彼は思考を切り替えてテオリノンを分析す  
る。

テオリノンは背負っていた蛇腹剣と呼ばれるらしい細長い剣を今  
は右手に携えている。

蛇腹剣は使い手が少ない。理由としては一般的な武器の製法では  
内部に仕込まれる機構や剣としての機能に支障が出るので現実的な  
武器ではない。

しかし、魔導器やデュナミスを用いれば現実的な武器になる。内  
部に仕込まれている機構や刀身部分をデュナミスで代用すればいい  
だけなのだから。

見たところ、テオリノンの持つそれには柄の部分に結晶が埋め込まれており、魔導器であることは明白だ。

ならば、武器としての機能は問題ないとされる。

そう分析したところで、シヴァは鞘に収められたままの剣を構えた。

「始め！」

エリオスの開始の合図が宣言されたことで、テオリノンは自身の武器である蛇腹剣を握りしめ、腕をしながら鞭のように揮う。

蛇腹剣の刀身部分は切り離されて鞭状になり、鞭のように揮っても何の問題もなくなる。この魔導器は術者が望めば、鞭にも、剣にも、先端部分を打撃武器のようにすることができ、基本は鞭状の武器だが、あらゆる距離に対応する武器に変化できる代物で、テオリノンの愛用武器だった。

テオリノンは戦争がそう珍しくもない国で生まれたからか、武芸は達人な方だ。

しかも、本人の適性と国を救ってくれた『勇者』や彼に同行した英雄である伯父のゼノンに憧れていることから実力で言えばブルグリアでも上位に入る。

だからこそ、試したいのだ。憧れの『勇者』である存在にどれほど近づけたのか。

今彼女の心は躍っている。

その彼女の心を反映するかのように、鞭は宙を踊り、音速に近い速度でシヴァに襲いかかる。

だが、シヴァに当たることはなかった。

彼女が次に認識したのは、いつの間にか首筋に突き付けられていた鞘に収まったままの剣だった。

シヴァが無表情に剣をテオリノンの首筋に突き付けていた。

「終了だ！」

勝負あったと見たエリオスは模擬戦の終了を宣言する。勝者を告げることはなかったが、勝敗は明らかだった。シヴァはそのまま身を翻し、フラウ達の元に戻っていく。テオリノンは茫然と立ち尽くしたままその姿を見送っていた。熱い眼差しでシヴァの背中を見詰めたまま。

「よろしければ、私達も彼らを鍛えましょうか？」

模擬戦終了後、シヴァ達は訓練場を借りることにしたのだが、エリオスに向かって弟子であるアタル達を鍛えようかと申し出ているのだ。

「そうしてくれるのであれば、あいつらにもいい経験になるのだが……いいのか？」

実際、実力者である彼らに鍛えて貰えるのであれば有難かった。エリオスとしても自身の鍛錬の時間を確保できるのは、これからの旅を思えば僥倖だった。

「私は育てるのと見守るのが趣味ですので構いませんよ」

「俺はやらんぞ」

「貴方は気が向いたらでいいのですよ。他人の成長を見守り、育てるのは私達にとってみれば、余分な時間であるとともに基礎を振り返るのに丁度いい時間です。他人に説明することで、何かしらの発

見があるかもしれないね。それに……」

無愛想にしている宋飛に底意地の悪そうな笑みをウィルは浮かべて告げる。

「恋人を自分で作るのもいいかもしれませんが。時間はかかりますが、ある意味では確実にいえますし、期待通りに育たなくてもつまみ程度にはなるでしょう？」

「ふむ……」

その事に心が揺れたのか、宋飛は考え込む仕草を行う。彼にとってもウィルの提案は魅力的であり、理想の恋人を捜しあてるまでのいい暇つぶし程度にはなると思わないでもなかった。

「いいだろう。ただし、俺が関わるのは近接戦闘だけだ。それ以上は知らん」

「構いませんよ」

育て上げるのが楽しみなのか、ウィルの壮絶な何かを感じさせる笑みはエリオスの背筋をぞくりとさせるのだった。

アタル達も強烈な悪寒に晒されたのは単なる偶然だろうか。

通い慣れた廊下はクレイオスの軍靴が鳴らす足音を空間へと響か

せる。クレイオスは過去、代表として他国の廊下を歩いたが、それと比較すればクレイオスが通い慣れた廊下はみすばらしいと言わざるを得なかった。

しかし、それも仕方なかった。彼らの国では戦争を行ってきたため、余計な贅沢をするわけにはいかなかった。そんなことをすれば、国庫は圧迫し、戦時に対応できなくなるのだ。故に、最低限のそれしか贅沢をしなかった。

かつて、彼が部屋の主だった部屋の扉を開ける。部屋の中には譲り渡した人物であるレオンが執務を行っていた。

「お父さん、結果はどうでしたか？」

「うむ、大体的見当は付いた。これからそれを煮詰めるところだ」

部屋に控えていた秘書がクレイオスにお茶を淹れる。レオンはクレイオスの話に興味を持ったのか、執務を一時中断し、談話の態勢に入った。

「如何でしたか？」

「まず、平均と云われたアタル殿に関しては将官クラスといってもよい。我々は対人戦に重きを置いており、経験も豊富な事から負けることはないだろうが、それでも怪しい所だ。穢魔に関してならばあちらに一日の長があるだろう。」

次に、最も弱いと云われたレイア殿は一般兵よりも僅かながら上といったところだな。センスはあるようだが、未熟といっても障りはない」

「では、シヴァ殿はどうでした？」

「『勇者』か……」

クレイオスはシヴァの実力を垣間見て、過去の出来事を連想させた。

かつて、彼はルドラに模擬戦を申し込み、圧倒的な力量の差で負けたのだ。

テオリノンのように。

「あの年齢で信じ難いほどの実力だ。闘ったのは一瞬だったが、その力量は測り知れない」

正直、あれでテオリノンよりも年下とは思えないほどだった。どうすれば、あの年齢であれほどの極致に立てるのかと。

「力量よりも儂が背筋を凍らせたのはあの在り方だ」

「在り方、ですか？」

「うむ。闘いにおいて、儂らは各自何かを背負っている事を重々承知しておる。儂らは穢魔よりも人間と多く戦ってきた故にそれが理解できる」

それはクセルギリア共和国の業といってもよかった。この半島は穢魔の血よりも人間の血で大地を穢していた。

癖なのか、クレイオスは鋭角な髭を弄くる。

「だが、シヴァ殿にはまるでなかった。いや、あつたのは殺意だけのような気もしたのだ。殺戮の意思を人間の形にしたといってもよいか。分かりにくければそうだな……かつてこの国にいたルドラ殿をさらに突き詰めたといってもよいか」

「彼をですか？」

レオンにとって、ルドラはブルグリア王国を救ってくれた恩人であるとともに、恐怖の対象でもあった。彼の中の何かが囁いたのだ、アレに深く関わってはいけないと。

弟であるゼノンは気にしなかったが、武芸は得意でないレオンは戦士よりも文官の感性に近く、その勘が警鐘を鳴らしていたのだ。

「ああ。……まあ、恩人の息子であろうと儂らには守るべき民がいる。どのような在り方であろうとも、コロニーを攻略し、民衆の不安を取り除いてくれればそれで良い」

「そうですね。私達はルドラ殿達がつってくれた機会をふいにしようとしている。不甲斐ないと言えませんが、今度こそ私達は纏まらなくてはならない。」

二度とこの半島の大地を人間の血で染めないように」

「そうだな。本来ならば、外部の者の手を借りることは恥じるべき事ではあるが、そうもいつていられない。今度こそ、コロニーを攻略した後は儂らの国の問題は儂らで解決すべきだ。そこに、『勇者』を入れてはならんのだよ」

かつて、彼らは折角の機会を掴んだにもかかわらず、共和国はうわべだけを整えただけの張りぼてにすぎなかった。

だからこそ、今度こそはうわべだけでなく中身までも新生しなくてはならなかったのだ。

「……一つだけ、問題が浮上するかもしれん」

クレイオスは苦々しい顔を浮かべ、レオンに告げる。

「何でしょうか？」

「テオリノンがかつてのゼノンのように、シヴァ殿に付いていきたいと申すかもしれん」

「それは……」

別に不思議な事ではなかった。テオリノンは勇者達の逸話が大好きであり、叔父であるゼノンが彼らに付いていった事を誇らしく思っている。憧れているといってもいい。

だからこそ、そうなくてもおかしくはなかった。

「そうだったら、そうなたでいいのではありませんか？」

「ならん!!」

クレイオスの怒声が伝播し、部屋中に振動が伝わる。顔を真っ赤にし、顰め面をしている様は本人の怒気もあつてか、見ている者を竦ませる。現にレオンは身を縮こまらせていた。

「奴にはこの国を導かねばならぬ義務があるし、何が起こるか分からぬ旅に同行させるわけにはいかん！」

「しかし、ゼノンの時は同行させていたではありませんか？」

「ゼノンの時とは事情が違う。奴がいなくても継承者であるお前が



おった。だが、テオリノンの他にはお前の後を引き継ぐ者はおらん」

「別にテオリノンが代表を引き継ぐ必要などないではありませんか？」

ますますクレイオスは眉間の皺を増やし、重苦しい息を吐き出す。まるで腹の中に溜まっているものを吐き出すように。

「ルーミリアのドラキュリア王は冷徹ではあるが、同時に過激な所業でも躊躇はせんので調整役には向かん。

マクセリアのアレクセリア王は野心家で統治などには向いておらん。かの王は支配はするものの、支配した国は放置することでも有名だ。それ故か纏まってはいるものの代表には務まらん。

グルシアは十二人の評議員が治める国であり、代表はユピテル殿になってはいるものの、かの御仁は女癖が悪く継承に問題が出ておる。さらに言うと、奥方達も癩癩持ちなので、いつあの国は内部崩壊してもおかしくはないのだ。

結局のところ、儂ら以外に代表役を任せても大丈夫な者はおらんだ。ならば、テオリノンが代表を継承する方が無難というものだ」

「……………」

レオンとてその事は充分に承知しているが、弟を送り出した身上としては、娘のそれも見送らなくてはいけないのではないかとも思っているのだ。

「シヴァ殿にはテオリノンが同行する事を拒否して貰えるように説得せねばならんな」

レオンはこの重苦しい空気から逃れようとするかのように用意さ

れた紅茶を飲んだ。

### 第三章 継承の意思

「さあ、踊りなさい！ 風のように！」

アタル達の絶叫が訓練場に断末魔の叫びのように響き渡る。

アタル達の他に訓練を行っている者はいるのだが、一様にアタル達を憐憫の眼差しで遠目に見ている。

「フフフフ、フハハハハハハ！」

ウィルは高笑いをあげながら、必死に風の槌から逃れようとしているアタル達を楽しそうに扱っている。

縦横無尽に宙を駆け巡る風は流れを止めることなく踊り続ける。

ウィル曰く、難易度の低い方から試していくことなので、風にはついていない光が付加されているため、エイドスの感知に優れていなくても避けることは可能だ。

しかし

「 うわっ！」

風の槌がアタルの頬を掠め、地面が僅かながら陥没する。

だが、アタルには休む暇もなかった。なぜなら、次の風の槌が様々な角度からアタルを追い詰めるように攻め立てるからだ。

エイドスの使用は許可されているものの、ありとあらゆる角度から襲いかかる風にあたる達は必然的に消耗を控えねばならず、避けられない時だけエイドスを使用することになった。

「邪魔するな！」

「そつちこそ！」

アーブとレイアが避けた場所には相手が存在していて、結果的に動きを止める羽目になった。

それを見逃すウィルではなく、全方位から風を襲いからせる。

「お前はあつちに抜ける！」

「分かった！」

逃げ道を塞がれたアーブ達は必然的に風の中を突破せねばならず、少しでも自分にかかる負担を減らすためにお互いの反対方向に走り出した。

「フフ、まだまだ続きますよ」

ウィルはアタル達を強くするために容赦なく訓練を続けていった。

拳法家である宋飛は自然との合一が目的とする訓練方法があるので、世界に流れるヒュレーを掴む訓練を行うことは容易く、暇さえあればこうして瞑想に耽っていた。

薄眼を開けて訓練場をちらりと覗くと、ここに来てから短くはない時間共に過ごした同士が楽しそうに訓練を施している。

ウィルの趣味が人間観察と人間育成にあることは理解しているのに、鬼のように扱っているウィルを見ても違和感はない。

傍らにおいているラキヤと呼ばれる蒸留酒が入っている酒器の蓋を開け、一飲みする。

「何と言うか、奴がサドなのは間違いないな」

高笑いしている同士の表情は生き生きと輝いていた。

シヴァはうんざりしていた。それはもう、うんざりしていた。

うんざりしている理由は目の前でニコニコとハーブティーを飲んでいるテオリノンだった。模擬戦が終わった後、テオリノンはしっかりといらいにシヴァの後を付いて回っている。

訓練していれば、テオリノンも訓練に混ざり、模擬戦を申し込んでもできる。

休んでいれば、日常の出来事から強くなる秘訣など多岐に渡る話題でシヴァに話しかけてくる。

憧れからしつこく付いて回ってくる人物もいたが、シヴァはそんな人物をとことん無視してきた。

しかし、目の前にいる人物は一国の姫君なので無下に扱うわけにもいかず、こうして相手をしなくてはいけなかったのだ。

そんな面倒な相手を今はエリオスに押し付けている。

今、彼女達が話題にしているのは以前旅に同行していたエリオスから見たゼノンの話であり、叔父であることから彼女の関心は尽きることはなかった。

「旅での叔父様のご様子は如何でしたか？」

「旅の途中で大分慣れていましたが、やはりブルグリアと他国の習慣の違いに戸惑っていた面がありました。意識していると出にくくはありますが、時々無意識に戻ってしまい、仲間内でも意思の疎通が混乱してしまうことがあったのですよ」

「ああ、それはわかります。私はこの国からはあまり出たことはありませんが、他の三国に出掛けた時なんかは意識しないと癖が出てしまいますね」

彼女達が話しているのは、ブルグリアでの習慣となっている肯定と否定の動作だ。

ブルグリアのその動作は国際基準のそれと異なるので、ブルグリアが他国の者と関わった場合、度々問題となるのだ。

「ルドラ達はそれに慣れていましたが、私達のような後から加わった者には混乱の元となっていました。その癖に痺れを切らした仲間の一人は無理やり矯正させていましたね」

「それはそれは……」

エリオスは彼らの事を話す時は殊更嬉しそうに話すので、旅での話題を聞きたいテオリノンとは気が合い、こうして長い間話し続けていた。

彼女達の話題に全く興味はないシヴァにとっては苦痛に過ぎず、適当に相槌を打って上の空に返事をする時間が続いていくのであった。

「はあ……はあ……」

「し、死ぬ……」

「……………」

ウィルの拷問のようなしごきを受けた三人は息も絶え絶えで、今にも息を引き取りそうだった。

マーテルはそんな三人の疲労を取るべく、デュナミスを発動させていた。

そして、三人をそんな状態に追いやったウィルは実にいい笑顔で喘いでいる三人を見つめていた。

「では、第二ラウンドいきましょうか」

『勘弁してください』

三人の心は一つになっているのか、一言一句違わずウィルに懇願する。

「半分は冗談ですよ」

半分は本気なのか、と三人は心の中で突っ込んだが、藪をつついて蛇を出したくないので、口に出すことはなかった。

「少し、デュナミスについての講義をしましょうか」

ウィルは三人に用意していたドリンクを渡し、三人の息が整うのを待った。

「講義、ですか？」

「ええ、一般に知られている以上のことを話すつもりです」

それを聞いてアタル達は佇まいを正した。ウィルが口にしたのは彼らが静聴するに値するものだった。

「まず、デユナミスについてですが、これは皆さんが御存じのように基本的な魔導です。デユナミスは生活を利便化するために産み出された技術であり、普通に生活するのであれば、デユナミスだけで充分なのです。

ですが、人の業というべきか、優れた技術というのは人は必ず軍事技術に結び付かせます。いえ、軍事技術の副産物として編み出されるといった方が正しいでしょうか。エネルギーは魔導を軍事利用したものと違って差し支えはない」

ここまではアタル達も知っていることであり、殊更耳に入れることでもない。この程度の基礎ならば、アタル達は学ぶにあたって必ず耳にする論議なのだから。

「ここからが知られていないことですが、デユナミスはエネルギーに発展することも視野に入れた魔導技術なのです」

これは初耳だった。他の技術とは異なり、デユナミスとは軍事技術が元となっている技術ではなく、生活の術が軍事技術になった例なのだ。

デユナミスとは伝えられている限り、誰が開発したという伝承は残っておらず、発展した者の名前だけが記録に残っているのだ。

デユナミスはこの世界に生きる人々が元から手にしていた技術とされている。

「エンテレケイアがその証拠ですね。あれは英雄を生み出すためのシステムなのですよ」

「どづいうことですか!？」



齎された衝撃の事実にあたる達は瞠目する。エンテレケイア自体謎に包まれた技術ではあるが、それでも齎された情報はアタル達は驚きを隠せなかった。

「言葉通りの意味ですよ。先ほどデュナミスは軍事用に開発される事を前提とした技術だと言いましたが、それに関わってきました。

人は凡庸であることに我慢ならない存在です。だからこそ、その特別な何かになれる補助をするのがエンテレケイアです。

デュナミスは汎用的な代物であるため、人が持つ最高の叡智の一つといって過言ではありません。その多岐に渡る人間の嗜好を満足させるために開発されたのが、デュナミスであり、エンテレケイアです」

「  
」

アタル達は齎された情報に言葉を紡げず、茫然としていた。

「強く望めば、または強くなろうと歩き続ければ特別な何かになれる機会が得られる。それがエンテレケイアです」

「誰がそんなの開発したんだ？」

アープの言葉はようやく絞り出されたように低く掠れていた。

「そこまで知りませんね。ただ、遙か昔から人々はデュナミスを使えたようですよ」

「どうして、そんな事を知っているんだ？」

レイアの問いはウイルが当然の知識を語るかのように、嘘偽りない態度をしていたことから発生した疑問だった。

「この程度の知識ならば、至る事が出来て、知りたいと望めば知ることはできますよ。もっとも、初期の頃は虫食いだらけの断片的な知識でしょうが……」

「一体何なんだろうかデユナミスって……」

アタルは自分が今まで疑問を覚えずに使ってきた技術が薄ら寒い奇妙なものに覚えてきた。

「次はもう少し、深く教えてあげましょう」

次の訓練に入るべく、ウイルは宋飛に声をかけた。

フラウは気が滅入っていた。それはもう、気が滅入っていた。用意された部屋のベットに転がり、出たくないほどに。それはセレナも同じだった。

彼女達はとつとこの国から出てしまいたかった。そうでなければ、穢魔を斃している方がマシだった。

シヴァにテオリノンが付き纏っていたので、対応をシヴァに任せ、適当に過ごすことに決めたフラウ達は適当に街をぶらついていたのだが、それがよくなかった。

街にある喫茶店で優雅に過ごしていたフラウ達だが、一人の老人がフラウ達に感謝の念を告げたことがきっかけだった。

フラウ達がサフィールに到着していることは知れ渡っており、その特徴的な白髪が『聖女』であるフラウだということも人々の間で

認識されていた。

ブルグリアでは『勇者』と『聖女』は特別な意味を持っている。十数年前にコロニーを攻略したのもそうだが、何よりも紛争の元になっていた国同士を纏め上げることになった立役者だったということが大きい。

終わらぬ紛争に窮していた者達にとってみれば天啓に等しく、救世の光に他ならなかった。

再び窮地に立たされている事が、彼らの崇拜に拍車が掛かったと言ってもいいだろう。

彼らは望んでいるのだ。

シヴァ達が再びコロニーを攻略し、四つの国が纏め上がる事を。

老婆はその一人だった。彼女は穢魔が支配する以前の国同士の紛争の悲惨さを知り、穢魔が齎した恐怖を知り、その中で多くのものを失ってきた彼女にとっては彼女が信仰する神にも等しかった。

いや、成果が目の前に現れた分勝つていいだろう。

ラクスやフラウの人間離れた美貌がそれに拍車を掛けた。

老婆の眼には女神か、神の使いにしか映らなかったのだ。

彼女はフラウ達に十数年前のルドラ達の偉業を褒め称え、フラウ達が再びそれを成し遂げる事を信じて疑わないほどに妄信していた。フラウにしてみれば、老婆のような態度を取る人物は珍しくはない。

一見、『勇者』の活躍により、『聖女』の役割は地味で目立たないが、市民達にとってはそうではない。

『勇者』はその華々しい活躍により、戦場に生きる者、絶望に身を奮っている者、武勇に憧れる子供にとっては衆目を集めるが、シヴァのように孤高に生き、殺戮の渦中に身を投じ続ける処遇を見るうちに、理解できない異物として排除する傾向にある。アタルのように傷つきながらも前に進み続ける、自分達にも理解できる存在であるならば、同類として受け入れる。

自身の感情を移入できない存在など人々は見向きもしないのだ。  
対して『聖女』は違う。

『聖女』の役割は戦後にこそ意味がある。  
穢魔などに傷つけられた傷を見る見るうちに治していく。傷ついた者や親しい者を癒していく様は、失う事を諦観していた者にとっては救いの光に等しい。

殺戮という人が大事に思っている倫理や道徳に背くことはなく、それを体現している様はまさに人々が求めていた自分達にとっての都合がいい存在の象徴である。

『勇者』とは違い、『聖女』には闇がない故に人々は、特に戦場の悲惨さを知らない、いや知っている者達こそが、絶望を知るが故に『聖女』という希望の証を支持するのだ。

『勇者』が殺戮を齎す死の象徴ならば、『聖女』は生命を齎す希望の象徴。

シヴァ達ほどその化身となった者はいないのだ。

具現化した存在ではあるものの、その信者を目にしても何の感慨も浮かばない。

シヴァとフラウにしてみれば、『勇者』と『聖女』は生を受けた時からの祝福のさいであり、逃れることは死以外に意識がある内は解放されることはない忌まわしき宿業にすぎない。

シヴァもフラウも両親の事を褒めそやされても迷惑な事には変わりはない。

血は繋がってはいるもののシヴァ達にすれば、彼らに関する記憶など全くない他人にすぎない。彼らの顔は記録に残っているので知ってはいるが、情も浮かばない。性格などに関しても他人に伝えられたものだけ。

シヴァ達にとっては偶像であり、実体を掴むことができない虚気楼。

シヴァは両親に対して思うところはない。彼らに対して理解を示しているのではなく、興味がないだけ。羨望も憎悪もない。

フラウは僅かながら感情の残滓は残ってはいるが、それは悪感情だけだ。

周囲の思惑があつたにせよ、彼らがいなければ生まれることはできず、彼らがいたからこそフラウ達は今の身の上に堕ちた。

複雑な事この上ない感情の矛先は最早形骸と化し、家族愛といえるものはシヴァに対するものだけだった。

例え、愛情を向けられたとしても、何の感情も湧きあがらないだろうとフラウは推測している。

だからこそ、老婆が両親に対し感謝の念をフラウに伝えようとも、迷惑千万なだけである。

表向きは笑顔を保ち、老婆の賛辞を受け取ってはいるが、心の内は二度と溶けない氷のように冷めていた。

どうでもいい他人の偉業を褒められたとしても、興味がないフラウにしてみれば苦痛に過ぎず、自分達に向けられる囑望は重苦しくない。

『勇者』と『聖女』である自分達の活動を称賛されたとしても面倒という感慨がなく、できれば放っておいてほしいというのがフラウ達の本音だった。

そんなフラウ達の心中を察することなく、自らが言いたい事だけをフラウに吐露した老婆は満足げにフラウの元から去っていった。

それが起爆剤となった。

フラウの元へ老婆のように自らに救いを齎してほしい者達やルドラ達の偉業を語り、フラウ達にもそれを実行して欲しい者達、フラウ達の美貌に寄せつけられた卑しい者達や有名人を一目目にしたい野次馬達が次から次へと押し寄せていった。

その騒ぎに街の憲兵達までが出動する羽目になり、隙間が見えないほど押し寄せる人波に嫌気がさしたフラウ達は屋根の上まで飛び上がり、その場から退散したのだった。

この一連の騒ぎから二度と街に出ないと誓ったフラウ達だった。

軋む扉の音から闖入者が入ってきた事をフラウ達に告げるが、フラウ達は対応しなかった。

闖入者の正体がシヴァであることはとっくに判明していたので、セレナは反応しなかった。彼らは繋がっているため、お互いの位置を把握することは訳なかった。

足音はしなかったが、フラウのベットに寄ってきていることは風の流れて察している。

テオリノンとの談話を終えたシヴァは何も言わず、フラウのベットへと腰かける。

ベットがシヴァの重さから弾む。

フラウは座るシヴァの膝へと頭を乗せ、安堵から力を抜いた。

フラウの頭を優しく慰めるかのように撫でるシヴァの手が温かかった。

何も言わず、頭を撫でるシヴァの温もりが気落ちしているフラウの心を癒す。

慰めの言葉はいらなかった。

そんな余計なものはいらなかった。

「兄様……………大好き」

フラウはそう呟くと、安心感からか疲れた精神を癒すべく眠りに就いた。

「先生、『水舞踏士』と称されるゼノンさんってどんな人なんですか？」

就寝間近となった頃、アタルはふとこの国で讃えられる『七英雄』の一人について知りたいと思った。特に理由はなく、ただ彼の故郷であるがゆえに気になった、その程度の認識である。

「ゼノンの事が…… そうだな…… あいつは表面的には礼儀正しく、笑顔も絶やさないため、温和な人物に思えるが、実はそうではない。いや、そういう面もあるのだが、現実主義というか、冷めていると言ってもいいかな。」

紛争が多い国の指導者の家に生まれたからか、人当たりを良くするために礼儀正しく、下の者に不安を与えないために笑顔は絶やさない。でも、戦場に駆り出されるのが当然だったためか、人の情思に対して割り切っている。割り切らなければ自分が死ぬだけだから。だから、あいつは手を下す時は迷わない」

「そうなんですか……」

伝えられている彼の噂よりも詳しい彼の内情は、流石に彼らと共に旅をしただけはあった。

「『水舞踏士』の所以は？」

アープも気になったのか、彼の二つ名の由来を尋ねる。

「水のエイドスを得意としていたことと武器が鞭だった事だな。あいつの鞭捌きはまるで鞭が意思を持っているかのように踊ることからその由来となっている」

「へえ……」

アープは弓だけでなく、水の鞭も使用するようになっていたため、

その鞭捌きを見てみたいと思っただが、それは叶わぬことだと諦めた。

「さあ、明日も訓練なんだ。さっさと寝るぞ」

アタル達の質問も続かないことで、エリオスは間近に迫ってきている攻略のために力をつけるべく、就寝を促した。

ウィルに扱われているアタル達はそれを憂鬱に思うも、疲れきっている体は疲れを取るべく、睡眠を欲していることからすぐに眠りに就くこととなった。

余計な理屈なぞいらぬ、実戦あるのみという宋飛のありがたい言葉によりアタル達は宋飛を相手に稽古することになった。

一人が宋飛と闘い、他の二名がオーラの変移を主とした組み手を行うという実戦形式の稽古は背中に冷や汗をかくという事態に陥っていた。

容赦なく攻撃を仕掛ける宋飛に何度寿命が縮まったのかアタルは数えるのが馬鹿らしくなった。

宋飛は急所こそ狙わないものの、マールという回復役がいるため、骨折を起こすであろう攻撃を容赦なく繰り返す。

宋飛の容赦ない攻撃はアタル達にとっては恐怖の対象に過ぎず、それをまともに喰らわないために常時集中を持続させなければならなかった。

アタルの上段からの一撃を宋飛は腕を捻転させ、刀身を逸らす事によって回避する。僅かに泳いだアタルの隙を研ぎ澄まして狙いをつけていたかのように宋飛の肘が襲いかかる。

アタルはオーラを集中させ、防御力をあげるも、宋飛の洗練させた一撃は未熟なアタルのそれを軽々と凌駕する。



「っ！」

腹に打ち込まれたことで息が詰まるも、続く顎への跳ね上げだけは上体を逸らすことで回避した。

バックステップで宋飛から距離を取ろうとするも、宋飛が許す筈もなく肉薄していく。

剣を薙ぎ払うことで牽制するも、宋飛はしゃがんで回避し、しゃがんだ体勢を利用してアタルの方へと前横蹴りを放つ。

命中すれば骨が砕けるであろう蹴撃を、アタルは僅かに後ろに飛び、肩に反発を付加することで本来受けるであろうダメージを減らす。

宋飛は僅かに身体を泳がせるもそれすらも利用して、速度を殺さず速度をさらに加速させてアタルへと接近する。

アタルが見たところ、宋飛の体術は攻防一体の拳法で、防ぐと同時に攻撃を繰り出す。そして、まるで流水を思わせる体術は回避すると次の瞬間には濁流となって相手に襲いかかるのだ。

剣という道具を持っているため、アタルは攻撃と同時に防御はできない。

宋飛に接近戦で勝つには宋飛を懐に入れず、彼に攻撃の隙を与えないように攻撃し続けるしかないが、アタルの剣術では宋飛の体術を圧倒することはできず、また対抗することもできないまま、攻撃を受ける前提で防御するという消極的な戦法を取るしかなかった。

エイドスが使えれば別の戦法をとれるのであるが、今はオーラの向上を志しているのでエイドスの使用は自ら禁じていた。

何とかして、剣の腕をあげなければ痛い目を見続けなければならぬなど、迫りくる拳を前にして現実逃避していた。

レイアとアープは二人の高速で行っている戦闘とは違い、ゆっくりとしている組み手を行っている。

彼らが行っているのは、オーラの変移を意識した組み手だ。

大抵は纏衣しているオーラを集束するのは戦闘における基本だが、宋飛に言われた通りに外部に纏うそれだけに注目するのではなく、強化している筋肉にも意識を向けている。

拳を突き出すと同時にゆっくりと纏衣しているオーラを身体全体から拳へと集束する。

速度はいらなかった。ただ、集束するオーラを意識することがこの稽古に求められる事だった。

宋飛が言うにはレイア達のそれには無駄が多く、オーラを充分に活用していないとのこと。それ故に、今はできるだけ無駄を失くし、細胞一つ一つにまでオーラを行き渡らせるように意識して組み手をしているのだった。

アタルが吹き飛ばされて気絶した。

どうやらレイア達の番がやって来たらしく、宋飛がレイア達を手招きしている。

魔導師であるアープを考慮して二人同時に相手するらしいが、二人にとっては死神が手招きしているようにしか見えなかった。

二人の背中に冷や汗が流れていることは明白だった。

「さて、今回も授業を始めましょう」

ウィルの扱きが終わり、傷はないが、アタル達は最早満身創痍と

いってよかった。形振り構わないほどアタル達はウィルの授業を喜んでいた。

「今回はデユナミスの習熟度についてです。

デユナミスは使えば使うほど、習熟度を増していきます。これは無意識のうちに自身のヒュレーだけでなく、世界のヒュレーも引き出している事が原因となっています。デユナミスが英雄を生み出すシステムになっているのは、これがその所以となっています。天賦の才にもよるところは確かにありますが、誰にでも努力し続ければ英雄となる機会は得られます。そんな機会はない方がいいですがね」

ウィルは肩を竦め、おどけるように言う。英雄となる機会とは云わば、困難に直面するということ。不幸に直面するということ自体がウィルとしては望ましく思っていないのだ。

「エンテレケイアは御都合主義の産物と称されてはいますが、今は良いでしょう。いずれ、それを体験することになるかもしれません。デユナミスの習熟度を上げる方法はデユナミスに触れること、それのみです。

習熟度を上げられる幅はデユナミスの規模や威力に比例します。エイドスに対する抵抗力とかもそれに比例します。よって、手っ取り早く強くなりたいなら、今のように扱かれるのが一番ですね」

ウィルの処刑宣言にアタル達は絶望の表情が顔に出る。

ウィルの扱きは命は取られはしないものの、ギリギリを彷徨っているのだ。

せめてもの抵抗か、好奇心かアープのウィルに問うた。

「一番効率の良い上げ方って何だ？」

「そうですね……エネルギーをぶつけ合うことですね。最大級のものならば、尚良しです。怪我しても死ななければ治癒のデユナミスで治療すればいいだけですし、同時に治癒のデユナミスも上げる事ができますし、一石二鳥ですね。」

例えば、炎のエネルギーをその身に受ければ、炎のデユナミスに対し、抵抗力と扱い方を学ぶ事ができます。デユナミスとはイメージが重要となってきましたから、それを経験することでそれがどのようなものか、身をもって経験することができます。イメージが強固となるといえばいいでしょうか。抵抗力もそれがどういうものかとわかるからこそ上がるのです

とはいえ、拷問のようなそれを受けたいと思う奇特な方はいないでしょうかね」

ウィルの説明にアタル達は顔が引きつった。ウィルならそれに近い事ならやりそうだからだ。というか、アタル達は体験中だった。

「だから、私のやり方が少々危険なものの、的確な修行方法だと理解したでしょうか？」

ウィルはニコリと笑うが、アタル達に安心を齎すものではなかった。寧ろ、奈落の底に落とされた気分だった。

「さあ、続きをやりましょうか」

訓練場が阿鼻叫喚となったのは言うまでもなかった。

机に積み重ねられている資料は各三箇所のコロニーに関するものであり、三人は一堂に会し、攻略についての会談を開いていた。

「さて、どうしたものか……」

クレイオスの手元には各地のコロニーの厭魔に関する資料。十数年前、再び穢魔に支配された時に得られた厭魔の能力がある程度ながら記されていた。

北のルーミアアの厭魔の資料をレオンは眺める。

「ルーミアアは屍骨種と鳥獣種が穢魔の中で数を占めている。厭魔はモロイか……」

資料に挿まれている記録には、狼男のような外見と鳥獣種のような飛膜を有しており、宙を滑空することも可能となっている。

攻撃手段は鋭い爪と牙、遠距離攻撃手段に風と雷。厄介な事に、姿を消すことも可能とされている。

ルーミアアが敗北したのはその隠密性によるものとされている。時には、自軍の中に潜り込まれ、同時討ちを誘われたという記録が残っている。

「マクセリアは駆竜種と甲虫種が比較的割合を示しておる。厭魔はブケパロス」

記録に写っている姿は二つの角が生えた五メートルを超える巨大な馬である。

攻撃手段は角による突刺しと、蹄による踏みつけ、そして突進と共に巻き起こる嵐である。ブケパロスの起こす嵐で碌に接近することができず、蹂躪されたとされている。

「グルシアは蛇翼種と豪獣種か……。厭魔はテュポン、厄介極まりないな」

固い口調で話すのはテオリノン。彼女の話し方は元来、こちらの方だった。公式の場ではもう少し柔らかい口調だが、身内しかいないこの場では元の口調に戻っていた。

蛇翼種は五メートル程の蛇に翼が生えており、大抵は地を這うが、短時間ではあるが、宙を飛ぶ翼ある蛇。

蛇翼種は相手を絞め殺したり、鉄をも溶かす酸を吐き出したり、相手を丸呑みして人間を殺害する穢魔だ。

グルシアのコロニーに生息する厭魔はテュポンと呼ばれており、首から腿までは人間の男性の身体だが、腿より下は大蛇のそれであり、肩からは無数の蛇が生えており、顔は蛇のような龍となっている。

山のような巨体であり、無数の蛇からは炎が放射され、巻き起る嵐は災害と比べて何ら遜色はないとされている。

過去、グルシアで最強の者となる評議員十二人が一斉に戦いを挑んでも、代表であるユピテル以外は瀕死さながらの重傷で逃げ帰った。

三人は資料を睨みつけると、如何なる戦力の分配を行うべきか話しあう。

「今回、攻略にあたって注意しなくてはならないのが穢魔の襲撃だ。これまで過去の事例にほとんどなかったとはいえ、起こってしまった以上警戒しなくてはならない」

レオンの意見にクレイオスもテオリノンも異論はなかった。

サフィールは沿岸部ではなく、内陸部に位置するがもしかしたら

領土内のどこかに穢魔が襲撃をかける可能性がある以上、戦力はある程度残しておかなければならなかった。

「さて、まずはシヴァ殿をどこに配置するか……」

「グルシアのテュポンを退治して貰うのはどうだろうか？ 正直、これほどの巨体だ。誰もが臆してしまうだろう。だからこそ、『勇者』であるシヴァ殿が最適ではないかと」

「テオリノンの言うとおりだな。グルシアには今回の件で以前会談を開いたのだが、テュポンの恐怖が未だ支配しているのか、評議員達の顔色は優れなかった。最悪の場合、戦線を放棄する可能性もあり得るだろう。ならば、単体の戦力でも申し分ないシヴァ殿が対峙し、もしも他の戦線が攻略し終え、戦力に余裕があればそちらの方に送るのが最善だろう」

クレイオスは思案顔で口髭を弄る。

「では、シヴァ殿に関してはそれがよいだろう。もしも、シヴァ殿が他の戦線よりも早く攻略し終えた場合は、不利な戦線に送るということで」

両名は首肯する。

「さて……残りはどうするかだが……」

「ウィル殿と宋飛殿は分けた方がよかるう。あの御仁らはエンテレケイアに至っており。ならば、二人を分けた方がよかるうて」

「残りに関してだが、実力や戦闘スタイルを顧みたところ、ウィル

殿にはエリオス殿とレイア殿、及びマーテル殿。宋飛殿の処にはアタル殿とアーブ殿が戦列に加わるのがよいかと……」

「ふむ……バランスは悪くないね。後はどちらにするかだが……」

「主力となる二人の相性で考えるのならば、宋飛殿はブケパロス、ウィル殿はモロイが戦いやすかろう。後は我々の軍戦力の分配だな」

会談は月が昇り始めた頃に開かれたのだが、終わったのは月が天高く登った頃だった。

山をも超える巨体を有するテュポンの資料を渡し、それが彼の対峙する相手だと通告しても、顔色一つ変えなかったシヴァを、さすが『勇者』だとテオリノンは思った。

ここ最近の自分の調子は今の晴天の様に晴れやかではあるが、太陽に一筋の雲が遮られるかのような少々曇った感情が芽生えていることも自覚していた。

ちらりと横目で見ると、シヴァとフラウとサティが隙間なく密着している。気持ちが悪くなるのは大抵その時と、今稽古をつけて貰っているセレナがシヴァに近づいている時だった。

この気持ちが悪心なのか、それとも『勇者』に対する気持ちなのかはテオリノン自身も明確ではない。どちらともありえるからだ。

ただ確かなのは、彼女も叔父と同じように彼らの旅についていきたいと願っている事だけだった。



テオリノンが稽古をつけて貰っているのは、以前のような模擬戦の延長でもあるが、同時に彼女もシヴァ達の攻略についていくからだ。

テオリノンだけでなく、クレイオスと将官の一人がそれぞれ三箇所の攻略の責任者として派遣されることになっている。

無論、彼女自身は後継者としての立場があるので、戦場ではお飾りの大将であり、攻略中は安全な場所で待機する手筈となっている。とはいえ、危険もないわけではないので、こうしてシヴァ達に稽古をつけて貰っているのだ。それが単なる口実か否かは彼女だけが知っていた。

宙を奔る鞭の軌跡は複雑怪奇な紋様を描き、数多の残像を生み出していく。飛び交う鞭は地面を抉り、砂塵を舞い散らせる。音速に迫る鞭の速度で空気が破裂し、空気は悲鳴を上げている。

常人ならば鞭の軌道を追うことはできず、武芸が未熟な者であれば鞭を扱う手でしか軌道を読めないだろう。

だが、対峙するは常軌を逸した訓練で類稀なる力を有した『聖女』の護衛。テオリノン程度の力量では彼女の足元にも及ばず、鞭の軌道を簡単に追われていた。

先ほどから何度もセレナを捉えようと、蛇腹剣は地面を抉り、空気を切り裂いてはいるもののセレナを捉えることはできなかった。

セレナは攻撃を仕掛けない。仕掛けられないのではなく、仕掛ける気がないだけである。

「っのー」

鞭を操作し、セレナを捉えようとするが、セレナの残像しか捉えることはできない。

セレナが水の弾丸を発射する。

攻撃に気を囚われていたテオリノンは迫りくる弾丸に反応が遅れ、あわば激突寸前のところで防御した。

鞭の嵐が止んだ事を好機と捉えたセレナは次々と水の弾丸を発射し、お返しとばかりに水の弾幕がテオリノンに襲いかかる。

回避できないと踏んだテオリノンは前方に鉄の盾を敷くも、水の弾丸は容赦なく鉄の盾を削っていく。

テオリノンを襲うのは水の弾丸だけではない。セレナ自身も水の弾丸の後を追うようにテオリノンに接近し、斬りかかる。

テオリノンは鞭に変化させていた蛇腹剣を剣状に戻し、肉薄するセレナと斬り結ぶ。

十合ほど交わすが、テオリノン自身は手加減されているということとは嫌になるほど分かっていた。

もしもセレナがそのつもりなら、数合か、もしくは一回も斬り結ぶことなく倒されていたことは承知している。

やはり世界は広いと、湧き上がる闘志がテオリノンの身体を熱くしていく。

剣閃は加速を増していき、先ほどの鞭と同じように破壊の嵐を撒き散らしていく。

そうして幾ばくかの時間が経ち、テオリノンの速度が僅かに鈍ったその時、蛇腹剣がテオリノンの手から弾き飛ばされ、放物線を描きながら地面に突き刺さる。

「ここまでにしましょうか」

「はい」

息が荒れ、汗塗れとなっているテオリノンとは対照的に、セレナは息は全く荒れておらず、軽く運動しただけというように一筋の汗が流れた。

訓練を終わった後、シヴァ達と使用人達が控えている場所へとテオリノン達は向かった。

汗を拭うためのふんわりとしたタオルと稽古で疲れ切り、水分を失った身体を潤すために用意されたドリンクを受け取ったテオリノンではあるが、いつものようにすぐにはシヴァへと近寄らなかつた。汗が噴き出るのが止まり、身体を清潔にするデュナミスを発動させてから汗を拭ったタオルと飲みきったドリンクの容器を使用人に渡した後、シヴァへと近寄った。

「その……如何だったでしょうか？」

テオリノンの声は後になるほど尻すばみになっていき、上目遣いでシヴァの様子を窺う。

「……悪くはないのではないのでしょうか。やや攻撃に集中されている面はありますが、それも常に攻撃される事を念頭に置き、経験を積みれば解消されるでしょう」

シヴァは相も変わらず無表情であり、声も抑揚はない。

「はい」

しかし、憧れの存在である『勇者』に悪くはないと褒められたのか、そうではないかという微妙に分からない言葉を掛けられたテオリノンにはそのようなことは関係ないのか、尻尾でもあればブンブんと振っていそうなほど表情は華やいていた。

「テオリノン様、私は彼女との稽古があるのでこれで」

セレナと稽古をすべく、訓練場に行こうとしたその時、テオリノンから声が掛かった。

「シヴァ殿、私の事はテオ、もしくはリノンと御呼びして頂きたい」

いつもの丁寧語ではなく、彼女本来の口調に戻り、自身の愛称を熱望する。

「訓練を行うので」

礼を取り、シヴァはテオリノンに背を向け、訓練場へと向かう。

その後ろ背中を切なさうに見送るテオリノンではあるが、一つ溜息をつくと彼女も迫りくる攻略のための準備を行うために邸内へと向かっていった。

「兄様、惚れられていますね」

「どつするのだ？」

「……………」

いつも通りシヴァの傍から離れないフラウは先ほどの遣り取りで看破したテオリノンの想いを何でもないことのように告げる。

肩に留まっているサティも同様で、如何するかを尋ねる。

彼女達にしてみれば、特段嫉妬する事ではない。シヴァがどう反

応するかを熟知しているのだから。

シヴァは嘆息すると答えた。

「実体を知ればすぐに熱は冷める。誰も自らの全てを捨てても、殺戮の道具に懸想する輩などいる筈はない。人間と道具、いや現象が結ばれることなどない」

シヴァの顔は無表情であり、瞳は何も映していない。  
フラウとサティは何も言わず、シヴァへと寄り添った。

明日の英気を養うために人々は帰るべき家へと帰る。  
夜の街を彩るのは何も住民達の家には灯る明かりだけではない。仕事が終わわり、職場の職員達と仕事の疲れを癒そうと一杯する者達。  
夜の雰囲気に惑わされ、ふらふらと街を彷徨う若者達。そんな夜の住民達を相手する為に開店している居酒屋や食事処、夜にこそ華やかさを魅せる繁華街、歓楽街。

真昼の様相とは違う街の姿と共に、夜という闇の中でも光を灯し続ける人々の無数の営みがあった。

ここ最近の夜の街の賑やかさは、いつものそれよりも増しておりその騒然とした界限を彩っている話題は当然の如く、間近に迫った攻略であり、それに関わる『勇者』と『聖女』であった。

彼らは騒ぎ続ける。失敗するかもしれないという恐怖から無自覚に目を背けながら

そんな繁華街の一角にある店内が仕切りで区切られているため、他の客の姿が見えず、それ故に騒がしさから無縁であり、静かに少数で飲みたい者達から愛用されている店で宋飛とウィルは静かに

酒を傾けていた。

「あいつらは使い物になるのか？」

宋飛が話題にしたのは、アタル達のことである。宋飛が見たとこ  
ろ、厭魔に挑むのは些か力量が足りないと見ている。

「さあ……それは彼ら次第ですかね」

グラスの中で踊っているワインを楽しみながら、ウィルは答えを  
はぐらかす。

「……………」

宋飛としてもどうでもいいのか、深く追求せずケバプチエと呼ば  
れる挽肉を固めて細目に焼いたハンバーグをつまみとして食する。

一口飲み、ウィルの眼前に用意されているサルマと呼ばれる酸っ  
ぱく漬け込んだキャベツで巻いたロールキャベツを口にする。それ  
を咀嚼すると、ウィルも宋飛に問いを投げ掛ける。

「『勇者』と鍛錬したようですが、気に入りませんでしたか？」

シヴァと宋飛の闘いはその激しさから訓練場が一時駄目になった  
ほどだった。

「ああ。力量は申し分ないが、如何せん奴には熱がない。いくらこ  
つちが燃え上がろうとも、あつちは冷めたまま。折角盛り上がった  
いるのに相手が冷めたままじゃしらけるだけだ。俺一人だけ逝って  
しまっても虚しいだけだ。俺が求めている相手は共に絶頂し合う相  
手だ。奴じゃ合わない」

思い出して苛立っているのか、咀嚼する音は乱暴だった。

「注文が多いですね」

「当然だ。俺は妥協するつもりはない。お前こそ、『勇者』を求め  
ているらしいが、お眼鏡に叶ったのか？」

「ええ。今の所、彼以上の逸材はないでしょう」

「ほう……『勇者』ならば、奴の方が一般的には向いてそうだがな」

宋飛が指したのはアタルの事だ。宋飛としては実にどうでもいい  
事ではあるが、一般的に求められている『勇者』の像はアタルだ  
ということとは彼とて理解している。

ウィルは目を細め、ゆっくりとした口調で語る。

「確かに彼は『英雄』の器でしょう。だが、彼は『勇者』の器では  
ない。

世界を救うこの物語を色取り取りに華やかせ、読者を盛り上から  
せる脇役であつても、決して主人公にはなれない。性格や行動から  
して主人公に抜擢されてもおかしくはないのですが、舞台違いです。  
彼がいなくてもこの物語は問題ないのですよ」

「一般に求められる『勇者』と貴様が求める『勇者』は違うという  
ことか……」

「そのくらい、あなたも知ることではできませんしょうか？」

「興味ない」

彼が求めるのは最高の闘いであって、『勇者』ではないのだ。  
ウィルは苦笑と共に話を続ける。

「あなたはそうでしょうね。……私が求める『勇者』に人間性はいらないのですよ。目的を果たせればそれでいい。それ以外は邪魔だ。『勇者』は目的以外の何もかもを捨てて、絡み付く因果の鎖のごとくを断ち切らなければならない」

「……あれは女に執着しているようだが」

「問題ありませんよ。それぐらいならば許容範囲内です。……それにあれならば全く問題ない」

ウィルはワインを再び躍らせるが、目は何処か別の所を見ていた。

「『勇者』とは一体何だか……」

ラキヤを口にする宋飛。彼とて特段興味があるわけではないが、少しだけ気になった。

「『勇者』とは　　ですよ」

ウィルがそう口にすると、時が止まったかのように沈黙が場を支配した。

「……ふん、俺なら御免だな」

吐き捨てるかのように宋飛は言う。口直しとばかりに、ラキヤを口にする。



「あなたならそうでしょうね。あなたは最高の闘いを味わえるのであればそれでいいのですから」

「そうだな。もしも、最高の決闘を味わえたのであれば、俺は勝敗はどうあれ死んでも構わん。いや……むしろ、最高の瞬間のまま終わりたい。ふざけた延命よりも俺は短くとも、華々しく散って終わりたい」

「私もあなたもこの物語の脇役でしかないでしょう。なればこそ、私達は赫々たる役者となりて、この物語を絢爛としましょう」

「世界の物語はどうあれ、俺個人の物語が至福の時を迎えられるのであればそれでいい」

二人は異なる容器しんねんに入った酒おもいを交わし合った。

酌み交わし合った時、それぞれの酒はグラスの中で魅せつけるかのように踊った。

クレイオス、レオン、テオリノンの三人の醸し出す異なる感情の発露が部屋の中にいる者を混沌の坩堝へと誘っていく。

彼らに仕え慣れている使用人でさえも、彼らの挙動一つ 例えば、カップを置くという何気ない仕草であっても身体をビクリと震わせ、恐る恐る顔色を窺う始末であった。

そんな中であって、シヴァ達だけが彼らの坩堝に囚われず自己を貫いていた。

シヴァ達はこの場では当事者でもあり、部外者でもある。

何故ならば

「シヴァ殿、テオリノンが攻略が終わった後の同行を申し込んでおるのだが、貴殿は如何なさるおつもりですか？」

クレイオスの問いかけは言葉上は穏やかであったが、その剣呑な雰囲気は瞳を問わず、全身で発していた。代表として魑魅魍魎の輩と渡り合った貫禄ある声は聞かせる者を竦ませ、形式としては問いかけであったが、鋭い眼光でシヴァに同行を拒絶しろと訴えていた。

「私としては、邪魔にならないのであれば受け入れるつもりですが」  
クレイオスの凄絶な威圧を伴う脅迫紛いの問いに、シヴァは常と変わらない答えを返した。

シヴァにとってみれば、一国の王女であろうと、邪魔にならなければよく、同行するのは構わなかった。

「御爺様、シヴァ殿もこう仰っているので同行してもよろしいでしょうか？」

同行の許可を得られたテオリノンは、シヴァの後ろ盾を得られたことで満足げな笑みで同行の許可をクレイオスから取るうとする。

「ならん！！シヴァ殿はどちらでもよいと言っただけで、お前の同行は許可しておらん。貴様が付いていっても足手纏いになるだけだ！」

額に青筋を立て、怒鳴り立てるクレイオス。

「そんなことはありません！ 現に私は国でも有数の使い手ではあ

りませんか!」

いつもの淑女の仮面を脱ぎ棄てて、テオリノンも負けじと怒鳴り返す。

「この国からあまり出たことがない小娘が何をほざくか!」

「ゼノン叔父様だってあまり国から出たことはなかったのに同行したじゃありませんか!」

「ゼノンは別にいいのじゃ、男子おとこだからな! 女子おんなは黙っておれ!」

「今時男女差別なんか意味はないでしょうが、糞爺!」

「やかましい馬鹿孫! 貴様はどうしてそう男勝りなんじゃ! 武芸なんぞに励むよりももう少しお淑やかにならんか!」

「武芸を叩きこんだ張本人が言うことですか!? 私がこんな風になつたのはあなたのせいでしょうが!」

「僕は護衛用にと教えただけじゃ! それを勘違いし、武芸にのめり込みよって!」

「と・に・か・く! 私はシヴァ殿に同行させてもらつつもりです」

「だ・め・だ! 何度言えば分かるんじゃ! 黙って僕に従え!!」

「嫌です!! 私は従つつもりはありません!」

「まあまあ……二人とも落ち着いて……」

「日和見は黙ってる!!!」

「は、はい……」

「「フン!!!」」

双方は鼻を鳴らし、お互いのことを視野に入れたくないとばかりにそっぽ向く。

レオンは二人の間で胃痛がするかのよう腹を押さえている。

二人はこうして度々このことで舌戦を繰り返していた。間に挿まれてしまい、何とか和解させようとしたレオンの胃は最早メルトダウン寸前だった。

シヴァの意見を聞こうという最終手段に陥った二人の争議は、シヴァのどちらとも取れる意見に、結局は泥沼に嵌ることとなったのだ。

これがシヴァが当事者であり、部外者である理由。

二人の意見は平行線であり、一向に交わることはなかった。

どうでもいいとばかりにお茶を飲むシヴァ達は何処までも平常運転だった。

そんな二人の平行線に変化が生じたのは、クレイオスのシヴァに対する質問だった。

「シヴァ殿、この馬鹿孫に言う事を聞かせる方法はないかね？」

クレイオスの質問は深く考えたものではなく、ただの短絡的なものだった。彼はシヴァがテオリノンの意思を曲げる意見が出る事を期待しただけでそれ以上の意味はなかった。

「僭越ながら申し上げさせて貰いますと、言う事を聞かせたくば奴

隷用の魔道具を身に付けさせればよろしいのではないのでしょうか？  
始めは反抗を抱くかもしれませんが、その内貴殿の思い通りに動く人形ができあがりませう」

シヴァの言葉に室内にいる誰もが凍りついた。 いや、フラウ達だけは変わらずに動いていた。

フラウ達にしてみれば、シヴァの言うことに疑問を挿む余地などなかった。彼女達にしてみれば、当然のことと認識していた。

「 いや、その……だな、僕はそこまでする必要はないと思っておる。ただ、この国に留まり、自らの意思で代表の座を継いでほしいのであって、奴隷のようになって欲しいわけではないのだ」

シヴァのとんでもない提案に毒気を抜かれたクレイオスは、先ほどまでの勢いは何処に消えたのか、やや躊躇いがちにシヴァに奴隷にしたいわけではないと告げる。

「しかし、このままでは平行線であることは承知なさっているのでしょうか？」

「う、うむ」

「ならば貴殿の意見を通すのであればこうするのが手っ取り早いのではない？」

「だが、僕はそこまでする気はないのだ。自らの意思で継いでこそ意味があるのだから」

「その自らの意思で同行したいを仰っているのですか？」

「そ、それはそうだが……」

シヴァの指摘にクレイオスは言葉に詰まる。

シヴァの指摘は尤もであるが、クレイオスとしては引くわけにも  
いかなかった。 クセルギリア共和国の為にも。

「……テオリノンには代表の座を継がなくてはならぬ理由があるの  
だ」

「それはなんですか？」

「もしもテオリノンが代表を継がねばクセルギリアの未来は危うい。  
今でさえ薄氷の上を歩くかのような危うい状態なのに、テオリノン  
以外が継ぐことになればこの国は元の木阿弥だ。 場合によっては今  
度こそ滅びを迎えることになるかもしれない。 よって、後継者を  
失うわけにはいかんだ」

テオリノンを引き留める真意は、ただ人の上に立つ立場の者とし  
ての責務だった。

もし仮に、テオリノン以外の後継者が手元にいれば、クレイオス  
はここまで意固地にならなかったかもしれない。

元代表として、そして民を率いる立場の者としてはそのような結  
末を迎えるわけにはいかなかった。

「別にそれで滅びるのであれば、それで構わないのではないでしょ  
うか？ それが彼らの選択であり、それで滅びるのであればそこま  
でだっただけでしょ？」

「……な！？」「」

『勇者』である者の発言とは到底思えない言葉にクレイオス達は絶句する。

シロップ漬けのケーキ、レヴァネを周囲の絶句に構わずフラウ達は食す。フラウ達の口内にしっかりとした卵の味と程良い加減のシロップの味が広がる。

「施政者としては滅びをよしとするわけにはいかないよ」

シヴァのあまりの暴論に今まで沈黙を保っていたレオンまでも焦りを覚えながらも口を出す。

「そ、そうだ。施政者である以上、民の良き生活を保障せねばならない」

「自分を犠牲にしても？」

「そうだ」

シヴァの淡々とした問いに渋面を浮かべながらも力強く頷く。  
紛争が多い国に生まれたからこそ、クレイオスはそれが骨身に染みていた。身を呈しても民を守るという意識が彼の心根を占めていた。

「ならば、尚のこと奴隷であろうと問題はないと思われませんが？  
心魂尽くすという自己犠牲を強いるのであれば、奴隷の方が都合がいい。国の奴隷を称するならば、奴隷であろうと構わないと思われませんが？ 余計な私欲はなく、ただ国の為だけに尽くす。これほど国のために都合がいい存在はいない」

「人を治めるには人でなくてはならん。奴隷のような道具では到底

国は治められない」

「……矛盾していますね。あなた方は国の歯車であることを強要し、自由意思を認めていないのに、国の為に尽くせと言う」

抑揚もなく、奴隷になることを無表情に告げるシヴァは何処かそら恐ろしかった。

彼の真意を探ろうと、彼を理解しているであろうフラウ達に声をかける。

「フラウ殿、セレナ殿、彼に言ってやっではもらえますかな？ 彼の言っていることは間違いだ」と

「何処がおかしなところがあるのですか？」

それにセレナは何でもないことのように答える。

「」

クレイオスは最早言葉を紡げなかった。

彼女達がふざけているのではなく、本気で疑問に思っている事をこれまでの経験から察したからだ。

セレナもフラウもシヴァの言うことに拒絶の意思はない。彼女達にしてみれば、それは不思議な事ではなく、これまで彼女達が過ごしてきた常識だったからだ。

三人の誰もが、物心つく前から奴隷用の魔道具を身体の一部として馴染むほどに長い間装着していた。

幼少の頃から奴隷用の首輪をつけられてきたのは二つの理由がある。

一つは徹底的にシヴァ達のことを殺し、自分達に都合がいい存在



を作り上げるため。

もう一つは旅の途中で奴隷用の魔道具を嵌められても、抵抗ができるように。

幼少の頃から親しんできた故に奴隷用の魔道具の構造をシヴァ達は熟知しており、その取り外し方も訓練を行ってきた。もつとも、奴隷用の魔道具はシヴァ達以外に壊すことは難しいが……。

過去、セレナ達は奴隷用の魔道具を嵌めた女性を解放した経歴がある。

「別にあなた方の意思にそぐわぬ子供をどう躰けようと構いませんが、一つだけ言うておくことがあります」

「何だね？」

セレナの落ちついていいる態度に釣られるようにクレイオスは動揺を治める。

「あなた達はよく私達を私達のためだと言って縛りつけますが、あれはどちらかといえばあなた達のためになるようなことを多分に含まれていますよね。立場、外聞、見栄などあなた達を満足させるための人形。自分達の言う事を聞く都合の良い人形が欲しいのなら、そう育てるか、作ればいい。市井の方だと様々な理屈を弄され難しいですが、あなた達のように身分ある人ならば別です。なぜなら大義名分がある」

セレナは口を閉ざし、これ以上は言うことはないと言わんばかりに茶を優雅に口にする。

セレナは別にクレイオスを責めている訳ではない。ただ、彼女の当たり前の常識として述べただけだった。

彼女も生まれながらにして、国のために、そして『聖女』のため

だけに存在する護衛。じこくきゆう

これまで一度たりとも彼女の意思は考慮されたことはない。ただそこに生まれたという理由だけで、人間に生まれ落ちながらも人形になった少女。

彼女も自分の境遇を嘆くという人間らしい感情は持ち合わせていない。

人の形をしているのに、人ではないシヴァ達にクレイオスもレオンも背筋が凍る思いがした。

彼らとて紛争が多い国に生まれた国故に、彼らのような教育が施された人間を知っている。今では禁止となっている事はあるが、物心つかない内から徹底的に人の心を殺し、人間を兵器に仕立て上げる教育がこの半島では平然と行われた時期があった。

だが、ここまで壊れている人間をクレイオス達は目に掛けたことはなかった。

レオンはルドラに感じていた危惧がこれにあっただと悟った。こんな救いようがないほど壊れている人間の傍にいれば、まともな神経を持ち合わせている者でも狂乱の渦に巻き込まれてしまう事を恐れていたのだ。

「あなた達は自分を人間だと思っっていますか？」

そう囁くように呟いたのは今まで黙っていたテオリノンで、何処か不可解であり、心あらずな様子でシヴァ達に問いかける。

「誰も俺達に人間であることを望んではないし、俺も人間でいるつもりはない。俺は只の殺戮のみを尽くす道具で、存在を否定する破壊という現象にすぎない」

シヴァの表情は相も変わらず無表情であり、自らを人間でないと称しても、一切の痛痒は見られない。

「あなた達はそれでいいのですか!？」

相手を悼むようなテオリノンの声はシヴァ達には届くことはない。

「良いも何も私達にはそれ以外に選択肢はありません」

「しかし」

「いくら個が他を庇おうとも、数の前には容易く破れる門に過ぎません。数という人間においては、絶対にして不動の力の前には個の意見など烈風に晒される蝋燭の灯に等しい。それは国を率いる立場にいるあなた達ならば理解できるものではありませんか？」

フラウの正論の前には、誰もが唇を噛み締め、悔しさから顔を歪めるしかなかった。

「あなた達がどのような選択をしようと構いません。後はあなた達で、勝手に決めてください」

切り捨てるようなシヴァの言葉を最後に、シヴァ達は部屋を出ていった。まるで、これ以上話しあうことはないかというように、そう背中を語っていた。

#### 第四章 混沌と吹き荒れる風は嵐となる

『勇者』という立場上、人目に晒されることは覚悟しているが、それでも人目を避けられるのであれば避けるに越した事はなかった。街を行く先々で勝利の凱旋を齎してくれるであろうシヴァ達に注がれる視線は不躰であり、囑望する瞳は太陽から降り注ぐ陽光のように熱を帯びている。

人の立場としては極致である『勇者』を一目見ようと人々は犇めき、人の壁を形成している。

祭事に託け、商売人達が懐を温めようと臨時の出店を出し、人々の熱狂に押されるように民衆の財布の紐は緩み、商品を購入している。

人々は日常を謳歌し、湧いて出た非日常を喧騒と共に過ごす。

非日常の後にはいつもと変わらぬ日常が再び太陽の如く昇る事を人々は信じている。

穢魔に怯える事のない日常を謳歌できる日が来る事を、『勇者』がその日を到来させるに違いないと誰もが信じていた。

グルシアとブルグリアの国境にあるコロニーに最も近い街で、シヴァ達は最後の打ち合わせをすべく待機していた。

便利な駒であるシヴァ達はその打ち合わせに参加はしない。

彼らの役目は厭魔を斃すことであり、今後の人間関係など微塵も考慮する必要はない。ただ作戦内容だけを知らせてくれれば、それ以上何も望まず、彼らの望む役割をこなすだけであった。

時はシヴァ達が同時攻略のためにコロニー近くの町へと移動し、最後の打ち合わせの少し前。  
そして、場所は協力する相手であるグルシアへと移る。

グルシアは十二の州に分かれており、それぞれの州を治める者を評議員と称している。評議員は選任者でもあり、自身の後継者を治めている州から選任することになっている。専ら選ばれるのは戦力として充分な者であり、時には武力以外の力を有する者も選任者しだいで選定されることになる。

また、受け継ぐものは領土だけでなく、名も受け継がなければならぬ。

オリンポス十二評議員　それがグルシアの最高権力者達である。

グルシアの首都、アッティアにあるファルテノン神殿。

ここは元々、神を奉る神殿として建築された建物であるが、今現在では十二人の評議員達がグルシア全体の政策を決める会議場となっている。

美しい等比を意識して建築された神殿は、大理石の柱が建築物を支える柱の役割を果たしており、同時に建築物を守護するかのよう  
に威容を誇っていた。

輝くような金の髪と顎を覆う髭を揺らし、評議員だけに許される  
正装を身に纏い、誰もいない長い廊下の先を青の瞳で見据えながら  
ユピテルは堂々と闊歩する。

大理石の床を歩く度にオリンポス十二評議員代表であるユピテル  
の足音が刻まれていく。警備の者は基本的に神殿の外に配置される

ので、ユピテル以外の人影は見られない。ユピテルが刻む足音だけが静謐を壊すただ一つの要因だった。

その足音も重厚な観音開きの扉の前で止まる。部屋を警備している兵士達はユピテルが扉の前に立ち止まると、彼を招き入れるようにゆっくりと扉を開く。

ユピテルが入室すると、既に室内ではユピテルを除く十一人が待機していた。

ユピテルは彼らを見渡した後、彼らに自身を刻みつけるかのよう  
に悠然と歩き、上座である代表の席に腰がける。

「さて、今回皆に集まってもらったのは言うまでもないことだろう。来るべき時が来たのだ……出征に向かうメンバーを決めたい」

ユピテルの壮年盛りの声が静まり返っている会議場に厳かに空間に染みるように響く。

だが、他の十一人の反応は芳しくはない。誰もが顔を嵐が通り過ぎるのを待つかのようになっている。

その反応にユピテルは苛立ちを覚えながらも、顔には出さない。彼とて以前の恐怖が今も尚、彼の中に巣食っているのだ。単に彼が他の十一人と反応が異なるのは、代表としての責務とただ一人最後まで戦い抜いたという自尊心に他ならない。

「……ローマーナ王国の例もある。半数はグルシアに対する穢魔の襲撃の際に備えて、各領土に配置することにしよう」

このユピテルの提案に対する反応は先ほどに比べて劇的だった。

誰もが我先にと居残り組になることを望み、声高に自分が相応しいと主張する。

そんな中で一際異彩を放ったのが、この一声だった。

「私は代表であるユピテルの妻ですから、ここに居残り、有事の際に指揮を執る人材として適切でしょう」

茶金の巻き毛とエメラルドのような碧の瞳を持つ妙齡な美女が口にした一言にこれまでは反対意見は挙がっていたにも関わらず、彼女の提案には否定はなかった。

ユピテルの妻であるユーノー。

彼女もオリンポス十二評議員の一人であり、彼女自身も領土を持つ身であるが、評議員同士の婚姻は珍しいことではない。

選定には領土からという制約はあるものの、それ以外には制約はなく、交易のために婚姻を結ぶことはこれまでもよくあることだった。

彼女の提案に反対の声は挙がらなかったのは、ユピテルの妻というだけではなく、ユーノーは情報収集能力に長けているので、有事の際の連絡や攻略中の情報収集に徹した方が最適だと判断されたにすぎない。

また、代表の妻であるため、有事の際の指揮を執るのに相応しい人物ともいえた。

ただ、彼女にはそれとは無関係にやや難点がある。

それはひどい癩癩の持ち主だということだ。

彼女自身は貞淑ではあるものの、夫であるユピテルは女癖が悪く、度々そのことで多大な喧嘩をすることがある。

ユピテルは自身が最も優れた血筋の持ち主だと自覚しているので、優れた花を咲かすべく種を撒き散らし、それに嫉妬したユーノーがそれを刈り取るという修羅場が発生している。

特に、十数年前の厭魔の件があってからは大義名分が発生したために、ユピテルはこれまで以上に種蒔きに精力的になり、その有効性を理解しているために口には出さず、ユーノーはその嫉妬心を内側に溜めに溜め、いつ噴火してもおかしくはない様相になっていることは誰もが知る事であった。

「それがよかるう。ウルカヌス、コロニーは貴公の領土にある。貴公も攻略の際には当然参加して貰うぞ」

「……承知いたしました」

攻略に参加することは諦念していたのだろう。赤銅の髪と瞳を持つ、お世辞にも容姿は優れているとは思えないウルカヌスは抵抗することなく承諾していた。

彼の古傷がずきりと疼く。彼の両足は義足であり、十数年前の穢魔の侵攻の際に彼の両足は奪われ、義足で生活する羽目になった。彼は戦闘よりも武具や魔導器の製作に優れていたため不便は感じてはいない。

だが、それでも彼は戦場で戦う戦士ではなく、鍛冶場などで武具などを製作する職人なので、厭魔に立ち向かいたくはないのだ。彼の節くれだっているにもかかわらず繊細な手は震えている。

「後はコロニーに近い者達から選別する事にするか」

ユピテルの意見に多少の反対意見は挙がったものの、概ね評議員達は強く反発することなく会議は進行していった。

彼らの中から勇ましい声が挙がらなかったのは、それだけ厭魔の恐怖が彼らに染み付いているからだろう。

ユピテルはその事に多少の不安を感じずにはいらなかった。

「こちらを御覧頂きたい」



コロニーが領土内にあるため、度々偵察隊を送り周辺を観察していたウルカヌスはスクリーンにコロニー周辺の地形を映し出す。コロニーはまるで山のように形成されており、その影響か地形は起伏に富んでおり、岩石がコロニーを守るように乱立していた。

コロニーの規模は国ごとに大きさは異なるが、グルシアのコロニーはクセルギリアの中でも規格外といえるほどの大きさを有していた。

「度重なる偵察をしたところ、時が経るごとに地形は起伏に富み、岩も無造作に設置されていました」

「穢魔の何らかの意図があるか？」

テオリノンの疑問にウルカヌスは然りと頷く。

「穢魔の構成は調査したところ、他の二国に比べれば数においては多くはないようです。

しかし、調査によると穢魔の構成で多いのは豪獣種と蛇翼種。この地形は奴らのために用意されたようなものです」

「とうとうと？」

「偵察の折、ある程度の接近を試みたのですが、起伏がある地形からの蛇翼種の奇襲、岩を破碎して礫をぶつける豪獣種と被害が相次いだ例があります」

「ふむ……」

「私達が先んじて穢魔の数は減らすことはできませんが、何分地形が複雑なため、討ち漏らしする可能性があります。その点は何卒御理

解く下さい」

「わかった。厭魔についてだが……」

室内にいる誰もがテオリノンの言葉に息を呑む。特にグルシアの面々からは只ならぬ緊張感が漂い、緊迫する空気が室内に満ちる。

「テュポンの現在位置は判明できません。あの巨体ですから、見逃す筈はありません。おそらくは、コロニー内部にその巨体を潜ませているに違いありません」

ウルカヌスの声には震えが混じっており、今にも息が詰まりそうでもあった。

「あれ以降の活動はなかったのか？」

「いえ、コロニーが建造されて以降、対象は沈黙しています。そのことからコロニーにいると推測しました」

その推測は的外れではないとテオリノンも頷き、攻略の段取りを進めていった。

銀の閃光が空間までも斬り裂こうと宙を奔る。閃光は一筋だけではない。一閃、二閃と数を増していき、空を断つ銀の閃光は休むことなく奔り続ける。

芸術のような剣舞は殺戮の術を高めたものにも関わらず、見る者を魅了する。迷いなき剣筋は剣を操る者の心情を表しているようで

もあり、同時に他者の付け入る隙を見せない。

剣舞は唐突に終わりを告げる。

第三者が現れた事を剣の操者が察したからだ。

「兄様、少しよろしいですか？」

シヴァは剣を鞘に収め、再び剣に血潮が付着する闘いに身を投じるべくその場所へと歩き出した。

「穢魔に関してはグルシア軍が対応するので、私達はそれまで待機します。厭魔に関してですが、シヴァ殿には私達の指揮下に入ってもらいます」

「承知しました」

テオリノンの凜々しい声によって紡がれる通達にシヴァは一瞬の間もなく承諾する。

用は済んだとばかりにシヴァは立ち上がり、部屋を去ろうとする。

「兄様、私達は彼女の所で待機しますね」

「ああ」

簡潔な返事にフラウ達は気を悪くしない。これはただの確認事項であり、彼女達にしてみれば当然の結論だった。

だが、それを壊そうとする者がいた。

「あなた達は一緒に戦おうとはしないのですか？」

テオリノンはてつきりシヴァと一緒に戦うものとはかり思っていた。

だが、フラウ達を選んだのはシヴァだけに戦わせるという選択。何処までも彼らはテオリノンの常識からは懸け離れた存在だった。

「ええ。あなたの護衛も必要でしょうし、これが私達の最善です」

そう話すフラウの口調にはただ一人だけを戦わせる負い目も悔恨もなく、当たり前だという認識の元で繰り出される言葉があった。

「しかし」

「あなたが常識を振り翳すのは構いませんが、それは所詮同じ見解を持つ者同士のみが通じる思想です。己が思想を基準とするのは結構ですが、それがそのまま相手にも通じるとは思わないでください」

冷たい視線を投げ掛けるフラウに一つの感情が宿っている。

それは拒絶だった。

テオリノンとフラウ達とは決定的なまでに価値観を相違していた。

「私達は壊すことには協力しますが、それ以外のことはできないと思っておいてください」

去り行くフラウ達の背中には何もかもを突き放している諦観があった。

テオリノンは彼女以外誰も残されていない室内で一人自身の中に巣食いだめる感情を吹き飛ばすように息を吐く。

テオリノン は例の奴隷発言からシヴァ達のことからなくなつてしまい、何処か一步引いた態度を取ってしまったている。

恐ろしいのだ  同じ人間とは思えないほどに。

クセルギリア共和国は新興国なので、その忙しさもあつてかスターリア王国には協力できなかった。

スターリア王国は基本的には他国に関しては不干渉を貫いており、他国もそれを破ることはない。

唯一例外があるとすれば、世界的な危機に関することであり、ようやく彼の国も重い腰を上げたと言われるほど沈黙を保っていた。

あの国が世界に名高い『勇者』の息子のシヴァにどのような扱いをしていたかはテオリノンは知らない。それを知るのは大国の一部の上層部だけであり、若輩のテオリノンは知る由もなかった。

ただ、彼の国には常に黒い噂が流れており、大国もスターリア王国の齎す利益を協力する代わりにお零れを貰っていることは公然の秘密だった。

テオリノンは自らの内に渦巻く感情に翻弄されていた。

盟主の娘として生まれたことから発する義務感。

幼い頃から夢見た世界を救済するという熱望。

不安定な世情を冷徹に見通す観察眼が齎す現状に対する不安。

叔父のように世界に名高い人物になるという大望。

『勇者』に対する羨望。

強き者に対する憧憬と思慕。

それらは時を経ることはなく、むしろ時間がないという焦燥感もあつて日増しに強まっている。

テオリノンはブルグリアという国を嫌悪しておらず、むしろ愛している。自らの育った国だ、愛着がないわけではない。

だからこそ、シヴァ達と一緒に旅に出たいという気持ちもあるが、同時にこのままでいいのかという国の将来に対する憂いもある。

二律背反の心がテオリノンの中で闘ぎ合い、どちらに転んでもおかしくはなかった。

早く答えを出さなければという焦燥感が胸を焦がすも、燻っている感情は一向に治まらず、荒れ狂うばかり。

自らの意思表示は表に出したことで、テオリノンの選択に周囲の者は慌てることはない。おそらく、レオン達もテオリノンが無理矢理旅に出たとしても問題はないようにはしているだろう。

クレイオスは最後まで反対はするだろうが、テオリノンが引かなければおそらく折れるだろうと読んでいる。

後は如何に自らの意思を決定するか、テオリノンは迷う。

だが、同時にこの作戦が終わらなければ答えは出ないのではないかという漠然とした思いも感じていた。

打ち合わせが終わり、準備が整うまでにおそらく後数日。

テオリノンは窓に近づき、ゆっくりと陰鬱な空気を吹き飛ばそうと窓を開ける。

テオリノンの澱みを吹き飛ばそうとするかのような清涼な風が室内に流れ込む。

見上げる空はテオリノンの迷う心を示すかのように曇天だった。

打ち合わせも終わり、残るは出征するだけとなったユピテルは種を撒き散らすべく街を陽気に歩く。

おそらく種を蒔いたことはユーノーに後ほど判明されるだろうが、ユピテルはそのような些末事を気にするような性格ではなく、粘りつくようなユーノーの嫉妬を含んだ束縛から解放されて晴れやかな気分になっているユピテルは、その心が赴くに任せ、種を蒔く苗床を選ぼうと、街の優秀な苗床を探す。

優秀である自分は多彩な花を咲かせる義務があると自負しているユピテルは種を蒔く事を怠る気など微塵もなく、大義名分があるユピテルは精力的に街を踏破せんとばかりに街並みを歩きまわる。

質素な身なりに包まれていようと、気品溢れる仕草と十二評議

員最高の力を有することから生まれる自信が生来持っている美貌を引き立たせ、ユピテルは街行く女性を魅了する。

ユピテルは彼の美貌に魅了されている女性にニコリと微笑む。甲高い声が女性から挙がるが、ユピテルは取り合わない。本来ならば手を出してもいいのだが、時間が限られていることと出来る限り優秀な苗床を選びたかったため、名残惜しくもあつたが足早に街路を歩き続ける。

ふと、彼の視界の片隅にベンチに座っている女性の二人組が目に入った。

宝石のような翠緑の髪は微かにそよぐ風に弄ばれ、アクアマリンのような藍緑の瞳は緑あふれる公園の隅まで見渡している。鋭利な雰囲気を発しており、それを強調するかのように無表情ではあるが、それも美貌を際立たせるものでしかない。引き締まった体は女性としての魅力を落とすのではなく、むしろ羨望の的にも成り得るほどにスタイルは良かった。

そして、ユピテルが釘付けとなったのは、白いローブに身を包んだ女性だった。

フードにほとんど隠れているため、顔はあまり見れないが、覗き見れる顔のパーツは息を呑むほど美しい。

隣にいる女性は決して劣っている訳ではないが、彼女に比べれば見劣りするのは免れない。あらゆる女性が彼女の隣に立とうとも、彼女には劣るのではないかと思わせるほどだった。

ゆったりしているローブに身を包んではいるが、黄金律のようなスタイルを隠せることはできず、むしろ僅かに隠れているからこそより一層彼女のスタイルの良さを引き立たせていた。

ユピテルはこれまで数え切れないほどの女性に手を出してきたが、彼女達のような衝撃的な女性に巡り合えたことはなかった。

如何なる手段を持ってしても彼女達を手に入れなければ、とユピテルは意気込む。

絶対に彼女達は自分に靡く筈だという自信の表れか、二人に近づ

く足取りは自信に充ち溢れ、臆することなくスムーズに歩み寄る。

「御嬢さん方、少しいいかな？」

「……何でしょうか？」

ユピテルを仰ぎ見たことで、フードは僅かにずれ、人間とは思えないほどの美貌が顔を覗かせる。

ユピテルは雷に打たれたような衝撃が全身に奔った事に気付かないほどに瞠目した。

雪よりも白い純白の髪、アメジストよりも美しい紫水晶の瞳、計算され尽くしたような大きさと配置の顔のパーツ、白皙の肌は同じ人間とは思えなかった。

是が非でも彼女だけは手に入れなくては、と発奮するユピテルではあるが、継ぐ声は唇の戦慄きから発することはできなかった。

ゴクリと息を呑むユピテルだが、あまりの喉の渇きからか呑むという仕草さえ一苦労だった。

暫し時が流れたが、一筋の汗が零れたことでようやくユピテルの時は動き出した。

「これから私とお茶でもしないかい？」

紡ぎ出された言葉は数多くの女性を口説いた百戦錬磨の言葉とは思えないほどにありふれたものだった。

ナンパだと分かり、女性達からユピテルに対する反応が消える。

ユピテルに向けられていた視線が宙を泳ぎ、ユピテルを捉えない。これは不味いと思ったユピテルは矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「君達のような可憐な華はこれまで目にした事はなくてね……つい心が逸つてしまい声を掛けてしまったのだよ。君達のような美しい



華に魅了されてしまった身としてはもつと君達を知りたいと思う。

どうか私に君達を知る機会を与えては貰えないだろうか？」

数多くの女性を魅了してきた微笑を、これまで以上に情熱的に目の前の二人に降り注がせる。

だが、結果は芳しくはなかった。

「連れがいますので、お断りします」

返答は即答で、にべもなかった。

その後、ユピテルがどれほどの美辞麗句で口説こうとも二人の女性は一切の無視を決め込み、ユピテルなどいないものと扱った。

「二人とも行くぞ」

低い男の声がユピテル達の間割り込む。

ユピテルが声のした方向を振り向くと、そこには漆黒の髪と黒曜石の髪を持つ男が片手に荷物を抱え立っていた。

邪魔が入り、ユピテルは不快からか顔を歪める。消し炭にしようかと思案したが、すぐにその思考は途切れることとなった。

「はい」

ユピテルをいないものと無視を決め込んでいた二人は男の声に即座に反応し、嬉しそうに駆け寄る。

それにシヨックを受けたユピテルは呆然とするも、女性達が場を去ろうとしたので慌てふためいて声をかける。

「待ちたまえ！ …… どうか、私ともう少しだけ共に過ごしてほしい」

ユピテルの切実な訴えは三人の足を止める。

「……知り合いか？」

「いいえ、ただの通行人です」

だが、ユピテルの切実な訴えは無情にもお目当ての相手に切り捨てられ、一度もユピテルを振り返ることなく、まるで誰もいなかったように公園を去っていった。

ユピテルは屈辱から拳を震わせ、唇を噛み締める。

女性を墮とすことはできず、また無視される屈辱をこれまで一度たりとも受けたことはなく、ユピテルは打ちのめされるよりもこの屈辱を与えた相手に対する殺意が芽生えた。

ほとんど順風満帆だった彼の人生に、このような汚点を残すことなど許容できる筈もなく、汚れを払うべくまずは相手を知ることにした。

徹底的に自分の偉大さを相手に誇示し、相手を屈服させ、女神を手中に収めるために。

空から零れる月の雫がグラスの氷に零れるように降り注ぐ。グラスに注がれている蒸留酒は月の雫の加護を得るかのようにもあった。

用意された二人用の部屋は豪奢ではないが、質素ともいえない。控えめに意匠を凝らされた家具は部屋を気品あるものにし、部屋で過ごす者に優越を与える。

仮の住まいとなったこの部屋に居座るのはエリオスとウィル。

二人は数日後に戦場へと出掛ける身。それ故にエリオスは兼ねてより問いたかった事を問うべく、酒の力を借りて話を繰り出す。

「答えたくないのであれば、答えなくても構わない。どうしてエンテレケイアに至った者は得た情報に口を閉ざすんだ？」

エリオスの師もかつての仲間達も、そしてシヴァも誰しもが知った情報を外には出さず、内に籠らせる。

ずっと蚊帳の外にいたエリオスはずっと気にかかっていた。彼らを知る情報とは何かと。未熟な事は十二分に承知しているが、それでも彼らと同じ悩みを共有していたかったエリオスは答えてくれそうな存在へと問いを投げ掛ける。

「ふむ……情報というのは知らなくてはいけないものと隠さなければならぬものがあるということは御存じですよね」

それは確認でもあり、試験でもあった。この程度の理解ができねば知る価値はないと。

「ああ。真実とは何もかもを曝け出している状態のことだ。それがどのような痛みであろうともだ。特に施政者はその尺度を知らねばならない。人々の安寧のために」

然りと、ウィルは頷く。この偉丈夫は話すに値すると判断する。

「その通りです。私達が口を閉ざすのは、単に話したところで他人には理解できないだけのこと。例え、理解できたとしても結果としてみれば徒に傷つくだけで、何も変わりはないからこそ沈黙する以外の術はないのです。人は己が理解したい事以外は理解しませんし、納得しませんから」

やはり駄目かとエリオスは諦めかけるが、それでも諦観することなどできる筈もなかった。彼らの所まで登り詰めるという思いは未だ心に燻っているのだから。

「如何なる真実であろうとも、受け入れる覚悟はとうにできている」

痛みを覚悟している瞳は悠然と聳え立つ山脈のように動じておらず、発せられる雰囲気はそれ故か清澄でもある。

その凄烈な意志はウィルの心を揺さぶり、口を軽くする。

「いいでしょう。真実の果てに貴方がどのような選択をするのかを楽しみにします。そうですね……今回の戦いの褒賞として真実の断片を差し上げましょう」

「それは魂魄結晶クリフトのことか？」

「ええ。今教えるのは、動揺を引きずる可能性があるので控えさせてもらいます。……ただ……一つだけ真実を」

ウィルは言うべきかわざるべきかを迷い、前者を言葉にする。

彼の覚悟に敬意を表して。

「私が『勇者』を捜しているのは御存じですよね？」

「ああ」

エリオスは多少訝しんだが、口を挿まずウィルに話を促す。

「『勇者』と『聖女』……これらは偉業を達成した者に対する敬称ではありませんが、本来ならば元々一つの役割を果たすための称号なのですよ」

ウィルの口調には一切の偽証は交えず、真実のみを果たしている澄み切った水面のような透明な語りがあった。

「過去、人心掌握の一環として人々に受け入れやすい称号を名目されましたが、それは醜悪な意志を隠すために用意された隠れ蓑にかすぎません。本来の役割、それは『選別』です」

だが、語られる言葉は綺麗すぎる水には魚が棲めないように、真実には人の心を蝕む毒が混じっていた。

「『選別』が何を意味するかは語る気はありません。しかし、確かなのは『勇者』と『聖女』と称されたルドラトリムール、ラクストリムール、そして彼らの仲間達。彼らは『選別』から弾かれてしまった落第者達であることは間違いありません」

「……それは死んでしまったからか？」

「……選ばれない方が人として幸せでしょう。『選別』に値する人物は、値すればするほど人間性の喪失を免れない。……いいえ、喪失している方がマシというもの。何故ならば」

侮蔑と憐憫が混じった瞳はここではない何かを映している。

エリオスには続く言葉は聞こえなかった。ウィルがそれ以上は口を閉ざしたからだ。

「……失礼しました。これ以上を知りたいのであれば貴方も至って

ください。ただ、覚悟はしておいてください。真実とは人の都合に合わせない」

「……ああ」

ウィルは鮮血のように真紅なワインをグラスの中で転がし、二度と味わえないかのようにゆっくりと口に運ぶ。

「ただ一つだけ……」

「何だ？」

「『選別』はこれが最後です。もしも、誰も選ばれなかったら……世界は今度こそ本当の斜陽の時を迎えます」

夜空に浮かび、地上を照らす月は雲が遮り翳りを増していく。

光が差していた地上に闇が侵食していく様は何かの暗示のようでもあった。

月の光は仄かな光で優しく闇を照らし、鬱蒼と茂る森が植物の香りを優しく運ぶ。僅かに流れる風が葉の囁きを奏で、命の眠りを促す夜を題目とする協奏曲が演奏されている。

高さ二メートルは越える先の方まで見通せるほどに透き通っている結晶の傍にある、座るのには丁度いい岩に腰を下ろし、待ち人が来るのをローブが身体を覆っている男は静かに夜の協奏曲に聞き入る。

その演奏にはありえない音が混じり、その音は座っている男に徐

々に近づいていく。

待ち人が来たかと、男は閉じていた瞳を開き、足音のする方向に目を向ける。

森が作り出していた闇でその足音の持ち主は姿は見えなかったが、男に近づくとつれ、月光が足音の持ち主を照らし出し輪郭を明確にする。

月明かりが照らし出したのは女だった。

闇夜のような髪が月光に映し出される事で映え、褐色の瞳は光の色合いによつては漆黒へと変化する。結い上げられた髪は一輪のかんざしで綺麗に纏めあげられ、桜の花が散華している陰陽を表しているかのような黒と白の着物は彼女の格好に非常に映えていた。

だが、彼女の身なりには一点の特異点が存在していた。

腰に帯びている長さ三尺ほどの刀が彼女の格好には不釣り合いのように存在していた。

「待たせてしまいましたか？」

何処かの訛りが混じっている言葉は、彼女の容姿が着物であるためだろうか彼女にはとても似合っていた。

男は頭を振る。

「僕はロマーナ王国からこちらに着た身です。貴女を待っている間、こちらの景色を十分に楽しんでいましたから気にはしていませんよ」

聞き様によつては遅いと婉曲に詰られているようではあったが、女性は男の言葉を一向に気にせず、何処か楽しそうに喋る。

「では、気にしないでおきましょう。良い女は男を待たせるもの故  
……」

「……自分でそれを言いますか。というか、貴女の国では女性は男の三步後を黙って歩くのではないのですか？」

ため息交じりに皮肉を男が言うも女は一向に気にせず、やや間延びしている口調でさも可笑しげに話す。

「ウチの性分には合いません。それに……」

女性の雰囲気は急激に変わる。ふんわりと包み込むような空気が一変して、鋭利な刃物で切り刻まれるかのような錯覚を齎す雰囲気へと移行する。

「ウチにはこれだけがあればええ。それ以外は邪魔や」

刀を掲げ、晒っている女の笑顔は血と狂気に蝕まれており、阿修羅道を歩む事を望みとするものであった。

そんな女の性分を理解している男は何も言わず肩を竦めるだけ。

「それは構いませんが、仕事はして貰いますよ」

「ええよ。でも、伝達だけというのはおもしろくない」

血と狂気に蝕まれているのが、女にとっては普通なのだろう。触れれば切り刻まれる空気は何事もなかったように消え失せ、幼女のように女は頬を膨らませている。

「……年に似合わない仕草を」

男の声は口腔内で咳いたかのようにほとんど洩れなかったが、女は耳聴くそれを聞きつけ、神速の一閃を男の首を断たんとするかの



ように奔らせる。

「なんかゆうた？」

「いえ、何も」

口が滑ったかと、男は女の一闪を躲したものの背中からは冷や汗が止まらなかった。

男はニコリと笑う女の笑顔に恐怖を覚え、誤魔化すように口早に告げる。

「殺すのは正式に名乗り上げてからです。後生ですから手加減はしてくださいよ。でも、遊ぶのは構いませんから、彼らで遊んでください」

「はあい。……で、遊ぶのならどこがよさそう？」

「そうですね……厭魔の質からすると、グルシアとマクセリア間にあるコロニーがよろしいかと。あそこは他の二つに比べれば弱いですから、相手側も少しは余裕ができるでしょう」

「ええのがおるとええけどな……と・こ・ろ・で……」

男は猛烈に嫌な悪寒が背筋に奔った。男は彼女の今の輝くような笑顔には見覚えがあった。強烈なトラウマは男の精神に刻まれている。

「身体が疼いてしまっしょうがない。鎮めるのに付き合ってえな」

刀をすらりと抜きながら、舌なめずりする様は顔だけを見るので

あれば妖艶ではあった。

だが、男はそんな女に昂るのではなく、血の気が引いていき青褪めていった。

強烈な恐怖心が蘇り、彼の身体を震え上がらせる。彼女は止まらない。彼女の気が鎮まるまで。男はそれに付き合わなければならぬのだ。

静寂が支配する夜の森に男の悲鳴が響き渡った。

グルシア地方ではこの時期、熱気が大地を覆うわけではあるが、まるで陽光の他にも熱源があるかのように暑さを増していく。海から距離はあるものの、さほど遠くはないせい空気は湿気を含み、蒸気が鎧を纏い行進する軍隊の体力をじわじわと奪っていく。このところ不安定な天気が続き、数日前には快晴ではあったものの、現在では雨でも降りだしそうなほど空は灰色の雲に覆われていた。

額から滴り落ちる汗を拭い、ユピテルは汗で微かに濡れている髪を鬱陶しそうに掻き上げる。彼の雷光の如き光輝く特注の鎧は蒸し暑さから蒸気が籠り、ユピテルに一層の不快感を齎していた。

兵士を引き連れ、率先して穢魔を殲滅すべく起伏のある土地を注意深く足を進める。

ユピテル達の視界を阻むものは大地だけではない。大地に鬱蒼と茂る木々が厭魔の身体を隠すかのように連なっている。

視覚ばかりではなく、聴覚、触覚を総動員させて、一瞬たりとて気を抜かず行進するためか、攻略の進行は遅々として進まず、神経は擦り減るばかりだった。

ユピテルの背丈を遙かに上回る大樹の頂上付近。

一匹の蛇翼種が大樹に身体を巻き付け、身体をカモフラージュさせて大樹を通り過ぎようとする獲物を刈るべく音もたてず待ち伏せていた。

蛇翼種は獲物がこちらを見ていない事を確認すると、獲物を狩猟するべく静かに行動を開始した。

その長い身体をばねの様に伸縮させ、音を伴わず地上へと急降下した。

獲物が多い。だからこそ、丸呑みすべく口を大きく開けるのではなく、喰らいつき、酸を浴びせ、鋼のような尻尾を鞭のように薙ぎ払い、人間の腕よりも遙かに太い体軀で巻き付こうとした。

獲物は襲いかかる狩人に気付かない。獲物はもうすぐそこだ。翼ある蛇はその顎を開いた。

ユピテルの頭上一メートルに蛇翼種が迫った時、一筋の閃光が蛇翼種を捉え、その体軀を大地へと縫いつける。

縫いつけられた蛇翼種は狩りを邪魔した存在へと襲いかかろうとしたが、それよりも先にユピテルの鎌によって命脈を断たれ消失した。

蛇翼種を宙で捉え、大地に縫い付けた存在は羽を大きく広げると飛び立ち、主であるユピテルの肩へと降り立つ。

「御苦労だった。続けて警戒態勢に入れ」

ユピテルは頭上から襲いかかる存在を感知していたが、主の守護という使命を果たした自分の守護聖霊に労いを掛ける。

ユピテルの守護聖霊、ガニユメデスと名付けられた鷲は任務了解とばかりに一声鳴くと翼を広げ、大空へと再び舞い上がる。

偵察と道案内の任務を受けたガニユメデスの指示通りにユピテル達は進軍し、一匹、また一匹と穢魔の数を減らしていく。

荒地となっている坂を苛立ち気に歩くと、坂の登頂から影がユピテル達を覆う。

影の正体は豪獣種が投げつけるように転がした大岩。

大岩は坂を飛び跳ねながら落ちてきて、ユピテル達の進路を塞ぎ、潰さんとばかりにその巨大な体積と重量を利用する。

ユピテルはそれを苛立ちをぶつけんとばかりに雷光を発する。

大岩はユピテルの怒りに直撃し、憤怒に耐えきれず崩壊する。

大岩を投げつけた豪獣種もユピテルの雷光に抗いきれずその姿を消した。

ユピテルの圧倒的なまでの実力に歓声が湧き、ユピテルについていく事を誉れとするかの如く称賛がユピテルに与えられる。

だが、ユピテルの心から苛立ちが消えることはない。

身に纏う鎧が周囲の熱気により蒸していくことでとめどなく汗が流れ、不快感がユピテルに付き纏うからか。

それもある。

交わした協定に従っているとはいえ、彼の役割は一兵士がやるような削減である。そんな華々しさや誉れとはいえない事に役割を与えられた事に不満を抱いているのか。

それもある。

ユピテルを苛立たせる原因は先の二つではなく、別の事だった。

それは、街で見初めた女性が『聖女』であったこと。

『聖女』に付き纏っていた男は『勇者』であり、彼女の兄であるこ

とはこの作戦前に顔を合わせて確認したので間違いない。

彼女に男がいようとユピテルはそれに構わず彼女を奪うつもりであった。どんな相手であろうと、自分以上の存在はいないと自負しているユピテルは必ずや彼女は男を捨て、自分に靡く筈だと確信している。

だが、それが『聖女』以外の場合だ。

『聖女』は『勇者』と共に世界を救わせるのは確定事項であり、ユピテル個人の問題では収まらない。

これが旅の終盤であるならば話は別だが、彼らの旅は始まりを告げたばかりであり、彼らの旅を止めるわけにはいかない。

今現在、『聖女』を手中に収めるには国際問題になり、今後のグルシアの国際的立場は危うくなる。

ならば諦めるか、女神を？

いや、それこそありえない。

彼女こそは至宝の宝石。

ユピテルは彼女に心を奪われ、魅了されてしまった虜囚。

囚われた心は宝石を手にかざることしか考えられないほど心を奪われ、身体はその魔性の輝きに取り憑かれている。

最早魂は飢餓している。一刻も手に入れると喚いている。

だが、一向に彼女を手に入れることができる策が思い浮かばずに苛立ちは募るばかり。

穢魔を八つ当たり気味に殺すことで多少は解消はしているものの、根本的な解決にはならない。

では、どうするか？

諦める？ ありえない。

嗚呼、私の心は貴女を求めているのに、貴女の元へは飛んで行けない。今の私は鳥籠の中に繋がれた鳥であり、まるで愛しき恋人の帰りを待つ乙女のようにです。

ユピテルが心の中で自分を慰撫する為に酔いしれていると、彼の脳裏にある存在が過ぎった。

その存在は妻のユーノーであった。  
悪魔的な策略が彼の頭脳に湯水の如き湧き出、氷のように固まり  
完成する。

「フ、フハハ……フハハハハハハ」

哄笑がユピテルの口から洩れ、存在を示すかのように響き渡る。  
それに驚いたのは彼に付き従うもので、突然の上司の哄笑に驚き  
を隠せなかった。

「ユ、ユピテル様……どうかお静かにお願いします。他の穢魔に感  
づかれてしまいます」

「問題ない。全て私が葬ってくれよう」

ユピテルは女神を手中に収められると思うと、顔のニヤケが止ま  
らなかった。

突き抜ける風は遠くまで流れていき、踏みしめる大地は水平線の  
如く平らであった。

ブルグリア マクセリア間にあるコロニーは平原に築かれ、四  
方に渡って起伏があるところはない。

まるで馬小屋のようでもある穴が無数にある長方形に近い岩石の  
根城は穢魔が突撃しやすくするためのものだった。

山脈に囲まれた中にある平野部は奇策を用いるには向いておらず、  
正攻法による策でしか通用しそうもなかった。

大地を力強く駆け抜け、我が物顔で疾走する駆竜種。

平原であるが故に障害物が無いことから何処までも転がり続ける甲虫種。

疾走を妨げるものがない平原は彼らの味方であり、彼らの力を最大限に発揮していた。

地の利はあちら側にある事を十分に承知している両軍はこの日のために練りに練った策謀を存分に働かせていた。

「第一陣、奴らが突撃してくる、構えろ！」

『ハッ！』

クレイオスの号令に従い、最前列にいる兵士達が身を覆い隠さんばかりの大盾を大地に突き刺し、一步たりとも動かないとばかりに構える。

そこに疾走する駆竜種と甲虫種が密集した盾を構えた軍団を食い破らんとばかりに突撃する。

結果を見るのであればある程度は成功を収めていた。

盾の森を突破できなかったものは後ろにいる踏み台を用意し、盾の高さを超える位置にいる兵士達の手にある長槍で突刺され、その命を落とした。

だが、失敗した者はいる。

例を挙げるのであれば、甲虫種の強力な突進に耐えきることができなかつた者、駆竜種が盾を跳躍し、その浮いている最中に長槍で駆竜種を突き刺す者ができなかった者、その隣にいたが故に影響を受けた者と完全に穢魔の突撃を防げたわけではない。

だが、実に九割以上も防げたこの作戦は確かな実を結んでいた。

作戦の全貌はこうだ。

この日のために開発された伸縮自在の盾の魔導器を最前線の兵士に配置させる。それを第一、第二と続かせ、第三陣は踏み台の上からこれまた伸縮自在の槍の魔導器で突撃が止まった穢魔を盾の列を飛び越えて攻撃する。踏み台にいる者達は槍を持つ者達だけではない。

穢魔の群れには駆竜種、甲虫種だけでなく鳥獣種も存在する。

鳥獣種は大地を駆ける二者とは別に空を駆ける。大地に根付いた盾は大空を飛びまわる鳥獣種の動きを阻害することは叶わない。

だからこそ、鳥獣種を撃ち落とすためにもう一つの部隊、エイドスを放ち、遠距離から攻撃する事を目的とした部隊が配置されている。

彼らの役割は鳥獣種だけでなく、大地を駆ける駆竜種と甲虫種の撃退も兼ね備えており、要となるポジションでもあった。

この四つの配列以降は全てそれらの補充であり、彼らがやられてもすぐに対処できるように待機していた。

このコロニーは素早い穢魔がその構成の多くを占めている。

その対策として考慮されたのが、平原という地形から討伐側が素早さで競い合うのは劣勢になる確率が高い。

ならば、速度を犠牲にして防御力を上げればいいという結論に達し、それを支援するために開発されたのが伸縮自在の槍と盾であった。

槍と盾は《錬金<sup>アルケミー</sup>の理》の応用であり、術者のヒュレーに応じて携帯サイズの魔導器は術者の願った通りの大きさへと変化する。

軍は穢魔一匹たりとも逃さぬように円形に配置されており、包囲陣が敷かれていた。



この作戦にあたり、マクセリア軍は包囲陣を敷くためにグルシア軍に支援を要請しており、グルシア軍はそれを了承した。

その代わりではあるが、穢魔を協力して倒すのであるならば、当然穢魔も協力して倒さなくてはならない。

マクセリア軍はその旨を快く了承しており、討伐軍の関係は良好といえた。

作戦を完遂する為にグルシア軍にも二つの魔導器は支給されており、今現在十全とその役割を果たしていた。

「しかし、遅々として攻略は進まないな」

「別にいいだろう。安全に戦えるんだから」

アープのぼやきを拾ったアタルは、彼の言う通りだと認めながらもこちらの被害が少ない方法は望ましい事なので反対はしなかった。もともと命令である以上、従うしかないのだが……。

アープは空を舞い、攻撃しようとして急降下する鳥獣種を水の矢で次々と撃墜していく。

アタルは盾を飛び越える駆竜種を、動きが止まった甲虫種を次々と伸縮自在の槍で貫く。

これも地獄の修行の成果か、以前よりもオーラとエイドスの練度は増していた。

穢魔は横一列に並び、次から次へと突進を繰り返す。

命の危険を顧みず、愚直なまでに突き進んでくる穢魔は確かに脅威的だった。

野に放たれている数匹から十数匹程度であるならば問題は無いだろうが、それが数百、数千と単位が増していくのであれば別だった。この戦法を取らなければ、戦局は乱戦へと移行していただろう。今よりも遥かに多くの被害が出ることになったに違いない。

ただ、同時に恐怖でもあった。

ただじつと動かずに穢魔を迎え撃つのは精神的消耗が大きい。エイドスでその数と速度は多少は殺してはいるものの、それでも次から次へと襲いかかってくる穢魔の突撃には、最前線で盾を構えている兵士達にとって負担が大きかった。

合間を縫って交代はしているものの、その隙間を縫うように穢魔が突撃してくるので、兵士達の消耗度合いは予定よりも大きく、一糸乱れぬ陣形は徐々にだが、綻びが生じていた。

「宋飛さん、かなりイラついてるな」

遠距離攻撃を持たない宋飛は必然として盾を構えていた。

他の者と比べ宋飛は悠然としており、他の所は度々交代しているにもかかわらず、宋飛は一度も交代せず、尚且つ一度も穢魔を通さなかった。

だが、彼の防御がいくら優れていると言っても彼の真価が発揮するのは攻撃であり、彼の性分には今の戦法は合わなかった。

彼の横にいる者が甲虫種の勢いに負け、突破されようとするが、宋飛の繰り出した蹴りは甲虫種の体躯を真つ二つにし、上半身は遙か彼方へと吹き飛んでいった。

苛立ちをぶつけるかのような蹴撃は強力無二。

後ろに控えていた者は宋飛のあまりの強烈な一撃に呆けたが、周りに一喝され我を取り戻すとすぐさま交代し、負傷した者を他の人物が運んでいった。

「あの人はこんなちまちました戦法よりも、正面突破で派手な方を選ぶだろうからな。仕方ないだろ」

「確かに」

宋飛に扱かれた二人は苦笑し合う。その方がらしいと思ったからだ。

「それよりも少しまずくなってきたくないか？」

「……ああ、そうだな」

統率されていた陣形は乱れ始め、いつ崩壊してもおかしくはないほどに隙間が生じ始めていた。

「……ん、何だ？」

「どうした？」

「いや、あれ……」

アーブが視線を向けた先には宋飛がいた。

彼は後ろに控えていた者に後を任せると、すぐさまクレイオスの元へと向かい、何かを具申ししているようだった。

彼らが何を話しているかは距離があることと、今も尚穢魔が突撃を繰り返してくることで、そちらの方ばかりに気を向ける事は叶わないからだ。

話しが終わったのか、宋飛は一礼すると迷わずアタル達の方へと向かってくる。

「小僧ども、行くぞ」

「行くつて、何処にですか？」

アタルは省略されすぎた言葉に問わずにはいられなかった。嫌な予感がひしひしと伝わってくるからだ。

「無論 戦場にだ」

余程嬉しいのか、無愛想だった宋飛の顔は今や唇が軽く上がっていた。

「ここはもう戦場だと思いますが……」

「温すぎてつまらん。この程度の戦いを戦場とは呼びたくはない。今の戦況をよく見ろ」

アタル達が戦場を見渡すと、穢魔一匹通れないほど一糸乱れぬ陣形を築いていたにもかかわらず、今や所々に隙間が生じている。

「このままでは総崩れになるのも時間の問題だ。よって、俺とお前ら、そして血の気の余っている一部の者達はこれから盾の向こうへと乗り出し、再び陣形が整うまで囷となって時間を稼ぐことになった」

防戦一方で苛立ちが募っていたのか、それを発散させる機会を得た宋飛は実に嬉しそうだった。

「ちなみにお前達には拒否権はない」

嫌な予感はこれだったかとアタル達は溜息をついた。

「無論、陣形が整う前に相手を殲滅しても構わんということだでは、いくぞ！」

アゾートを形成した宋飛は盾の前へと跳躍し、瞬く間に穢魔を殲滅していく。

アタル達はそれに続く形で、時間を稼ぐべく囷になった。

「ほう、これは素晴らしい益荒男だ……」

囷となって瞬く間に穢魔を殲滅していく兵士達を見て、その勇猛さに感心する者がいた。

マクセリア王アレクセリア三世は太陽のように光り輝く髪を靡かせ、赤と碧の異なる瞳はその勇猛の中心人物である宋飛を見据えていた。

中肉中背にもかかわらず、泰然としている様は彼の背中を見ている兵士達に平静を齎す。

若くして王の座に付いた彼ではあるが、彼に不平不満を漏らす者は少ない。

誰よりも勇壮に駆け、誰よりも民を、兵を愛する王は現マクセリアが築かれるまでに多くあった穢魔の侵攻に揺れる小国を呑みこみ、大国へと発展させた。

それは穢魔の侵攻があつた十数年前の出来事であり、穢魔の侵攻を防ぎながらも、数々の国を侵略、そして安定させた手腕は王としての器量が窺えた。

だが、この王には大きな欠点があつた。

それは一つ処に留まる事を好まない。統治者ではなく、先駆者であり、冒険者であるということ。

侵略されたにもかかわらず、こうまで早く安定したのは穢魔の脅威もあるが、何よりアレクセリア三世は統治するのはその土地の統治者に任せ、褒賞などは全て部下に与えているからだ。

彼自身が得られたものはほとんどないといってよかった。

彼が単に侵略したのは穢魔の侵攻に揺れる小国を見てられず、それならば彼らが安心できるように自身の配下としようとしたこと。

そして、彼自身が世界を味わい尽くしたいからだ。

この王の厄介な点はまさしくそれで、それが自身だけに留まらず、彼に従う者達全てに彼と同じように世界を楽しんでもらいたいと思っ  
ていることだ。

彼の人類、皆兄弟という思想は征服という形になって表れ、今日まで過ごしてきた。

「陛下、先を越されましたな」

「ああ、私の先に行くとは彼らもやるな……」

元々、この作戦においてブルグリア軍に起こった陣形の乱れは考慮されており、乱れが大きくなれば今の宋飛のように困になることが採用されていた。

当初の目論見よりも早くブルグリア軍が崩れた事によって、アレクセリア三世は救援するべく囿に買って出ようとしようとしたのだが、宋飛達に先を越されたのだった。

「こちらも負けてはおれんな、私も加勢しよう」

手に伸縮自在の槍を持ち、アレクセリア三世は意気揚々と囿を買

って出ようとする。

「陛下、お願いですから御自重ください！ 陛下が囿になる必要などないのです！」

側近の一人であるステイルは危険な役を買って出る王を諫める。

「馬鹿者！！」

彼の体軀からは想像もつかないほどの爆音が彼の口から発せられる。

「危険であるからこそ、上に立つ者が率先して行っただ！ 上に立つ者は先駆者であるが故に、恐れてはならん。そのような臆病者には誰もついてこぬ。上に立つ者が先を歩くからこそ、配下の者は安心してついてくるのだ！！」

ステイルはその事を十分に承知しているが、それとこれとは話が別なのだ。

指揮者は最後方で指揮を執らなくてはならない。前線で指揮を執っては不都合が生じてしまう。

胃痛で込み上げてくるものがあるが、それを無視してステイルは最善を果たす。

「陛下の心遣いは私達の心に染み渡りました。ですから、その陛下の心遣いに報いるためにどうか我らに囿はお任せください」

目配せをして、囿を買って出る者達へと合図する。

それを受けた囿部隊の隊長は王の前に膝まづき、進言する。

「陛下、その役割は私達が果たすべく役目と作戦前にお決めになられた筈です。どうか、我らの役割を奪わないで頂けないでしょうか？」

アレクセリア三世は囀部隊の誰もが臆していないのを確かめると、発破をかける。

「あい、わかった。ならば、見事その役割を果たして見せよ。私は貴様らの勇姿を後ろから眺めさせてもらう」

「必ずや！ いざー！」

勇壮さを顔に刻むと、囀部隊は盾の前へと勇み、宋飛達を支援すべく、役割を果たしながら彼らの元へと向かっていった。

陣形を立て直した両軍は大した被害を生まず、攻略一日目を終えた。

大地の上に並び立つ緑の森は、天の恵みを受けてより繁茂する力を増している。

僅かに泥濘む大地はその証であり、人の行く手を妨げるものであった。

泥濘む地面に足跡を刻みながら進むエリオス達の足取りは遅い。泥による進行の遅れもそうだが、何よりエリオス達の隙をつくように襲撃してくる穢魔を警戒しているのが何より大きい。

僅かに滴る汗は歩行による疲れよりも、いつ襲撃してくるかわか



らない穢魔に対して神経を尖らせていることが原因だ。

「休憩にしよう」

エリオスは同行しているレイア達の消耗が強くなってきているのを感じ取ると、休憩を提案する。

「大丈夫です。まだいけます」

僅かに疲れが顔に出ているが、気丈にもレイアはエリオスの提案を断る。

それは、他の兵士達も同様だった。

「無理をしてもこちらが参るだけだ。休める時に休んだ方がいい」

頑なな同行者達を休ませるために、エリオスは率先して腰を下ろす。

腰を下ろしたエリオスは動かないと判断したのか、それに続く形でレイア達も僅かに警戒を緩め、腰を下ろす。

「やはり、神経が参りますね……」

弱音ともいえる兵士の言葉にエリオスは叱咤せず、同意だと頷きそうになった首を横に振る。

「ああ。こつも視界が遮られると、いつもより気を張らなければならぬ。せめて、平原にあってくれればいいもの……」

エリオスの愚痴に兵士達も首を横に振る。レイアとマーテルだけが思わず頷いてしまったが、すぐに頭を振る。

肯定と否定の動作はブルグリア軍とエリオス達では異なり、数の多さからレイア達の方が合わせることとなったのだが、やはり慣れた習慣ゆえに戸惑いは隠せなかった。

ブルグリア　ルーミア間にあるコロニーは鬱蒼とした森の中にあり、その規模は不明となっている。

通常、コロニーは地上部に建造されるのだが、元々その地にあった洞窟なども利用されることもある。

今回の事例はまさにそれで、スカーリーソアラと現地の人々に慕われてきた氷の洞窟は今や穢魔の巣窟となっており、彼らを収納する為に改築されている。

鬱蒼と茂る森の中には数多くの穢魔が守護しており、容易と洞窟まで辿りつかせない。

ならば、森を焼き尽くせばよいのではないかと苛烈な案が提出されたが、その案は成立されることはなかった。

理由としては、観光名所として名高かったスカーリーソアラを失う可能性を持つ提案を呑むわけにはいかないと、現地に近い人々からの非難があったこと、何よりも穢魔が出てくるのはその洞窟の入り口だけではなく、別の場所から掘り進んだのか、新たな穴が数多く発見された事によって焼き払ったところで大した効果が得られないのではないという懸念があがったのだ。

よって、案として採用されたのが、森の穢魔を排除する班、穢魔が出現する穴を搜索する班と分かれ、その穴から少数精鋭を送り出し、厭魔を討伐する案が採用された。

エリオス達が森を彷徨っているのは穢魔を排除するためである。

少なからずのブルグリア軍が穢魔の討伐と穴の搜索に加担しているが、当初の役割はあまり変わらず、穢魔の殲滅がルーミア軍に指揮権があり、厭魔の討伐がブルグリア軍に指揮権が与えられる。

厭魔の討伐にはルーミア軍も参加することになっているが、同時に精鋭を送り込むだけで、ほとんどの兵士は送り込む精鋭達が背後を気にせず戦えるように穢魔の殲滅に力を入れることになっている。

少数精鋭だけで戦うのは以前の穢魔の侵攻で数を頼みに厭魔の討伐に乗り出した結果、厭魔の能力により同時討ちが多数発生してしまい、多大な被害を被ってしまったからだ。

その教訓を活かし、此度の攻略では同時討ちが発生しにくい少数精鋭を送り込むことが決定したのだった。

『敵が来ます。気をつけてください』

通信の魔導器からウィルからの警告が発せられる。

風を使って広大な探索ができるウィルは、本陣にて敵の警告や穴の探索を主な任務として哨戒作業にあたった。

ウィルの探索は風の流れを読んでの探索になるのだが、あまりにも広大な範囲を走査するためにどうしても精度は低くなっている。

よって、ウィルの警告を絶対とせず、それぞれが自身の周囲を警戒する事を事前に通達されていた。

エリオス達は武器を構え、いつでも動けるように体勢を整える。敵の姿はほどなく見えた。

屍骨種が泥濘に足を囚われながら、遅々として足を進めてきた。そんな鈍重な屍骨種をよそに鳥獣は軽やかに舞い、エリオスに襲

いかかる。

樹々が乱立する森の中、そして泥濘んでいる地面という悪環境の中では、必然的にエリオス達の取れる選択肢は限られてくる。

火系エイドスと長柄を振るといふ動作を封じられたエリオスだが、

生憎とその程度の苦難はこれまでに散々体験してきた。

剣を錬成し、衝撃を付加させた光の矢を樹々の間を華麗に舞う鳥獣種を難なく撃ち落とす。

他の兵士達もそれは同様で、多少の手間取りはあったものの鳥獣種に遅れは取らない。

レイアも彼らに遅れる形で撃墜するも怪我一つない。

屍骨種が遅れてエリオス達に襲いかかるが、野に生息している穢魔共と変わらない数はエリオス達の不利には働かない。

確実に屍骨種を葬る兵士達の頭上に影が忍び寄る。

その影はその体を枝に擬態しながら、音もなく這いずり、樹々を渡ってきた。

兵士達が屍骨種に気をつかっているのを確認すると、鉄をも溶かす酸を兵士達へと浴びせる。

だが、その酸は兵士達に届くことはなく、自身に浴びせられることになった。

耐性はあるものの、それは体内に限った話であり、体表はその限りではない。

浴びせられた場所が熱を持つ。

蛇翼種は奇声をあげながらのたうち回り、樹上から落ちる。

レイアは落ちた蛇翼種にすかさず止めを刺す。

感謝と喝采を込めてレイアはマーテルに笑いかけると、すぐさま次の穢魔に対して警戒する。

マーテルがした事は反射の盾を彼らの頭上に張っただけだ。

落下のベクトルは向上へと入れ替わり、酸を浴びせた蛇翼種へと返っていった。

無論、熟練度によっては無効化されたり、一部しか反せなかったりはするものの、防衛の手段を一途に学んでいるマーテルにとって、反射のエイドスは相当のものだった。

戦闘が終わり、警戒を残したまま戦闘態勢を解く。

「では、先に進むぞ」

一同は顔を横に振り、森の深き場所へと足を進めていった。

ユピテルが攻略に取り組んでいる間、留守を預かる事になっているユーノーは各地に張り巡らした草から報告された報告書に目を通す。

一通り目を通し、最後に夫の近況が記載された報告書を見て、そこに記された夫の愚行にユーノーは腸が煮えくりかえった。

あまりの憎たらしさに報告書は握りつぶされ、ユーノーの心境を表しているかのように報告書は燃え、それに耐えきることができず灰になった。

夫が性懲りもなく、しかもよりによって『聖女』に愚行を繰り返しているらしく、恥を晒し続ける夫にユーノーの顔は憤怒に染まる。添付されている写真には自分よりもうら若く、自分よりも遥かに端麗な顔が映し出されている。

その写真を見て、彼女の中の何かが音を立ててブチ切れるのを自覚した。

溜めに溜めた憤怒は最早抑えきることはできず、火山の如く噴火して理性を吹き飛ばす。

自分よりも遥かに美しく、夫の心を奪う存在を生かしておくことはできなかつた。

「私よ」

連結水晶である場所へと繋ぎ、忌々しい存在を抹消すべくユーノー

ーは動いた。

攻略は順調そのもので麓に森がある山岳のようなコロニーは今や中腹まで攻略が進んでおり、コロニーから出現する穢魔の数も少なくなってきた。

厭魔が出現してもおかしくはない範囲に踏み込んではいるが、未だその姿を現さず沈黙を保っている。

中腹を見通せる位置に一人佇んでいるシヴァは余人を寄せ付けない。

迫りくる血潮の 때가シヴァの殺意を膨れ上がらせ、臨界の時を待っている。

今朝方、フラウ達とテオリノンは被害が及ばぬ所に避難した。

ユピテルに付き纏われることから解放されたフラウは安堵を浮かべたが、シヴァの身を案じることも忘れなかった。

厭魔が出現しないであろう位置で穢魔を殲滅し終えた後、シヴァ達に交代するわけではあるが、それは撤退と継戦の見極めが難しく、グルシア軍は中腹に到達した時から既に半日が経過しているが、一向に進軍しない。

おそらくはその位置で継戦するのであると、話声が風に乗ってシヴァの耳に届く。

交代するのはおそらくは明日だろうとシヴァは推測を立てる。

厭魔との対戦時、シヴァを矢面に出し、他の者はシヴァのサポートをすることは作戦会議で伝えられたが、シヴァとしては単独で戦う方が好ましかった。

元より単独で戦い続ける事を目的として造られた故に、連携して戦うという意識など微塵もなく、邪魔でしかない。

当初は連携して戦う事を提案された。ブルグリア軍としてはそれは当然の選択であったが、シヴァはそれを拒否した。

単独で戦う事をシヴァは提案したのだが、それは受け入れられず現在の作戦内容となったのだ。

下手な同情や無駄な道義心で介入されるのはシヴァにとっては有難迷惑でしかないが、作戦として決まった以上は従うよりは他になく、今の作戦内容こそが両者の妥協点であった。

「ひ、とり、じめゝなのだ！」

サテイがシヴァの頭に踏ん返り返って出現した。

鼻歌交じりの声は歓喜に満ちており、暫くの間シヴァを独り占めできる事を喜んでいた。

「……………そうか」

「この愛に溢れる時間を無駄にするわけにはいかぬ。我の新しい姿を披露してやろう！」

常と同じく平常運転なシヴァに対し、サテイのテンションはいっになく高く、いつもよりも激しく宙を舞う。

「へ〜んしん！」

サテイの身体が光に包まれると、サテイはその光に溶けだし、別の姿へと変貌する。

光が治まった時、そこに表れたのは一頭の獅子の子であった。

獅子になったサテイは愛情を示すためか、シヴァの頬を一舐めす

るとシヴァの手に擦り寄る。

撫でて欲しい事が分かると、シヴァは組んでいる足の上に居座っているサティの頭や腹を優しく撫でる。

気持ちよさそうに目を細めるサティの姿は人間ではなく、獣そのものだった。

「影響されたのか？」

「うむ。我は他のとは違い、元が人だから人型を取っている。それ故か、他の姿へと変貌することができる。おそらく核が形をもったのではなく、核にヒュレーを纏わせているからこそできる芸当であろうよ」

サティが口にする核とは守護聖霊の元となっているもの、人間で例えるならば脳であり、心臓だ。

守護聖霊は術者の守護を目的としたものだが、術者が死なない限り不滅というわけではない。

一定ラインを越えた攻撃に晒され、核を破壊されたり、保有しているヒュレーを自身を形成している限界以上までに消費すれば実体を保てなくなり、その守護聖霊は二度と意志を持つことはない。

アゾートの制御という機能を果たすことはできるものの、それ以上の機能を持つことはできないのだ。

「……………それよりも安定はしているのか？」

「うむ。この姿こそが何よりの証拠だ。…………シヴァよ、解放してよいぞ」

「……………」



シヴァは何も言わず、サティの無防備に晒されている顎や腹を撫でる。

サティの尻尾が嬉しそうに揺れた。

夕方より降り出した雨は勢いを増し続け、一向に治まる様子は見られない。

フラウ達に用意された宿舎の部屋の窓は強風に窓を揺らし続け、叩きつけられる雫を垂らし続けていた。

雷鳴が轟き続ける空は断末魔の如き悲鳴であった。それは無念の内に死んでいった兵士達の嘆きか、それとも暴虐の限りを尽くした穢魔の断末魔か。

これまでの戦局において、穢魔の討伐数は討伐軍の死者を上回ることはなく、圧勝といってもいいほどの戦局図であった。

だが、同時にこれまでの勝利は嵐の前兆であることは攻略に関わる誰もが承知していた。

逆転なき戦局図を塗り替える存在、厭魔を討伐できるか否かこそが攻略の要となっているのだ。

その共通認識は誰もが理解しており、これまでが順調だからといって、これからもそうだとは限らない事を示唆していた。

「この雨が止むまでは攻略は中止ですね」

未だ降り止まぬ雨を、窓際に立ちながら外を眺めるテオリノンは、咳くように言葉を漏らした。

就寝服を纏った姿は彼女が就寝前であることを示し、そして部屋にいる者全てがテオリノンと同じであった。

「戦えないわけではないですが、雨天時においてはあちらが有利といえます。無理をして戦い続ける必要はないでしょう」

セレナの言葉にフラウとテオリノンは同意する。

「ええ。ですが、幸いにしてほとんどの穢魔は殲滅したとのこと。明日以降は、雨が止み次第厭魔の討伐へと移行すると報告を受けました」

「そうですね……」

フラウは何かに耐えるように静かに目を伏せる。

「」

テオリノンが何を思ったのか、口を開きかけたが言葉は口から出ずに、中へと消えていった。

「……寝ましようか」

「……そうですね」

テオリノンの提案にフラウは伏せていた目を開いて首肯する。

「セレナ殿？ 如何なされましたか？」

「……いえ、何も」

何かを探るように外を見るセレナをテオリノンは不審に思ったが、

セレナは頭を振ると明かりを消す。

闇が訪れた。

闇に蠢く輩が動き出すと、セレナとフラウは悟った。

粘りつくような不快な悪意は風雨に晒されても、けして流されることなく存在し続けた。闇に隠れている悪意は目標へと静かに忍び寄った。

「貴公らは真に良き益荒男であった。どうだ、私と一緒に世界を味わい尽くさないか？」

日中の攻略が終わり、明日の英気と今日の労いのために開かれた宴会は酣たけなわとなり、男女の兵士どちらも隔たりなく楽しむ様は宴に参加している者達に陽気を齎している。

死者がなかつたわけではけしてない。少なからずの兵士が亡くなっており、その友人達は今騒いでいる兵士達の中にある筈ではあるが、悲しみに耽たづなっている者はいない。

誰もが陽気に騒いでいるが、それは悲しみを忘れるための空騒ぎではなく、死んでしまった者達の方まで楽しもうという死者への甲いであつた。

『今日まで共に過ごしてきた友のために涙を流すのは結構。だが、忘れるな。友が悲しむよりは、友が笑っている方が死者への何より

の手向けとなる事を。　　少なくとも私はそうだ。

故に、騒ごう　　友への手向けとして。

故に、笑おう　　友が未練なく天へ昇れるように。

そして、全てが終わわりし時、友の家族と共に泣こう　　友ともう

笑いあえない事に。

そして、また騒ぎ、笑おう　　共に笑いあえなくなった友の分まで」

日中の攻略が終わった後、アレクセリア三世は今日失ってしまった兵士のために宴会を開こうと提案し、先の演説を行ったのだ。

この演説を聞き、宴会を開かないと拒否した兵士はおらず、こうして兵士達は馬鹿騒ぎを行っているのだ。

冒頭の言葉はアレクセリア三世がアタル達を労うために掛けた言葉であった。

「ありがとうございます。しかしながら、陛下の言葉に沿うことはできません。私達にもやるべきことがあるので……」

アタルはマクセリア王の言葉をやんわりと拒絶する。

先の言葉は国への勧誘であり、今は何処かの国に所属することはできないアタルは断るといふ選択肢しかなかった。

「そうか……気が向いたらいつでも我が国へと来い。歓迎するぞ」

アタルの否定の言葉にアレクセリア三世は気を悪くせず、まるで童子のような笑みを浮かべる。

アタルは面倒な事が起こらなくて内心ほっとしたが、次の言葉で凍りついた。

「此度会ったのも何かの縁だ。そこで、だ……友好を深めるために

やらないか？」

傷だらけの上半身を剥きだしにしている王が、やや鼻息を荒くしている様にアタルは己が貞操の危機を悟った。

「ぼ、ぼぼぼぼ僕は、そっちの気はないのでお断りします!!」

「よいではないか……なに、初めてならば優しくしてやるぞ」

半裸の王に肩を組まれ、アタルは冷や汗が止まらなかった。

諸々と流れる汗を拭うことすら忘れて、アタルは必死に助けを求め。

だが、アタルが視線を向けると誰もが目を逸らし、誤魔化すように騒ぎ始める。

親友のアーブにさえ見捨てられたアタルは絶望に包まれ、僕の貞操はここまでなのかと諦めかけたその時、救いの手を差し伸べられた。

「なにしてやがりますか—————!!」

側近の一人であるステイルは必死の形相を浮かべ、王の奇行を止めようとアタルとアレクセリア三世を引き剥がす。

「何をする、無粋な奴め」

「無粋も何もありませんよ!! 貴方様は何をするおつもりですか!?!」

「セックス」

「もう少しオブラードに包めー！ー！ー！」

スティールの絶叫は宴会場に響き渡るが、誰もスティールを諫めようとはせずに、誰もが王とスティールの騒ぎを酒のつまみとしていた。

マクセリアの兵士達にとっては、アレクセリア三世が男色の気があることは周知の事実であるので、騒ぐ事ではなかった。

(余談ではあるが、アレクセリア三世は両刀使いである)

「なんだ、嫉妬か？ ならば、私が相手をしてやろう」

「違っわ、馬鹿王！！！」

王と臣下の遣り取りではないが、この王は公務の時とはともかく、こういった宴会の時のみならず、平時から友人のように接すると、常日頃から歩み寄っているのでマクセリア側はスティールの無礼を気にすることはなかった。

「語り合いと滾りを鎮めるにはセックスこそが最上なのだ。一石二鳥だろう？」

「余所に迷惑をかけない！」

破天荒すぎる王にスティールの胃は荒れ放題だった。

拗ねた表情のアレクセリア三世は喚き立てる側近を無視し、別の場所を見遣る。

彼が見遣る場所には、宋飛が次々とマクセリア軍の精鋭達と拳で語り合っていた。

これは参加せねばなるまいと、野獣の笑みを張りつかせ、アレクセリア三世は足を進める。

「……何処へ行くおつもりですか？」

「あそこで拳と拳で語り合い、裸となって語り合ってくる」

実にいい笑顔をする王を殴りたくなつたスティールであつた。

「……よかつたな」

貞操の花が散るのを免れたアタルは腰を抜かしており、放心状態だつた。慰めるように肩に手を置くアーブに反応する様子も見せない。

「……………うん」

やっとのことで漏れた言葉と共に涙が流れた。

それは昨日のことであるが、それは鮮明すぎており、強烈なまでに記憶に残つた出来事であつた。

ただ、アタルはそれを走馬灯のように思えた。

上位の存在である筈のブケパロスに跨り、騎乗している姿はさな

がら魔軍の将であった。

穢魔を引き連れ、配下のように従えている姿はまさしく将であり、曇天で夕焼けが見えないにもかかわらず、血潮のような夕日を背にしている錯覚を齎すほど鮮血の予感を感じさせる死神だった。

優美であり、無骨とは程遠い洗練された華やかな着物のような朱色の鎧を纏った女傑らしき存在。

僅かに膨らむ胸元から女性だとは判断できるが、顔は般若面に覆われて素性を探らせない。

ただ一つ判明していることは敵だという事。

厭魔に跨っている存在は強烈な殺気を発し、全身で殺すと告げていた。

発せられる狂気に吞まれ、放たれる殺意の波動に切り刻まれているアタルは震えが止まらなかった。

アタルは本能で理解した。

アレに刃向えば命はないと。

自分などアレに対抗すらできない無力な存在だと。

雨がぼつり、ぼつりと降り始める。

やがて豪雨へと変わり始めるが、それに構っている余裕すら失われていた。

開幕を告げるように般若は刀を討伐軍へと向けた。

誰もが眠りに就いた深夜、男は尿意を催したため、一人天幕を抜け出す。

用意されている簡易トイレは男がいた天幕からやや遠くにあった



ため、男は近くにある茂みへと入り尿意を解消する。

一人逸れている男を襲いかかるように忍び寄る霧。

男は何か不審なものを感じ取り、事の最中に後ろを振り返るが何も見えない。

気のせいだったかと再び事を続けるが、男は感じてしまった寒気を振り切るようにさっさと終わらせようとする。

だが、男は終わらせることはできなかった。

何かが男を呑みこみ、襲いかかる。

男は悲鳴をあげることができず、まるで水気が失われていくように枯れていく。

枯れ果てた男は砂となって虚空へと消えたが、別の何かがそこに立っていた。

それは枯れ果てる前の男の姿だった。

男は暫し呆然と立ち尽くした後、自身の天幕へと戻っていった。

長きに渡り眠っていた存在は、自身の周りに巣食っていた同胞の存在がほとんど消え失せてしまっている事に気付いた。

そして、周囲には別の何かが蠢いていることも。

どうやら誅伐の時が来たらしい。

長きに渡り眠っていた蛇は覚醒した。

月も見えぬ雨天の空は雷鳴が轟くが、その雫が流れている大地も負けてはいなかった。

何かが覚醒しているかのように大地が鳴動する。

鳴動する大地は休息を取っていた生命を否応がなしに起こし、蛇の覚醒の瞬間を目撃させる。

地響きが極点に達したのだろう。ほんの僅かな静寂の後、覚醒の刻を迎えた。

悠然と聳え立っていた巖の山岳は荒れ狂う大地の脈動に負け、その姿を消した。

代わりに姿を現したのは、内側で眠っていた存在が発した熱で岩盤が高熱を帯び、周囲一帯に飛び散る擬似的な噴火という自然現象。

そして、それを起こした張本人　厭魔テュポン。

覚醒の刻を迎えた蛇は復活を告げる咆哮を地平線の彼方まで届かせた。

## 第五章 嵐の惨禍 ～雨中の悪意～

厭魔の覚醒を告げる咆哮と大地の鳴動は然程遠く離れていないフラウ達にも届く。

「一体、何が起こったのでしょうか？」

微細な変化であろうともすぐに目を覚ますフラウ達がこれほど大きな変化を逃す筈はなく、一切の隙を窺わせないほどの戦闘態勢をとる。

「調べてきます」

テオリノン達はすぐさま寝間着を脱ぎ、何処にでも出掛けられる服装に着替えると、専用の連結水晶がある場所へと赴く。

その場所へと向かう途中、宿泊している施設の者達がざわめきを発する声がフラウ達の耳にもしつかりと届く。

慌てふためく声が聞こえるのは施設内だけだが、窓から見える街中の家屋は突然の変異に明かりを灯していくことから彼らの焦燥が目に取るように分かる。

言い様のない不安がフラウの胸中を焦がすが、その焦燥が何から齎されるかは彼女は知っていた。

戦いの刻が来たのだ。

突然の変異は厭魔の出現を意味している。それ以外に理由のつけようがなかった。

フラウ達の傍には今誰もいない。テオリノンは先程の異変の原因を探ろうと専用の部屋へと急いで向かい、警備上の理由からフラウ達は隔離されていたので人の気配はしない。警備の者は全てテオリノンに付いていったのだ。

だから、ざわめきが聞こえてくるので静寂とはほど遠いが、それでもフラウ達の今いる場所は喧騒とは無縁といっても差支えはない。だが、その静謐を破るがごとく突如として遠くから爆発音と、それに続くように近くの窓ガラスが割れて人が侵入した。

夜という光の休息が齎す気温の低下は、ここ最近の天気不安定さにより、野外により一層の低下を招いていた。

それに加え、降雨による冷気も重なることで容赦なく体温を奪っていき、外套に包まれているとはいえ身震いを防げなかった。

男は吐く息が外界に漏れないように両手で口を覆い、生温かい息を吐き続ける。

外套から零れる男の素顔は仮面に覆われていて見えないが、首に一際目立つ首輪が男の太い首に飼い犬のように巻かれていた。

男は体温が奪われないように、そしてすぐにも動けるように筋肉質の巨大な体躯を膝を抱えるようにして丸まっている。

男からはそこはかとなく異臭が漏れるが、嗅ぎ慣れている男は気にも留めない。

ただ、男はゆっくりと作戦の内容と建物の見取り図、そして逃走経路を思い浮かべる。

男の素性を言うならば、男は犯罪者の類であった。

通常、犯罪者には脱走などの余計な面倒を起こさないために、刑期を終えるまでは少しばかり特殊な隷属の魔導器を装着することを義務付けられている。

その点で言うなれば、男の首に一際目立っている首輪が男が逮捕された犯罪者であることを雄弁に語っている。

では、何故男は今現在この場所にいるのか？

刑期を終えたのであろうか　いや、違う。それならば首輪をしている筈はなかった。

答えは至極簡単だった。男は刑期を減らすために取引を持ち掛けられたのだ。

成功すれば男は収容所からさほど間もなく出ることが可能になる。しかし、失敗すれば素性を探らせないために首輪の爆弾が作動し、男は命を落とすことになる。

男は生死五十パーセントの確率の取引に応じた。

応じた理由は、ただ単に言われた事以外をしてはいけない、奴隷のような生活に嫌気がさしたからだ。

この取引を受けた者は男の他にも数人いる。

彼らが受け持った任務の内容はいうなれば犯罪。それも誘拐であった。

指定された場所へ誘拐の対象となる人物を連れていく事、それが彼らが人形の生活から抜け出すための条件だった。

男は懐から彼が装着している首輪とは違う、手首に装着する事を前提とした隷属の魔導器を確認するように取り出す。

この魔導器は装着している者の拘束を目的としたもので、不用意に外そうとするか、これとセットになっている支配用の魔導器を装着している者に従わないと耐えがたい苦痛を発する仕様になっている。

男の手首には当然それが埋められている。

男の役割は陽動としての爆発が起こった後に即座に行動し、対象を捕縛すること。男の他にも何人かはこの役割に宛てられているのだが、目標を数人がかりで捕縛し、対象となる二人を捕縛した後は逃走のサポートをすることになっている。

余談ではあるが、この世界において火薬を用いた武具の開発や戦闘での使用は禁じられている。

工事用などの発破に用いるのであれば例外的に使用も認められているのだが、デュナミスという代替手段がある以上用いられることは少ない。

そして、これもまた例外的処置でもあるのだが、片手に収まる程度の銃は開発を認められてもいるのだが、金属の弾丸はこれまたデュナミスで代替可能であり、尚且つ普通のサイズの弾丸ではデュナミスの防衛手段を突破できないことから使用者はあまりいない。

人々がそのような武器を嫌悪していることもあり、国の上層部もその使用を認めていないこともある。

目標が隔離された場所にいることは事前の調査で判明しており、今現在も所在位置が判明している。

男は静かに、周囲に自身の存在が漏れないようにゆっくりと四肢に力を込めていく。

ようやく巡ってきたチャンス逃すまいと、慎重にかつ大胆に事は進められている。

仲間が今やもう過去の遺物と化した魔導器ではない爆薬を仕掛けた装置を作動させようと合図を送っている。

集中している男の精神に男の心臓が五月蠅い程の高鳴りを響かせる。生死を賭けた大博打に男の掌は汗が溢れだしていく。

まるで時が止まったような感覚に男は陥るが、事の性急を催促する肉体は時の変移を告げている。

闇夜に響く喧騒よりも遥かに轟く爆発音が男の耳を刺激する。爆発音は雨音に掻き消されることなく男に開始の合図を届かせたのだ。

それを聞きつけ、男は溜めに溜めた四肢の力を解放し、爆ぜた力は勢いを衰えさせることなく窓ガラスを突き破った。

突如として起こった崩壊を告げる爆発音はテオリノンの耳にも充分に轟かせていた。建物が崩壊していく様は音でしか判別できないが、それでもその様を想像することは容易ではあった。

「何があったのかを探りなさい！」

テオリノンが命令を発し、それを即座に聞きつけ駆けるように現場へと向かう兵士達。何人かはテオリノンの護衛のために居残る事になったが、誰もが何が起こったのかを知りたがっていた。

（　　こんな時に！）

苛立ちをぶつけるように親指の爪を噛むテオリノン。彼女はいま非常にイラついていた。

前線で何が起こったのか、連絡が取れないために把握できないのだ。

それに加え、今回の凶事である。

自然現象でなく、人為的なものだということは彼女は何となく察していた。

TPOを選べと、喚き散らしたくはあったが、ぶつける対象がない事と上に立つ者としての矜持からか自身の爪を強く噛むことで苛立ちを治めていた。

地震による揺れと身を震わせるような咆哮だけでなく、先の爆発が加わったのだ。何が起こったのか、情報を知ろうと駆けつけてきた者達は自身の不安を紛らわせようと無遠慮に周囲に喚き立てていく。

職員達は彼らを鎮まらせようと懸命の努力を重ねるが、肝心の情報が彼らにも伝わってこないの、焼け石にも水だった。

人々の喧噪が極点に達しそうなその時、テオリノンの耳に二つの凶報が入った。

「お知らせします！！ 討伐軍が厭魔の出現により崩壊いたしました！！」

青褪めた職員が絶望に包まれているような表情で唇を震わせながら凶報を告げた。

「御報告します！！ 聖女様達が行方不明です！！」

爆発があつた所を探りに行かせた兵士の一人が血の気が引いたような顔色で、焦りを表情に出しながら凶報を齎した。

テオリノンはあまりの凶報に突然視界が闇に覆われたかのように、くらりと身体をよろめかせた。



## 第五章 嵐の惨禍 〔深緑に混じる真紅〕

自然が悠久の時をかけて作り出した氷の洞窟は、人の手には作り出せぬ幻想を現世に現出させ、言葉には尽くせぬほどの感動を齎す。氷の芸術が生み出されているのは天上から垂れる氷柱だけではない。どれ程の変化を重ねたのだろうか、氷柱は鋭利であるのが通常なのに対し、地上に樹のように生えている氷の柱は丸みを帯びている。

氷柱の表面もまるで陶器のように滑らかであり、永久に溶けないのではないかと思わせるほどである。

そんな氷の樹々を抜けるように進む兵士達の足取りは遅い。穢魔の侵出口でもあったためか、多少は踏み固められてはいるものの、それでもなお氷の地面は滑りやすく、足取りも覚束なくなってしまう。

「はあ……憂鬱だな」

白い息を吐きながら一人の兵士は愚痴る。

「何よ、突然」

「考えても見るよ。厭魔と戦うのは良いとしても、この洞窟をあまり壊さないように戦え、だぜ……どう考えてもこちらが不利になっってしまうだろうが」

氷の洞窟に侵入し、厭魔を討伐する全員に通達されているのだが、広範囲に及ぶエネルギーの使用は禁じられている。

「仕方ないだろ。民意というのは無視できるものではない」

「……民を守るのが軍だものね」

「こつちの気も知らないで……」

一人が苛立たしげに舌打ちをするが、それはこの場にいる五人全員  
の気持ちでもあった。

今回の攻略にあたり、最も懸念されたのが、攻略に携わる軍の損  
害ではなく、攻略後の氷の洞窟の破壊状況であった。

氷の洞窟、スカーリーソアラは他国に誇れる自然遺産としてル  
ミアでも評判の観光名所でもあったので、攻略にあたり、作戦時  
の行動について度々議論されてきた。

軍としては攻略に成功するかどうか重要なので、スカーリーソ  
アラがどれ程の破損を被ろうと構わないのだが、直接には攻略には  
参加しない者達にとってみれば軍よりもスカーリーソアラの方が遥  
かに重要でもあった。

ルーミアにとっての不幸は、スカーリーソアラを保護しようと  
擁護する環境団体がルーミアの中でも有数の力を持っている事だ  
った。

その環境団体の重役がルーミアの中でも有数の資産家であり、  
スカーリーソアラをこよなく愛していたことから、またスカーリー  
ソアラの恩恵を受けていた近隣の街の意見を無視するわけにはいか  
ず、攻撃手段を配慮しなくてはいけない事態に陥ってしまったのだ。

「それにしても……不気味なほど静かね」

憂鬱となった雰囲気解消すべく話題を切り替えようとするが、  
切り替えた話題も明るい話題とはいえなかった。

「時々穢魔が出てくるのだが、それ以外は静かなものだな」

「景色を楽しむ余裕があるくらいにね」

「違うない」

微笑しあう兵士達の雰囲気は先程に比べれば随分と明るくなり、僅かに届く陽の光が洞窟内を照らしている現状のようでもあった。だが、太陽に雲が差すように、その光に影が差す通信が入った。

『地上部で厭魔に襲われたという情報が入った。直ちに指定したポイントへ向かえ!』

彼らは顔を見合わせ、可能な限り急いで地上部へと戻った。

彼らが現場へと駆けつけた時、目に入った光景は惨劇であった。

斑模様の真紅がまるで局所的な土砂降りに見舞われたように深緑の森に混じっている。枯れ葉や森の果実が地面に落ちているように人間の臍物もまた散乱している。ばら撒かれている人間の体は元の造形が分からないほどであり、無事な箇所など見当たらなかった。

日常では決して見られない血の惨状がそこにはあった。

駆けつけた兵士達は思わず吐き気を催し、数人は周辺に撒き散らされている血潮のように、吐瀉物を吐きだしたが、残る数人は僅かながら残った理性を掻き集め、周囲を警戒する。

耳鳴りがするほどに静寂を保っている森に、神経を研ぎ澄まし、一瞬たりとも変化を逃さぬように用心する。

すると、彼らの張り巡らした警戒の糸に引つ掛かる存在が茂みに

息を潜めていた。

厭魔かと思ひ、迎撃態勢を整える。緊張に高鳴った鼓動が一つ叩くと、

「ま、待ってください！ 味方ですから、攻撃しないでください！」

顔中が鼻水と涙だらけになって、腰砕けになった男が這いずり回るように出てきた。彼は身体中を血と泥まみれにしており、無事かどうかは一見して分からなかった。

同じ軍服を着込んだ同僚の姿に彼らは少しばかり警戒を解いた。

「何があつたか話せる？」

女性兵士は膝まづき、安心させるような優しげな声で情けない姿を晒している男に声を掛ける。

「……は、はい」

他の兵士達は男の言葉に片耳を寄せながら、再び警戒態勢を整える。

「自分達が背後の隙を突かせまいと、穢魔の警戒に当たっていた時でした。突然、霧に覆われたかと思うと、何かの影が過ぎり、他の人達をまるで血を啜るように八つ裂きにしていきました」

男はその光景を思い出したのか、顔は青褪め、唇も震えていた。

「よく無事だったわね」

「その……情けない話ですが、襲われた時に反射的に攻撃した人がいたのですが、その放った切断のエイドスが自分に当たってしまい、吹き飛ばされた後気絶してしまっただんです」

男の軍服は袈裟掛けに切られており、男の血に塗れた身体が露出していた。

「治療しましょうか？」

「応急処置は自分で施したので大丈夫です。ただ……」

「ただ？」

男は情けない表情が一変して、キリツと効果音が付きそうなほど真剣な表情で言う。

「腰が抜けて動けません！」

一瞬の静寂の後、笑いの渦が彼らに巻き起こった。

「おまえ……そんな情けない事真面目な顔で言うか？」

涙目になりながら、男性兵士は真剣な顔つきで情けない事を言った男を笑う。

「いえいえ……情けない事だからこそ、敢えて真剣な顔で言うのです」

涙と鼻水の痕が残る男は何処までも真剣な口調だった。助けが来るまで怯えて泣いていた人物の様相ではなかった。

「ほら、他の地上部の兵士の所まで送ってやるから、早く俺の背中に乗れ」

「御迷惑をお掛けします」

「いいつてことよ」

血の惨劇が周囲に広がっている非日常ではあるが、彼らの軽口は彼らがこれまで過ごしてきた日常であった。

「とりあえず本部に連絡して、現在位置から最も近い場所にいる地上部班を尋ねてくれ」

「わかったわ」

懐に持っている連絡用の魔導器を手取る。

彼らの雰囲気は柔らかくなったが、それでも周囲への警戒を怠ってはいなかった。

「あ、もう一つお願いいいですか？」

「何だ？ 漏らしたから処理してください、なんて馬鹿げた事を言うなよ？」

腰が砕けている男を背負っている兵士は笑い顔を浮かべながら擲掬する。

「さすがにそんなことはありませんよ。簡単な事です……」

男は兵士に体重を僅かに乗せながら、楽しげな口調でこう告げた。

「死んでください」

「え？」

次の瞬間、男は飛膜を持った狼男へと変貌し、背負っていた兵士は周囲に散らばる死体のように八つ裂きとなった。

誰もがその突如として起こった惨状に心を奪われ、思考を停止してしまった。

それが彼らの命脈を絶つこととなった。

モロイは惚けている彼らを見逃す筈はなく、その鋭い爪で惨劇を再開した。

数秒もしないうちに、ここにいた五人は只の肉塊へと変わり果て、より一層の真紅の水を鬱蒼と茂る森の中に散水した。

モロイは彼の鋭い爪に滴っている五人の血液を美味そうにそのやや長い舌で舐めとる。

五人がこうまであっさりともロイに騙されたのは、モロイが人間に変貌するという事実を知らなかったためだ。

過去、モロイの戦法は濃霧を発生させて、彼らが密集しているところを一撃だけ襲いかかり、同時討ちを発生させること。

そして、もう一つが幻覚を利用して姿を消したり、相手を攪乱させる事だった。

一度たりとも、人間へと変身できる事を露見してはいなかった。それがモロイの強みだった。

モロイの葬世『モタモル・インフイニタス境無き変態』  
させる肉体変化の魔導術。

モロイの望む姿へ際限なく変貌

ただ、これにはいくつか制限がある。モロイが変貌する相手の肉

体情報を血液などから一定量以上摂取すること。また、一度変貌して元の姿に戻ってしまえば、もう一度同じように摂取しなくてはならない。

さらに、変貌した場合、変貌した相手以上の力は再現することはできない。あくまで変貌した相手の能力が再現できるものでしか力を発揮できない。

モロイは霧などにも変貌することは可能ではあるが、霧になれるだけで相手を攻撃することは叶わない。相手を攻撃する為には変身を解かなくてはならないのだ。

モロイは自身が弱い存在だと認識している。

攻撃力に関しては若干高めではあるが、変貌する肉体のせいか、防御力は並外れて弱い。

だからこそ、敵を幻惑の術で同時討ちに誘ったり、今回のように自身を変貌させて相手の隙を突くのだ。

モロイの聴覚が足早に駆けつけてきているいくつもの足音を拾った。

自身の脆弱性を理解しているモロイは自身の姿を半分以上に縮ませ、行方を眩ませるように空へと飛び去っていった。



## 第五章 嵐の惨禍 〈鮮血の女傑〉

鮮血が舞い散る戦場は、ただ一体の存在のみが脚光を浴びる舞台となっていた。

優雅に舞うような流麗たる軌跡は障害物があるうとも、決して停止することもなく線を描き続ける。

操者である女傑は優美な舞を踊っているかのように、洗練され尽くした動きで縦横無尽に戦場を駆け抜けていく。

舞踊の舞台である大地は天より降り続ける滴により、小規模な川が形成されているが、舞台の役者である女傑により血河に変換されていく。

先日まで堅固な鉄の堤防を築いていた討伐軍は、今やその鉄の境界をまるで川が氾濫し、堤防が決壊したかのように広大な穴が空けられている。

氾濫したかのように穴から溢れ出る穢魔は、堰き止められていた鬱憤を晴らすかの如く次々とその穴から続出していく。

戦場は定められし型を継続させるのではなく、臨機応変に動きを変えねばならない混戦へと移行せざるを得なかった。

「はあ！！」

炎のように波打つ大剣はアタルの意思を受けて、熱を帯びながら駆竜種の切り口を灼きながら体躯を断つ。

「降り注ぎ、彼の者を貫き、大地に縫い止める《レイランス槍雨》！」

上空より降り注ぎし、いくつもの水の槍は滑空する鳥獣種、疾走する駆竜種の体躯を貫き、大地へと縛りつける。急所に直撃した個

体はそのまま消え失せたが、水の槍で貫かれ、地面へと縫いつけられた個体は他者がかさず止めを刺した。

「なあ……どうするんだ、あれ？」

恐怖と絶望を張りつかせながら問うアープにいつもの飄々とした態度は見られない。彼は怖れているのだ、鮮血の女傑の刃がこちらを向く事を。

「……誰かがあれと戦わなくちゃいけない」

アタルが目を向ける先には、次々と立ちはだかる兵士達を斬り伏せていく人型の厭魔。

彼女はブケパロスに跨り、さながら無双の女性將軍の如く穢魔を先導している。

いや、先導と云うよりも彼女が好き勝手に暴れてできた穴から勝手に穢魔が湧き出ていると言った方が正しいだろう。事実、彼女は穢魔を指揮している様子は見られない。

ただ厄介なのは、その無類なき強さだ。

その女傑は力任せに刀を揮うのではなく、歴とした技術を持って刀を揮っているのがアタルには分かる。

流麗たる刀の軌跡は緩急自在であり、演舞しているかのようである。芸術に等しい剣の舞に魅入られし者は悉くその身に軌跡を刻まれていった。

彼女を討たねば勝利はありえないと、腕に覚えのある者達は総力を結集して彼女に戦いを挑んだが、皆彼女の舞に魅入られてしまった。

誰一人として彼女の舞に付き合える人物はいなかったのだ。

幸いと云っていいのは、彼女が舞っている位置はアレクセリア三世とも、クレイオスとも遠い位置であることである。

もしも、彼女が大将である両名のどちらかにでも突撃してしまえば、討伐軍が総崩れとなり、敗北の一途を辿る羽目になることは必至だった。

だが、それも時間の問題であり、さらに時間が過ぎるにつれ脅威となるのはその女傑だけでなく、鉄の檻から抜け出した穢魔も脅威となるのは明白であった。

「アーブ……僕はいくよ」

アタルは一つ目を閉じると、今まで抱いていた感情を押しやるように無表情になる。

次に目を開くと、静かな決意を湛えた表情でアーブに語り出す。

「な、なにを言ってるんだ、死ぬ気か！」

突然のアタルの申し出にアーブは狼狽する。アーブから見てもアタルの申し出は自殺行為であり、勝利と云う想像がアーブの脳裏には思い浮かばない。

「このまま誰かがあれと戦わなくては被害が増える一方だ。だって誰かがあれを止めるべきなんだ」

「だけど……おまえじゃあ……」

「うん、知ってる。僕じゃあ、あれには勝てない」

「だったらー！」

アーブの必死の制止にも耳を貸さず、アタルはアーブに言い聞かせるように誠実に語る。

「力が無いからといって、僕は目の前の困難から逃げたくない。『勇者』を目指す以上、今回のような試練はこれからも付き纏うんだ。だったら、僕は立ち向かうよ。」

だって　僕は『勇者』になるんだから」

アタルは現実として自らに力が無いことは十分に理解していた。理解するには十分な程の事象を体験してきたのだ。

だからといって、過去に駄目だったから今回も無理だという言葉はしたくなかった。

遠い理想を夢見ているのだ。きっと、何回だって躓くことも膝を折ることもあるだろう。

だからアタルはそれを覚悟していた。

覚悟した上で、それでも歩み続けると決めたのだ。

いつか、その理想に手が届くと信じて。

「『勇者』は誰よりも先に危険を被らなくちゃいけないんだ。後ろにいる誰かが『勇者』の背中を見ているんだから。後に続く誰かのために僕は前を歩き続ける」

ただならぬ決意を秘めたアタルの瞳に、説得は無理だと判断したアーブは乱暴に頭を掻き、唸るように悩む。

「分かったよ、だったら俺も付いていく。なんせ、俺達は親友だからな　一蓮托生だ」

アーブは格好つけるようにキリツとした表情をつけるも、下半身は生まれたての動物のように震えていた。

「頼りにしてるよ、相棒」

「任せとけってんだ………ついでに他の奴らの力も借りようぜ。俺達だけじゃ無理だって、絶対に無理だって。力を借りようぜ、絶対」

勇ましい返答は、後半になるにつれて臆しているような口調へと変化していった。

「……そうだな。とりあえず、宋飛さんにでも……」

アタルが宋飛の方を見ると、何かに打ち震えているかのように茫然とした宋飛がいた。

「宋飛さん？」

常ならぬ宋飛の様子にアタルは訝しむ。しかし、一秒でも時間が惜しい事も事実なので用件を手早く済ませる。

「宋飛さん、これから僕達はあの厭魔に戦いを挑みますが、どうしますか？」

アタルの言葉にまるで夢から醒めたようにはっとする宋飛だが、アタルの言葉を認識すると、まるで不倶戴天の敵に相見えたかのように特大の殺気を放つ。

「あいつとは俺がやる。貴様らは手を出すな」

宋飛の怒気がまるで視覚化できるような強烈な威圧感。アタルは息を呑む事さえも困難なほど宋飛の威圧にあてられていた。

「しかし……」

「でも何も無い。邪魔をすれば貴様から殺すぞ」

「アタル、任せようぜ」

「アープ……」

他の人物にも声を掛け、持ち場を離れる事を許可して貰ったのか、数人を引き連れたアープがその場にいた。

「宋飛が人型の厭魔を引き付けた後、ブケパロスを俺達が討つ。それでいいだろう？」

確認とばかりに宋飛を窺うと、宋飛は然りと頷く。

「決まりだ。俺達が道を切り開くから、後は宜しく頼む」

「当然だ」

宋飛はアゾートを形成し、両の拳を合わせた。

般若の面を被った女傑はひどく退屈していた。

自身としては精鋭が渦巻くであろう総大将に突撃を繰り出したかったのだが、制限を課せられている身では彼らから最も遠い位置で暴れる他はない。

中々骨のある相手が彼女の前に立ち塞がったが、一太刀、もしくは二太刀交わすと相手は大地へと沈んでいった。

詰まらない。詰まらない。非常に詰まらない。

彼女は闘争に魅入られし修羅である。

彼女が欲するのは木偶を斬る殺戮ではなく、血沸き肉躍る闘争の宴を開きたいのだ。

彼女の相手を務まるにはどれも役者不足。欲求不満も甚だしい。

とりあえず言伝だけ伝えてこの場を去ろうとした　その時。

彼女を押し潰さんとばかりの大岩が彼女を覆う。

魔導で作りし偽岩であることは岩を覆う僅かな光で察している。

未熟な術者はヒュレーが漏れるのだ。

斬撃の範囲をエイドスで伸ばし、一閃と大岩を断ち斬る。

二つに割れ、定められし自身を保てなくなった大岩は虚空へと消えるが、代わりの影が襲いかかる。

大地を砕かんばかりの烈蹴にこれまで流麗たる軌跡を描いてきた斬線は僅かに歪む。

斬線を歪みし相手は地面に着地すると、女へと振り返る。

「俺と踊っていただけかな、麗しい人」

徹底的に無駄を削ぎ落とし、闘争の為だけに造られた肉体を持ち、力ある朱色の手甲と脚甲を身に纏う拳法着の男がいた。

女は自身の口角が上がるのを自覚した。良質な獲物だということ  
は先程の襲撃で分かる。

身体が灼けるように熱い。早く、この熱を解放したくてたまらなくなる　いや、身体が溶けるほどに熱を帯びたくなる。

「ええけど……退屈させんといてな。ウチを放つといて先に逝く男  
嫌いやねん」

「奇遇だな。俺も俺より先に逝ってしまう女は嫌いなんだよ」

溢れる殺意が止まらない。

ああ……これは同類を見つけたからだろう。  
やばい……言いつけを破って壊したくなる。

「先に伝えとくわ。『勇者』に伝言や。」

『北の最も近く、最も乱れし土地で待つ』。確かに伝えてな」

女が伝えし先は先の男ではなく、男の後ろに控えているこれまでの有象無象の連中。

慄然と困惑に立ち竦む連中を無視し、ダンスの申し込みをしてきた相手へと向き直る。

「二人つきりになれるとこにいこか。ウチ、恥ずかしがり屋さかい」

「そうだな。愛の語らいには邪魔が入らない処がいい」

女はブケパロスから軽やかに下馬すると、ブケパロスの見事な毛並みの鬘を優しく撫でる。

「後はよろしくな。……ほな、いこか？」

「ああ……あっちがいいだろう」

拳法着の男が指差した先はこの戦場から遠く離れた場所、山岳の麓にある少し拓けた平原。そこならば、横槍が入ろうとしてもすぐに分かる。

「ええよ。ウチに遅れんといてな」

「はっ！ そっちこそ」



吐き捨てるように悪態をつく男が女には好ましかった。  
これ位の威勢がある男の方が闘いがいがあるというもの。  
女は疾風と化し、男も女に遅れずに付いてくる。  
女はこれから起こる愛の語らいに身体が昂った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9142v/>

---

創世の詠

2011年11月26日23時56分発行